月姫系図

角田喜久雄

春陽文庫

A-2-26

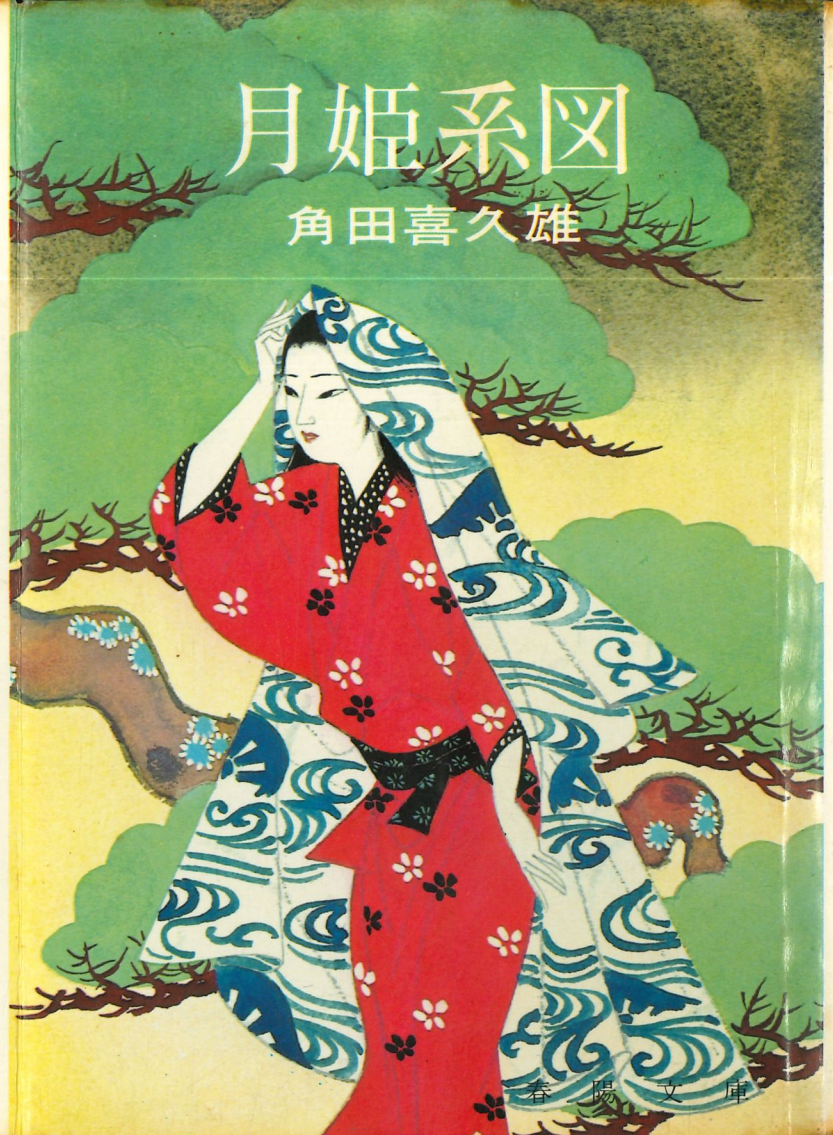
いまを時めく権力者の金山奉行大久保石見守長安の行列をさえぎって狂奔する馬一頭！そのあとを追う女馬子お静の苦境を救い、荒れ馬をとり鎮めた美しい娘があった。それは旗本水町三郎太の娘雪絵であった。雪絵の美しさに石見守長安の好色の目が走った！

八月八日、菩提寺仙勝寺に母の墓参に出かけた雪絵は、三日月堂の中で三日月さまこと月姫と会うことが、毎年の習いになっていたが、ナゾの女性〝月姫さま〟とは!?

元北条家の乱波あがりの不逞な渡り中間青助に脅迫されていた雪絵を救ってくれた浪人は桜井進太郎であった！　進太郎とその従者の忍者藤兵衛が探索する武田家のヒミツとは!?

「不動如山」と記された〝朱書き一節〟の四枚の竹片を追って卍巴と展開する物語の面白さ！

装画＊東啓三郎



月姫系図

角田喜久雄

春陽文庫 A 2/26 440

440円

0193-010226-3066

春陽文庫

2227

月姫系図

角田喜久雄

春陽堂

月姫系図 角田喜久雄 春陽文庫

春陽文庫

月姫系図

角田喜久雄

春陽堂

月姫系図

かげろう

慶長十七年は、何か物騒がしい年であった。

関ガ原の合戦以来、お取りつぶしになった大名が数知れず、そのため職をうしなって路頭になげ出された不平不満の侍たちや、徳川の天下を快く思わず、事あれかしと願っている浪人どもが日本中に充満していたし、ことに、大坂城にある秀頼をようした豊臣家譜代の一大勢力が、最近になって、何か事をたくらむ気配があるとの情報が伝わってきたりして、徳川幕府の神経をとがらせたことも一通りでなかったようである。

そのためか、この六月には、浪人、浮浪の徒にたいして大々的な弾圧が下されたが、結果においては、かえって彼らの反感をつのらせるに役立つくらいのものであったらしい。

それに、この年は天候まで不順で、大事な照りこみ月の六、七月に雨ばかりつづき、かえって、秋の声をきく八月になってからどっと暑さが攻めよせてきた。

その日、八月八日も、目もくらむような油照りであった。

ことに、八ツ半（午後三時）という日盛りのせいもあってか、お茶の水から牛込御門に向かう、神田川沿いの大通りも、真っ白に乾きあがって、めらめらとかげろうがたっていた。

「下にい……下にい……」

と、物々しい先ぶれの声が聞こえてくる。

見ると、牛込御門の方角からこちらへ向けて、美々しい行列が、かげろうにゆれながら近づいてくる。

きらきら、金色の金具を光らせた駕籠の豪華さもさることながら、駕籠わきの供の人数も、四十人に余るであろう。

汗をふきふきあえいでいた通行人も、それをみると、いっせいに道わきへ身をよけた。

「あれはどなたさまの行列でしょうか？」

「ご存じないのかえ、お前さん。ありゃア、大久保石見守さまですよ」

「ああ、あの金山お奉行の？　道理でねえ……」

と、ひそひそ話している。

「この江戸では、ご遠慮もあるからあの程度だけれど、地方の金山へ旅をなさるときにゃア、そりゃアもう、大変なお行列だそうでねえ。道中のお慰みに、ご愛妾を二、三十人、猿楽師を三、四十人……全部で百人にも余る大変なお供だそうですよ」

「へえ、そりゃア本当ですか？」

「なにしろ、八王子で三万石のご知行取りでいらっしゃるけれど、その実、三十万石の大大名も及ばないご威勢やらご権式やらだそうですからねえ」

話している声をさえぎるように、突然、

「ふふふふ……さるか！」

と、あざけるような含み笑いが聞こえてきた。

見ると、少しはなれたところに、一癖ありげな風体の浪人者が二人、くわえ楊枝でぬっと立っていた。

「甲州の山ざるが、器用におどって三十万石を盗みとったというわけか」

「一度も腰の刀をぬいたことがないというしろものだ。合戦の用にもたたんくせに、金勘定の才覚だけで大きな面ができる。ても、ありがたいご時世だて」

ふふふ……と憎さげに笑いながら、じろりと行列をにらんだ二人の目には、昼日中だというのに、明らかに酒の酔いがあった。

うわさの主、大久保石見守長安は、もと金春七郎という猿楽師のせがれだった。

だから、悪口にさると罵倒する者もいる。

武田信玄に見いだされてその臣となったが、武田氏の滅亡と同時に、たくみに徳川家へ寝返

って、金銀山開発に大きな功績があった。
今では、佐渡、伊豆、石見、南部の金山奉行を兼ね、甲府のお城もあずかり、将軍家のお覚えも極めてめでたく、飛ぶ鳥もおとす勢いだというわさも本当であった。
「来る、来る、さるめ！」
と、浪人たちはまたせせら笑った。
「下に、下に……が聞いてあきれる。ふん、いい気なものだのう」
何か、一言一言ささやきあってから、ちらりと見合わせた目には、憎悪の光があった。
二人の目が、意味ありげに傍らを見た。
そこには、一人の女馬子がいた。
まだ、やっと十六、七であろう。子供子供した、目の丸いかわいい顔立ちの少女である。
駄馬の手綱をしっかり握って、神妙にひかえている姿はあどけないくらい初々しかった。
「下にい……下にい……」
先ぶれの声はもう間近に迫っていた。
「さるに馬とはどうじゃ？」
「さるに犬という話は聞くがのう」
浪人たちの声であった。
わっはっは……
と笑った声があまりにも傍若無人だったので、周囲の人たちが、ひやっとしたようにふりむいたときには、もう、その一人が、ぎらっと大刀を抜いていた。
抜いた大刀の峰をかえすと、無言のまま、二、三歩つかつかっとよってきて、少女のひきとめていた駄馬のしりを力まかせにたたいた。
けたたましい馬のいななきと、女馬子があっ！　と叫んだのと同時だった。
不意だったからたまらない。一度棒立ちになってから、やにわに走り出した馬にひかれて、女馬子は一、二間地をはった末、とうとう持ちこたえられず手綱をはなしてしまった。
馬は狂奔する。
「ああっ！」

「馬！　馬！　奔馬だッ！」
「とりおさえろッ。お供先だぞッ」
仰天した行列の人数は、乱れ散りながら右往左往する。
ただでも、この暑さのために、馬のかんが立っていたのだろう。たけり立って、しゃにむに疾駆するそのあとを、
「五十鈴や、五十鈴！　おとまり！　とまっておくれってば！」
と、女馬子は涙声をあげながら必死に追ってゆく。
血相変えた供回りの三、四人がつぎつぎに、大手をひろげて奔馬の前に立ったが、いずれも馬の勢いに気おされたか、意気地なく左右にけはなされてしまった。
駕籠わきまで、もう四、五間しかない。
と——
そのとき、とある物陰から、すすす……と小走りに出てきた若い女が、あっと思う間もなく、大手をひろげて、きりっと奔馬の前に立ちふさがった。
年のころは十七、八であろう。目もさめるように美しい娘である。
それは一つの術というのだろうか、それとも度胸というのだろうか。
それまでは、何ものをもけはなして突進せずにはおかないように疾駆していた奔馬、その大手をひろげて立った娘の前までくると、ちょっと、ひるんだようにたたらをふんだ。
瞬間、その馬腹へ、かいくぐるように身をよせた娘は、手綱をとるなと思う間もなく、ひらっと身をおどらせて、馬の背へ横座りに身をのせていた。
そのまま、荒れている馬の手綱をさばいて、とっとっとっ……と、小半町ほど向こうへ走りぬけていったかと思うと、くるっと馬首をむけかえてこちらへもどってくるときには、さしも

の奔馬ももうすっかりおとなしくなって手綱さばきのままに、ゆっくりと歩いてくる。

並みいる人たちが、

ほう！

と安堵のため息とも、感嘆の声ともつかぬ吐息をもらしながら、馬背の娘をつくづくと見たのはそのときであった。

着物、髪形から、一目で武家の娘としれる。馬を乗りこなして少し上気したか、ぬけるような白い顔に、ほんのりと紅がさし、少し切れ長な黒みがちな目が、まるで黒曜石のようにすがすがしく澄んでいる。

いくら横座りにしているとはいえ、馬の背にいるのだから、いくらかすそ前が崩れて、ひるがえる赤い下着の透き間から、まっ白な脛がちらちらと見えがくれする。

気品があって、そのくせ、初々しくつやめき、ぞくっとするような美しさであった。

もとの所までもどってくると、娘は軽々と馬からおりて、真っ青になっておろおろしている女馬子の方へ、にっこりほほえみかけながら手綱をわたした。

あの、荒馬をとりしずめた男まさりの風貌とは、まるで、うって変わったなよなよとした優しげな姿であった。

物見高い野次馬のことだから、周囲から、わっと声がくるところだろうが、ところが、かえって周囲は、しいんと息をのんで静まりかえってしまった。供回りの侍たちが、血相変えてその二人をおっとりかこんだからである。

「おのれ、不埒な馬子め！」

「この行列を、どなたさまと心得おるかッ」

「よくも、お供先を乱したなッ。屋敷へしょっぴいてゆくか」

「いやッ、たたっ斬れ。見せしめのため、たたっ斬ってしまえッ」

口々にわめきたてられて、幼い女馬子は、もう生きた心地もなげにおろおろするばかりであった。

「も、申しわけございませぬ。お、お許しくださいませッ」

「黙れッ。それですむか。たたっ斬れッ」

「で、でも……わ、わたくし、な、何も致しませんのに……こ、このとおりでございます」

と、大地へ座って手を合わせるのを、

「許さん！」

と、一人がぎらっと大刀をひきぬいた。抜きざまにふりかぶったのも素早かったが、

「お待ちなされませ」

と、とっさにその腕をおさえたのはさらに早かった。

あの、美しい娘である。

「うぬッ、何をするッ！」

と侍はおさえられた腕をふりはなそうとして体をふったが、逆に、うしろへ一、二歩、たたた……と押しもどされただけであった。

それが、余計、侍たちの怒りをさそったのであろう。

「おのれ、じゃまだてすると容赦せんぞ」

血走った侍たちの目が、いっせいにさっと娘の方を見返った。

「失礼ながら、この馬子さんの申されること、一応お聞きくださいましてはいかがなものでございましょうか」

と、娘の声は静かにおちつきはらっていた。

「いまさら、益なきいいわけは許さん、黙れッ」

「益なきいいわけではございませぬ。この馬子さんは、何もしらぬとおっしゃってではございませぬか。わたくしも、そば近く見ていて存じておりますが、この馬子さんは、つつましく、手綱をひかえて馬をとどめておりましたものを、ご浪人ていのお武家が、いきなり刀をぬいて馬を打ち、あのように奔走させたのが事の起こりでございます。ねえ、あなた、そうでございましょう」

と、優しく女馬子の方を見やる。
「は、はい。そ、そのとおりでございます。わたくし、何が何やらさっぱりわかりませんうちに、馬が……」
と、女馬子は涙ぐみながら必死にいう。
「それ故、この馬子さんには罪はないものかと存じます。なにとぞ、ご理解くださって、許しおかれますように……」
「何ッ？　浪人者が馬を故意にたたいたというのか？　そやつはどこにいる？　さあ、どこにいるか、そやつを引き出してみい」
と、居丈高になって周囲を見回したころには、もう、あの二人の浪人は影も形もなく消えさっていた。
「それ、見ろ。でたらめを申して罪をのがれようとは、いよいよもって許しがたい。斬るッ。そこをどかっしゃい！」
「どうあっても、おききとどけくださいませぬか」
そういって、女馬子をかばいながら、つっと一歩うしろへさがった娘の顔には、思わず、はっと胸をうつような権高い気品がみなぎっていて、さすがたけりたった侍たちも、一瞬、絶句したまま棒立ちになっていた。
と——
そのとき、上役らしい年配の武士が一人、侍たちのうしろからゆっくりと歩み出てきた。
「お女中。手前は、大久保石見守供回り、南部左衛門と申す。失礼ながら、お名前をうかがいたい」
と、じろっと見つめられて、娘は、悪びれもせず、静かにいった。
「旗本二百石、水町三郎太の娘雪絵と申します」
「雪絵どのとやら、いかなる事情があろうとも、奔馬をはなってお供先をさわがせた女を、そのまま許してやるわけにはまいらぬ。あなたには、この奔馬をとり鎮めいただいたお礼、改めて申し上げるつもりではあるが、みだりにじゃまだてをいたされてはお身のためにもなりますまい。なにとぞ、おひかえください」
「では、どうあっても……」
「さよう、女馬子は屋敷へ引かねばならん」
ぴしっととどめをさすようにいったとき、
「左衛門、待て……」
と、駕籠の中から声がかかった。
「左衛門、わしが直々に話をする。そのお娘御をこれへ……」
と、駕籠の中からまたいった。
「はっ」
と答えた侍は、いささか狼狽したように、
「雪絵どのとやら、殿から直々お話があるという。さあ……」
と、せきたてて、雪絵を駕籠わきまでつれていった。
雪絵はかがんで、地面へ片手の指先をおいた。
駕籠のとびらが四、五寸あいて、今を時めく、金山奉行、大久保石見守長安の顔がじろっとそとをのぞく。
背の低い、さるのような顔をした、しかし脂ぎった老人の顔であった。長安は、今年六十八歳の高齢である。
「雪絵どの、久しぶりじゃのう」
「お久しゅうございます」
老人のしゃがれた太い声と、雪絵の澄んだ美しい声とが、低く問い答えする。
「珍しいところで会ったのう」
「お供先をお騒がせ申し、恐れ入りましてございます」
「いや、よい。あなたの口添えとあらば、その女馬子が、たとえどのような不埒を働こうとも許してつかわす」
「女だてらの見苦しいご無礼をもかえりみず、ありがたき幸せに存じます」
「いや、そう堅苦しゅういわれるな。美しかったな。美しいとも勇ましいとも……あの荒馬を

乗りこなした姿、駕籠内から思わず見とれていたわい」

「……」

「しかし、雪絵どの、ただ、このままには許してやれぬ」

「は？」

「条件がある」

「……」

雪絵のまゆがちらと曇った。

「女馬子の代わりに、あなたが、このまま、わしと同道してくれぬか。いや、もちろん、客人としてじゃ。客人も客人、この上なしの珍客としてもてなそうがの」

雪絵の顔はいよいよ暗く曇ってきた。

「ありがたい仰せではございますが……」

「堅苦しく申されるなというに……」

「ただ今は、亡き母の墓参への途中でございますほどに、折角の仰せではございますが……」

「墓参？」

長安は苦い顔をした。

「そうそう、今日は八月八日であったな。この日は、あなたの誕生日ときき及んだ。その日を選んで亡き母者の墓に詣でる、心美しいしきたりを毎年かかさずつづけていると聞いていたが、孝心なものじゃな」

「なにとぞ、お聞きとどけくださいますよう」

「うむ、無理はいわん。その代わり日を改めて使いを出す。その折には、これまでのように言を左右しての断りは許さんぞ。よいか？」

と、歯を見せてにやっと笑った。その歯にはそっくり金がかぶせてある。笑うと、それが、気味わるくきらっと光るのだ。

雪絵はぞくっとしながら黙って顔を伏せていた。

雪絵が、はじめて石見守長安にあったのは今年の正月のことであった。

お能方金春左近から、初舞の招待をうけていたのにあいにく父が病気になり、それかといって招待を断れない筋合いもあって、娘の雪絵が代理でよばれていった。

そのとき、一番上席にいた、さるのような顔をした老人が、はじめから終わりまで、雪絵の方をじろじろ見つづけていたことを覚えている。

お能が終わったあと、雪絵一人、わざわざ引きとめられ、その老人の茶のお相手をさせられたのだが、それが長安の名前をしった最初だった。

そのときも、長安の露骨な目が、終始じろじろとなめるように雪絵をながめまわしていて、気味わるいというよりも、その無礼さに腹が立ってならなかった。

ところが、その翌日になると、早速長安の使者が、雪絵の父、水町三郎太のもとへやってきた。

「手前主人こと、ご息女雪絵さまの茶道のお手並みの見事さにほとほと感じ入り、是非ご教授をうけたいとのこと、まげてご承引のほどを……」

と、口上は慇懃を極め、手土産代わりにといって差し出した三方の上には、これ見よがしに小判の包みが山とつんである。

苦笑いした三郎太は、

「茶道の達人として聞こえる石見殿が、なんのたわむれを……」

と、一言のもとに断ったが、それにもかかわらず長安の使者は二度三度とやってきて、ほんの茶席のお相手でもよいから是非に……という。

最後にはいよいよ本音をあらわして、正式の媒酌人なるものをたて、

「雪絵さまを、大久保家の奥方にとご所望でございますが……後添えとは申せ、もちろん正式の奥さまにお迎え申し上げたいとのご希望にございます……」

と、押しつよく申し入れてきた。

「ほほう！　石見殿が娘を嫁にくれいと仰せで

ござるか。なるほど、これは妙じゃ。六十八歳のご老体に十八歳の娘をのう……」

わっはっは……と、三郎太は皮肉に笑いとばした。

「失礼だが、石見殿は今を時めくご大身ながら、いわば当節のご随身。当水町家は、吹けばとぶような小身ながら三河以来のれっきとした旗本でござる」

家の格式が違うといわんばかりの断りようは随分手きびしいものであった。

まさかこれ以上は、と思っていたが、ところが、そうでない。長安は執念深かった。生涯を、才知と押しで泳ぎわたってきた老人の一念はそっとするくらい強かったのだ。

それ以来は、何かにかこつけて、直々駕籠を水町家の玄関先へのりつけてくる。

ちょっと、近所までまいったからごあいさつにとか、疲れたからしばらく休息を……などといっては、押しつよく上がりこんでくる。

相手が相手だから、まさか、玄関払いまではできるわけのものでない。

雪絵は不快でたまらなかった。まるでへびにでもみこまれたようで、その声をきいただけで、ぞうっと身震いがする。

もちろん、部屋にかくれて、一度もその前には出はしなかったが……。

「お久しかったのう雪絵どの。半年ともいえぬ。ますますもってお美しゅうなられた」

と、長安の目は、じいっと雪絵を見つめたままであった。

「あれから見ると、少し肉がおつきのようだな。ますます女らしゅう美しくなられた。うむ。お美しいな」

ご愛妾も何十人いるか分からないというわさだ。

数しれぬ女の肉体をしりつくした老人の目は、まるで、雪絵の着物をはぎとって、肌をひ

そかにまさぐるような露骨さである。

雪絵はいやらしさに、背筋を毛虫がはうような悪寒を覚えた。

話し声の一つ一つは聞こえなかったであろうが、遠く群がっている人たちは、何事ならんというように好奇の視線を向けている。

長安は、そんなことはまるで眼中にないように傍若無人だったが、雪絵は、もうたまりかねて立ち上がろうとした。

「では、これにて失礼を……」

「あ、待たれい」

と、長安はしつこく立たせない。

「さきほどのこと、ご承知じゃな」

「……」

「まだお返事を伺わぬ。改めて使いを立てる故、かならず屋敷へまいってくださるな？」

「……」

雪絵はうなだれたままくちびるをかんでいる。その姿を、長安の目は、ねっちりと見つめたまま離れようとはしなかった。

「女馬子を許しやれというあなたの願いもかなえよう。わしの願いもかなえていただきたい」

「……」

「そのままには許しがたい狼藉者も、あなたの望み故に許してやる。わしの願いも聞いてほしいのう」

「は……」

と、雪絵はかすかにいった。いやとはいえない今の場合だった。

「では、しかとお約束した」

「は、はい……」

「よい日であった。ははは……」

長安の心地よさそうな笑い声を合図に、とびらがしまり、ついと駕籠があがって、何事もなかったように行列がさがってゆく。

「まあ、お嬢さま、ほんにようございました。どうなることかと案じておりましたのに……」

物陰から走り出てきた女中のお玉が、ほっと

したように声をかけた。
「おや？　どうあそばしましたか。お顔の色が……」
「なんでもありません」
「でも、お顔の色がひどくお悪うございます。ご気分でもお悪いのでは？」
「いいえ、玉。なんでもないのです。心配はいりません」
「さようでございましょうか？」
「それよりも、とんだことでお墓参りがおくれました。少し急ぎましょう」
「ほんにそうでございました。お寺さまでもお待ちかねでございましょう」
と、二人が足を早めて歩き出すと、
「もし、お嬢さま……ちょっと、お待ちくださいまし」
と、あわてて走りよってきた者がある。駄馬の手綱をしっかり握ったさっきの女馬子であった。
「ああ、さっきの馬子さんですね」
と、振り向いた雪絵はにっこりして、
「とんだ目におあいでしたね。おけがはなかったの？」
と、優しく聞く。
「はい、お陰さまで……お嬢さま、本当にありがとうございました。あなたさまがお助けくださらなかったら、とうに命がなかったところでございました」
「もうそのようなお礼には及びません。あら！あなた、ひじのところに血が……」
と、雪絵はまゆをひそめて、
「玉や、何か傷をしばる布がありませんか」
「いいえ、お嬢さま。こんなの、こうしておけばすぐ治ってしまいます」
と、小さな舌を出してひじの傷口をぺろっとなめ、大きな丸い目をくりくりさせながらにっと笑った。かわいい。

「まあ……」
「ほほほ……」
と、雪絵とお玉も顔を見合わせ、その無邪気さに、思わずつりこまれたように笑った。
「あのう、お嬢さま……」
「はい？」
「わたし、向こう柳原に住んでいます静と申す者でございますが……あのう、先程伺いましたけれど、あなたさまは水町さまのお嬢さまで雪絵さまとおっしゃるのでございますね？」
「よく、覚えていてくれましたね」
「では、あのお茶の水の台にお屋敷のあるお旗本の水町さまでございますか？」
「まあ、どうしてそれまでご存じなの？　屋敷のことまで申さなかったつもりですけれど……」
「お兄さまが、おうわさをするのを聞いておりましたから……」
「お兄さまがおありなの？」
「本当のお兄さまではないのですけれど……わたし、父に小さいとき死にわかれ、年とった母も病身だものですから、こうして馬をひいて働いておりますの。ほかに、兄弟が一人もいませんもので……」
「そう、お気の毒なお身の上ですね。でも、感心なこと……」
と、雪絵は何か身につまされたようにまゆを曇らせた。
「お兄さまと申しますのは、お部屋をおかしていますご浪人で、それはそれは、やさしい良いお方、わたしを、妹のようにとてもかわいがってくださるものですから……」
「そうですか。でも、そのお方がわたしのうわさをなさるというわけは？」
「なぜですか、水町さまのおうわさをなさるのを、一、二度陰で伺ったことがございます。水町さまには、それはそれはお美しいお嬢さまがおいでなさいますって……」

「まあ、わたしのことをご存じとは、どういうお方かしら?」
「桜井進太郎とおっしゃるお若いご浪人でございますよ」
「桜井進太郎さま? はて、玉や、お前、そのお方のことお聞きしたことあるかえ?」
と、いぶかしげにお玉の方をふりむいた。
「いいえ、お嬢さま、わたくしも一向に……」
「でも、お嬢さま、桜井のお兄さまはいろいろお嬢さまのことをご存じですよ。そうそう、八月八日はお嬢さまのご誕生日で、そのご誕生日には必ずお母さまのお墓参りをなさるしきたりだなんて……」
「まあ!」
まあ!
と思わず声をあげた雪絵の顔には、なぜか、ふしぎな動揺の表情があった。
うわさのとおり、雪絵は八月八日の誕生日に、照っても降っても必ず亡き母の墓参をしなければならない習慣になっていた。
いや、それは母が亡くなる以前からのことである。
水町家の菩提寺は牛込台の仙勝寺だが、まだ乳飲み子のころから母の懐に抱かれ、八月八日には必ず墓参りにつれていかれた。
その母が五年前亡くなってからは、女中のお玉をつれて雪絵一人で仙勝寺へ行く。
そこには、雪絵親子しかしらないある秘密があったのだが、名前さえ覚えのない桜井進太郎という武士が、なぜ、そんな墓参りのことまで知っていてうわさをしているのか、雪絵は怪しむように女馬子——お静の顔を、いまさらのようにじいっと見た。
しかし、りんごのように顔を赤くしたお静は、それとは気づかず、
「本当に本当に、ありがとうございました。お嬢さま。改めてお屋敷の方へお礼にあがらせていただきとうございます。よろしゅうございます?」
と、あどけなく聞く。
「改めてお礼だなんて、そんなこと困ります。けれど、おついでのときには、遊びによってくださいね」
「まあ、うれしい。遊びにうかがってよろしいのでございますか?」
「ええ、ようございますとも」
「うれしい、うれしい。帰ってから、お兄さまにたんと自慢してあげます」
と、お静は幼子のように手をたたいて小おどりしながら、
「お嬢さま。お怒りになりません? 失礼なことを申し上げてもよろしゅうございますか?」
と、くりくりした丸い目で、にっこり雪絵を見上げた。
「まあ、どんなことでしょう。わたしの悪口?」
「いいえ、そんな……わたし、お嬢さまが大好きってこと。お美しくて、勇ましくて、お優しくて……わたしの命の恩人でいらっしゃるのですもの。大好き!」
と、さすがに顔を真っ赤にしながらいった。
ところで、その三人が歩いてゆくずっとうしろから、見えがくれにそのあとをつけゆく一人の男があった。
身の丈六尺に近いかと思われる岩のように肩のもり上がった男である。胸にも腕にも、熊のように毛が黒々とはえている。
三月ばかり前から水町家へ中間奉公にはいってきた青助という男で、実によく、まめまめしく働く。軽口のうまいおどけ者ではあったが、あるとき、父三郎太が、
「どうも、一癖あるやつ……」
とうわさをしたのを、雪絵もちらっと耳にしてしっていた。
やがてお静は馬をひいてわかれてゆき、雪絵主従は牛込御門の方角へ足を急がせはじめた

が、青助は、底光りする目でじいっとその影を追いながらどこまでも尾行していった。

三　日月堂

牛込御門を出て牛込の台へかかると、とたんに人家はまばらになり、山畑さえまだ十分にはひらかれていない、森と林と草むらのつづく、昔のままの武蔵野の原であった。

雪絵主従は草いきれにむせながら、丘を上り下りして足を急がせてゆく。

雪絵には、その草いきれにさえ、年ごとの懐かしい思い出があった。春秋の彼岸参りには雪絵の行かないことはあっても、八月八日の墓参は、照っても降ってもかかしたことがない。

まだ雪絵の幼いころ、当日がひどい吹き降りだったので出かけるのをぐずっていると、それでも父母はきびしくせき立てて、時刻にはきちんとこの道を連れてゆかれた。

その代わり、この日に限って、母は特に優しく慈愛にみちていて、雪絵がどんなにだだをこねても甘えても、一言しかるでもなく快くきいれてくれたものであった。

今日でいうと牛込寺町の辺りであろうか。当時はまだ草深い武蔵野の一隅であった。

その辺りの、うっそうと茂った森を背にして、水町家の菩提寺仙勝寺の屋根が見えている。

山門の前に、ぽつんと寺男の住まいが一軒。

寺男といっても、この辺りのことだから、お寺の用事の合間には百姓もするし、参詣者のために、軒下に線香や花をならべて売ってもいる。

「これは、水町さまのお嬢さま。お待ち申しておりました。今日は、少々おそうございましたな」

と、顔なじみの寺男が出迎えた。

「はい、途中で少々手間取ったものですから……では、玉や。お前はここでいつものとおり待っていておくれ」

「かしこまりました。どうぞ、お嬢さま、ごゆるりと……」

雪絵は女中をそこへ残し、ただ一人、寺男の案内で山門をくぐってゆく。お玉を供につれてここへくるようになってからは、いつでも、お玉を山門のそとに待たしておく。

本堂へあがって、亡き母の供養を兼ね、水町家ご先祖のためのお経をあげてもらうと、雪絵は線香を手にし、ただ一人きり、裏手の墓地へ回る。

これも毎年の例になっているから、お寺の方でも遠慮してだれ一人ついてはこない。

水町家の墓は、きれいに掃除され、草花を入れた水桶もちゃんと用意しておいてある。

雪絵は香華を手向け、心静かに手を合わせ、目をとじた。

目をとじているうちに、次第に胸が波立ってくる。これから起ころうとしていることへの、ふしぎな興奮であった。

母に手をひかれてくるころは、ご先祖のご供養のためにといい、母が亡くなってからはその墓参といいふらしてはいるが、それが実は、これから起ころうとしているふしぎな出来事への口実にすぎないことを、雪絵はよくしっている。

立ちあがると、あたりへじっと目を配った。

森に鳴くひぐらしぜみの声のほか、風の音もなければ人影もなかった。

墓石のすぐそばに、一本の太い銀杏の木があり、人の背丈ぐらいのところに大きなうろがあいている。

雪絵はあたりへ目を配りながら、そっと手をのばし、そのうろの中をさぐった。

と——

とりだしたのは一個のかぎである。

墓地の中にそびえたった銀杏の木のうろに、どうしてかぎが入っているのか、その訳は雪絵にもよくわからない。

ただ、幼いころから母のやることを見ていて

そのとおりまねているだけだ。

もっとも、幼いころの雪絵には、そのことがふしぎでならず、一度春の彼岸に墓参りにきたとき、人目にかくれて、そっと銀杏の木によじ登り、そのうろの中をさぐってみたことがある。

しかし、そのときは、指先にふれたのは朽ちた枯れ葉ばかりでかぎの影もなかった。八月八日の墓参りのときにかぎって、その銀杏のうろにかぎが入っている。そして、今ではもう、一つのしきたりになってしまって、少しも不審に思うこともなくなっていた。

雪絵は、もう一度あたりを見回し、人目のないことをたしかめてから、本堂へ行くのとは反対に、裏手へ向けて墓地を横切っていった。

墓地のはずれには深いやぶがあり、それが寺の地境になっている。

やぶをぬけると鬱蒼たる森の中へ入り、もはやこの辺りへはだれ一人立ち入る者もないと見え、あたりは道もない一面の深い草むらであった。

すぐ、土塀につきあたる。隣屋敷の塀であるが、よほど広い敷地をもっているとみえ、その土塀は森の中をえんえんと遠くつづいている。

一度、寺の人たちにその隣屋敷のことを尋ねてみたことがあるが、ただ、江戸の商人の別宅とだけで、それ以上何も知っていない様子であったし、母に尋ねても返事はなかった。

道はなくとも、毎年一度ずつ通ったところだから雪絵は迷わない。腰を没するほどの草むらをわけながら、苔むした土塀にそって奥へ奥へと進んでゆく。

間もなく、小さなくぐり戸の前へ出た。

その辺りはことに森も深く草むらも濃くて、あたりはたそがれたように薄暗い。

雪絵はためらいもなく、そのとびらへ手をかけた。

何年にも開けたてしたこともないように苔むした重いとびらだったが、手をふれると、意外なくらい軽く、ぎぎーっとかすかにきしみながら向こうへ開いた。

雪絵は中へ入ってとびらをしめ、丁寧にかんぬきをさした。

年に一度ずつ、母の生きていたころは母に手をひかれ、母亡きあとはただ一人で、同じ日の同じ時刻にくぐってきた戸口だったが、いまさらのように雪絵の胸ははげしく鼓動をうちはじめ、緊張のため五体の硬くなるのをどうすることもできなかった。

雪絵はそのまま、濃い木立の陰をくぐって奥へ奥へと入ってゆく。

と——

その足音が遠のいて聞こえなくなったころ、土塀のそとの、とある草むらの陰からぬうっと立ち上がった人影があった。

屋敷を出るときからずっと尾行してきた中間の青助という男である。

「多分、こんなことだろうと思っていたのさ」

ふん！

と鼻先で軽く笑うと、彼はひらりと身をおどらせて土塀の先へ手をかけた。と思う間に、六尺近い巨軀が軽々と塀先を越えて屋敷の中へおり立っていた。

広い敷地の中に鬱蒼と森がしげっている。

一体どういう人の屋敷なのか、いや、それよりも人が住んでいるのだろうか。

何年もの間全然手を入れたことがないように、森も下草も生いしげるにまかせ、苔むすにまかせてある。樹間の小道も、まるで深山を歩くように暗く、荒れはてていた。

しかし、雪絵には、その小道の上りくだりにも、一つ一つはっきりした記憶が残っている。年に一度ずつ、胸に動悸をうたせながらせきたてられる思いで通った道であった。

やがて、だらだらとくだっていった道が池につきあたる。

その、青みどろに覆われてどろんとよどんだ古池は、弧を描いて眼前を横切り、両端は森にさえぎられて見通しもきかぬ向こうまでつづいているらしい。

池の向こう側は、切りたった丘陵の急斜面にさえぎられ、その急斜面と弧を描いた池との間に半月形の小平地があるのだが、池には橋がかかっていないので、一見、はなれ小島のような印象があった。

その離れ小島に、茂った立木の間から建物の屋根が見えている。どうやら、能の舞台らしい。

草むらの中の小道は、池の端をまわって右手の方へつづいているらしいが、雪絵は、その道は行かずに、つと左手へそれ、草むらを押しわけながら池の水打ち際へ出た。

と——

そこに、生いしげった葦にかくれて、一隻の小舟がもやってある。

何のためらいもなく、舟へ身をうつすと、棹をとってこぎ出した。

いつもより時刻がおくれているせいか、日もよほど西へかたむいたとみえ、池の表はたそがれ近い空の色を赤くうつしていた。

離れ小島のような向こう岸へつくと、舟をもやってまっすぐに建物の前へゆく。

それははたして能舞台であった。

古い歴史のある能舞台をここへ移し建てたものか、それとも、ここへ建ててからそれだけの月日がたったものか、崖を背にしょい池を前にして森にうもれたまま、見るからにしいんとするほど古びた建物であった。

一体、こういうところに能舞台を造って、だれが舞い、だれがそれを観賞したというのであろう？　いや、その建物のすみずみにまで、いまだかつて、だれ一人足をふみ入れたことさえないような陰々たる物わびしさが立ちこめているではないか。

舞台正面の欄間に、三日月堂と書いた額がかかっている。

一度、雪絵がいぶかって、

「お母さま。お能の舞台に、なぜ三日月堂などという名をつけたのでしょう？」

と尋ねたことがあるが、

「以前、この辺りに三日月さまをまつったやしろがあったので、そういう名をつけたようにききましたけれど……」

と、母もそれ以上よくは知らないようであった。

雪絵は、階段の下に、きちんとそろえて草履をぬぎ、すそのちりをはらって人けもない舞台へ静かにあがってゆく。

物腰は静かだが、顔は緊張にこわばって少し青ざめてさえいた。

能舞台に登った雪絵は、息をひそめ、緊張した表情で左へ、橋懸かりをわたってゆく。

一足一足、静かに床をふんでゆくその足音のほかには、ひぐらしぜみの声もすでに遠く、何か肌にせまるようなしんかんたる静けさが立ちこめていた。

橋懸かりのつきあたりは幕口といい、能の行われるときは仕切りの幕のさがっているところだが、今そこは、錠前のついた固い重い木のとびらで厳重にとじられていた。おそらく、そのとびらの開かれることはめったにないのであろう、錠前はさびをよんで古びていた。

とびらの前には、蠟燭をたてた手燭が一つ。

さらに、火打ち道具が一組みそろえておいてある。

雪絵は、まず、火打ち道具をうって蠟燭に火を点じた。

それから、銀杏の木のうろから取り出してきたかぎをとびらの錠前にさしこむ。そうすることになんの疑いもさしはさんでいない物静かな姿であった。

ぴいん……

と音がして、錠は思いのほか軽くはね、重いとびらは向こうへゆるやかに開いた。

例年の習慣にしたがって、雪絵は手燭をとってその戸口を向こうへくぐった。

いつもそうである。母の生前、その人にともなわれてここへきたころも、母はきまってとびらのそとに残り、雪絵一人が中へ入るのが例であった。

やっと物心ついたばかりの幼いころでさえ、母は必ずとびらのそとに残って、決して一緒に入ることを承知しなかった。

入ってとびらをしめると、周囲をたてきってあるその部屋は、暗夜のようなやみにとざされる。

そこを普通鏡の間とよぶのだが、そこからは舞台の真裏にあたる楽屋に通じている。

手燭をかざしてその楽屋のとっつきまで来た雪絵は、物静かにひざを折って正座し、手燭を斜め前においた。

燈火は、雪絵の姿をありありとてらしているが、奥行の深い楽屋の向こうまではしかとはとどかず、ことに、行きづまってかぎの手におれているあたりには濃いやみがたちこめている。

「三日月さま……」

と雪絵は低い声でいった。

「三日月さま……月姫さま。雪絵でございます。今年もまた、八月八日が巡ってまいりました。雪絵がお目通りのため参じましてございます」

いって、床に手をつき、低く頭をさげた。

燈火にてらされたその顔は、もう蒼白に変じている。緊張のためであった。

胸の鼓動はいよいよ高くなり、ともすれば、床についた手先がわなわな震え出しそうになる。

あたりは水をうったように静かだった。もうここまでは、ひぐらしぜみの声も聞こえてはこない。それは、まるで人間社会から隔絶した別種の世界にあるような静けさであった。

どのくらい時間がたったであろうか。随分長いようであったし、ほんの数秒の間だったようにも思われる。

やみのどこかでかすかな物の気配が起こった。足音とも、きぬずれの音とも定かではない。

「雪絵か……よう来ました」

と、突然やみの中から声が聞こえてきた。

それは澄みとおった——あまりにも澄みとおった美しい女の声であった。

「雪絵。よう来ました。ほんに、よう来てくれました」

と、その女の声がまたいった。

「顔をおあげ、雪絵、顔をおあげ」

物心ついて以来年に一度ずつ、必ず聞いてきたふしぎな女の声であった。

「さあ、顔をあげるのです。燈火に向けて顔をあげるのです」

雪絵はおずおずと顔をあげ、やみのかなたへ目をやった。

楽屋の奥深い辺りに、もうろうと一個の人影がたっている。

その辺りまでは、しかし灯影がとどかぬ故、あきらかには見定めにくいが、白衣に髪を長くとき流した、この世のものとは思われぬほど臈たけた若い女性の影であった。

そこばかり、ややはっきりと見えている顔は、青白く、仮面のように動かない。

いや、たしかに仮面をつけている顔であった。若い女をかたどった能面も数あるが、名人増阿弥の傑作といわれている増の面によく似通って、縹渺たる神品をただよわせている仮面であった。

「雪絵、十八歳におなりだね。今日は十八歳の誕生日ですね」

仮面の陰から、澄み通った声がまたいった。

「はい、十八歳になりましてございます。月姫さま」

と、雪絵は、またたきもせず、じいっとその影を凝視する。むさぼるような必死なひとみだった。

「この一年、達者でしたか？　病気はせなんだかえ？」

「はい、ご覧のとおり、つつがなく誕生日をむかえましてございます」

「美しゅうなられた。年ごとに美しゅうなられる。都に住んでも、けがれにそまぬ雪のように清らかな美しさじゃ」

「もし、月姫さま……」

と、雪絵はじっと見つめたままあえぐようにいった。必死の思いがその声を震わせる。

「あなたさまはどのようなお方でいらせられますか？　失礼ながら、わたくしと、どのようなご関係のお方でいらっしゃいますか？」

「わたしは、そなたの先祖です」

美しい声は同じ調子で答えた。

「いつもそう仰せでございます。昨年も一昨年も、同じようなお答えをうけたまわりました。ご先祖さまとはどういう意味なのでございましょうか？　水町家のご先祖でいらっしゃいますならば、父も母もこれへはまいらず、なぜ、わたくしだけこのように、年に一度、お目通りするのでございましょうか？　いえ、なぜ、このように、人目を忍んで、ふしぎなお目通りを申し上げねばならないのでございましょうか？」

「わたしは、そなたの先祖です」

「雪絵はもはや子供ではございませぬ。あけくれ、そのことのふしぎさに心迷い、悩みとおしております。お願いでございます、なぜ、このようなお目通りをせねばならぬか、どうぞどうぞ、それをお打ちあけくださいませ」

「いずれ……雪絵、いずれ分かるときがくるでしょう」

「いずれ……と仰せられますと？　それは、いつのことなのでございますか？」

「いずれ……分かるでしょう」

と、その声は、またくりかえした。

去年もそうであったし、一昨年もそうであった。毎年、問う言葉も答える言葉もきまっている。

ふしぎな疑惑と、ふしぎな物悲しさと、そして、ふしぎな懐かしさに、その仮面の人影を見つめている雪絵の胸がせつなく波立ってくるようだ。

「雪絵、いつまでも清らかでいておくれ。いつまでもすこやかに、そして、——力強く正しく生きておくれ」

と、その声がいった。

「そうすればきっと、いつかは……何もかも分かるときがくるでしょう」

「は、はい……」

雪絵は、またたきもせずその人影を見つめている。

「仰せのとおり……きっと、仰せのとおりいたします」

「ああ、よういいました。すなおな子……そなたの母と生きうつしじゃ」

そうつぶやいた声には、何か嘆くような響きがこもっていた。

「亡くなりました母のことでございますか？　仙勝寺の墓下に、ねむっておりますあの母のことを仰せでございますか？」

尋ねたが、それには答えず、しばらくじっと雪絵を凝視していたが、やがて、

「そなたも、もう十八ですね」

と、ふっと思いかえしたようにいった。

「はい、十八歳になりましてございます」

「これからは、いろいろと、人の世の苦しい思いに出会うことでしょう。雪絵、そういうときには……どうにもならぬほど悲しいとき、どうにもならぬほど苦しいとき、どうにもならぬほど困じたときには、この三日月堂を思い出すのです」

「そうすれば、いつでも、お目にかかれるのでございましょうか」
「いいや、会うまい。会うことはあるまい。そなたと会うのは八月八日、この一日だけですよ」
「では、苦しいときに三日月堂を思い出せとおっしゃいますのは？」
「ここへ来て祈りをささげてごらん。そして、事の次第を願文にしたためて舞台の上に納めてごらん……わたしはそなたの先祖です。会うことはなくとも、いつでも、どこかから、そなたをじっと見守っているはずです。分かりましたか？」
「は、はい……分かりましてございます。あまりに苦しくて思い余りましたときには、きっと、ここへ来てお祈りいたします」
「それでよい、それでよい……しかし、雪絵、このことは、秘密です」
「はい……」
「常々申しているように、このことが、ちらとでも世間へもれると、そなたの身に、思いもかけぬ不幸がふりかかってくるかもしれません。どのようなことがあろうとも、この三日月堂のことは決して漏らしてはなりませんよ」
「は、はい。よく承知しております」
「雪絵、しかとこちらをお向き。そして、よく見るのです。このわたしの顔を見るのです」
いいながら、その手がやみの中に青白くゆらっと動いて、顔につけている面にふれた。
面がはずれてすうっと宙に泳いだと思うと、その、ふしぎな女性の素顔が、やみの中にもうろうと浮き出てきた。
美しい……といっただけでは、とても形容しきれない。
つけていた面よりも、もっと臈たけて神性にとんだ、この世のものとも思われぬ容貌であった。見る人によっては、恐怖を感じてぞうっと寒けだつかもしれない顔であった。

雪絵はじっと凝視している。またたきもせず見つめている。
毎年一度ずつ、きまって見つめてきた顔であるのに、年ごとに違うような気のするのがふしぎであった。
見つめているうちに、二十歳の若さに見えていた顔が、いつとはなしに、すうっと、六十も七十も、いや、もっともっとしれぬほど怪しく年経た人の顔に見え出し、と思っていると、また、いつとはなしにみずみずしい若さにかえってくる。
「よく見ましたか、雪絵。そなたの先祖の顔ですよ。月姫の顔ですよ。そなたのほかには、だれ一人見ることを許さぬ顔ですよ。この顔を、もしも、ちらとでも見た者は、そのまま生きながらえることを絶えて許さぬ月姫の顔ですよ。よく見ましたね。見てくれましたね」
「は、はい……月姫さま」
「では、お別れです。来年のこの日まで、では、すこやかに暮らしておくれ」
「も、もう、お別れでございますか？」
「時刻が来ました。別れねばなりません。また、来年、八月八日、ここでこうして会えるでしょう」
「あ、もし！」
と、思わずいった雪絵の声はとりすがるように高かった。
「来る年も来る年も、わたくしの誕生日には、いつでもこうしてお目にかかることができるのでございますか？」
「そうです、八月八日には……しかし、そなたも、もう十八ですね。まもなく、夫を迎えねばならぬ年ごろになりました。そのときは……そなたが夫をもったそのときは……そなたと会う最後のときですよ」
「ええっ？　わたくしが夫をもつと、もうお目にかかれぬのでございますか？」
「悲しいけれど……しかたありません」

「な、なぜでございます？　なぜでございます!?」
「そのときは、そなたが浮き世の人になりきるときだからです。下界の人になりはてるときだからです。わたしとまったく別の世界に住む人になりきるときだからです」
「なぜ？　なぜでございますか？　どういう意味なのでございますか？」
「では、雪絵。お別れです」
「あの、も、もしッ」
と、雪絵があわてて腰をうかし、一、二歩そのあとを追ったときには、もう、その顔は、やみの中へかき消すように、ふっと見えなくなってしまっていた。
あたりは、ふたたび静寂をとりもどして、ただしんかんと静まりかえっている。
雪絵は、しばし、くちびるをかんだまま、暗がりの中にじいっと立ちつくしていた。

これは、ここに立つたびに、毎年きまって繰り返す疑惑ではあったが……。
雪絵は茫然と、小舟にのり、池を渡って向こう岸へついた。
そのころになって、例年よりずっと時刻のおくれていることに気づいた雪絵は、ぐずぐずしていると、帰りが夜道にかかることをしって、にわかに足をいそがせて森の中を小走りに歩きはじめた。
雪絵はまるで気がつかなかったのだが——
ほんの二間とははなれていないやぶの中に、一個の人影がひっそりと身を沈め、前を通りすぎてゆく雪絵の姿を、葉末ごしに、じいっと見つめていた。
そして、足音が、向こうの森陰に消えさったころ、のっそり立ち上がって、底光りのする目を池越しに能舞台の方へじろっと向けた。
「ざまアみろ。図星だった！」
と、口の中でつぶやいたのは青助である。

夢からさめたように、茫然と鏡の間から立ち出た雪絵は、幕口のとびらをしめ錠をかけ、手燭とかぎをそろえてそばにおくと、重い足どりで橋懸かりをわたり舞台へもどってきた。
見渡す池の表や、その向こうの鬱蒼たる森の陰には、いつの間にか、もうたそがれの色がひたひたとよせはじめていた。
さっき、雪絵がぬけてきたとは反対の森のかなたに、屋根らしいものがちらっと見えているが、何者の住まいなのか。
——いや、人が住んでいるのかどうかさえ、まるで雪絵には分からない。
かりに住んでいる人があったとしても、この離れ小島のような能舞台とは、まるで絶縁された別世界としか思われない印象があった。
——一体、あのふしぎな女性は、どこから来てどこへ去っていったのであろうか？　それとも、ずっとこの浮き世から隔絶したような離れ小島に住みついているのであろうか？

「年に一度、照っても降っても誕生日に墓参りするという、その仕組みがどうもくせえとにらんでいたおれの目に狂いはなかったのだ。雪絵はたった一人で、かなり長い時間、舞台の奥に入っていたが、はて、何をしていたのだろう？」
幕口のとびらをあけるかぎが、墓場の銀杏の木のうろにかくしてある。
つまり、だれかが、今日のこの時刻に、雪絵をあの能舞台の奥へ招きよせるため、かぎを銀杏のうろへ入れておくしきたりなのだ。
「雪絵のやつ、たしかに、だれかに会っていたにちげえねえ。それも、よくよくせえ秘密のあるやつなんだ。しかも、そいつは、まだあの舞台の奥にいる。どうやら、大分面白くなってきやアがったぜ」
と、彼はなおしばし、舞台の方をじいっとにらんでいたが、そこには、まるで人の気配もないようにしんかんと静まりかえっている。
「よしッ、こうなったら、とことんまで突きと

めずにゃアおかねえぞ」

と、彼はふてぶてしくうそぶいて、離れ小島へ渡るつもりか、小舟のもやってある水際へむけてのっそり、二、三歩あるきかけたが、とたん、

「うっ！」

と、うめいて、うしろへ飛びのいた。

一本の矢が、危うく額をかすめてうしろへ飛びすぎてゆく。

「畜生ッ！」

うめいた青助は、草むらに身を沈めながら、らんらんと光る目で、すばやくあたりを見回したが、どこもひっそりとたそがれて、人影らしいものもなければ、矢のとんできた方角も分からない。

「ふん、味なことをやりゃアがる。ちょっと手ごわいようだが、これでなくっちゃ面白かねえや」

うそぶきながら、じりりっと草むらの底をはうように動きだすと、とたん、

びゅっ！

と、鋭い羽音をたてて、第二の矢が頭上すれすれをかすめた。

と思う間もなく、第三の矢が……。

一体、どこから何者がねらい撃っているのか、まるで白日のもとに高々とさらした的を射るように正確そのものであった。

「こいつア危ねえぞ！」

と、直感した青助は、もう池を渡るのは断念したように、ぱっと地をけって森の暗がりめがけて脱兎のように走り出した。

まるで、それを待ちかまえていたようだ。ぱらぱらっと、三、四本の矢が一時に青助の影をねらって降りかかってくる。

「ううっ！　やりゃアがったなッ！」

うめきながら、一度、がくっと地へひざをついた青助は、しかし次の瞬間、はね起きざま、

太い立木の陰へ突っ走り、そのまま、がばと身を伏せた。

一本の矢が、左の腿にささって血をふいている。

青助は、その矢を、むずとつかんで抜きすてざま、手ぬぐいをとって傷口をきりきりっと固く結びあげた。

いくら浅いといっても、それだけの矢傷をうけて、顔色一つ変えないのは、よほどのしたたか者だとみえる。

「今日はしくじった。退散するぜ。だが、このままにゃアすまねえんだ。覚えていやアがれッ」

口の中で毒づくと、やにわに立ち上がって、また、ばたばたと走りはじめた。

とたん、また、どこからともなく、びゅっびゅっ！　と羽音をたてて矢がとんでくる。

こいつア、思いのほかに手ごわい相手だぞ。ただでもたそがれたこの時刻に、この暗い森陰で、一体、どこからどうしてこっちを見通しているのか？

さすがの青助も、ぞっとした思いで、ただもう、走るに夢中だった。

やっと森をぬけ、土塀につきあたる。

土塀を、ぱっと飛びこえた青助の挙動は、まさに死に物狂いの真剣さであった。

しかし、おどり越えた土塀の根方の草に身をかくしたとたん、ぴったりと身を伏せた青助の身ごなしも、こうしたことに、よくよく慣れきった男であることを思わせる。

今まで、執拗に青助を追っていた矢羽根の音も、同時に、ぴったりとまって、あたりはまた、うそのような静けさにたちかえっていた。

「畜生め、青助、生涯での不出来だった。ひで え目にあわせやがって……」

と、青助はいまいましげに、ちっ！　と舌打ちしながら立ち上がる。

「とっつぁん、ごめんよ」

と、青助は仙勝寺門前の、寺男の店へ何食わぬ顔をして入ってきた。

もう、とっぷりと暮れはてて、店の奥には灯がともっている。

「おや、いらっしゃいまし」

店を片づけていた寺男は、時ならぬ客の方へびっくりしたような目をむけた。

「ご参詣でございますか」

「いいや、あっしゃア、水町さまの中間だが……お嬢さまは、もうお帰りになったのかえ?」

「へえ……もう少々先に、お女中さんをつれておもどりなされましてございますが……」

「そうかえ。そんなら、途中で行きちがったのかな。なにね。お嬢さまのおもどりがおそいんで、こうしてお迎えにきたんだが……」

「おやおや、それはどうも……一本道でございますから、途中でお会いしたはずでございますがねえ」

「何よ、急いで近道をふっとんできたもんだから、行きちがったらしいわ」

「おやッ、あなた、おけがなさいましたねえ。腿から血が……」

「そそっかしいったらありゃアしねえ。転んで、やぶの根っ子にぶっつけちまったんだ。とっつぁん、すまねえが、焼酎がなかったかねえ。それに、ボロ切れでいいんだ。あったら少しくれねえか」

「はいはい、おやすいご用でございます。おい、ばあさん、焼酎が少しのこっていただろう。それから傷口をしばる布をな。急いでもってこいよ」

と、寺男は奥にむかって声をかけた。

青助は、どっかりと床几に腰をおとして、

「子供じゃあるめえし、転んでけがをするなんざ、からきしみっともねえ話だが、それっていうのが、だれだか、うしろから駆けてきやがって、いきなりおれを突きのけていったやつがあったんだ」

「へえ、そりゃまた、随分乱暴な……」

「あまり癪にさわるから、後からおいかけていって、文句の一つも浴びせてやろうと思ったんだが、その野郎、ふいっと隣の屋敷へへえっていってしまやがった」

「へえ? お隣って申しますと」

「そら、仙勝寺の墓地つづきに、ずうっと土塀の回った屋敷があるだろう、あすこだ」

と、青助は空とぼけていう。

「おかしゅうございますね。あのお屋敷は、普段、住んでるお方もないようでございますがね」

「っていううわさをきいたから、それだけに、おれアそうっとしたんだ。ねえ、とっつぁん、あの屋敷はだれの持ちものなんだい?」

何気なく尋ねかけた青助の目が、上目づかいにじろっと寺男を見た。

「なんでも、江戸の大商人だというわさでございますが、詳しいことはだれも存じません」

「おかしいじゃねえか、あれだけの屋敷をもちながら、だれも住んでいねえっていうのは?」

「物好きなお人なんでございましょうね。わたしが、お寺へご奉公に出てから、もう随分になりますが、ついぞかつて人声一つ聞いたことがございませんのでね」

人のいい寺男は、問われるままにしゃべっている。

「まるっきり手入れをしてねえせいもあるが、随分荒れはてた古い屋敷だねえ」

と、青助はしつこく食いさがって聞く。

「そうでございますよ。徳川さまがこの江戸へ、ご入府あそばします以前からのものだそうでして……もとは、何やらおっしゃる土地の豪族のお館だったそうですが、その後、ご一族がちりぢりになってしまい、それからは、だれも住み手がなく、ずうっと荒れるにまかせてありましたそうで……」

「それを、江戸の商人て人が買ったんだな?」

「へえ、そのとおりで……」
「そりゃア、いつのことだ？」
「さて、もう十何年か前になりましょうなア。そうそう、わたしが、この寺へあがった前の年のことだと聞きましたから、今年でちょうど十七年になりますか……」
「ふうむ、十七年前にのう」
十七年と、胸の中で指を折って数えている青助の目がぎょろっと光った。
——はて、雪絵は今年で十八歳だ。十七年前といえば、雪絵が生まれた翌年のことだが……どうもくせえぞ。
「それで、何かい。あの地所を買って、その年に普請をしたってわけなんだな」
「いいえ、そうではございませんそうで……あの土塀などは、昔からのままで、ただ、壊れた所を、少しずつ修繕したそうでございますよ。それから、お能の舞台をお作りになりましたそうでね」
「へえ、お能の舞台を？」
と、青助は白っぱくれて、
「そんなものはどこにも見えねえようだがのう」
「まるで表から見えません。わたしも、一度も見たことはございませんが、寺の衆の話ではなんでも、どこかの古いお能舞台を運んできて、三日月さまの辺りへお建てになったらしいってねえ」
「ええっ、三日月さまだって？」
と、青助は、何かぎくっとしたように声を高くした。
「三日月さまって、そりゃア、一体なんのことだい？」
「詳しいことは存じませんが、あのお屋敷のずっと奥の方に、三日月さまをお祭りした古いおやしろがありましたそうで、以前は、あそこを三日月屋敷とよんだそうでございます。もっとも、住み手がなくなってからは、いつの間にかそのおやしろも朽ちはてて、土台石のほかはあとかたもなくなっていたそうでございますが……」
話しているところへ、寺男の妻が、徳利にはいった焼酎と、白布をさいたものを一まとめにして運んできた。
「やあ、すまねえ、すまねえ」
青助はうけとると、床几にかけたまま、すそをまくって腿をつき出し、しばってある古手ぬぐいをとった。
「おう、大分ひどいおけがじゃございませんか」
「なに、大したこたアねえ。やぶの根っ子にぶっつけただけさ」
と、手ぬぐいの血のりを洗い、焼酎を口にふくんで、ぷっと傷口にふっかける。
と——
「矢の根を残しておくと、脚が腐るぞ」
と、向こうのすみから出しぬけに声をかけたものがあった。
出しぬけに、矢の根——といわれて、青助はぎくっとしたようにその方を見た。
たそがれて暗い向こうの片すみに、うしろ向きに床几にかけて茶をすすっている一人の浪人らしい若侍がいた。
暗い上に黒い衣類を着ているので今まで気がつかずにいたのであろう。それに、めったに客などない店だったから……。
「矢の根を抜かんといかん……」
と、上半身をふり向けながら、またいう。
じろっとにらんだ青助のすごい視線と、ぴったり宙に目をあわせたまま、若侍の表情は氷のように物静かであった。
「矢はぬきとっても、往々にして根が傷の中に残る。すておくと脚が腐るぞ」
物静かな声であった。
「い、いえ、だんなさま。ありがとう存じますが、そんな矢の根だなんて……へへへ、こりゃ

アほんの、やぶの根っ子につまずきました傷なんで……」

青助は、ふっととぼけた表情になって、そのまま、さっと包帯を巻きにかかった。

「そうか……やぶの根につまずいた傷か。なるほど、この辺のやぶは恐ろしい。矢を射かけたほどに肉をえぐると見えるのう……」

にっと白い歯を見せて笑った顔が、あまり物静かだっただけに、青助は、余計ひやっとした思いであった。

「大分、暮れてきたな。どれ、帰るとしようか……亭主、ここへ茶代をおくぞ」

といいすてて、若侍はのっそりと立ち上がる。年のころ、二十五、六であろう。背丈は五尺四、五寸ぐらいだから、がっちりとした肩のはった影が岩のようにたくましい。

若侍はもう青助の方など見向きもせず、店を出ると、江戸の方をさして、すたすたと歩み去ってゆく。

「ありゃア、ご参詣の人かえ?」

と、青助がきく。

「へえ、ここ一月二月の間に、二、三度お参りに見えました」

「ご近所なのか?」

「いいえ、たしか、浅草の向こう柳原の辺りと伺いましたよ。おう、そうそう、……最初おいでになりましたとき、お静坊に案内されておいでしたから、きっと向こう柳原のお近くに相違ございません」

「なんだい、そのお静坊ってのは?」

「親孝行の子でございますよ。まだ十五、六にしかならないのに、女馬子をして病気の母親を養っておりますそうで……よく、この辺りを駄馬をひいて通ります」

「ふうん……」

「あ、もしや、あのお武家さまは水町さまとお知りあいのお方ではござりませんですか」

「なんだって?」

「最初ここへおいでになりましたとき、水町さまのお墓はどこかとお尋ねでございましたもの。何かご関係のあるお方だとばかり思っておりましたが……」

「ありがとう。銭をおくぜ」

と、包帯を巻きおわった青助は、すっとぶように店から走り出た。

何者だろう、あの若侍は?

水町家の墓を聞いたって? その上、この脚の傷を矢傷だとずばりあてやアがったが……。

あわてて見渡した向こうは、もう一面の暗がりで、人影らしいものはどこにも見えなかった。

灯とり虫

さすがに秋である。

昼間の暑さも、夜のとばりがおりると一緒に、忘れたようにぬぐいさられて、すがすがしい涼風が軒の風鈴を軽くゆさぶって吹きすぎてゆく。

「おう、草ひばりじゃな……」

と、三郎太は鳴き出した虫の声に耳をすました。

五十三という年齢より五つ六つふけて見える額のしわである。小鬢にめっきりとふえてきた白髪の一本一本にも、血で血を洗う戦場の起きふしに命を削ってきた人の過去がきざみつけられているようだ。

「ふしぎに、この日というと草ひばりの声をきく。昨年もそうであった。一昨年も……」

と、三郎太は、何か遠い追憶にふけるように目を細めながら、

「そうだ、あのときも聞いたのう、草ひばりの声を……かしましいほどの鳴きようであった」

と、さも懐かしげにぽつりという。

「父上さま、あのときと仰せられますと?」

つつましくその前に座った雪絵は、優しいひとみで父を見つめながら聞く。

「そなたの生まれる前の年のことであった。ご

用の筋があって信濃路を旅したことがあったが、その折、ふと通りすがりの八ガ岳へまいったのじゃ。そのとき、ひときわ美しく鳴きすだいていた草ひばりの声を思い出す」

「ほほほ、おかしゅうございますこと……」

と、雪絵は微笑をふくませながら、何か、いぶかしげに小首をかしげる。

「何がおかしい？」

「父上さまは、昨年もそのように仰せでございました」

「む？」

「忘れもいたしません。同じ八月八日の晩。わたくしが母上さまのお墓参りからもどりまして、同じこのお部屋に、こうして父上さまとただ二人きりお話し申しておりました折にも、やはり、同じようなことを仰せでございました」

「ふうむ……」

「なぜそのように、八ガ岳でお聞きあそばした草ひばりの声が、お懐かしくておいでなのかと、お伺いいたしましたが、そなたの知らぬことじゃと、ただそれだけ仰せられて……」

「ははは、そのようなことを申したかのう」

「父上さま、その草ひばりの鳴き声に、どのような思い出がおありなのでございますか？　よほどのことと思われます。是非是非お聞かせくださいませ。是非、父上さま……」

「若い日の、一つのあやまちじゃ。あやまちであっても、年たてばただ懐かしく思い出されるものでな」

と、三郎太はさりげなく話をそらせて、

「雪絵、お墓参りはとどこおりなくすませたか？」

「はい、例年のように……」

「月姫さまにも……」

といいかけて、三郎太は、ふっとあたりへ目を配った。

この日、墓参りからもどると、父と娘二人きり、人目をさけて、奥の間で、こうして語りあうのが例になっている。

雪絵には、この春元服した三つ年下の弟があるが、その弟さえこの席へは通されない。

「月姫さまにお目通りしたか？」

と、あたりへ気を配りながら、三郎太の声が急に低くなる。

「はい、父上さま……」

雪絵も、にわかに真剣な目の色になって、じっと父を見上げた。

「お変わりはなかったか？」

「はい、まことにお健やかにお見うけいたしました」

「それはよかった。ごきげんも良うあられたのであろうな？」

「はい、ごきげんうるわしく、よう来てくれましたと、くりかえし懐かしげに仰せられました」

「懐かしげに申されたか。ふむ……それで、何か……もっと何かお話をしたか？」

「例年のとおり……同じようなお言葉がございました。いついつまでも、清らかに気高く、そして美しい娘でいてくれよと仰せられました」

「うむ、うむ……」

「そなたは亡き母によう似てきたとも仰せられました」

「何？　亡き母によう似たと？」

「はい。母によう似てすなお子じゃと仰せられました」

「うむ……そうか？　そう申されたか？」

と、半ば独白のようにいいながら、三郎太のまゆがふっと曇った。

ついとわきへそらしたひとみに、何か古い思い出の中に沈んでゆくような表情があった。

「父上さま……」

「なんじゃ？」

「雪絵は苦しゅうございます」

と、雪絵の声は、思い迫ったように切なげな響きをこめていた。

「知りたいことを、知ることもならず耐えているのが苦しゅうございます。父上さまも教えてはくださいませぬ。亡き母上さまもそうでございました。月姫さまも……月姫さまも、いくらお尋ねしても何一つお答えくださいませぬ。父上さまッ、なぜお教えいただけないのでしょうか？　月姫さまとはどのようなご素姓のお方なのでございましょうか？

なぜあのように、雪絵ただ一人、人目を忍んであのようなお目通りの仕方をいたさなければならないのでございましょうか？」

「雪絵、何も聞くまい。いつかは、おのずと分かるときがくるであろう」

と、三郎太は沈んだ顔をして、憮然としていう。

「昨年も、一昨年も、そう仰せでございました。月姫さまもそう仰せられました。この身にまつわるふしぎなどを、解くこともかなわず耐えているのが苦しゅうございます！　父上さま……もはや、たえられぬほどに苦しゅうございます。わたくしも、もう十八歳にあいなります。雪絵はもはや子供ではございませぬ。お父さま、お願いでございます。なにとぞ、それをお聞かせくださいませ。いえ、なぜ、聞くことがならぬか、せめても、そのわけなりとお聞かせくださいませ。もし、父上さまッ、お、お願いでございます」

「時節がまいらねば、知ってならぬこともある。話してならぬこともある。雪絵、もうしばらく待て。苦しいというその心中、分からぬではないが、時節のくるまで、もうしばらく、じっと待て」

と、三郎太の沈んだ声がしみじみという。

「のう、雪絵。ただただ、時節のくるのを待てと申して、そなたの心を悩ます疑惑を、解いてやらぬ父をさだめし不満に思うであろうが、さるお方に……ありていに申さば、あの月姫さまに、固くお誓いした約束があるのじゃ。つまりは、わしの一存によって、どうにもならぬ子細があると思え。月姫さまが、時節を待てよとの仰せであらば、その時節のくるのを待たねばならぬ。苦しかろうが、黙って待て。何も聞かずに待っていてほしい。のう、雪絵。分かったな？」

と、三郎太はしみじみいって、いとおしむように娘を見つめた。

「しかも、常々申し聞かせてあるように、ことは、必ずうかつに他言すまいぞ。だれにも、ちらとでも悟られまい。うかつにこのことが世に漏れたなら、その身に思わぬ不祥事が降りかかってまいらぬでもない。その身ばかりではなく、この父にも、この水町家にも、また、あの月姫さまにも……容易ならん不幸が見舞うものと覚悟せずばなるまい。絶対に漏らすな。命にかけても他言すなよ。分かったな、雪絵？」

と、その声はいよいよ一語一語かんでふくめるようであった。

「は、はい……」

雪絵はうなだれたまま、悄然としていう。

「それほどまでに仰せあそばしますのは、さだめしよくよくのご事情があってのことと存じます。問うなと仰せなれば、もう、雪絵は二度と決してお尋ね致しませぬ」

「よいよい、それでよい……しかし、そなたも、もう十八歳じゃ。改めて、一言だけ申し聞かせておきたいことがある。雪絵、わしの顔を見い」

と、父は娘の顔を、いまさらのようにじっと見つめて、

「月姫さまの仰せられた言葉を承知しておろう？　いついつまでも、清く気高く、そして美しい娘でいてほしいと……月姫さまは、なぜそのように仰せられたか……分かるか？」

「ご慈愛のお言葉と伺いましたが……」

「うむ、ご慈愛もある、そして、そなたの体の

中には、たぐいなく尊い血が流れているからじゃ」

「な、なんと仰せられましたか？」

「尊い血じゃ。そなたの身内には、たぐいなく尊い血が流れているからじゃ。わが水町家の血のほかに、たぐいなく高貴な尊い血が流れているからじゃ」

「え、えっ？」

「雪絵、月姫さまのお言葉を忘れまいぞ。いつ、いかなる者の前に立っても、その清らかさ気高さ美しさを誇らかに歌いうる娘であってほしい。高い誇りをもてよ。いかなる者に対しても、寸歩もおくせず、めげぬほどの高い誇りを持つことを忘れるな。これが、十八歳の誕生日を迎えた、いとしいそなたへのせめてものはなむけじゃ」

といったきり、三郎太は、ぽつんと言葉をきって目を閉じた。

その額にきざんだしわのいくすじかに、なぞを包んだ愁いに似たものが、一段と濃い影を作ったようだ。

にわかに行燈の灯がまたたいて、すうっと暗くなる。火とり虫が迷いこんだらしい。

雪絵は、何か茫然としながら、行燈のそばへにじりよって、茫然とした手付きで一匹の蛾を追いたてた。

「おう、そうそう……雪絵、今日は墓参にまいる道すがら何かあったそうな？」

と、三郎太はふと目を開くと、微笑になって雪絵を見やった。

「荒くれ奔馬を乗り鎮めたという、あれは事実か？」

聞かれて、

「あ――」

と、低くいったまま、雪絵はわれに返ったようにさっと赤らんだ。

「もう、あのことがお耳に？」

「うむ、だれやら、うわさをきいて知らせにきた者があるという」

「女だてらに恥ずかしゅう存じます」

「なんの……そなたなればやりかねまいと、笑っていた。それほどの娘をわが子にもって、さすが水町家の娘御などとほめられては、ついこの鼻も高くなろうというものじゃが……しかし、聞けば、相手は長安なそうな？」

「はい、大久保石見守さまでございました」

「はて、あの山ざるめ、ようやすやすとひきさがったの。それとも、何かいいがかりをつけたか？」

と、三郎太の目は笑っている。

そう聞かれてはかくしてもおけないことだから、雪絵は、事の次第を残らず話した。

「ふむ……さるのいいそうなことじゃ。どうでもそなたを、一度は屋敷へ呼びよせて、初一念を貫くつもりか？」

「いやおういわさず、お約束をさせられましてございます。思い出しても不快でございます」

「かまわん。そのような約束、忘れてしまえ」

「お呼び出しがまいっても、お屋敷へ上がらずともよろしゅうございましょうか？」

「かまわん、ほうっておけ、山ざるめ！」

と、三郎太の声はあざ笑うように高くなってくる。

「甲州の山ざるが、小才のきくのをいいことに、黄金と漁色に踊り狂って、時を得顔にのさばりおるわ。なるほど、金山をひらいて公儀の財政に寄与した点、功績も大きかろう、大御所さまのお覚えもめでたかろう。だが、このわしにとってきゃつは何者じゃ！　いや……きゃつこそは、猿楽師の小せがれに生まれながら信玄公に見いだされ武田家の臣となった高恩も忘れ、武田家滅亡の直後、たちまち小才をめぐらして徳川家に随身しおった、いわば変節者ではないか。いや、変節者も数は多い。あしたに甲の主人を失って、ゆうべに乙の主人の祿をはむは、戦国の当時からざらにある例だが、きゃつめは、

その高恩ある武田家を食いものにしているやつじゃ。

信玄公のご末子で、盲人であるが故に死をまぬがれた海野竜宝師のご遺児、顕了道快和尚を威嚇して武田家累代の家宝をまきあげ、自ら新羅三郎の後裔などと称し、だれ一人知らぬ者もない武田家のご家紋、武田菱を旗じるしに使いおる厚顔無恥の痴れ者じゃ。余人はいざ知らず、この三郎太の目の黒い間は、断じてそなたに指一本染めさせはせぬ」

突然、三郎太は言葉を切って、じいっと行燈を凝視した。また蛾が迷いこんだか、行燈の灯がちらちらとゆれている。

とたん、

「曲者ッ！」

叫ぶのと、三郎太が立って、長押の手槍をとりはずし、畳ごしに床下へ、ぐさり！　と突き立てるのと同時だった。

床に突きたてた手槍をひきぬいた三郎太は、一瞬、きっと耳をそばだてた。

そういえば、いっとき、けたたましく鳴いていた草ひばりの声がひたとやんで、あたりは森閑と静まりかえっていた。

その静寂の底を、何かの気配が、床下伝いにささささと遠ざかってゆく。

三郎太は、槍を手にしたまま、足早に縁先までいって、しばらく、じいっと庭先の暗がりへ目を凝らす様子であった。

「父上さまッ。曲者は!?　人を呼びましょうか?」

と、そのそばへ走りよって、雪絵が低い鋭い声でいう。

さすがに、とっさに袋の口をひらいて片手を懐剣の柄にかけていた。

「素早いやつめ。ただ者とも思われぬ。いや、騒ぐな。だれも呼ぶな」

と、三郎太はゆっくりいった。

「でも、父上さま、ただいまのお話を?」

「うむ、聞かれたかもしれぬ。よも、ただの盗賊ではあるまい」

「すておいて大事ございませぬか?」

「うむ……」

と、物に動ぜぬ太いまゆが娘の方をふりむいた。

「そなた、今日の墓参りに、何者かにつけられるようなことはなかったか?」

「いいえ、そのようなこと……」

「三日月堂への途中、何か思いあたる不審な節はなかったか?」

「いいえ、いつものとおりでございました。心当たりはございませぬ」

「それならよい。かりに、今の話を残らず聞かれたとしても、おそらく大事あるまい。しかし、くれぐれも用心せい。命にかけて、月姫さまのこと、他人にさとられるな」

「はい、くれぐれも用心いたしまする」

「何やつが、いかなる目的をもって床下に忍び入ったか……それとも、ただの盗賊にすぎなんだか、いずれ分かるであろう。よい。部屋へ下がって休め」

と、三郎太は、もう何事もなかったように、おだやかな微笑になって部屋へもどってゆく。

そのとき、庭を横切って足早に走りよってくる気配がして、

「父上さまッ……おう、姉上さまもそこにおいでございますか」

と、声をかけた者があった。

雪絵にはたった一人の弟で、左近といい、この春元服をすませたばかりの十五歳の少年である。

「父上さまッ、曲者が……」

「騒がしい、静かにせい」

と、三郎太はしかって、

「曲者?　ほほう……」

と、さりげない顔で左近を見やった。

「先刻、姉上さまのお部屋の方に、何やら怪しい人影をちらと見かけましたので、それとなく庭先を見回っておりましたところ、ただいま、あの向こうの植え込みの陰を矢のように走りぬけ、塀をおどり越えて逃げてゆく曲者を見かけましてございます。ひっ捕らえてくれようと、あとを追いましたが、たちまちやみにまぎれて……残念でございました」

と、十五の少年は息をはずませていったが、

「よいよい、鼠賊であろう。すてておけ」

と、三郎太はこともなげにいいすてた。

雪絵は部屋へ下がっても、すぐ寝る気にはならなかった。

自分の体の中に高貴な血が流れているといった父のふしぎな言葉が、胸の中に大きな塊を作っていた。

高貴な血が流れているなどと聞いても少しもうれしいとは思わない。父と母との血をうけついだ水町家の娘であることだけで、この上ない幸せだと思い、それ以上何一つ望むことなどありはしない。

とはいっても、やはり気にかかる。父の言葉の意味は何を語っているのであろうか。父か母かの過去に、何か、まだ知らずにいる秘密があるのだろうか。

いや、そんなことはあろうはずがない。自分は、父と母との間にうまれた、だれはばかることのない水町家の娘なのだ。わたしは、父と母との間にうまれ、その血をうけついだ娘なのだ……。

ただ、月姫さまは、わたしのご先祖だとおっしゃる。してみると、父か母かの血を通して、あのお方の血がこの体の中に流れているというわけなのであろうか。

月姫さま——ふしぎな女性だ。まるで、この世のものとも思われぬほど、臈たけて、そしてあやしいふんいきを身にまとっておいでになる。一体、どうした素姓の、どうした身分のお方なのであろうか。

考えれば考えるほど疑惑が深まり、それにつれて、身のひきしまるような緊張に襲われてくる……。

雪絵は、いまさらのように、あの曲者のことを思って、慄然とした。

だれかが、この屋敷をうかがっていた。父から、命にかけて守れといわれた、この身の秘密を、だれかがかぎつけてさぐり知ろうとしているらしい。油断はできない。

弟左近の訴えた言葉を思い出し、そっとぬれ縁に立ち出てみた。

雪絵の部屋は、母屋から廊下でつづいた離れの一間があてられている。

縁先に立つと、八日の月は雲の間にかくれて、庭先は見通しもならぬほど暗かった。

ふっと気付いたのは、行燈の灯にてらされている足元の縁の上であった。

足跡らしいものがかすかについている。はだしの、大きな男の足跡である。

弟のいったことは本当だったらしい。だれかここへ忍びよって、中の気配をうかがっていた様子がありありとまぶたにうかんでくる。

何か、ふっと不吉な予感を覚えたように、雪絵は暗い顔になった。

と——

「お嬢さま……もし、お嬢さま……」

と、暗い植え込みの向こうから、ささやくように呼んだ者があった。

「もし、雪絵さま」

「だれッ？」

と、きっとその方を凝視すると、

「わたくしでございます。青助でございます」

と、手にした馬乗提燈の灯影と一緒に、中間の影が、そっと植え込みからぬけ出てきた。

「何ごとです？　夜中、みだりにこの辺りに近よると許しませんよ」

雪絵はきびしくしかったが、
「お静かに……雪絵さま、大変でございます」
と、青助は足音を忍ばせて近よってくる。
「失礼お許しくださいませ。雪絵さま、大変なことが起こりましてございます」
と、青助は神妙な顔つきで、縁先近い大地へ身をかがめ、片ひざをついた。
「何事です？　大変なこととは？」
「あ、もし。どうぞ、お静かに……」
「早くおいい。大変なこととは何事です？　いえ、どうして父上さまに申し上げず、ここへ来たのです？」
雪絵は、気品の高い目で、きびしく中間の顔を見つめる。
「いいえ、それが、お殿さまには申し上げにくいことでございまして……是非、至急、お嬢さまのお耳に……と、そう思いましたもので、失礼とは存じましたけれど……」
「分かりました。大変とは何事です？　早くおいい」
「つかぬことを伺うようでございますが、ただいま、お屋敷うちに、何ぞ変わったことでも起こりはいたしませんでしたでしょうか？」
「何!?　なんとおいいだえ？」
「いえ、先程、このお屋敷の塀外をうろうろしております怪しい人影を認めたものでして……」
「それが、どうしましたか？」
「では、何事もなかったのでございますか？　おかしゅうございますなア……」
と、青助は、しさいらしく小首をかしげ、
「そいつらは二人組みらしゅうございましてね。妙なことをひそひそ話しあっておりましたが、あっしは急なご用もあったことゝて、そのまま見すごしにいたしましたが、それが、たった今しがた、ご用からもどりまして、そこらまでさしかかりますと、その先の塀の辺りから、出しぬけに矢のような速さで向こうへ突っ走ってゆくやつがあるじゃアございませんか。あっという間にやみにのまれてしまいまして……おそろしくすばしこいやつなんで……はて、どうしたものか、いろいろ迷っておりましたが、やっぱり、少しでもお早くお耳にお入れしておいた方が……と、そう思いましたもので、へい……」
「それなら、なぜ父上さまに申し上げぬ、直々、わたしでないと話せぬとはなぜです？」
「まあお待ちくださいまし。問題なのは、その前に、二人でひそひそ話しあっていた話のことなんでして……それが、どうやらお嬢さまのお身に、大変なご関係のありそうなことだったものですから……」
「何？　わたしの身に関係のある話？」
「さようでございます。月姫さまがどうの、三日月堂がどうのと……」
「あっ、お待ち！」
と、雪絵はわれにもなくあわててせきこんだ。
「じゃア、やっぱり、思い当たることがおありなので」
「いいえ、そうではないけれど……青助、静かに……それで、その話というのはどのようなことでした」
「それが、うかつには申し上げられませんことでして……」
「なぜ？」
「大変なことなんでございますよ、お嬢さま、ここではお話しできません。失礼でございますが、ちょっと、そこまでお運びいただけませんでしょうか？」
と、額越しに、素早い視線がじろっと雪絵を盗み見た。
「青助、なぜここでは話ができないのです？」
「さあ、それが……うっかり、人に聞かれたら、大騒動になりそうなお話なんでして……」
と、青助はことさら声を低くした。
「月姫さまのことでございますよ、雪絵さま」

「月姫さま……とやらが、どうしたのです？」
「ですから、ここではうかつにお話しできないような……三日月堂とやらからここまで、ずっとお嬢さまをつけてきたとか申しておりました、へい……水町さまのお家にかかわるような大事だとか……」
「それだけですか？」
「いいえ、いいえ、その先が大変なんでして……あまりふしぎな話なんで、あっしは、ついつい知らず知らず耳をすまして残らず聞いてしまったんでございます。そのときはただ、ふしぎに思って聞いておりましたが、あとでよくよく考えてみますと……お嬢さま、恐れ入りますが、ちょっとそこまで……」
あたりを見回しながら、いよいよ声を低くする。その様子が、さもただごとならず雪絵の目に映った。
「お待ち、青助……」
と、雪絵は思わず、くつ脱ぎの庭げたへ足をおろしていた。
「暗うございます。お足元にお気をつけくださいまし」
と、青助は忠実らしく小腰をかがめて先に立ちながら、提燈をさしかけてきた。
「どこまで行くのです？」
「お屋敷うちでは、人目がございます。恐れ入りますが、裏木戸から、ちょっと表へ……」
そのいい方もさりげなかったが、雪絵の思いは、青助のもらした月姫、三日月堂という言葉にとりつかれていた。
床下に忍びこんだ曲者が、それまで知っているというのは容易ならざることである。命にかけて秘密を守れといわれた父の言葉が、やきつくように胸に残っていた。
木戸を表へ抜け出ると、そこは屋敷の裏手で、秋草のおい茂った小暗い空き地を越えてその向こうは神田川の断崖にのぞんでいる。
「どこまで行くのです？」

「いえ、ここで結構でございます。ここならじゃまの入るはずもなく、だれにも聞かれる心配もございません」
と、立ちどまった青助は、提燈の柄をとある立木の枝の間にさしとめた。
「さあ、お話し。どんなことを聞いたのですか。青助？」
と、雪絵はただもうそのことばかりに憑かれていた。
普通なら、仮にも旗本の娘が、夜中中間風情の呼び出しにあって、男と二人きり、こんな人けのないやみの中に立ち出るはずはなかったのだが……。
「さて……と改まるほどのお話じゃアございませんが、なんでございますってね、お嬢さまが、八月八日のお誕生日に、毎年ただお一人でお墓参りなさいますのは、お墓参りが目的ではなくて、何かほかにお目当てがおありなんだそうでございますってね？」
いいながら、じろっとあたりを見回した青助の目つきは、じゃまになる人影のないのを、しかと確かめるようにあやしく光っていた。
「何をおいいです。わたしが仙勝寺へまいるのは、亡くなられた母上や、ご先祖さまの墓参をするためです。毎年の例で、だれでも知っていることではないか」
「ところが、そうじゃございませんそうでねえ、うわべは墓参りでも、その実、それにかこつけて、何かほかの、大変な目的がおありなんでございますってね」
「何！　青助、主人を疑うのですか。言葉がすぎましょう！」
「おっと、ご免くださいまし。お怒りになってはお話ができません。こりゃあ、あっしが申し上げるのではなくて、それ、だれかのひそひそ話をまた聞きしましたんで、へい……」
と、青助は空とぼける。

「むだ口をきかず、先をお話しッ！」
「なんでも、仙勝寺の裏隣に、荒れはてただれかのお屋敷があるんだそうでございますね。お嬢さまは、お墓参りをおすませになりますと、その足で、たったお一人、こっそりそのお屋敷へ入っておいでになる……そんなことを話しておりましたんで、へい……」
「何のことかわたしには分かりません。でも、それで、もっと何かいいましたか、青助？」
と、雪絵はさりげなくいったが、顔からすうっと血の気のひいてゆく思いであった。
だれかに見られたに違いない。容易ならないことになった。その先を、どのくらい知られているのだろうかと、不安さに、胸をぐうっとしめつけられるようであった。
「そのお屋敷の奥に、その、三日月堂とかいう、お能の舞台のようなものがあるんだそうで……お嬢さまは、その三日月堂へ、こっそりお一人で入っておいでになり、だれかとこっそりお会いあそばすんだそうで……」
「ふしぎな話ですね。ふしぎなうわさをするものですね。わたしは覚えもないし、なんのことか少しも分からないけど……」
「本当に、お嬢さま、お覚えのないことでございますか？」
「青助、わたしを疑うのですか」
「いいえ、もう、そんなわけではございませんが、その三日月堂でだれとお会いになるのか、その名前までちゃんと話しておりましたよ」
「青助……」
「まあ、お聞きくださいまし、お嬢さま……それがなんでございますってね、月姫さまとおっしゃるお方だそうでございますってね。お嬢さまのご先祖さまにあたるお方なんだって、そんなことを申しておりました。へい……そして、お嬢さまは、お生まれあそばしたすぐのころから、母君さまのお懐に抱かれ、あるいは、お手をひかれして、年に一度ずつ、お墓参りにかこ

つけては、こっそり、そのお方さまにお目通りあそばすため、三日月堂へおでましになるんだそうでございますね。いやもう、世の中にゃアふしぎな話があるもんでございますが、つまりは、それが水町さまのお家にとって、容易ならねえ秘密にからんだことだからなんでございますってね」
「青助ッ！」
と、いったまま、しばし、雪絵はきっと青助を凝視していたが、
「お前ですね!?」
「へ？」
「わたしのあとをつけてきて、盗み見したのはお前自身ですねッ!?」
雪絵の目は怒りをふくんではったと青助をにらんだ。
「なんでございますって？　あっしが、お嬢さまのあとをおつけして……と、とんでもございません、そんなこと……」
「お黙り。人の立ち話をちらと盗み聞きしたというお前が、それほど深く詳しいことを知ろうはずがない。青助、正直においい！」
「へへへ……」
「おのれ、笑ったな」
「やっと、お気がつきましたかい、お嬢さま。おっしゃるとおり、ずうっとあとをつけて行き、のこらず拝見させていただきましたんで、へへへ……」
と、青助は、がらっと声の調子をかえ、ふてぶてしくあざ笑った。
「うぬッ、憎いやつ。なんで、主人のあとをつけ、そのようなことをしたか!?」
「それどころじゃアございません。さっきは、だんなさまの床下へ、こっそり忍びこんでお二人のお話を、残らず聞かせていただきましたんで、へい……」
「おのれ、なぜそのようなことをした？　返事

によってはただはおかぬ！」
「おっとっとっと、いきなり懐剣へお手を出したりあそばして、何をなさるおつもりなんで？」
「返事によっては成敗する」
「そいつア、悪いご了見というもんでございます。へへへ……おやめなさいまし」
青助はうそぶいた。
「もうこうなりゃア、何もかも申し上げてしまいますが、毎年八月八日のお誕生日に、お嬢さまたったお一人で、きまってお墓参りなさるっていう、妙なうわさをちらっと小耳にはさんだのが最初でございまさア。ご当家へ中間奉公に住みこんだのも、ただただそいつをばらしてみてえ野心からなんでしてね。どうもくせえぞと、にらんだこの目に狂いはなかったというわけでさア。しかも、にらんだはじめの目算よりも、こいつア、よっぽどえらい仕組みらしゅうございます。れっきとしたお旗本のお嬢さまが、中間風情に一言二言ささやかれて、夜の夜中、男と二人っきり、あわててこんなところへいらっしゃる。それだけ考えたってただごとじゃアございませんや。なにしろ、うかつにこれが世間へ漏れたら、たちまち水町家が危うくなる……たしか、だんなさまがそうおっしゃってでございましたねえ。命にかけても、この秘密は守れってねえ、へへへ……」
「青助、そこへ直れッ！」
「しっ！　お声が高うございますぜ。いくら、あたりに人けはなくっても、塀から塀へお屋敷つづきだ。人さまに聞かれちゃまずうございましょう」
にやりと笑ったその顔のふてぶてしさに、雪絵は、もう生かしてはおけぬと、瞬間決意した。
「青助、それだけの悪事をたくらみ、ぬけぬけと口外したからは、さだめし覚悟はあろう。成敗する。覚悟！」
懐剣をぬきはなちざま、さっと斬りつけてきた気勢は、とても女と思えぬ鋭さであった。

しかし、青助は、とうから用心していたらしく、ひらりとわきへ飛んで逃げ、
「やいっ、じたばたするなッ」
と、叱咤しながら、ぬっと立ちはだかった姿は、六尺近い上背といいすごみのある形相といい、ただ者ならぬ正体を露骨にありありとむき出していた。
「おい、雪絵さん……ことのついでに聞いておけよ。この青助を、ただの渡り中間と思って甘く見やアがると、あとでとんだほえ面かくぜ。時世時節で運が向きゃア、一国一城のあるじにもなる男だ。かつて昔は、相模の北条家に仕え、血なまぐせえ戦場も散々かけめぐってきた、ちっとは名の聞こえた乱波の末だぜ。たかが吹けばとぶような、二百石の小旗本なんざ、おれの舌三寸で、たちまちぶっつぶして見せるからそう思っていろ」
低い声で、威嚇するようにいいながら、豹のような目が、暗がりの中にぎらぎら光って雪絵をねめつけている。
一体この男が、なんのために正体をかくしてわが家に住みこんでまで、一家の秘事をあばこうとするのか——
「青助ッ、おのれが何者であろうと、そのようなこと、わたしの知ったことではない。ただ一つ聞いておきたいことがある。なんのために水町家の秘事をあばこうとした！」
「そっちが聞くまでもねえや。今こっちの方からしゃべるところなんだ。おれア、お前さんにほれたんだよ」
「な、何ッ！」
「もう半年ばかり前のことだ。道でばったり出会った目もさめるような良い女。あれが、水町家の評判娘と聞いたそのときから、おれア、ぞうっと恋の虫にとりつかれてしまったんだ。とたんに、おれア、この女はおれのものだときめたんだよ」

「な、な、何ッ、無礼なッ」

「ほれて身分が違うと指をくわえて引っこむなア、能も力もねえ世間のやつらのするこった。おれア、ずうっとお前さんをつけ回して、八月八日の墓参りの件をかぎつけると、こいつア物になるぞと、その足で、しり切れ半纏に毛脛をむき出しの、中間奉公に化けこんだのだ。面白いじゃアねえか。お前さんは何やらどえらいご身分の血筋なんだってねえ。その裏にゃア、さだめし結構な秘密がかくれているとこの勘がにらんでいらア。いよいよもってほれましたぜ。おい、お嬢さん、おれの女房になりな。いやだといっても、思いどおりにするぜ」

と、ねこが捕らえたねずみをなぶるように、雪絵を見つめた目がにやっと薄笑いした。

雪絵は、生かしておけないやつ……という覚悟に加えて、今は虫酸の走るような嫌悪にかりたてられていた。

白蠟のように青ざめた顔に、怒りをふくんだ目が血走っている。

「おのれ、痴れ者ッ！」

そでがひるがえって、青光りする懐剣が流星のように宙を走った。

一閃、二閃！

腕に覚えのある雪絵ではあったが、相手はるかにそれ以上のしたたか者だったらしい。

右へ左へ軽くかわしながら、

はっし！

とこぶしをあげて雪絵の小手をたたいた。

「うっ！」

思わず懐剣をとりおとして前へのめってゆくその利き腕を、とっさにつかんで逆にねじあげながら、うしろざまに、片腕を雪絵の首へまいてぐいっと絞めつけ、

「ほっ、やるじゃアねえか。こんなかわいい顔をしていながらよ」

と、薄ら笑いのひげ面を、露骨に雪絵の顔へすりよせてくる。

「荒馬を乗り鎮めたお嬢さんも、ちっと勝手が違ったようだなア。

この青助は、血なまぐせえ戦場で、五人六人の荒くれ男を相手にして、寸歩もあとへひかなかった男だぜ。抱かれた味はどんなもんだい？」

と、必死にもがく雪絵の体を、ぐいぐいっとしめつけてくる。

「おのれ、痴れ者め！　許さぬッ。生かしておかぬ！」

「おい、じたばたするな。むだだってことよ。だいいち、人さまに聞きつけられたらどうする気なんだ？　命にかけても守れといわれた、お前の秘密がのこらず世間へぱあっと知れ渡ってしまうんだぜ。悪いことはいわねえ、おとなしくおれの女房になれ。お前の了見一つで、水町家は安泰なんだ。それとも、騒いで人を呼んで、散々恥っさらしをしたあげく、親子もろとも路頭に迷うのがいいのか。それ、帯がとけている、胸がはだけている。人さまが見たら、それだけでもただごととは思うめえ。おい、お嬢さん、了見しろよ」

「うぬッ、憎いやつ！　だ、だれがッ！　死んでも……死んでも……」

「いやだといっても、そうは問屋が卸さねえ。おれア、ほれてるんだ。ぞっこん、ほれてるんだよ。器量も器量だが、荒馬を乗りこなしたあの気っぷ。それ……その、必死にもがいてさからっている、そのぴちぴちした体に、もうぞっこんほれているっていうんだ」

憎い、憎い、憎い……と思っても、雪絵は声をたてられない。声が出ないのではなくて、この恥ずかしい姿を人に見られたくない武士の娘としての意地と、もしそのために、命にかけて守れといわれた水町家の秘事が、世間に漏れるかもしれない恐れとからであった。

「おのれッ！　おのれッ！」

と、死に物狂いで身もだえする雪絵のすそが、知らず知らずはだけて雪よりも白い脛の辺り

が、赤い肌につくものの間からちらっとのぞいた。

じろっとそれを見やった青助の目に、みだらなものがめらめらっと燃え上がる。

「やいッ、静かにしろッ」

そういった声にも、男の欲望をむき出しにした残忍な響きがあった。

もつれ合ったままに、二人の影が折り重なって秋草の根方の辺りへどっと倒れた。

「声をたてるなよ。水町家の秘密を、だれにも知られたくねえと思ったら……じっとしているんだ。じっとしてりゃいいんだ。何もとって食おうといやアしねえ。神田川べりの秋草の褥。お前がおれの女房になる祝言の床だ。いい思い出になるぜ」

「死んでも……死んでも、おのれ！」

「死なすもんか。死なしてたまるか。ほれた女だ。やいッ、舌をかむ気か？　断っておくが、てめえが死んだら、水町家にたたるぜ。親や弟の命が惜しかったら、すなおにおれの女房になれ」

と、恋に狂った男の声が耳元であえいでいる。

六尺近い、二十貫に余る男の巨体にねじ伏せられ、身動きもならず、死ぬことさえできない雪絵だった。

男の指先が肌をまさぐっている。

「ああ――」

日ごろの雪絵の声ではない。女の本能がいわせた切ないかすかな悲鳴であった。

提燈の灯が、その無惨な光景をおぼろに照らしていた。

青助の巨体に押し倒され、のしかかられ、絶体絶命の瀬戸際においこまれながら、奇妙なことに、一瞬、雪絵はふっとそれを忘れた。無我の瞬間が襲ってきたのだ。

雪絵自身では意識していない。

剣をとって強敵に相対し、生死ぎりぎりの境

になったとき、ふと無我に襲われることがある。それと、似ていたとでもいったらいいだろうか。それとも、何か先天的に雪絵の血液の中にひそんでいるものがそうさせたのか。

胸の上にのしかかっていた二十貫に余る男の体の重さも、その荒い息づかいも、みだらに肌をはってくる指先の感触も、とたん、雪絵の意識のそとに消えた。

自然、まるで放心したように、その五体からぐったりと力が抜けてゆく。

青助は――

あれほどはげしく抵抗していた力が、見る間に抜けさってゆくのを感じて、

しめた！

と、心の中で勝利を確信した。

どの女もそうであった。女が、最後の瞬間に力を抜きさって放心状態になるのは、男に屈服して自由になることを口に出していったのと同じことだと知っている。

ほれた女を無理強いに、あわただしく手込めにすることの味気なさより、屈服した体を、ゆっくりと時間をかけて愛撫する快楽の深さが、ずきっと青助の脳髄にしみわたった。

青助が腕の力をゆるめ、体の重みを抜いて姿勢を変えようとしたのは、そういう男の欲深さからであったろう。

一瞬、雪絵は閉じていた両眼をかっと見ひらいて、すぐ鼻先にあった男の腕へ、がぶ！　とかみつきざま、満身の力をこめて下から突きあげた。

「あっ！」

と、思わず叫んで、青助がどっとわきへ倒れたのは、この男としてはよくよくの油断だったに違いない。

「くそッ、やりやアがったな！」

青助がはねおきたときには、雪絵も立っていた。

こんなにも憎しみをふくんだ凄艶な女の顔

と、こんなにも怒りくるったすさまじい男の顔を見たことはない。

「逃げようたって逃がすものか。やい、雪絵ッ。逃げられるものなら逃げてみろッ」

めらめらともえ上がるような怒りの目が毒づいた。

「てめえがやったことを覚えておけよ。それだけの礼は、その体にきっとしてやるんだ。ちいっとかわいがりようが、くどくなるからそう思えッ」

おどりかかってきた男の腕の中を、雪絵は素早くかいくぐって右へ走ったが、男の指にその先がのこった。

びりっと音がして、それが裂けた。

走る、追う。

雪絵の影がよろめいた。木の根につまずいたらしい。

「うぬッ！」

と、その影めがけてしゃにむに襲いかかっていった青助の体が、とたん、まるではじかれたようにうしろへのけぞった。

「あ！　だ、だれだッ!?」

いつの間にか、青助の前に、まるで降ってわいたように人影が立ちはだかっている。

雪絵をうしろにかばいながら、とっさに青助の胸をつきもどした膂力の強さはただごとではなかった。

「うぬッ！」

と、怒気に顔をひきゆがめた青助が、立ち直った体勢をそのままに、いまにもおどりかかってゆきそうだった気配を、とっさにひっこめて逆に二、三歩うしろへ飛びさがったのは、その相手の姿に見覚えがあったからである。

「矢傷が膿むぞ」

と、灯影の向こうから、落ちつきはらった声があった。

「けっ！　お前は、あのときの侍だな!?」

青助は、ぎらぎら光る目で、まじまじとその影をにらんだ。

「そうだ、ちげえねえ。仙勝寺門前の茶店であった侍だッ」

「やっと思い出してくれたか。ありがとう」

「ちっ！　てめえ、つけてきやアがったな」

「怒るな、怒るな。お互いさまではないか」

と、灯影の中で、若々しい顔が笑っている。

「うぬッ、どうもくせえさんぴんだとにらんでいたが、やっぱり、そうか。何の目あてでつけてきやアがった?」

「ほうっておくと、脚の矢傷が悪化する。重ねて注意してやろうと思ってな。あまり、力むと傷が膿むぞ。一つしかない自分の体だ、粗末にするな」

「なめるなッ、小僧。さあ、ぬかせ。なんであとをつけて来やアがった?」

「くどいやつだな、あまり力むなというに……いささら、いくら強がってみても、もう底がしれている。にらみはきかん」

にっと白い歯を見せて笑ったのが、ことさら青助にぐっときたらしい。

「やい、念のためにいっておくが、このおれを、ただの渡り中間と思うと、とんだ目を見るぞ」

「よせよせ、もうそのせりふは、陰にいて散々聞きあきた。北条家にあって名ある乱波の末だとのう。いかなる乱波の末かはしらんが、このわしの面をしらんようでは、とるに足らんしろものであろう」

「な、何ッ!?」

と、青助は、かっと目をむいて若侍の顔を凝視した。

ぎらぎら光るそのひとみに、疑惑の色がちらちら動いたのは、しかとは分からぬながら、その若侍の顔に何か不審な、気にかかるものを感じとったからであろう。

「てめえはだれだ?」

「だれだと思う?」

「どこかで、たしかに見かけた面だ」
「思い出してみろ」
「だれだッ？　てめえは何者だ？」
「ははは、分からんか。分からねばそれでよい」
若侍は、灯影の中に、たくましい形を作ったまま、泰然と立っていた。
青助の顔には、まだ疑惑の影が動いている。
「おい、わけえの。むだな争いはやめよう」
「おじけづいたか」
「くそッ。この世で何一つ恐ろしいことがあるものか。やさしくいってやるのはてめえのためなんだ。おい、手をひけ。ここから黙って引き下がってゆけ。じゃまアするな。この青助が、こうとにらんだ仕事に、うかつに割りこんでくると……命がねえぞ」
青助の声は、陰々と鬼気をはらんで不気味だった。
「わしに手をひけというのか？」
若侍の声は、相変わらず物静かだった。
「そうだ。大事に使えば、生涯役にたつ命だ。悪いことはいわねえ。さっさと消えていきな」
「よろしい。手をひこう。貴様も手をひけ」
「おれがこんなに物分かりよくいうのはめったにねえことだぜ。やさしくいっているうちが花だと思えよ。気がみじけえんだ」
「わしもそうだ。気が短いぞ」
「今夜にかぎって、なぜこんなに辛抱強いのか、実ア、おれ自身ふしぎでならねえくらいだ。さあ、もう一言いおう。手をひけッ」
「騒ぐと、脚の矢傷が膿んでくるというに……」
「どうでも、おれにさからう気か？」
「そばで見ていて、今宵の勝負は明らかに貴様の負けだ。年若い女を相手にして、あのやりとりは、世間に聞こえて自慢になるまい。いくら力んでも、もうにらみはきかん。よせよせッ」
「仕方がねえ、かたをつけよう」
懐をさぐって、ぎらりとぬいたのは七首であった。
すさまじい目が、餌食をねらう野獣のように相手を見すえた。
「最後に、もう一度きく。てめえはだれだ？　何者だ？」
「ほほう、気になるとみえるな？」
「後生をともらって、卒塔婆の一本もたててやろうといってるんだ」
「まだ、分からんか。分からねばそれでよい」
「くそッ！」
ほえたてた声が、そのまま、相手に向かってどっと風を巻きおこした。幾度か、生死の境をくぐりぬけ、血の海を泳ぎわたってきた者の、あの命しらずなすさまじさであった。
「とうッ！」
答えるように、低い、しかし鋭い気合いの声が若侍の口からほとばしり出たと思うと、二つの影が、もつれるようにぶつかり合い、そして、斜めに飛びさがった。
草が倒れ、虫の声がひたとやんで、一瞬、あたりは森閑たる静けさに包まれた。
二つの影が、ひたと地に根をおろしたように向きあっている。六尺豊かな青助の影と、上背はそれよりややおとるが、巌のようにたくましい若侍の影と……。
と思う間に、素手のまま、腰をひいて斜めに構えた若侍と、七首を頭上高くふりかぶった青助の体が、にらみあったまま、目にもとまらぬほど、静かに、じりじり動いてゆく。
雪絵は、まるでくぎ付けになったように、さっきからそのまま草むらの陰に立って、事のなりゆきを凝視していた。
口を出すきもなかったし、走って逃げる余裕もなかった。いや、それほど、その場の空気が緊迫していたといった方がいいのであろう。
はっ！　と、思って、雪絵はわれ知らず息をつめた。
青助が地をけって宙へおどり上がったその下

へ、若侍の影が、まるでのめるように低く片ひざついたからである。

とたん、青助の姿は、若侍の頭上で一回転しながら、もんどりうって向こうへけし飛んだ。

その向こうは、神田川に望んだ断崖である。

青助は何か一声叫んだらしい。それにつづいて、はるかに下の方から、ざぶんと鈍い水音が響いてきた。

若侍は、崖の鼻にたって、青助の落ちこんでいった暗い流れの辺りをじいっと見おろしていたが、やがてふり向くと、まるで何事もなかったように、静かな姿ですそのちりを払った。

「ご心配はいりますまい」

と、茫然とたっている雪絵の方へ、軽く目礼しながら歩みよってくる。

「青助は逃がしましたが案じることはありますまい。あいつの命を断ってその口を封じてしまいたいと、あるいはご希望かもしれんが、いや、彼も容易なことでは水町家の秘密とやらを、世間に漏らすようなことはいたしますまい。彼も相当なしたたか者です。あなたをおどしていたように、腹いせのためにしろ、それを世間に向かってしゃべってしまえばもうそれまでのことだ、とよくそろばんをはじいているでしょう。まず、彼は、絶対にしゃべりはせんとお約束してもよろしいな。ただし、彼は、一度や二度の仕損じで、やすやすとひきさがるようなやつでもありません。必ず、執拗にご当家へからみつき、ゆすりがましいことをしかけてくるに相違ありませんから、その点は、くれぐれもご用心あるように……」

いいながら、その目が、いまさらのように雪絵の姿を見回した。

「おけがはなかったかな？」

「は、はい。お陰さまで……」

と、雪絵は日ごろに似げなく、やっといって、あわてふためきながら乱れた胸元をかきあわせた。

「おけがのなかったのは何よりです。つまらぬ野良犬にかみつかれてもけがはけがですから……」

「見苦しいところをお目にかけ、お恥ずかしゅう存じます」

「なんの、ご立派でした。あの青助という男は、かつて、荒れくるう牛を素手で殴り殺したということのあるやつです。あの勝負は、立派にあなたの勝ちでした。いや、さすがに評判のお方だけあると、失礼ながら、実は感心していたくらいです」

いたわるようなその言葉が、ずきんと胸にしみわたって、かえって、雪絵の顔は羞恥にかっと赤くそまった。

「そ、そのように仰せられますと、余計……お恥ずかしくて、ご返事の申し上げようもございませぬ。あなたさまにお助けいただかなければ、本当に……本当に、どうなりましたことやら……」

「ご安心ください。わしは何も聞きません。いや……聞かぬといってはうそになりますかな。実は、あの場の子細は、陰にあって一通り耳にはいたしたが、生来物忘れのうまい方でしてな。右の耳から聞いて、すぐ左の耳へ抜けてしまうのです。あなたのお身にご迷惑のかかるようなことは、覚えてもおらんし、もちろんしゃべる気づかいもありません。ご安心ください。それよりも、人目については面倒です。さ、早くお屋敷へおひきとりになってはいかがか。どれ、わしも失礼いたします。では、ごめん……」

いうだけ言うと、雪絵の方へちらっと微笑を残して、もうすたすた歩き出す。

「あ、もし……」

雪絵はうろたえた。

「もしッ、ちょっとお待ちくださいませ。まだしみじみお礼も申し上げませんのに……」

「ああ、そのことなら……」

と、笑って手をふった様子は、いかにも淡泊で、自然だった。

「で、でも、それではわたくし困ります。困ってしまいます。ど、どうぞ、しばらく！」

雪絵は思わず追いすがってゆく。

「もしッ、失礼でございますが、ちょっと、屋敷へお立ち寄り願えますまいか？」

「いずれ、また、ご縁がありましたら寄らせていただきます」

「お願いでございます。お手間はおとらせいたしませぬ。父からも、せめてお礼のごあいさつなりと……」

「いいや、それはいかん。お父上には、先程のこと、なるべくお話にならん方がよいのではないか」

「でも、困ります。わたくし、本当に困ってしまいます」

「なに、お互いさまですよ」

「え？」

「昼間のお礼返しだと思っていただけばよろしいのです」

「え、え？」

「大久保家の供回りに、引ったてられてゆくところを、女馬子を助けていただいたそうな。そのお静に代わってのお礼返しだと申しているのです」

「まあ、あの、かわいらしい女馬子の？　どういうことやら、よく分かりませぬ。失礼でございますが、あなたさまは？」

「お静に、少しゆかりのある者です」

「お名前を……どうぞ、お名前をお聞かせくださいませ」

「名前か？」

と、若侍は困ったような顔をした。

いたずらを見つけられたとき、子供がよくそんな顔をする。そういえば、その顔には体のたくましさに似げなく、どこやら、まだ少年の面

影が残ってでもいるような、すがすがしい印象があった。

「どうぞ、お名前を？」

「どうしても、申し上げねばなりませんか？」

「ご迷惑かは存じませんが、お願いでございます。せめて、お名前だけでも……」

「桜井進太郎。素浪人です……」

若侍はぽつんといった。

そして、もう一度、雪絵の方へ軽く目礼し、そのままやみのかなたへすたすたと歩みさってゆく。

それを見送っている雪絵の顔に、あっ！　というような驚きの表情があった。

一瞬、お静という女馬子から聞いた言葉が一時に記憶の中へよみがえってきたからである。

お静の家に同居している若い浪人で、よく水町家のうわさをする人があると、お静がいっていた。

――水町さまには、雪絵さまとおっしゃる、それはそれはお美しいお嬢さまがおいでなさいますって……そのお方がおうわさなさるのを伺ったことがございます……。

お静は、たしかそういった。

――八月八日はお嬢さまのお誕生日で、その日には必ずお母さまのお墓参りをなさるしきたりだなんて、そんなこともそのお方が話しておいででした……。

お静は、そんなこともいったはずだ。

そして、その人のお名前が、桜井進太郎さまとおっしゃることも……。

さっきの青助の口ぶりでは、あのお方も仙勝寺からずっとあとをつけておいでになったらしいし、その上青助をよくご存じでいらっしゃるらしい。

一体、どういうお方なのであろう？　なぜわたしのことをご存じなのであろう？

やみをはう

桜井進太郎は風のような速さで歩いていた。

お茶の水の水町家の裏手から姿を消したと思うと、今仙勝寺の墓地を抜けている。

ただの歩き方ではない、体を斜めに構え、上体を前にかたむけて、そのままの姿勢を崩さず、さっさっと滑るように飛んでゆく。世に伝える忍者の歩法というのがこれに違いなかった。

墓地を裏手へ抜け出ると、例の三日月屋敷の土塀につきあたる。

ひたと足をとめた進太郎は、やみの向こうをすかし見るように目を凝らしながら、

「爺……」

と、ささやくように低くよんだ。

「爺いるか？」

もう、四ツ（十時）に近いであろう。昼でも暗い密林の中は、あやめも分からぬほど、とっぷりと暮れていた。

と――

その、土塀のすそのひときわ濃いやみの中から、むっくり立ち上がった人影があった。

「若……若さま、これに……」

と、低い声が答えてくる。

伊賀袴をはき、白髪を黒頭巾で覆った老人であった。小柄だが、やみの中でさえ光をはなつかと思われるほど鋭い目をした精悍な男であった。

「おう、藤兵衛……待たした。三日月屋敷に異状はなかったか？」

そういう、進太郎の声もさっき雪絵と話していたときのやさしい穏やかさとは、がらりと変わってきびしい響きをこめていた。

「異状ございません」

「三日月堂のあるじは、まだ去らずにこの屋敷うちにいるか？」

「何者も、ここから立ち出た気配はございません。その上、新たに三人の男女が屋敷の中へ入ってまいりました」

「ふうむ、三人か？　男と女か？」

「夜に入りましてから、まず、男二人が、こっそり門をくぐって中へ消え、つづいてまもなく女が一人、同じ門をくぐって中へ消えましてございます」

「男とはだれだ？　何者か分からぬか？」

「一人は、呂宋屋彦七でございました」

「そうか、この三日月屋敷の持ち主、呂宋屋彦七か」

「日本橋に巨大な店をかまえ、持ち船をつかって南蛮と交易をいとなんでおりますあの呂宋屋でございます。彼が、この三日月屋敷の持ち主であることは、もはや間違いない事実でございます」

「して、もう一人は？」

「泉野兵馬……ご存じでございませぬか？」

「しっている。すでに一年余り、呂宋屋にかかり客となっている、甲州武田家の浪人と称するあの男であろう」

「最後の女一人は、その兵馬の妹でございます」

「何!?　お梶どのが三日月屋敷をおとずれたか？」

「さようでございます。金山奉行、大久保石見守の愛妾お梶の方が最後に三日月屋敷の門をくぐりましてございます」

「爺、誠だな？　間違いないな？」

「間違いございませぬ。供もつれず、ただ一人、こっそりこの屋敷をおとずれてまいりました」

「ふうむ……」

と、進太郎はうめくようにいった。

「ふうむ、お梶どのが三日月屋敷をおとずれたか。それが事実とすると、ふしぎでならぬ。大久保石見の愛妾が、なぜ三日月屋敷をおとずれたか理由が分からぬ」

「さても、若。前からご注意申し上げておきました。あのおなごはよくよくご注意あそばされ

ねばなりませぬ」

と、藤兵衛はたしなめるように厳かにいった。

「して、若……青助の方はいかがなりましたか？　雪絵さまにお間違いはございませんでしたか？」

「案の定、きゃつめ、牙をむきおったわ。かぎ出した水町家の秘密をたてにとって、雪絵どのをゆすり手込めにしようとまでしおった」

「青助のやりそうなことでございます。色と欲にかけてはなかなかのしたたか者、すてておけば、雪絵さまのお体はもとよりのこと、水町家の骨の髄までしゃぶりつくすやつでございます」

「青助が水町家の秘密をちらとでもかぎつけたからは、もう安閑とはしておれぬ。爺、いそがねばならんぞ」

「いさい、心得ております」

「まず、三日月堂のあるじの正体をつきとめねばならん」

「容易なことではございますまい」

「青助も、忍びの術にたけた乱波の末じゃ、きゃつが矢傷を負って危うく逃れ出てきたことからみても、容易ならぬ相手だとはしれている。屋敷うちの人数は見当がついたか？」

「十人……あるいは二十人……この藤兵衛の目にさえしかとはさとらせない容易ならぬ相手でございます。若……神気をすましてごろうじませ。この森閑たる人けもなげな屋敷うちに、ぞくぞくと肌に迫るただならぬ気魄のみちておりますのをお感じになりませぬか」

「いや、どうあってもやらねばならぬ。今夜をおいてまたの機会はない。年に一度、雪絵どのの誕生の日に、たった一度姿を現す三日月堂のあるじじゃ。明日にもここから姿を消すかもしれん」

「さきほどから、くまなく屋敷うちの気配をさぐり歩き、たった一つ手段のあることに気づきましてござります」

「藤兵衛、その手段とは？」

「裏手の丘から、断崖をくだって、まっすぐに三日月堂へおりる道でございます」

「よしッ、時を移して機会を逃がしてはならぬ」

進太郎は懐から黒布をとりだして顔を覆った。

「若……険しい道でございます。しかと、わたくしのあとにおつきくださいますよう」

「何をいう、爺。夜目のきくことはそなたよりわしが上じゃ」

「なるほど、月のない暗夜に、梢にねむるすずめを弓で見事射おとされた若でございましたな」

ははは……とかすかに笑ったのが最後だった。

ひたと口をつぐんだ二人は、深い草むらを音もなく押しわけて、そのまま、奥へ奥へと森をくぐりぬけてゆく。

この辺りは、武蔵野の原始の姿をそのままに残している。さして深い山でもないのに、立ち入る者が絶えてないのか、びっしりと空を覆った密林の下草は、足の踏み入れようもない藤づる、蔦かずらのやぶだった。

しかし、先頭を行く藤兵衛は、こんな山道を歩くのも慣れきっているのか、苦もなく押し分けてさっさっと進んでゆく。

「若……お気をつけなされませ」

と、藤兵衛がささやいたのは、いよいよ断崖の鼻近くたどりついたときであった。

目の下は三日月屋敷だ。

といっても、一面の森で、ただ、遠い向こうに木の間越しにちらっと屋根が見えている。

「ごろうじませ。この広大な敷地うちに、人家と申せば、ただあれだけの小さなものが一軒あるだけでございます。呂宋屋彦七が、なんのためにこの屋敷を買ったか、その腹の中がそっくり読めるようでございます」

「うむ、己が住むためではなかったのだ。三日月堂のあるじが、年に一度、人目を忍んで雪絵どのに会うために、……ただ、その目的のためにこの屋敷を買い、三日月堂を建てたのだ」
「さようでございます。それに違いございません。三日月堂が建ったのは、今から十七年の昔だったと申します。つまり、雪絵さまがお生まれなされた翌年のことでございます」
二人の立った位置からは、にぶく光っている池の一部がやっと見えるだけで、池のこちら側にある三日月堂は崖の鼻下にかくれていた。
と思ううちに、藤兵衛は、崖の鼻から向こうへ斜めにつき出している松の巨木の幹へ手をかけると、音もなくさるのようにするするっと登っていった。
梢のあたりから身をのり出すようにして足元をのぞきながら、進太郎の方へしきりに手招きする。
進太郎も、すぐそのあとを追った。

そこまで登ると、三日月堂の屋根が半分ほど視界に入ってくる。
しばらく、じいっと目を凝らしていた藤兵衛が、
「若……幸先ようございます。三日月堂の中には、そこのあるじと一緒に、彦七、兵馬、お梶の三人もたしかに居合わすはずでございます」
「なぜ？　藤兵衛、なぜそれがわかる？」
「木の間がくれでしかと人数は分かりかねますが、池のまわりから向こうの山の端まで、三日月堂をぐるりととりまいて人影が垣をつくっておりましょう？」
「うむ、いる。立木のようにひっそりと立っている」
「あの物々しい警戒ぶりが、三日月堂の中の様子をはっきり物語っているとお思いあそばしませぬか？」
「なるほど、爺。二度とない機会じゃ。あの三日月堂に近づく手だてはないか？」

「彼らの視線は、池の向こうへいっせいにむけられております。一瞬の機をとらえれば造作もございませぬ」
「その機を捕らえることができるか、爺？」
「かつて昔、北条家にありまして、かりにも武蔵の藤兵衛と呼ばれておりました乱波の末でございます。まず、おまかせおきくださいませ」
藤兵衛は落ちつきはらっていった。
藤兵衛は驚くような素早い身ごなしで動作した。
腰からなわの束をとって一端を松の木の根方にくくりつけ、崖下へそっと投げおとす。と思う間に、その姿は、なわを伝って滑るように下に消えた。
間をおいて、進太郎がなわを伝ってゆく。なわのつきかける辺りに突出した岩角があって、藤兵衛はその上に、ぴったり張りつくように取りついていた。

その岩角から下までは、もう二間ばかりの高さしかない。藤兵衛にならってじっと身を伏せた進太郎の目に、わずか数間の距離をおいて能舞台の裏手が黒々と見えていた。
池を渡らねば近づけない場所だから、この裏側まで警戒する必要を認めなかったためか、それとも、三日月堂にあまり近づきすぎることを恐れてか、間近い辺りには見張りの影は見えなかった。
ただ、目を横に転じて三日月堂を出はずれた向こうを見ると、立木のように微動さえせず突っ立っている人影が三つ四つ認められる。
武士とも百姓とも町人とも、しかとは判じかねる男たちであった。やみよりも濃く黒々と見えているのは、着ているものの色のせいであろう。一人残らず、伊賀袴、たっつけ袴らしいものを着けていることだけがそれと分かった。
さて、これから藤兵衛はどうしようというのか？

藤兵衛は、そっと手をのばして進太郎の指先を握り、その指先のある個所を、次々と、非常な速さでおさえてはなし、はなしてはまたおさえるという動作を始めた。

これが、ある種の忍者の間で行われた指語法というものである。

絶対に声を出してならないときに、この手段で会話をかわすのだ。

五本の指の先から根元まで、おさえる位置によってそれぞれいろは四十八文字を表現する。さらに、手のひらや甲にふれれば、濁音と半濁音を意味するわけだ。

修練すれば意外にたやすいもので、相当な速度で会話が進行するといわれている。

「今が一番危険な場合でございます。絶対に動いてはなりませぬ」

と、藤兵衛の指先が話しかけてくる。

進太郎は、それにならって藤兵衛の片方の指先をつかみ、答えかえした。

「いつまで待つのか？　いつまでこうしているのか？」

「もう、まもなくでございます。今は、この三日月堂をとりまいて、あらゆる気魄が集中しております。それが、横へそれる瞬間が、まもなくやってまいります」

「なぜ、横にそれるのか？　どうして、それが予測できるのか？」

「かねて、犬火なわを仕掛けてございますから？」

「何？　犬火なわをしかけたとは？」

「かつて戦陣のみぎり、敵中へ忍び入ります折など、しばしば用いました藤兵衛秘伝の術でございます」

と、藤兵衛は指先で語りながら、声をたてずににやりと笑った。

「犬火なわとは、陣中にあって、しばしば腐肉をあさって群がり寄ります野犬を捕らえ、とっさに行う苦肉の策でございますが……」

と、藤兵衛の指語法は語りつづけた。

「若のおもとりあえず以前、野犬を一匹とらえ、屋敷の向こうすみにつなぎとめました。好餌につられて、犬はしばらくの間静かでございましょう。しかし、その尾には、花火をしこんだ火なわをくくりつけてございます。さきほど、若のお声を聞きましたとたん、その火なわに点火いたしおきましたゆえ、まもなく、火なわはもえつきて、花火が爆発するでございましょう。結びつけてあるなわは、わずかな力でとけるはずでございますから、そのまま、犬は狂いたって狂奔いたします」

「つまりは相手の注意をわきへそらす手段だな？」

「さようでございます。忍者と申しますものは、いかなる場所、場合にあっても、手に入ったものをたくみに利用し、目的をとげるのがその生命でございます」

「火なわのにおいをかぎつけられぬか？」

「風向きが逆でございます」

「して、その術が成功したあとは？」

「間髪を入れず、わたくしにお従いくださいますよう。せくことは無用でございます。ただ、静かに……静かに、そして、決断だけが必要でございます」

藤兵衛の指語法がぴたりとやんだ。

彼の鋭い特異な感覚が、切迫したある瞬間を悟ったようである。

ほとんど同時に、はるか向こうで、ば、ば、ばあ……ん！

と、火薬のはじける音がした。同時に、けたたましくほえたてる犬の悲鳴と、やぶを押し分けて狂奔するらしいその気配が、太古さながらに静まりかえっていた屋敷うちの大気をくぐって伝わってきた。

藤兵衛が、むくっと体を起こし、宙に飛んだのはその瞬間であった。続いて進太郎も、それ

にならって、二間の崖をひらっと飛びおりていた。

飛びおりたと思ったとき、藤兵衛の影はもうそこにはない。ちらとゆらめく影を残しただけで、三間余の空間を横切り、もう、三日月堂の床下に身を伏せていた。

その隣へ身を近づけた進太郎の指先をつと握り、

「静かに……大胆に……」

と、指語法でいった。

「犬火なわの効果はもう去りましてございます。さだめし、敵中にもそのことの何を意味するか、感づく人物もおりましょう。警戒はひとしおきびしくなり、ことに、この床下に注意が向けられるものと覚悟せねばなりませぬ。あくまで、静かに、大胆に……」

藤兵衛は、動くとも見えぬ速さで、じりっじりりと地をはってゆく。

その床下は、光もなく音もない、凍りついたようなやみであった。

耳をすましても、もう犬のほえる音も聞こえず、見張りの男たちのざわめきも伝わらず、さらに、頭上の三日月堂の中には人がいるのやらいないのやら、しんかんとしてなんの物音も気配もなかった。

しかし、藤兵衛は、また進太郎の指先をつかんで語った。

「若、おりますでございます！　少なくも、二人……いや三人……」

進太郎と藤兵衛は、そのまま床下に身を伏せていた。まるで、石と化したと思われるほど、呼吸の音さえ聞かせない静かさであった。

頭の上はちょうど三日月堂の楽屋にあたるはずである。藤兵衛が、たしかに二人か三人の人のいる気配がすると断言したが、しかし、進太郎にはなんの物音も聞こえなかった。

「月姫さま、異状はございませぬ」

と、ふっとかすかな男の声が漏れてきたのは、大分間をおいてからである。

「犬の遠ぼえが聞こえたが、異状はないか？」

と、もっとかすかな女の声がそれに答えた。

「異状はないと合図がございました。たとえ、どのような痴れ者が忍び入りましても、決して、この辺りまで近寄ることはなりますまい。ご身辺は、かたときもはなれず山の衆がご警固申し上げておりまする」

「しかし、彦七、油断はならぬぞ。さきほどの、青助とやらいう下郎のこともある」

「さようでございます。油断はなりませぬ。さきほど申し上げましたとおり、青助は月姫さまの秘密をあばきたて、それをたてにとって雪絵さまを脅迫し、いまわしい不埒なことを働きかけましてございます」

「雪絵の身に間違いはなかったか？」

「ご身辺をひそかにお守り申し上げておりました泉野兵馬の話では、今宵のところは幸いご無事であったと申しておりますが……」

「雪絵のこと、くれぐれも頼みますぞ」

「心得ておりまする。これまでも、わたくしども一党、陰ながらご注意申し上げておりましたが、この上は、泉野兵馬にも一段ときびしくご警固申し上げるよう申しつけますでございます」

「兵馬といえば、彼の妹お梶はどうしたか？　大久保石見の屋敷に住みこんだというあの娘じゃ」

「お梶は、兄兵馬におとらず、懸命のご奉公と見受けられます。兵馬の意志もございまして、その後、石見守長安に身をまかせた由にございます」

「彦七、身をまかせたとは？」

「長安の側女になったという意味でございます」

「お梶は進んで身をまかせたのか？　喜んで長安の閨にはべったのか？」

「長安の執心がことのほかきびしく、半ば手込め同様と聞いております。一つには、兄兵馬のたっての勧めもあって、心ならずもそのまま大久保家にとどまりおるよう承知しております」
「あの色餓鬼に妹が手込めにあったというに、兵馬はなぜ、のめのめと大久保家へとどまれとお梶にすすめたのじゃ？」
「それもこれも、懸命のご奉公のためと思われまする。もともと、お梶は隠密の役目を帯びて大久保家へ住みこみおりました。長安の側女になれば、むしろもっけの幸い。なにも月姫さまへのご奉公と心得て、死んだ気で辛抱せよと、兵馬は妹に申し聞かしたということでございます」
「そうか……それほどまでに、わたしのためにつくしてくれたか」
と、女の声は吐息するようにふっとかすれた。
「兵馬も兵馬ながら、女の身としてお梶はさぞつらかろう。操をすてるは死にまさる苦痛であろうに……彦七、わたしから、過分に思うと、よくよく二人に伝えておくれ」
声の様子では、月姫と呂宋屋彦七とは、ちょうど雪絵の場合と同じように、間に濃いやみをへだてて遠く向かいあっているらしい。話題の主である泉野兵馬とその妹のお梶とは、月姫の前にも出られず、さらにはなれて幕口の辺りにひかえていると思われた。
「月姫さま、お梶の働きによりまして、大久保石見の野心のほどが、おおかた明らかになってまいりました」
「おう、それを聞きましょう、彦七」
「長安めの、野心の第一は、甲州武田家ご伝来の遺品を集めて、自らをその末裔にでっち上げようとすることでございます」
「あの、痴れ者め、ありそうなことじゃ」
「第二に、徳川家のおんためと称して、いまだ世に現れておりませぬおびただしい武田家のご遺産をその一手に奪取いたそう野心でございます」
「わたしの予想していたとおりじゃ、きゃつめは、武田家のかくし黄金をねらっているのじゃな」
「第三に……この春以来、雪絵さまに目をつけ、執念深くねらいつづけていることでございます」
「何、何ッ!?　彦七、なんじゃと？」
「あの色餓鬼めは、そのあり余る側女の数にもあきたらず、雪絵さまにみだらな手を伸ばそうとしているらしいのでございます」
「雪絵をか？　雪絵を長安めがねらいおると申すのか？」
「さようでございます。いかなる手段をめぐらしても、色欲をとげようとひそかに牙をむいていると、お梶から知らせてまいっておりまする」
「すりゃ、雪絵の素姓をのこらず知ってか？」
「いや、詳しいことはよく存じおりますまい。しかし、月姫さまとなんらかのご関係のあることは、どうやら存じおるらしいと、お梶はさよう申しておりました」
「わたしと雪絵との関係をなぜしったか？　これほど、きびしく秘めおることを、どうして長安めがさとったか？」
「姫、ご油断なりませぬと申しあげましたはこのことでございます。青助という、下郎ですらすでに、そのことに感づきおりまする。長安のもとには、どうやら容易ならぬ忍者がひかえおる様子にございますぞ」
「だれか？　そやつは何者か？」
「お梶の話では、長安の身辺近く忽然と現れて、何やら密語してはまた忽然と姿を消してゆく、いの字と呼ぶ正体不明の人物がおります由……」
「いの字？　いの字とは何者じゃ？　彦七、そなたには分からぬか？」
「だれにもその正体がしれませぬ。お梶にさえ、

いの字という名前のほか何一つ知る手がかりもないと申しまする。ただ、そやつは、月姫さまならびにわれわれ一党のことを、驚くほど詳しく探り出し、いちいち長安に報告いたしおる気配だと申します。おそらく、雪絵さまが、今日姫にお目通りあそばされましたことも、すでに長安の耳に報告されているに違いないとお梶が申します」

「彦七、いそがねばならぬ」

「仰せのとおり、うかうかはなりませぬ」

「第一に、雪絵のことじゃ。雪絵の身が心もとない」

と、月姫の声が鋭く、陰々と響いてくる。

「雪絵をこのままにはしておけぬ。長安のこともある、青助のこともある。彦七、このままおいては雪絵の身が気がかりじゃ」

「さようでございます。今宵、お目通りを願い出ましたのも、第一にそのことをお案じ申し上げていたからでございます」

「どうすればよいと思うか？　雪絵は下界の娘じゃ。山へは連れもどれぬ女じゃ」

「月姫さま。おそれながら、雪絵さまのお身をお固めあそばすほかはないかと考えおりますが……」

「雪絵に夫をもたせよと申すのか？」

「せめて、はようお許婚をお定めくださりませ。一時を争う場合でございます」

「許婚を定めれば、雪絵の身は安泰じゃと思うか？」

「少なくとも、長安の淫心を、おさえる力はございましょう。主ある女に、よもや、あまりにも露骨なことはいたしますまい」

「うむ……」

「少なくとも、もしもの場合、雪絵さまのご決断のきまりともなりましょう」

「彦七、火急の場合に、心当たりの男でもいるか？」

「はい、姫」

「だれじゃ？　その男はだれじゃ？」

「泉野兵馬にございます」

「ふうむ、兵馬か？」

「彼は、今こそ浪々の身ではございますが、その家柄は、かつて武田家にあってその名も聞こえました名門にございます。彼の亡き父の忠節、また彼ら兄妹の真心、懸命のご奉公ぶりから見ましても、さして、雪絵さまにふさわしからぬ人物とも思われませぬ」

「そなたの推挙も無理とは思わぬ。兵馬の家は武田家のはえ抜きじゃ。しかし、彦七、このことばかりはわたしの一存にはまかせられぬ。雪絵はどうか？　雪絵は兵馬を好いているか？」

「兵馬は、時折水町家へ参上いたしおりますが……彼の申しますに、雪絵さまもいつも快くおもてなしくださいます由、決して悪意はおもちなされぬようと、かよう申しておりますが……」

「そして、兵馬は？」

「不遜ながら、雪絵さまをおしたい申し上げておると、過日、しみじみわたくしに打ち明けましてございます。兵馬は、もしもわたくしなきあとは、その身代わりとして、月姫さまのご意志を奉じ、一党を指揮して立つべき人物にございます」

「亡き母の切なる望みにより、折角山をさって浮き世の娘となった雪絵を、また争いの中にまきこむとは……わたしは望みとうない。そっとしておいてやりたいのじゃ」

「そのお心はよく分かりますでございます。しかし、すてておいても、もはやそのご素姓ご身分は世間に知れ渡るでございましょう。いや、そのことを枷にして、いつ、その身に思わぬご不幸がふりかかるかもしれませぬ」

「そなたの申すように……雪絵に異存なくば、わたしはかまわぬが……」

「姫、ご決断下しおかれますように……」

と迫られて、月姫の声がかすかに答えた。

「何事も運命じゃ。それよりほかに、雪絵に迫る危険を防ぐ道がないとならば……彦七、そなたにまかせる。よいように取りはからえ」

「では、月姫さま、雪絵さまと兵馬とのご縁組みのお約束、お許しくだされまするか？」

「わたしには異存はない。しかし、雪絵の父、水町三郎太に考えもあろう。三郎太の意志をくんでやらねばならぬ」

「三郎太さまも、姫のお取りきめあそばしましたことに、よもご異存はございますまい」

「わたしは、雪絵の幸せのみ願いたいのじゃ。雪絵が幸せになれるよう、彦七、くれぐれもよしなに頼みます」

「よく心得ておりますでございます。ともかくも、兵馬とのご婚約のことだけ、お許しくださいますように……」

しばらく、話し声はとだえていたが、やがて、月姫の声がまた聞こえてきた。

「彦七、計画は進んでいますか？」

「着々と進んでおりますでございます」

「船の準備は？」

「目下のところは、大船小船、合わせて三十余隻、いつなんどきたりとも集められるよう手配ができております。さらに着々とその数も増加いたすことと存じます」

「わたしの星占いでは、次第に情勢が逼迫しつつあるようじゃ。来年、いや、さらい年、少なくともここ二、三年のうちに機会がめぐってくるであろう」

「姫、わたくしの予想も、ここ二、三年と踏んでおります。それにつけても、是非とも入用なのは、武田家のご遺産でございます」

「大久保石見もねらっている。彦七、勝算はあるか？」

「いかなる手段を巡らしても必ずこの手におさめますでございます。武田家のご遺産は、当然それをつぐべきお人の手に帰すべきが天地の理

法でございます」

「また、会うのは、来年の今月今夜じゃ。彦七、なんぞ申すこと、ほかにあるか？」

「泉野兵馬と、妹お梶が、幕口までまいってひかえおります。お目通り願えましょうか？」

「いや、会うまい。わしの会うのは、雪絵とそなただけじゃ。雪絵の父にすら目通りは許さぬ」

「是非にと、お目通りを願っておりますが……」

「大儀じゃと、そなたの口より二人に伝えよ」

それきり、話し声はひたととだえて、あたりはしんかんたる静けさにとざされてしまった。

「若、まだお動きになってはなりませぬ」

と、床下に身を伏せた藤兵衛は、進太郎の指先を握って話しかけてくる。

「藤兵衛、彦七はじめ兵馬お梶の連中は立ちさったらしいが、月姫はまだ、三日月堂にいるな？」

「さようでございます。少なくも、立ち去った気配がございませぬ」

「なおここに忍んでいて、月姫の正体をさぐろうというのか？」

「いや、なかなかもって、うかと正体をさとらすような人物とも思われませぬ。動いてならぬと申し上げましたのは、まだ危険が去らないからでございます」

「まだ、危険が？」

「敵も、犬火なわに、それと感づいて、徹底的な取り調べをするに違いありませぬ。それに……もう一度、奇妙な予感がいたしてなりませぬ」

「何？　奇妙な予感とは？」

「若、いの字とよばれる、ふしぎな忍者のことでございます」

と、藤兵衛はことさら、力をこめて進太郎の指先に話しかけた。

「爺、いの字とは、先刻、彦七が話していた大久保長安の諜者のことか？」

「さようでございます。目下関東に流れこんで

おります名ある忍者の動静は、おおかたそらんじているつもりでございますが、いの字と名乗るやつは心当たりがございませぬ」
「いの字とは、もちろん、偽名、符丁であろう」
「符丁にいたしましても、長安の手にある諜者のことは、とうから承知しておりましたが、そのようなやつは心当たりがございませぬ」
「爺のしらんやつでは、おそらく、とるに足らんかけ出し者であろうが……」
「いや、若。先刻の彦七の話から考えましても、油断ならぬやつと思われます」
「したが、そのいの字がどうしたというのか？」
「今夜の機会をのがすはずはないと、そのように予感しているのでございます」
「今夜の機会？」
「月姫が、この江戸に姿を現すのは、毎年ただ一度、八月八日のこの一日しかございませぬ。月姫の動静に少なからず神経をたかぶらせているはずの長安の手の者が、この機会を逃がすはずがないとお考えになりませぬか？」
「月姫の動静をさぐり、あわよくばその正体をつきとめるために、いの字が今夜この三日月堂に近づくというのだな？」
「長安の機先を制するためには、何よりも先に、そやつの正体をつきとめおかねばなりませぬ」
「分かった、爺……」
「いずれにしましても、あと数刻のご辛抱でございます」
指と指を、互いにさぐりあっての声のない会話も、それきりひたとやんだ。
三日月堂の中も周囲も、水をうったような静けさであったが、広い屋敷うちを、足音を盗んだかすかな気配が、かなたこなたとくまなく歩き回っているのが二人の耳にはありありと聞こえていた。
藤兵衛が予言したとおり、さっき耳にした爆音と犬の鳴き声を、怪しいとにらんだ警固の男たちが、その探索に歩き回っているのであろう。

しばらくすると、三日月堂の裏手を、ひそかに歩んでくる二人連れらしい足音が聞こえてきた。
「彦七どの、どうやら、曲者は風をくらって逃走したらしゅうございますな」
「さよう、くまなく調べたが、どこからも屋敷うちへ入った者のいるらしい形跡が見あたらぬ。しかし油断はならぬ」
「このまま、朝方まで探索をつづけますか？」
「三日月堂の近くは恐れ多い。池の周囲をかためて抜からず見張りをつづけるよう手配した」
「しかし、この裏手の崖は？」
「よもやと思うが、わしと腹心の者二、三で、そっとご警固する」
「手前も、その中にお加えいただけますか？」
「兵馬さん、あなたは格別のお人だ。もちろん、その人数に加わってもらう。姫のお身近くだから、そのつもりでご注意いただきたい」
「心得ております。姫にお目通り願えなかったのは残念ですが、心をこめてご奉公するつもりです」
ひそひそ語りあっているのは呂宋屋彦七と泉野兵馬らしい。そのまま、二人の声も向こうへ遠ざかっていった。
かなり時がたった。
もう、かれこれ、八ツ（午前二時）をまわったであろう。
さすがに、三日月屋敷の中は凍りついたような静寂にとざされ、草も木も眠りにおちたかと思われる時刻であった。
そのときまで、まるで石に化したかと思われるほど、じいっと身じろぎもせずいた藤兵衛が、ふっと進太郎の指先をつかんで話しかけてきた。
「だれかまいります」
「どこへ？」
「この三日月堂の方へ……」

「世の中は広うございます」
「いかなる手段で、月姫に近づこうとするのか？」
「若、床下を出ましたぞ」
「楽屋の裏手だ。月姫のいる楽屋の近くだ」
「さあ、若。われわれも床下を出ねばなりませぬ。万一のとき、このままいては袋のねずみとなる恐れがございます」
藤兵衛は、虫のはうよりも静かに、じりじりはって床下のはずれまでいった。
「若、ごらんなさりませ。あの楽屋の裏窓のところを……」
と、藤兵衛は、床下から首だけもたげて、進太郎の指先にいった。
その辺りは、ことに暗かったが、その暗がりの中に、一個の人影が見えた。窓のところに、やみよりも濃い黒い影が大手をひろげて、ぴったりと張りついている。
何かしているらしい。ゆっくりとその片手が

「警固の者ではないか？」
「いいや、忍びの者でございます」
しばらくすると、そのかすかな気配は進太郎の耳にもそれと感じられてきた。
なるほど、警固の者ではない。この三日月堂の裏手は、彦七と兵馬と、ほか一、二の者が交代で見回っているらしいが、その気配は彼らの足取りからそれていた。
「床下に入りました」
と、藤兵衛の指先が語った。
「いの字か？」
「おそらく……ほかには考えられませぬ」
「このきびしい警戒を、よくくぐりぬけてきたものだ。爺、どう思う？」
「どこかにすきがあったのでございましょう。よくよく、内部の事情に通じたやつか、さもなくば、わたくしなどよりさらに術にたけた忍者かと存じます」
「爺よりすぐれた忍者がいると思うか？」
藤兵衛が、ぐうっと進太郎の指先を強く握りしめたのは、脱出すべき瞬間の迫ったことを教える合図だった。
しかも、藤兵衛は身を伏せたまま、まだ動かなかった。じいっと、二間かなたに息をひそめている人影をにらんでいた。
が——突然だった。
「いの字！」
藤兵衛が、ただでは聞こえないほど低い声で、しかし、刺すような鋭さで、一声ぴしっと鞭でうつように声を発したのだ。
向こうでは、さすがに愕然としたらしい。
はじかれたようにはねおきざま、きっとこっちをふりむいた。
藤兵衛が、この危険な状態の中で、あえて声を発したのは、相手の不意をつくことによって、思わず不用意にこっちへ見せた覆面の顔やその挙動から、その男の正体をかぎとろうとするためであったらしい。

動いている。
と、思ううちに、その窓の戸が音もなくすっとはずれた。何の音もしなかった。
まるで、海の底をはう海盤車に似ていた。
大手をひろげて、壁に吸いついたまま、ゆっくりと動きながら、いつしか、その上半身が窓の中へはいこんでゆく。
ところが、どうしたことか、一瞬、その黒い影は壁をはなれてぱっと地上へとびおりると、進太郎たちが身を伏せているところから二間とははなれていない床下へ、さっと身を沈めた。
何が起こったのか？
楽屋内は、しんとしたままなんの物音も、動くものの気配もなかった。
楽屋内ではなんの物音もしなかったが、警固の者が感づいたらしい。三日月堂の裏手を回って、こちらへ走ってくるそれらしい足音が聞こえてきた。

その男のはねおきるのと、藤兵衛が立ち上がるのとまったく同時だった。ただ、一瞬の短い時間ではあったが、二つの影は、殺気をはらんでじっと向かいあった。

二人とも武器は手にしていない。よくよくの場合以外、絶対に武器を手にしないのが忍者の常識だが、しかも、向かいあった二人の間には、ぞっと肌にあわだつようなすさまじい殺気が立ちこめた。

忍びの最中に出あった者は、すべて敵と心得る。もし、自分の行動の安全を確保するために敵を倒すことが必要と見れば、いかなる手段をめぐらしても——それが、どんな卑劣な手段であろうとも、即座に殺戮してのける。それが、また忍者の常識でもあるのだ。

が——その、火をはくような無言の対峙は一瞬にして崩れた。警固の連中の足音が迫っていた。

どっちからともなく、さっと散った影法師は、一個は床下へ、そして藤兵衛は裏手の断崖へ向けて走り出した。そのうしろに、密着して進太郎も走ってゆく。

「若！」

と、一声底くいって、藤兵衛はさっと崖壁に大手をひろげて蜘蛛のように張りついた。

とっさに、進太郎は、そのくの字なりにまげているひざへ片足をかけさらにその肩へ次の足をかける。

間髪を入れず、沈んでいた藤兵衛の五体が、驚くべき力をもってはね上がるように上へ伸びた。

その上へはね上がる力と、進太郎自身の跳躍力を一つにして、瞬間、進太郎の影は、二間に余る頭上の岩角へひらりと飛びつき、あっという間もなく、その角へたぐり登っていた。

「あっ、曲者ッ、向こうだッ。あの岩角にッ！」

進太郎の姿を認めたらしい、追っ手のけたたましい声がわき起こったが、そこからは、手をいっぱいにのばせばとどく所に、先刻のなわが垂れている。

藤兵衛は——

その追っ手の人影めがけて、逆に、さっと突っ込んでいった。進太郎に脱出するための時間を与えるためである。

敵中にあって危険が迫ったときには、まず一人が犠牲になって他の一人を助けることが忍者の常識であった。

一人が命をまっとうすれば、少なくも使命はとげるし、安全圏に逃れ出た者から救いの手をのばすこともできる。

進太郎はなわの先にとりつくと、懸命にそれをよじ登っていった。すばらしく身軽で、速い。

崖下に追っ手の一人二人が迫ったころには、もう容易に追いつかぬ高さにまで達していた。それに、崖の根元は、垂直にきりたった岩壁なので簡単にはとりつけない。

何か叫んでいるらしいが、三日月堂の真裏のこととて、月姫をはばかってか忍びやかなその声は、しかとは進太郎の耳にはとどかなかった。

と思ううちに、やみの中に白い矢羽根をひらめかせながら、ばらばらっと幾筋かの矢がとんできた。

もう上まではいくらの距離でもない。ただ、そこが、頭上に岩がせり出している個所で、進太郎の体が宙に浮いているから、とんでくる矢から身のかわしようもなかった。

「うっ！」

と、進太郎がうめいたのは、瞬間、左の二の腕の辺りに熱鉄をあてられたような衝撃を感じたからである。

一本の矢が、彼の腕の肉をえぐり、そでをひきさいてそばの草むらの中へぷすっと立つのが見えた。

「くそッ、なかなかやりおるわい」

進太郎はにやっと笑った。そんなことでは動じない。落ちつきはらって、上までの距離を目測した。

しかし、事態は進太郎の予測していたよりはるかに悪化していたらしい。

頭上の方から、急に、人のざわめきが聞こえてきた。

「こっちへ逃げたと合図があった。崖を登るとすればこの辺りだぞ」

「おう、この辺りの草が踏みにじられている。ここへ、だれか来たやつのある証拠だ」

「まだ、逃げおおしはせぬ。崖の中途へめがけて矢を射かけている。曲者は、この下だッ！」

「おっ！　見ろ、その松の根方を……」

「なわが結んである。なわが動いている。ここへ登ってくる」

「斬れッ、なわを断ち斬れッ」

しまったッ！

と思ったとき、進太郎はなわをつかんだまま、どっと下へ落下していた。

とっさに、崖から突き出ていた、何か木の根っ子らしいものをつかんでいた。落ちたのは一間ほどだったであろう。

宙にういた体を、そのまま横にふって、そばの岩角へひらりと取りついた。

上にも下にも敵がいる。執拗に矢を射かけてくる。

進太郎は必死に横に移動した。それより手段がなかった。何よりも先に、矢の攻撃から身を守らねばならない。

ひたと、矢羽根のうなりがとだえたのは、進太郎の体が草むらの中にかくれたからであった。進太郎は、野猿のように、横へ横へと身をすさってゆく。

やみがその影をのみこんだが、しかし、危地を脱したわけではなく、頭上にも足下にも、ざわめきが彼を追っていた。

深いやぶと濃いやみが進太郎の姿を追っ手の目からさえぎっていた。

それに、事態の悪化を早くもさとった藤兵衛が、必死に追っ手を誘って進太郎の姿から彼らの視線をそらせていたことが一つの力となっている。

一瞬の機会を捕らえて、進太郎は右へ右へと崖を横に渡っていった。普通では到底渡ることもむずかしい急斜面であったが、それを、野猿のような身軽さで、素早く移動してゆく。

突然、一坪ほどの小平地へ出た。崖の途中が、くびれたように平らに削ってあって、見ると、高さ三尺ばかりの小さなやしろが祭ってあって、その前から下へ、狭い急な石段が三日月堂のそばまでくだっている。

格子戸の透き間からやしろの奥をのぞくと、なんで作ってあるのか、白くきらきら光った三日月形のご神体らしいものが供えてあった。

思うに、これがうわさにきく三日月さまなのであろう。遠い昔からここに祭ってあったものか、それとも、呂宋屋彦七がこの屋敷を買いとって、能舞台を建てたときにここへ移しかえたものか——

神社の背後、つまり、一坪ほどの小平地のうしろには、まるで、帆立貝を立てたように深くくびれこんだ大岩壁が頭上へ高くせり出していた。

ここが行きどまりであった。石段をおりて能舞台の裏手へ出るほか、これ以上進む手段はない。

進太郎がここへたどりつくのと一足違いに、追っ手も石段の下へはせ集まってきた。

「曲者は右へ渡った。三日月さまのおやしろが行きどまりだぞ。あすこをおさえて袋のねずみにしろ」

低い声だが、だれか叱咤するように鋭くいっているのが聞こえた。

同時に、石段をかけ登ってくる足音が起こる。

進太郎は、一瞬、やしろの背後へ身を伏せた。

今渡ってきた崖を、逆にもどってゆくしか逃れる道はないが、崖の上も下もふさがれていて、やがて矢ぶすまの餌食になることはしれきっている。

――くそッ。登ってくるやつらをけおとして、行けるところまで行ってみるより手段はなかろう……。

窮地に追いつめられた手負いの野獣のように、進太郎が猛然と立ち上がろうとしたとき、

――や!?

と、いぶかるようにうしろを振り向いた。

今まで周囲に気をとられて気づかずにいたのだが、襟元へ、すうっと吹きつけて流れてゆく、かすかな風の気配を感じたからだ。

気まぐれに吹いてくる風ではない。一定の方角から、一定の方向へ、流れるように吹いてくる風だった。吹いてくる方角は、やしろの背後に、帆立貝のようにそびえたった岩壁の、くびれてへこんだ奥の方からである。

進太郎は、生い茂っている草むらをはって、四、五歩その方へ進んだ。

風の流れが次第にはっきりと強くなってゆき、岩壁が折りたたんだようにたっている、そのひだの陰から吹いてくることが分かった。

のぞくと、岩壁に三尺ばかりの裂け目がある。

進太郎がその裂け目へはいこむのと、追っ手の足音がやしろの前へ立つのとほとんど同時だった。

「ここに見張っていろ。崖を右手へ逃れてくればここへたどりつくしかない。ここへ来なければ、上へ登るか、下へ逃れるか、その二つしか道はないのだ。今、向こうでは、強盗提燈の光を集めて曲者の所在を探している。弓に矢をつがえていろ。見つけ次第、容赦なくうてッ」

と、忍びやかに命じている声が、進太郎のすぐ鼻の先に聞こえた。

追っ手は、明らかに、進太郎の断崖を渡る速度を誤認して、まだ、ここにたどりついたとは思っていないらしい。

とはいっても、求める場所に進太郎の姿がないと知れば、すぐ探索の手を八方へ広げるであろう。ここにいては、発見されるのは時間の問題なのだ。

進太郎は、身をひそめている岩の裂け目を見まわした。風はその奥から吹き出してきている。

――どうなるものか!

行けるところまで行ってみるまでだと、進太郎ははうようにして奥へ進んだ。

幸い、反対の方角へ気をとられている追っ手の連中は感づかないらしい。

岩の裂け目は一間ばかりでつきて土壁につきあたったが、その土壁にも、人がたって歩けるほどの横穴が口を開けていた。

もはや、これは天然のものではなく、人間が、何かの目的で作ったものだ。風の吹き通す具合いから、どこかへ抜けている隧道らしいと思われた。

進太郎はちゅうちょなく前へ進んだ。落ちつきはらった歩き方であった。

忍者は常に未知の世界を歩くものだが、未知の世界には当然予測しがたい危険がひそんでいると覚悟しなければならぬ。その危険に対処し、克服するには沈着のほかなんらの手段もないと、よく藤兵衛が教えている。

苔むした隧道はたんたんと続き、やがてつきた。

穴の出口は深いやぶで覆われ、のび上がるようにしてあたりをうかがうと、そこが、能舞台のある一画とは、今隧道で越えてきた丘の鼻にさえぎられた別の天地であることがしれた。

三日月堂の前では大きな池をなしている水が、細い流れに変わって前を横切り、小さな土橋がかかっていて、そのすぐ向こうの森の中には、さっき崖の上の松の梢から見おろしたこの

屋敷の母屋らしいものがちらちら見えている。
進太郎は、はたと思いあたったようにうなずいた。
月姫が、だれにも認められず、その母屋と三日月堂の間を往来するには今の隧道を通るのであろう。おそらく、月姫のために作られた秘密の通路だったに違いない……。
あたりには人けはなかった。曲者を、三日月堂の一郭に追いつめたと信じて、すべての人間がその方にはせ集まっているためと思われる。
進太郎は、すばやく土橋を渡った。
母屋に近づいて様子をうかがっていたが、しいんとして何者のいる気配もない。
裏手のやぶ陰に覓が水をおとしているのをみると、進太郎は静かに近よって渇したのどをうるおした。
さっきから、すぐそばの木立の陰にじいっと立って、こっちを凝視している人影のあったことに、さすがの進太郎もまるで気づかなかったらしい。
その人影は、進太郎が土橋を渡ってくるころから、その木陰に立ってじっと目を凝らして見つめていたらしい。
身じろぎもせず、あまりにもひっそりと立ちつくしていたので、進太郎も、つい気づかずに見逃してしまったのだ。
覓の水をのみ、どろにまみれた手を洗っているうちに、一応危地を脱したという一瞬の安堵が、ずきっずきっとうずいている右腕の傷の痛みをふっと思い出させた。
矢じりがわずかに肉をそいだだけでたいした傷ではなかったが、はずみにそでが裂けてもぎとられたらしく、二の腕が露出して血にまみれていた。
手早く傷口を清水で洗ったが、それをしばる手ごろな布がない。
ちょっとちゅうちょしながら、進太郎は顔を覆っていた黒い布をとった。端を裂きとって包帯の代わりにするつもりである。
「もし……」
と、出しぬけに背後に人声をきいたのは、その途端であった。
不意をうたれた進太郎は、思わず、あ！　と口の中で叫びながら振り向いた。
「もし、あなたさまは……もしや桜井さまでは？」
あたりをはばかるように、忍びやかに低い声だったが、異様に弾んだ女の声であった。
いいながら、木立の陰をはなれて、星明かりの中へ二、三歩あゆみ出てきたその人影は、夜目にもほの白いその顔形でそれとしれる、まだうら若い女であった。
相手の正体を識別した瞬間、攻撃にうつるか逃走するか、とっさに決断するはずであった進太郎が、そのまま凝然と突ったって動かなかったのは、明らかに己の姓名を指摘された意外さからであった。
「まあ！　本当に……桜井さまでございますね。進太郎さま、桜井進太郎さまでございますねッ!?」
女は、息を弾ませながら、つつっ……と走りよってきて、ひたと進太郎の正面に立った。
その、つぶらな大きな目が、驚きと喜びと恐怖をつきまぜた異様な表情に震えながらまじまじと進太郎の顔を見ている。
「進太郎さまでございます。桜井進太郎さまでございますね。お、お見忘れでございましょうか？　わ、わたくし……」
「よく知っています。お梶どのですね」
と、進太郎は落ち着きをとりもどして静かな声で答えた。
「まあ、覚えていてくださいましたか。う、うれしゅうございます」
と、女はいまにもすがりつきそうに身をよせながら、
「思いもかけない所で……本当に、思いもかけ

ない所で、お目にかかりました。お、お懐かしゅうございます」

と、声を震わせながらいった女の目には、何か、うるんだような美しい光があった。

「本当に……何からお話し申し上げてよいやら……でも、こうしてはおられませぬ。ここでは危のうございます」

と、にわかにあたりへ目を配りながら、

「とにかく、進太郎さま。あの家の中へ……わたくしの部屋までおいでくださいまし」

と、手をとらんばかりにして先に立とうとする。

進太郎は、お梶の顔をじっと見つめていた。

三年前会ったとき十六歳といっていたから、今は十九の娘盛りになったはずである。そのころ、まだあどけなかった少女は、今はみずみずしくなまめいて、見違えるばかり美しくなっている。

三年前、兄の泉野兵馬と一緒にお梶がたずねてきたのは、進太郎が父と二人で、相州小田原の郊外にわび住まいしていたころであった。

進太郎の父桜井太郎左衛門は、もと北条家に仕えて、乱波とよばれた忍者の総支配の役にあった人だが、主家の没落後は、その主家にゆかりの地である小田原の郊外に遁世した。

甲州武田家の遺臣と称して泉野兄妹が飄然としてたずねてきた用件は、当時、進太郎はしるよしもなかったが、兄妹の父泉野左馬之助と太郎左衛門が旧知の仲だったことは知っている。

兄の兵馬は、青白い陰性な男でなんとなく虫が好かず、兵馬の方でもことさら進太郎を避ける様子があったが、お梶の方は、あどけなさを丸出しにして、よく進太郎の部屋へ遊びにき、何かというと甘えたり、せがんだりするほどなついていた。

兄妹が桜井家に寄食したのは、たった一カ月余りのことではあったが、お梶との交情は、今

でも進太郎の思い出の中に懐かしく残っている。

兄妹が去ったあとで、妹はすなおな純な娘だが、兄兵馬は一癖ある油断ならんやつ——と、父がたった一言うわさをするのを聞いた。

その父の一言が、どういうことを意味しているか、それがはっきり分かったのは、昨年、太郎左衛門の臨終の間際だった。

父が臨終のときに語った、ある重大な秘密を詮明するために、進太郎は、住みなれた小田原をさって江戸へ移り住むことになったのだが、江戸へ出てきて、真っ先にしたことは、泉野兄妹の行方をつきとめることだったのである。

だから、今お梶が意外な所で会ったと驚いていったことも、進太郎にはむしろ当然だったといえる。彼は、とうから、泉野兄妹の行動を、一部始終知りつくしていたからだ。

「お梶どの、わしは、今この屋敷の人たちに追われているのです。正直に申せば、ある目的から、この屋敷の秘密をさぐるために……」

と、進太郎はお梶を見つめながらいった。

お梶は、進太郎の視線からまぶしそうに目をそらせて、

「はい、おおかたはお察し申し上げております。何もおっしゃらずに……とにかくここにいては危のうございます」

「そのご好意があったら見逃してください。人目については事面倒だ」

「とおっしゃいまして、今すぐこの屋敷からお逃れあそばす手段はございませぬ。そこここの森の中、どこといわず屋敷中に網の目のように見張りの目が光っております。ともかくも、早くお身をおかくしあそばさねばなりませぬ」

「といって、身をかくす場所がどこにあろうか？」

「わたくしの部屋へ……そこが、たった一つのかくれ場所でございます。それから先は、梶がきっと悪うはからいませぬ。さっ、進太郎さ

まッ」

と、お梶はもどかしそうにいって進太郎をせきたてた。

母屋は、だだっ広い建物であった。

おそらく、彦七がこの屋敷を買いとる以前からのものであろう。建ちぐされていたのを方々手入れしたあとがある。見るからに、土豪の一族の住まいらしい造りであった。

奥まった一間から、ぼつんと、たった一個所灯影がさしている。

「ここは、一夜の仮の宿に、わたくしに与えられた部屋でございます。進太郎さま、お上がりあそばして……そこの手桶に、洗足の水もとってございます」

いいながら、進太郎をうしろへかくして、あたりへ気を配っているお梶の様子には、この人のために、何かしなければならぬと決意した、必死の気配が感じられた。

「お梶どの、大事ないか？　あなたにまで迷惑をかけてはまことに本意ないと思うが……」

「そのような、お気づかいなど……いいえ、この部屋は、木の茂りのため容易に外から見通しがききませぬ。それに、今のところでは、この屋敷中で一番見張りの目から遠い場所でございます。さあ、お上がりあそばして……」

燈台もと暗しのたとえにのっとったものかもしれぬが、お梶の大胆不敵さに一驚しながら、今の進太郎としては進むことも退くこともならず、これほどにいってくれるお梶の言葉に、黙って従うよりほかなかった。

足を洗ってあがった進太郎を、お梶は片すみの屏風の陰にかくし、傷薬白布などを運んできて、手早く傷の手当をしてくれた。

残った包帯の結び目を、顔を寄せ歯でおさえて、とけないように固くしめつける。その前髪が進太郎の肩先にふれ、さらさらと音をたてた。

「すまんなア、お手数をかけて……」

「まあ、そんなこと……わたくしこそ、小田原では随分お世話になりましたものを……覚えておいでございましょうか。わたくし、蜂にさされまして……」

「そうそう、そんなこともあったのう。あなたが熊ん蜂に刺されたことがあった」

いいながら、いまさらのように、目の前にあるお梶のうなじをじっと見おろした。

襟元を熊ん蜂に刺されて悲鳴をあげている十六の少女を、抱いて傷口の毒を吸ってやったあのころのことが、まぶたにまざまざと浮かんでくる。

あのころ、ほっそりとたよりなげであった少女のうなじが、今は、象牙のように白く、ぬめやかに変わっていた。

お梶は、その視線を感じたのであろう、みるみる、かっと赤らみながら、逃れるように身をひいて立ってゆくと、ぬれ縁に面した障子をわざとあけはなち、自分は外に向いたまま屏風に近くそっと座った。

「お懐かしゅうございます。進太郎さま」

改めてそういったお梶の声は、万感の思いをこめたように、かすかに震えていた。

「三年になるなア、あれから……」

「三年でございます」

「たった一月ではあったが、あのときのことを、わしはよく思い出したものだ」

「わたくしも……一日とて、思い出さぬ日はございませんでした。あの一月は、わたくしの生涯で、一番楽しい思い出となりました。わたくしは……わ、わたくしは……」

と、お梶の声は、涙ぐんだようにうるんで、はたととぎれた。

「お梶どの、こうしてここにいてよいのか？　あなたに迷惑がかからぬか？」

と、進太郎は心せくように腰をうかしかけたが、進太郎をはなしともなげなお梶は大胆であ

った。
「進太郎さま、もう少し……お願いでございます。おっつけ、警固の様子もしれましょう。その上で、きっとお逃がし申しますから、どうぞもうしばらく……」
「あなたはしるまいが、父は、昨年、小田原のあの家で亡くなりました」
「進太郎さま、申し訳ございませぬ。太郎左衛門さまご不幸のことは、ちらとおうわさを耳にして存じておりましたのに、おくやみにも上がりませず……実は、つい先ごろ、兄からそのことを聞かされたばかりでございます」
「ご存じならば話しよい。わしは、父の遺命をうけて江戸へ出てきたのです。はっきり申せば、あなたがたご兄妹の行方をたずねてな」
「そのことも、兄から聞きましてございます。進太郎さまが、きっと、わたくしどもの前にお姿を現しあそばすに違いあるまいと……」
「あなたがたご兄妹の敵となってな?」
「は、はい。兄はそう申しておりました」
「そうだ。わしは、あなたがたの敵なのだ。わしは、もう、あなたがたのことはあらかた調べて存じている。兄者が呂宋屋彦七にくみして何をしているかということも、あなたが大久保長安の屋敷に住みこんでおられるということも……」
「そして……そ、そして、わたくしが、長安の……お側女になりましたということも?」
「……」
「で、でも、進太郎さま。わたくし、好んでそうなったのではございません。兄から、ご主家への忠節のためじゃと、のっぴきならず詰め寄られて……死ぬ思いで……本当に、進太郎さま、死ぬ思いで……」
ふっととだえたのは、思わずくちびるをついて出ようとする嗚咽の声を、懸命にかみしめてこらえたからであろう。
「お梶どの、わしが父の遺命をうけ、なぜ、あなたがたご兄妹を敵視しなければならなくなったか、その理由をご存じか?」
「いいえ、兄は、詳しいことは何一つ話してくれませぬ。ただ、進太郎さまが、敵だと、兄からその一言を聞きましたとき……もう、目の前が真っ暗になって……いっそ、い、いっそ、死んでしまった方が……」
「待ちなさい、お梶どの。わしが予想していたとおり、あなたは何一つ知らされておらんのだ。いや、わしははっきりいうが、兄者兵馬を敵とは思っても、少なくもあなたはそうは思っておらぬ」
「なぜでございましょう? なぜ、兄だけを、敵だとおいいなのでございましょうか?」
「今話しても分かるまい。いずれ、時がくれば自然とわかるときがくる。わしの胸には、三年前の、あの清らかな、あどけないあなたの姿だけが焼きついているのだ」
「進太郎さま、おやめあそばして……わ、わたくしはもう……わ、わたくしの体は……」
と、思わず切なげにいったのは、長安の愛妾になって、けがれはてた自分の身を恥じた声であった。
とたん、お梶は、はっとしたように屏風の陰へ手をふって制した。
庭前に、突然足音を聞いたからだ。
「お梶、そこにいたのか?」
と、植え込みをぬけて、縁先近く歩みよってきたのは兄の兵馬であった。
お梶より五つ六つ年上であろう。女のように色の白い、眉目秀麗な若侍であった。
「異常はないか? この家に何者か近づいた気配はなかったか?」
「いいえ、兄上さま。風のそよぐ音もいたしませぬ」
と、お梶は屏風の前に座ったまま、さりげなくいった。

「曲者は、まだ捕らえられませぬか？」
「うむ、よほどのしたたかな曲者とみえる。三日月堂をかこんだあれだけの人数を、うまうまとすりぬけて姿を消しおった」
「では、逃げうせたのでございますか？」
「いや、逃がすものか。この屋敷内のどこかにひそんでいる。ぐるりは、十重二十重に固めているから、もはや袋のねずみだ」
「して、その曲者は？　一人でございますか？」
「いいや、二人だ。お梶、いの字らしいぞ」
「ええっ！」
「その中の一人を、たしかにいの字とにらんでいる。彦七殿もご同感だという。もう、逃がさん。きゃつめ、証拠の品を残していったのだ」
「いの字が？　証拠の品とおっしゃいますと」
「矢じりに裂きとられた片そでだ」
お梶は、口の中であっ！　と叫び声をあげたようである。矢じりに裂きとられた片そでといえば、進太郎のそれである。
「われらにとって最大の敵、大久保長安の秘蔵の隠密、いの字を袋のねずみにしたと、皆殺気立っている。お梶、この辺りも気を配っていよ」
「は、はい……」
「そのやぶ陰に、甚吾を伏せておく。怪しい気配を感じたらすぐ呼べ。それでも足らずば、すかさず合図の呼び子をふくのだ。いいか！」
「よく心得ております」
「今、屋敷内をしらみつぶしに探索しているが、何、もう一刻もすれば空が白んでくる。それまで、袋のねずみにひっ包んでおけば、いの字め、自然と正体をばくろするであろう。抜かるなよッ」
と、いいすてて、兵馬は足早に立ちさっていった。
「お梶どの」
と、進太郎が呼んだ。
「は、はい……お静かに……植え込みに一人、伏せている者がおりまする」
「いの字が忍び入ったことはたしかだ。わしもそいつの姿を見た」
「まあ……」
「しかし、この屋敷の連中、わしをいの字と思いこんでいるらしいな。今の話の様子では、きゃつも三日月堂から逃げおおせたらしい。ふしぎだ」
「忍び入ったのは二人だと申しておりました」
「それ故ふしぎだ。その、もう一人と申すのは、わしの部下の藤兵衛のはずだが……いの字め、どうして姿も見せず消えうせたのか」
「進太郎さま、屋敷の者は、あなたさまをいの字と思いこんでいるらしゅうございます」
「そうらしい。おかしな成り行きだ」
ははは……と進太郎は笑ったが、
「こうしてはおられませぬ。もう、猶予はなりませぬ。早く、ここから脱出あそばさねばなりませぬ」
と、お梶は不安げに声をはげましていった。
「お梶どの、ここから脱出する手段はあるか？」
「ただ一つございます」
「どのような方法で？」
「警固の者になりすまして、やみにまぎれてお逃れになるのでございます」
「ううむ……うまく、警固の者になりすませるか？」
「お待ちくださいまし。お動きになってはなりませぬ」
お梶はそういって、何気ない風でたっていったが、まもなく、そでの下にかくしてそっと持ち返ったものを、屏風の陰へおしやった。
黒い山袴と、同じ黒い上着、それにわらじまで添えてある。
「それをおつけあそばしますよう。ただ、顔をおかくしになってはかえって怪しまれます。やみにまぎれては、しかとお顔は分かりますまい

と存じます。それが、警固の者の風体でございます」
「しかし、植え込みに一人いるであろう。ここを立ち出るときには？」
「わたくしが、うまく遠ざけます。今宵この屋敷内におります男は、ほとんどすべて、月姫さまが山からお連れあそばした連中ではございますが、ただ一人、植え込みにひそんでおります、甚吾と申しますのは、呂宋屋配下の者で、わたくしたち兄妹が、特に目をかけております者故、わたくしには、どのようにでもなるでございましょう」
「あとで、あなたに迷惑がかからぬか？」
「いいえ、ご案じなく……さあ、進太郎さま、早く」
進太郎は、せきたてられるままに、着ているものの上から、上着をつけ、山袴をはき、わらじをむすんだ。
「甚吾、甚吾……」
と、縁先に立ったお梶は、植え込みの方に向かって低く呼んだ。
「は、お梶さま……」
と、音もなく、歩み出てきた影が、縁先近く小腰をかがめた。
「今、急に思い出したのです。さっき、あの土橋のほとりで何やら動く者の影を見たのです。念のため、そなた、土橋の辺りをたしかめてきておくれ」
「いや、お梶さま。お言葉ですが、兵馬さまから、ここを動かず見張っておれとご厳命でございましたから……」
と、怪しむようにじいっとお梶を見上げた。
「わたしのいうことを信じられないのですか？」
「いいえ、そうではございませぬが……」
「土橋の辺りに怪しい影を見たのです。ほうっておいてよいのですか？」
「今、ご警固の方々が、しらみつぶしに探索しておられます。まもなく土橋の辺りへ回るでございましょう」
「それまでに、もしものことでもあったらどうします。さあ、早く、いって見てきておくれ」
「……」
「甚吾、そなたは、常々、わたしのいうことなら、水火も辞さず聞きとどけると、よくいっておいでだが、それは偽りなのですか？」
「お梶さま、申しわけございません。では、おいいつけどおり、土橋の辺りを、調べてまいります。ごめん……」
いいすてて、その影は、のまれるようにやみの向こうへ消えていった。
甚吾の足音が聞こえなくなると、お梶は転がるように屏風の前へもどってきて、
「さっ、進太郎さま。この間にお早く！」
と、息を弾ませながらいった。
「お梶どの、かたじけない」
「この母屋の前の森を入りますと、小道がございます。それを左へ左へとおいであそばせばやがて土塀のところへ出ることでございましょう。その道が、一番警固の者の少ない道でございます」
「前の森を左へ左へ……」
と、進太郎は暗唱するようにつぶやいた。
「もし、警固の者に出会いあそばしまして、月と声がかかりましたら、山とお答えあそばさねばなりませぬ。それが合い言葉でございますから……そして、もしまた、向こうから、何の何がしと名前を名乗られましたら、こちらも名前をお答えあそばさねばならぬ定めでございます。そのときは……甚吾と、今の男の名前をお答えくださいませ」
「分かった、お梶どの。火急の場合、しみじみと礼をいう暇もない」
「まあ、お礼だなどとそのような……それよりも、さあお早く……」

「では、行く。また、会うこともあろうが、くれぐれも身をおいといください」
進太郎は目礼すると、さっと縁先からとんでおり、そのまま、前方の森へ脱兎のようにおどりこんでいった。
お梶は、思わずひきずられるように縁先まで走りより、消えゆくその人の影を食い入るように見送った。
進太郎さま！　進太郎さま！
と、まるで呼びつづけているような、懐かしげな、そして切なく悲しい目の色であった。
十六の少女の折に、たった一ヵ月一緒に暮らしたその人。そのときは、ただ兄よりも優しい良いお人と思ってしたっていたのだが、いつの間に、恋がめばえていたのか、だれも知らない、だれにもいえないお梶ただ一人の胸の秘密だった。
進太郎は、森の中を足早に歩いていた。
敵中である。お梶の策が、うまく成功するかどうかだれにも分からない。
ただ分かっているのは、しみじみと胸にしみるお梶の好意である。
三年前に、あどけない少女だった人が、今はみずみずしく美しい女に成長したふしぎさと、あれほど無邪気に明るかった人が、今は主家への忠節という名目で、好まぬ男に肌を許した悲しみからか、身にも心にも、しみついたような寂しげな影のあることが進太郎のまぶたにちらついていた。
と——
進太郎のまぶたからお梶の影が消えた。
行く手のやみの中に、人のうごめきを感じたからである。
進太郎は、ことさら、落ち着きはらって何気なく近づいていった。
「月……」
どこからともなく、一つの声が出しぬけにささやきかけてきた。

「山……」
と、待っていたように答える。
「月の輪の平九郎」
と、別の方角から、またささやいた声がある。
「甚吾」
いいすてて、しいんと静まりかえった道を二、三間行きすぎると、突然鋭い声が追ってきた。
「甚吾、待たっしゃい！」
進太郎がぎくっとして立ちどまると、背後のやみの中で、何者か立ち上がる気配がした。
「何か、ご用か？」
と、進太郎はふくみ声でさりげなく聞く。
「甚吾、おぬしは、兵馬さま付きではないか。兵馬さまについて、母屋の辺りから三日月堂一帯の警固にあたっているはずだ」
「そのとおりだ。それがどうしたか？」
「何者も、許しなく持ち場を離れてはならぬはずだ。おぬしはなぜこの辺りに立ち入ったか？いやどなたの許しをえてきたか？」
進太郎は、胸へぐっときたが、とっさに答えた。
「この辺りへ曲者の立ち回った気配があった故、お梶さまの許しを得て持ち場をはなれた」
「何？　曲者がこの辺りへ立ち回った気配があると？　しかとそうか？」
「間違いはない。確信をもった故に、ひそかに探索して歩いている」
「しかとそうだな？」
いったと思うと、付近のやみがざわざわっと動いて、おどり出た人影がいっせいにこちらへ歩み出してきた。七、八人はいるだろう。
しまった！
と、進太郎は思わず舌打ちした。
接近して、この素顔を見られれば、甚吾でないことは一目でしれる。
もはや、逃れるだけ逃れて、かなわぬときは斬ってすてるまでだと、決意するや否や、進太

郎はくるっときびすをかえして足早に歩き出した。

「待てッ、甚吾。待たっしゃい！」

と、やにわに足音が高くなって、ばらばらっと追いすがってくる。

うぬッ、やるかッ！

進太郎がきっとなって大刀の柄に手をかけたとき、前方のやみを横切って、脱兎のように走る人影が見えた。

「あっ、いたッ。曲者だッ！」

と、進太郎の肩ごしに背後から叫んだのは、今まで進太郎を追っていた警固の人影であった。

「それッ、向こうだ。右手の森だッ」

「曲者だッ。出会えッ。曲者が出たぞッ」

と、その人数は、進太郎を追いこして、一散に右手へ走りぬけてゆく。

とっさの出来事に、進太郎はあっという思いだったが、天の助けだ。

「それ見い。わしのいったとおりだッ。そやつをひっ捕らえろッ。右だ。右だッ」

と、叫びながら、その連中のあとについて走ってゆく。もう、だれ一人、進太郎の方を振り向く者も、怪しむ者もなかった。

しばらく走ってから、進太郎は木立の茂みに、ふと足をとめた。

右だ左だと、追い回している追っ手の声が聞こえている。何者か、逃げる人影はすばらしく敏捷なやつらしく、ちらっと姿を見たと思うとやみに消え、追いつめられたと思うと、思わぬ方角へ忽然と姿を現して走っている。

進太郎は、その気配に耳をすませながら、ゆっくりと歩いた。土塀のところへ出た。

それをおどり越えると、仙勝寺の表門に通じている往還の上であった。

不動如山

向こう柳原の、草むした土手を二間ばかり、

だらだらとおりきった神田川べりに、茂った柳の陰に日ざしをさけながら、進太郎はゆったりと腰をおろしつり糸をたれていた。

もっとも、今日は、高曇りの上、川筋をふき通す風が顔をなぶってようやく秋めいた涼しい日であった。

「若、それ、ひいております」

と、世話をやいているのは藤兵衛である。

刀もない丸腰で、草むらにかがみこんだ様子は、近所の百姓爺が物好きに油を売っていると見えるかっこうであった。

進太郎が竿をあげると、見事な大ものが、秋の薄日の中に銀鱗をおどらせる。

「よく、かかりますな。その分では、夕刻までには、またお静坊が小遣いかせぎに売り歩くほどにもなりましょうか」

「爺がそばから世話をやくのでいかん。黙っていればもっとつれる」

「ははは……つりと将棋は、ただ見ているだけでは面白くございません。岡目八目の口出しも将棋のうちなら、そばで世話やくロづりもつりのうちでございます」

藤兵衛は笑いながら、きせるをぬいてたばこを吸いつけた。

「爺、昨夜の三日月屋敷だがな……分かれたあと、あれからどうした？」

と、進太郎は、ちらりとあたりへ目を配りながらいった。

川下の、斜め岸に浅草見付が見えるだけで、近くには人影もない。

「いの字と名乗る曲者の正体を、つきとめてやろうと思い、ふみとどまっておりました」

「きゃつははたしていの字か？」

「おそらく、間違いはございますまい」

「きゃつはどうした？　あの重囲の中をうまく脱出したか？」

「それがふしぎでございます。若もご存じのとおり、きゃつはとっさに三日月堂の床下にまぎ

「世の中は広大でございます。きゃつの手並みには、さすがの藤兵衛もただ舌をまくばかりでございます。それほどの術者が、この世におろうとも思いませんが、おそらく、よほどの名あるやつに違いございません」

藤兵衛は、静かにたばこをくゆらせながら、水面にゆれている浮きを見つめていた。

「それで、爺はどうしたか？　どうして三日月屋敷から逃れ出たか？」

「爺のことならお案じはいりませぬ。老いたりとはいえ、武蔵の藤兵衛、忍びにかけましては、まだあれほどのことに戸惑うものではございませぬ」

「大きなことをいう。相変わらず、爺の自信は大したものだな」

「ははは……あ、若。それ、浮きが！　引いておりますぞ。ああ、逃がしましたな。大きなやつでございましたのに……」

れこみました」

「うむ、見た。あの重囲の中で床下へかくれては、到底姿をくらますことはむずかしかろうと思っていた」

「さよう、わたくしもそう直感いたしておりました。ところが、なんと、きゃつめは、床下へかくれたまま、忽然と姿を消してしまったのでございます」

「ふうむ……」

「忍びのことにかけましては、おそらく、わたくしの知らぬ手はないはずと存じておりますのに、きゃつめはいかなる手段によりましたものか、床下へかくれたまま、二度と姿を現すのを見かけることはできませんでございました」

「警固の連中にすきがあったのではないか？」

「いいや、彼らは十二分に網をはりめぐらし、四方よりとりかこんでくまなく床下を探したはずにござります」

「それでも、いの字は知れずにしまったか？」

「うるさいのう、爺は。そう、わきでわいわいいっては、どんなすなおな魚でも逃げてしまう。忍びのことは自信もあろうが、つりはわしにまかせておけ」

「さよう、小田原においでのお小さいころから、若はつりがお上手でございました。毎日のように、沖へお出かけあそばしました」

「海づりにくらべると、川はまだるこい。懐かしいなア、あのころが……」

懐かしい……と、そういった進太郎のまぶたには、昨夜出会ったお梶のことがちらっとうかんでいる。心にもなく大久保長安に肌を許して……と、暗然とうなだれたその哀れにも青白い顔が……。

まるで、その胸の中をのぞきこんだように、

「若、昨夜、お梶さまにお会いなされましたな？」

と、藤兵衛がいった。

「む？」

「図星でございましょう？」

「爺、どうしてそれをしっている？」

「三年前、あの小さかったお方が、お美しくご成人なされてでございました。一時は、はてなと目を疑うぐらいでございました」

「どうして知っている、爺？」

「しかし、女と申すものはいざとなるとその大胆沈着さ、驚くべきものがございますな。あの折のお梶さまのおはからいで、爺でもあれ以上はなりませぬ。若を、警固の衆の扮装にお変えして、森伝いにお逃がしになさいました」

「さては、見ていたな？」

「はい、見ておりました。陰ながら、若のご動静、じいっとお見守りしておりました」

「では、わしが森の中で警固の者に怪しまれ、呼びとめられた折、何者か、曲者がおどり出たことを知っているか？」

「お危のうございました。三日月屋敷が、心得ある者の指揮をうけ、並々ならぬきびしい固め

をいたしおる証拠でございます。しかし、若。ははは……」
「なぜ、笑う？」
「まだ、お気づきになりませぬか。あのときおどり出た曲者は、この爺でございます。若のお身が危険と見て、脱出のすきをお作り申し上げるための苦肉の策だったのでございます」
いいかけて、藤兵衛は突然手をふった。
「それそれ、浮きが……あっ、もったいない。また食い逃げされましたな」
笑いながら、何気なくひょいと腰をあげたその土手の向こうから、息せききってこっちへ走りよってくる人影があった。
「進太郎さまア……大変でございますよ。進太郎さまア……」
どうやら、馬子のお静の声らしい。
「進太郎さまア！　大変ですよう。大変ですってば！」
と、駆けてきたお静は、土手の上に立ちどまって、はアはア息をきらしている。
「お静ちゃん、静かにしてくれんかなア。そら、折角、食いかけた魚がびっくりして逃げてしまったではないか……」
と、進太郎は微笑しながらふり向いた。
「そんなお魚なんて、どうだっていいことよ。ねえ、お兄さまったら！」
と、じれったそうに、顔を真っ赤にして身をもんでいる。
「一体、どうしたのかね？　どうせ、お静ちゃんが大変だというのだから、また、軒から青大将がおちてきたのではないか？」
「うん、ひどい！　お兄さまったら……そんなんじゃないんですよ。本当に、大変！　一大事よ……」
「ほう、大変で、その上一大事か？」
「そんな意地悪おっしゃるなら、よくってよ。もう教えてあげないから……」

「ははは、堪忍堪忍。お静ちゃんが怒るとこわいからな」
「ほっぺたがふくらんで、ぼたもちのおばけのような顔になるというんでしょう？」
「ははは……」
「ひどいお兄さま！　よくってよ。もう、絶対教えてあげません」
「堪忍堪忍……」
「もう、しりません」
「あやまっているではないか。つれた魚も、皆かわいいお静ちゃんにあげるよ」
「お世辞いっても、もうだめ……」
「本当に怒ったのか？」
と、進太郎が、もう一度ふりかえって土手を見あげると、お静は大きな目玉をくりくりさせながら、かわいい舌をぺろっと出して見せた。
「お兄さま、おとなしく、あたしのいうとおりにすれば堪忍してあげます」
「よしよし、おとなしくする。お静ちゃんにはかなわんからなア」
「もう竿をしまって、つりをやめなさい」
「はいはい」
「それから、さっさと土手をあがっていらっしゃいまし」
「はいはい」
進太郎は笑いながら土手をあがってくる。藤兵衛も、進太郎のつり道具をまとめながら、にこにこしながらあとについてきた。
進太郎もさることながら、藤兵衛もただ好々爺然として、昨夜三日月屋敷へ忍び入ったときの、あのすさまじい気魄などどこにあろうかと疑われるほどのんびりした姿だった。
「お兄さま、大変ですよ」
「はあ、また大変か」
「いや、まぜっかえしちゃア……」
と、お静は甘えるように進太郎の胸へとりつきながら、にっと白い歯を見せて半分笑いながらその顔をにらんだ。

「ねえ、お嬢さまがいらしたのよ」
「え？　だれ？」
「お嬢さまよ。昨日、あたしを助けてくださったお嬢さまよ。とてもとても、そりゃア、とってもおきれいなお嬢さまよ。そら、お兄さまご存じじゃアありませんか。水町さまの、雪絵さまとおっしゃるお方よ。その雪絵さまが、家へ来ていらっしゃるの。お兄さまにお目にかかりたいって……ねえ、大変でしょう！」
と、お静は興奮に息をはずませながらいった。
「ねえ、お兄さま。雪絵さまよ。あのお嬢さまが、お兄さまにお会いしたいって、わざわざおいでくだすったのよ。ねえ、大変でしょう！　あたし、大好き。あのお嬢さま、お美しくて、お強くて、お優しく、とても、大好きなの」
と、お静は一人で興奮して、顔を赤くしている。
進太郎は藤兵衛とちらっと目を見合わせた。
「でも、ふしぎだね。どうして、あんなきたない所へ、お旗本のお嬢さまがわざわざおいでくださったんでしょうね？　だいいち、お兄さまにお会いしたいって……是非お目にかかりたいって……ふしぎよ。お兄さま、何かありましたの？」
「ふうん……」
「何かあったんでしょう？　ねえ、お兄さまってば……」
「さあ、どうかなア。分からんなア」
「意地悪！　あたしに、かくしていなさるのよ。きっと何かあったのよ」
「わしは、お静ちゃんにかくしごとなんかせんよ」
「うそ、うそ！　ようございます。その代わり、お兄さまが藤兵衛さんとお話ししていたこと、皆雪絵さまにいいつけてあげるから……」
「いいつける？　どんなことを？」
「一度、雪絵さまにお会いしたいって、口癖みたいにおっしゃってたこと。それから、幾度もあのお屋敷の辺りへいってうろうろしていらしたこと。それから、どこかで雪絵さまをちらっとご覧になっていらして、あんな美しい人をはじめてみた。この世の人とは思われない。心にしみるようなふしぎな美しさだって……ため息なさりながら藤兵衛さんに話していらしたこと……」
「こらッ、余計なことしゃべると承知せんぞ」
「わあい！　お兄さま、赤くなったア……」
と、お静は手をたたきながら先を走ってゆく。
「かなわんなア、お静ちゃんには」
と、進太郎は苦笑したが、藤兵衛はむっつり黙りこんでいた。
お静の家は、この辺にありふれたお百姓家だった。以前は相当な暮らしをしていたらしく、家はわりに大きいが、その軒もかたむきかけて今の貧しさをありありと見せている。
母屋から少しはなれてぽつんと建っているのが、進太郎の住まいだった。
以前は納屋に使っていたのだろう、かなり大きいその板葺小屋に手を入れ、床を張り、畳ふすまを入れてどうやら人間の住まいらしくできあがっている。
進太郎が入ってゆくと、お静の先触れがあったらしく、雪絵は上がりかまち近くまで出て、丁寧に手をついた。
「お留守にうかがいまして、勝手ながら、お座敷を拝借させていただいておりました」
「やあ、どうぞご遠慮なく……堅苦しいごあいさつはぬきにしてください」
進太郎はざっくばらんに、つかつかっと上へあがる。
「むさくるしい所へわざわざ、恐縮です。しかしよくここがお分かりでございましたなア」
「はい、それはもうすぐ……孝行馬子のお静さんの家とききましたらすぐ……ねえ、お玉や」
と、雪絵は、まぶしそうに進太郎の視線から

目をそらせ、うしろにひかえている女中の方をちらっと見やった。

「桜井さま。昨夜は……本当に、危ういところを……本当に、お礼の申し上げようもございませぬ」

と、雪絵はあらたまって丁寧に手をついた。

「いやア、ご丁寧に……しかし、そのことならもう昨夜のうちに、十分お礼を伺いました。さあ、お手をあげてください」

「父からも、くれぐれもよろしく申し上げてくれるようにと申しつかってまいりました。当然父がこちらさまへおじゃま申し上げ、お礼申し上げなくてはならぬところでございますが、突然お伺いしますのも、あるいはご迷惑かと申しまして……失礼ではございますが、おついでの節なりと、宅の方へお立ち寄りいただけましたら、有り難いが……と、父からそのように……」

「では、お父上に昨夜のことをお話しなさったのか？」

「青助のことがございますので、すててもおけませず……」

「青助は？」

「あれきり、ふっつり姿を見せませぬ」

「あいつは、もと、関八州に悪名をうたわれていた風摩とよぶ野武士の一族の流れをくむもので、一時、北条家に忍者として仕官していたことのある男だが、一度食いついたら、てこでもはなれぬ山犬のようなたちのよくない痴れ者です。とるに足らん下郎だが、くれぐれもご注意があってよろしいな」

「ありがとう存じます。きっと気を配ることにいたします。玉や、あの品を……」

と、うしろにひかえていた女中に目配せした。

お玉が包みをといて、何やらそっと進太郎の前へ押し出すようにもってくる。

「お礼のしるし、と申すほどのものではございませぬが、手土産代わりにお納めいただきとう存じます」

「そりゃア、こまるなア」

と、進太郎は当惑したように、

「そんなことをなさっては、今度は、お静さんの方からも何かもって伺わねばならぬ。お静さんも貧乏だし、わしもご覧のとおりやせ浪人だし、それはこまる」

「いいえ、いいえ、ご辞退はかえってお恥ずかしゅうございます。どうぞ……どうぞ、桜井さま」

と、雪絵はほおを赤らめて懸命にいう。

「本当に、お恥ずかしい品でございますが、ちょうど三河の国元から清酒が到来いたしましたので、それにほんのおしるしばかりの鮮魚でございます」

「そうですか。それでは、折角だから遠慮なく頂きましょう。お静さんの母者人が長らく病気でふせっている。孝行なあの子が、魚でも食べさせたいと口癖のようにいうので、実は、今しがたつりに出かけたところだが、どうもこの辺りの魚は心なきやからばかりでしてな。うまく鉤にかかってくれんのです。不漁でしおしお引きあげてきたところでしたが、そりゃア、お静さんが喜ぶでしょう。酒の方はもちろんわしがちょうだいする」

「お好きでいらっしゃいますか？」

「斗酒なお辞せず、牛飲というやつです」

ははは……と笑った飾りけのないざっくばらんに、思わず堅苦しさがとけたか、今まで伏し目勝ちだった雪絵が、はじめて顔をあげてそっと進太郎を見やった。

その目がうるんだようにつやつやと光っている。美しい、何かうっとりしたような目の色であった。

武家の家庭に物堅く育った雪絵には、こんなときに、うまくすらすら話の糸口を見つけ出すことができない。

用事がすめば辞去しなければならぬと思いながら、そのくせ、何か去りかねたようにもじもじしていた。

お静でもいてくれたらと思うのに、気をきかせて遠慮したのか、お静も藤兵衛も姿を見せなかった。

「あのう？　お静さんは？」

「さあ、どうしたか。ご用なら、呼びましょうか？」

「いいえ、あのう、別に……」

「天真爛漫なかわいい子です」

「本当に、気立てのよいかわいい人でございます」

「今朝からあなたのおうわさで夢中でした。あなたのことを大好き大好きといって、はねまわっていました」

「まあ、そうでございましょうか……そういえば、昨日、お静さんは桜井さまのおうわさをしきりになすっていらっしゃいました」

「何か、妙なことでもいいませんでしたかな？　お気にさわったらご勘弁ください」

「いいえ、そのようなこと……」

いいかけて、雪絵が急にぼうっと顔を赤らめたのは、進太郎お兄さまが、お嬢さまのことを、それはそれはお美しい方とおうわさしておいでですよ……とこんなことをいったお静の言葉をふっと思い出したからであった。

「雪絵どの」

「はい？」

「あなたは、わしのことを、正体のしれん怪しいやつと疑っておいでしょうな？」

雪絵はどきっとしたように顔を伏せた。

「おかくしなさらんでもよろしい。昨夜の青助とのやりとりで、わしが仙勝寺からあなたがたの跡をつけていったこともお分かりになったであろうし、また、水町家の秘密に立ち入って存じていることもお分かりになったであろう。お疑いになるのも無理はない」

微笑をふくんだ優しいひとみだが、ずばりと雪絵の腹の底まで見抜いているようである。

「実は、わしは父の遺言にしたがって、ある大事ななぞをつきとめるため江戸へ出てきたのです。水町家の秘密に立ち入るような心ないことをいたしたのもそのためではあるが、ただ、青助とは違う。自分で申したのでは身のあかしにはならぬかもしれぬが、お味方になればとて、決して、水町家のふためやご迷惑になるようなことはいたさぬつもりだ。雪絵どの、余人はとにかく、あなただけはそれを信じていただきたいと思うが……」

信じております、信じております。あなたさまのなさり方に、不審と思うかどはあっても、あなたさまが決してわたくしの敵でないということはよく分かっております……と、雪絵は精いっぱい言いたい気持ちだったが、なぜか面はゆくて口に出せなかった。

「雪絵どの、その証拠をお見せしよう。あなたに是非お見せしたいものがあるのです」

「まあ……なんでございましょうか？」

「失礼だが、お人払いを願いたいが……」

そういった進太郎の声は、にわかに改まって意味ありげだった。

雪絵が目配せすると、女中のお玉は、心得てすっと表へ立ち去っていった。

進太郎は、奥の一間へ立っていったと思うと、やがて何やら手にしてもどってきた。

「さあ、とくとこれをご覧ください」

と、雪絵の前へそっとおく。

幅一寸くらい、長さ五寸余りの、竹を薄くそいだ短冊型のものである。

「まあ、なんでございましょうか？」

「枝折です。読書のとき使う、あの枝折です」

「それを、わたくしに見よと仰せられまするは？」

「その上に、彫ってある字を読んでごらんなさ

い」

竹片の表には『不動如山』という四文字が刻まれて、朱うるしがつめてある。

「動かざること山の如し……これは唐国の兵書『孫子』に出ている文字と承知しておりますが……」

「そのとおりです。その品を、『朱書き一節』と呼ぶそうです。朱書きとは、その文字の朱うるしから呼ぶのでしょう。頭部に、竹の節が残してある。それで一節と呼ぶのだときいています。雪絵どの、もしやあなたは、この『朱書き一節』に見覚えがおありではないか？」

「……」

雪絵は、それを手にしたまま、まじまじと見つめている。何か、古い記憶がちらっとその脳裏をかすめたようだ。

「孫子の文句は、四連をもって一括されているはずです。すなわち、

其疾如風（その早きこと風の如く）
其徐如林（その静かなること林の如し）
侵掠如火（侵しかすむること火の如く）
不動如山（動かざること山の如し）

動かざること山の如し……それ一句だけでは意味をなさないのです。お分かりか？『朱書き一節』は四枚の枝折で一組みになっていなければならないはずです」

「わかりました、桜井さま。わたくし、以前、これと同じものを見たことがございます」

「いつ、どこで？」

「もう、三月も前のことでございましょうか。あるお方が、父のもとへまいられ、今あなたさまが仰せられましたと同じように、こういう枝折に覚えはないか、どこかで見かけたことがないかと……これと、まったく同じような竹片を父に示して尋ねておりますのを、そばからちらと見かけたことがございました。そのとき父が、その早きこと風の如く……と、孫子の文句のはじめの一節をつぶやきながら、いぶかしげにじ

いっと見つめていたのを今はっきりと思い出しましてございます」

「雪絵どの、それは泉野兵馬でしょう？」

「ええっ？」

「お父上のところへ、その文句を刻んである『朱書き一節』をもって見えたと申されたは、呂宋屋彦七の所に寄寓している泉野兵馬と申す男でしょう？」

「まあ、桜井さま、どうしてそれを？　どうして泉野さまをご存じでしょうか？」

「今から三年前、わしが父とともに小田原にいるころ、泉野兵馬が、その『朱書き一節』をもって尋ねてきたことがあるからです」

思いなしか、進太郎の目に何かきびしいものがきらりと光ったようだが、しかし、そのいい方は淡々としていた。

「では……桜井さま。あなたさまは、兵馬さまと？」

「そうです。旧知の仲です。彼は客人として一カ月、父の家に滞在しました。『其疾如風』四文字をきざんだ『朱書き一節』をたずさえて、父から何事かを聞き出すためにきたのです」

「まあ！　さようでございましたか。兵馬さまとご面識ある間柄でおいであそばしましたか……」

と、雪絵は重ねていいながら、いまさらのように驚きの目で進太郎を見つめた。

「おそらく、兵馬が水町家へ親しく出入りするようになりましたのも、つまりは、『朱書き一節』のためでございましょう。わしが、水町家の秘密に立ち入り、一度なりとも、あなたに……または、お父上に、お目にかかりたいと願っていたのも、この『朱書き一節』のためだったのです」

「桜井さま、失礼でございますが、その『朱書き一節』と申しますのは、一体、どのような意味をもっているのでございましょうか？」

「雪絵どの、それは、むしろあなたにお聞きし

「それにご返事できるのは、おそらく月姫さまのほかにはおられますまい」

雪絵は顔を伏せた。

何か、己の身をとりまいている奇妙な疑惑が、刻一刻とその色を濃くしてゆくような重苦しい気持ちにうたれた。

「雪絵どの、身をおいといください。そして、勇気をお出しになることです」

進太郎がいった。物静かな声音だが、ふしぎに胸の底にしみ入るような温かさがあった。

「人には漏らさぬことを、残らずお話ししました。わしは、あなたの味方であるつもりです。少なくとも、敵であると考えていただきたくないのです。もし、お役に立つことがあれば……いつでも……」

「ありがとう存じます。うれしゅう存じます」

と、雪絵はすなおに礼をいう。昨夜、危ういところを救われたとはいえ、ゆっくり話をかわすのは今がはじめてである。いわば、初対面にたいと思っていたくらいです」

進太郎は微笑した。

「その、孫子の文句四連は、ご承知のとおり甲州武田家の軍略の表徴ともいわれ、武田家馬印にも書きしるされている名高い文句です。そして、孫子の文句四連をしるした四枚の『朱書き一節』を一組みとして、それは、そのまま武田家の社稷、甲州一国の統帥を表徴するものといい伝えられているのです。しかし、どうしてか？　何のためにか？　その真意はだれもしりません。いや、もしかしたら、雪絵どの、あなたがご存じないかと、ふっと考えられる節があったのです。兵馬が、それをもってお父上に何かお尋ねしていたといわれるのも、おそらく同じ気持ちからだったのでしょう」

「まあ……どうしてでございましょう？　なぜ、わたくしが、そのようなことを存じているとお思いあそばされたのでございましょう？」

進太郎は答える代わりに微笑した。

ひとしいその人の言葉に、なぜこんなにしみじみとした思いになり、すなおな気持ちになれるのか、雪絵はふとそれを思って、われながらふしぎな心地だった。

「お兄さま……もう、およろしいの？　あたし、お茶を入れてきましたのよ」

と、お静のくりくりした目が、そっと戸口から中をのぞいた。

お静やお玉が加わると、座敷はたちまちにぎやかになった。

「まあ、うれしい。このお魚、お嬢さまがお土産にくださいましたの。あら、鯛よ。お兄さま、鯛でございますよ、まアまア、病気のお母さんがどんなに喜ぶでしょう。鯛なんて、もう何年にも、一度も口にしたことないですもの。もったいないくらい……」

と、お静は一人ではしゃいでいる。

「ねえ、お兄さま、何かお礼返しを差し上げなくちゃ罰があたりますわねえ。そうそう、もうじき、茸の季節になりますから、あたし、沢山とってお屋敷へもってあがりましょう。あたし、茸とりの名人なのよ。ねえ、お兄さま」

「お静さんは、いいお兄さまをお持ちでお幸せね」

雪絵も、つりこまれたように、いつしか堅苦しさをほぐされてうきうきと口をきいている。

「ねえ、本当でございましょう。でもね、ときどき、意地悪なさるのよ」

「あら、そうでしょうか？」

「だって、雪絵さまと、このように親しくなっていらっしゃるのに、あたしには、ただの一言もお話しなさらなかったのですよ。そのくせ、水町さまのお嬢さまは、それはそれは、天女のようにお美しくて気品のあるお方だとか……」

「これ、余計なことをしゃべるでない」

「いいますとも、さっきの敵討ちよ。皆、しゃべってしまってあげますから……一度、お会い

したいもんだなんて、お屋敷のまわりへ幾度もおいでになって、うろうろなさったり……」
「これ、よさんか」
と、進太郎は閉口したように苦笑いする。雪絵のほおにも、心なしか、うっすらと紅刷毛ではいたように血の色がうかんでいた。
お静は、やっとおしゃべりをやめたと思うと、今度は、庭に植えてある自慢の花を見せたいといって雪絵をはなそうとしない。
「ねえ、お兄さまもご一緒に……お客さまを、ほうっておきになるなんて、そんな礼儀にはずれたことといけません」
などと、生意気なことをいって、無理やり進太郎の手をひっぱる。
物堅い武家の奥に育って世間をしらない雪絵には、たった一刻余りだが、のびのびした自由なその時間が心にしみるように楽しかったようである。
「これから、浅草観世音にまいりますから……」
と、辞去したときも、雪絵は何か心残りげであった。
お静の家から雑木林をぬけてしばらく行くと、浅草見付から観世音へ向かう街道へ出る。
何か、酒にでもよったような、軽い興奮に、雪絵はうっとりしたようにその雑木林をぬけていったが、突然、うしろから、
「雪絵どの。しばらく」
と、呼びとめられた。
ふり向くと、女のように色の白い、端麗な容貌をした若侍が一人、足早にこちらへ向けて歩みよってくる。
「まあ、兵馬さま……」
と、口の中でつぶやいた雪絵の顔は、いつか物憂げに曇っていた。
「雪絵どの。珍しいところでお目にかかりましたなア」
と、兵馬は微笑しながらなれなれしくよって

きた。
「どちらへ？」
「浅草観音へ参詣にまいるところでございます。兵馬さま、何かご用でも？」
「浅草へまいられますか。昨日は母君のご墓参、今日はまた観世音へご参詣。ご信心なことです。顔や姿はその人の心を映すと申すが、そのお優しいお心、しみじみ感じ入ります」
「昨日はわたくしのお誕生日、母の墓参は例年のしきたりでございますし、生前母が信心しておりました浅草観世音へ、今日、こうして参詣にまいりますのも母がおりましたころからの、年々のしきたりになっておりまする」
「それはそれは……なんにしても、母君のご供養専一に、ご孝心お厚いお優しいお心、ただただ感じ入るばかりです。昨日は、あなたのお誕生日と承知し、お屋敷へお祝いに参じましたがお留守で残念でした」
「存ぜぬこととて失礼いたしました。あのう、何かご用でも？」
「暦の上では秋だというのに、暑さがつづきまするのう。こちらの木陰へお寄りなさらぬか？」
と、手をとらんばかりに心をつかう。
女のように色が白くて端麗な顔だ。着ているものにも一点の崩れもなく髪も油壺からひきあげたかのようにつやつやと光っている。
「兵馬さま。失礼でございますが、何かご用でも？」
落ち着きはらっていて、立ちさる様子もない兵馬へ、雪絵は心持ちまゆをひそめながら、三度尋ねた。
「さよう、立ち話もならぬ。いかがであろう。浅草見付に存じよりの茶店がありまする、そこまでご足労いただけますか？」
「いいえ、少々、先をいそぎますので……もし、ご用でございましたら、ここで仰せきけくださいませ」
「お急ぎか……いや、お急ぎならば、お供いた

しましょう。わしも、久しぶりで浅草にもうでてみたい」

と、押しつよくいって歩き出そうとする。

雪絵は不快さを顔にこそ出さねど、

「どうぞ、ここで……もし、ひまどるようなご用でございましたら、屋敷の方へおいでいただきとうございます」

と、きっぱりいった。

「いや、ひまどるほどのことではありません。では、ここで申し上げましょう。申し上げたいのはただ一言、桜井進太郎という人物には、くれぐれもご注意なさらねばならんということです」

「まっ、な、なんと仰せられましたか？」

「桜井進太郎です。人は見かけによらんものといいますが、彼には、くれぐれもご用心なさらねばいかんと申すのです」

「そのお方が……わたくしと、一体、どういうかかわりがあると仰せなのでございますか？」

「あなたは、たったいましがた、彼にお会いになられたでしょう。しかも、かなりに長い時間、彼とただ二人きり、しめきった部屋の中で……」

「兵馬さまッ。で、では、あなたさまは、それを見ていらしたのですか？」

「そうです」

「わたくしの跡をつけていらして、盗人のように……」

「そのとおりです」

兵馬は笑った。ひやっとするような冷たい笑い方である。

「雪絵どの、あなたは今、盗人のように跡をつけて……とおっしゃった。盗人のように……とおっしゃるならそれでよろしい。しかし時と場合によっては、人の私事をこっそり盗み見るような、いやしいこともせねばならんこともあるのです」

兵馬は雪絵を真っ向から見つめている。女の

ようにまつげの長い美しい目が、青い木の影をうつしてか、気味わるいくらい澄んでいた。

「わしが、この先まで通りかかったとき、あなたが、大通りからそれて思いがけない方角へ入っていかれるのを、ふっとお見かけしたのです。遠目に、何気なくお見送りしていると……わしは、あの女馬子の家に何者が寄寓しているかはとうから存じていた。まさか、雪絵どのが……と、いぶかりながらも、ついお跡をつけたのです。はっきり申し上げるが、わしは、はじめから終わりまで、あなたと進太郎の挙動を残らずじいっと見守っておりました」

雪絵は、何かぞっとするようなはだ寒いものを感じた。

およそ、武士たるものが、みだりに人の跡を尾行したり、ましてや盗み見するなどということは絶えてなすべきことではないと、骨の髄にしみ入るほど教えこまれている。

その恥ある行動を平然としていってのける兵馬の声音の中に、気味わるい執念の響きを感じたからだ。

「あなたは、わしの卑劣な行動を非難なさろうとしていらっしゃる。いや、分かっています。しかし、それもこれも、かの進太郎という人物の恐ろしさを、このわしがだれよりもよく存じていたから、すててておけなかったのです。あなたが、なんのご用で彼の所へお出かけになられたか、それはあなたのお好きであるが……」

「まあ、兵馬さま。わたくしが、私情のたわむれごとなどで、あのお方をおたずねしたとお思いでございますか？　お言葉がすぎましょう。わたくし、父のお許しを得てごあいさつにまいったのです」

「ははア、父君のお許しを得られてのう……それは、結構でした。しかし、さして懇意であるはずのない彼と、二人きり、ふすまをしめきってのお話は……ただのごあいさつとも思われません。いや、お怒りになってはいけません。わ

しは、あなたのなさることをとやかく申しているのではなく、ただただ、あなたに、桜井進太郎なる人物が、油断ならぬ恐るべき痴れ者であることを、とくに申しあげておきたいだけなのです。あなたのために、父君のために、水町家のために……」

「兵馬さま、聞き苦しゅうございます。みだりに人さまのことをあしざまにおっしゃるのはおやめくださいまし」

雪絵の目は、兵馬をきっと見かえした。日ごろは、ほれぼれするほど優しげに美しいひとみが、こんなときには荒くれ男でさえ、たじたじするほど、おかしがたいきびしさをたたえる。

「みだりには申しません。進太郎がいかなる性根の人物か、今いかなる恐るべきことを企ておるか、れっきとした証拠を握ればこそ、申しあげているのです」

兵馬は平然としていった。

「彼こそ、水町家の秘密をかぎつけ、月姫さまの秘事に立ち入って、それを種に大それた野望を実現しようとたくらみつつあるやつなのです」

兵馬が、呂宋屋彦七（ルソンやひこしち）の家に寄食している武田家の浪人ということだけはしっていたが、それ以上のことはしらないし、知ろうという興味も雪絵にはなかった。

彦七が父三郎太と懇意だったところから、兵馬もいつのころからか水町家へ出入りするようになった。

なんのために、父がそういう人たちを近づけるのか、雪絵は詳しいことはしらなかったが、水町家の客人であると思って、ただ、茶菓を運んだり、時には酒席のとりもちに出たりした。

もっとも、兵馬は何かというと雪絵のそばへ近よろうとし、機会があれば、さりげなく話しかけてくる。

母がなくなってからは、雪絵が水町家の主婦の役をつとめねばならないから、すげなくもできないで、適当に話の相手もする。父の代理役で、呂宋屋へ行ったことも二、三度あるし、そんな折には、自然、かなり長い時間兵馬と話しあったこともある。

うわべは、随分親しい交際のように見えても、雪絵としては、別に可もなく不可もない、世間付き合いの相手の一人であった。美しい男振りで、物いいの優しい親切な人だとは思っていても、ただそれだけのことである。

その兵馬の顔を、今こそ、雪絵はしげしげと見渡した。その気持ちの中には、何か、あっ！という思いがあった。

なぜ、この人が、進太郎のことをこんなにもあしざまにいうのであろうかと、いぶかる気持ちのかげには、むらむらっとこみあげてくるような反発がある。

「兵馬さま、もう、おやめくださいまし。そのようなお話、聞きとうございませぬ」

「よろしゅうございます。やめましょう。おいやなことは、強いて申し上げはいたしません。しかし、わしの申したことに、もし疑わしいことがあるとお思いであらば、呂宋屋彦七にお尋ねになるがよろしかろう」

「彦七どのに、何をお尋ねするのです？」

「桜井進太郎がいかなる人物かということです。彼が月姫さまや水町家にとって、いかに恐ろしい人物かということをです。わしの申したことにうそ偽りがあるかどうかをはっきりしていただくためにです」

「兵馬さま、あなたはどうして、桜井さまのことを、そのようにあしざまにばかりおっしゃるのでございます。三年前、たとえ一月の間とは申せ、あのお方のお家に身をおよせになり、お世話をおうけなされたお方ではございませんか？」

「やっぱり、思ったとおりです。きゃつは、そのことをあなたに話したのですな」

兵馬は、奇妙に顔をゆがめながら、にやっと笑った。

「きゃつは、『朱書き一節』という竹片のことを話しはいたしませなんだか？　きゃつの家には『不動如山』の一節があるのです。わしは、ひそかに、それを手に入れるためきゃつの家へ寄食したのですが……それ以来、きゃつとわしとは仇敵の間となりました。

雪絵どの、そのことの意味がお分かりか？　その『朱書き一節』は、月姫さまのために、そして、雪絵どの、あなたのために是非とも手に入れねばならなかったものなのです。わしは、月姫さまのために、雪絵どののために、それを手に入れようとして失敗し、以来、きゃつらと、仇敵の間柄になったのです」

雪絵は奇妙な胸騒ぎをじっとおさえていた。くわしいことは分からぬながら、月姫さまの名前が出ただけで容易ならぬことが、びいんと響いてくる。

折も折、進太郎と兵馬とがまったく同じことを、出しぬけに口にした。進太郎はともかくも、兵馬とは以前からの付き合いであるものを、えりにえらんで、こんな所での立ち話にそれを話しかけてきたことが、まるで、進太郎と自分との話を立ち聞きしていて、そっくりそれを裏返してしゃべっているとしか思われない。

兵馬の言葉には毒がある。月姫さまや雪絵のためにと、口ではいっていながら、そのくせ、進太郎に対する遺恨を毒気にかえて自分にふきこもうとしているような印象がある。

何か、男らしくない陰険な人という感じがちらっと雪絵の胸をかすめ、いまさらのように見直す兵馬の顔がうとましいものにさえ思われてきた。

皮肉なことに、それに刺激されたように、今までは漠然としていた進太郎への気持ちが、急に、好ましい好意になって、むらむらと鮮やかによみがえってくる。

「兵馬さま、それでわたくしにどうせよと仰せなのでございますか？」

と、雪絵は冷たくいった。

「進太郎にはくれぐれもご注意なさらねばなりません。あの男をそばへ近づけることはなりません」

「ご注意はありがとうございますが、あなたさまからお指図をうけとうは思いませぬ。おすておきくださいますよう」

「ははは、言葉がすぎましたかな。指図をするのではありません。あの男は、雪絵どのや月姫さまの秘密をあばいて、事を企ておる、油断ならぬ痴れ者だとご注意申し上げているのです」

「兵馬さま」

雪絵は、きっとなって兵馬を見つめた。

「さきほどから、月姫さま、月姫さまと、ふしぎな名前をおっしゃいますが、わたくし存じよらぬお名前です。それはどういうお人なのでしょうか？　どうして、あなたさまはそのようなことを？」

「なるほど、うかつに口に出してはならぬお名前でした。わしが、なぜそのような水町家の秘密に立ち入り、また、存じているかは、いずれ分かることでございましょう。不審ならば、彦七になりとお尋ねください。わしが、月姫さまのために、また雪絵どののために、身命を賭して働いておりますことが、すぐご理解願えましょう」

「お話と仰せられますのは、それだけでございましょうか？」

「さようです。それだけです」

「では、先をいそぎます。これで失礼させていただきます」

玉や、と女中に声をかけて雪絵は去ってゆく。二度とうしろをふりむきさえもしなかった。

兵馬は、そこに立ったまま、食い入るようなひとみで雪絵のうしろ姿を見送っていた。顔に

薄笑いがうかんでくる。

「雪絵どの。あなたはすでにわしの許婚ときまったお人だ。月姫さまからお許しの出たということは、もはや、何者の力をもってしてもくつがえしはならぬ。あなたはわしの妻になる。そのとき、わしの終生の野心が成就するのだ」

つぶやいた声を聞いた者はだれもなかった。

雪絵が、浅草へ参詣をすませ、お茶の水の屋敷へもどったのは、初秋の日ざしがようやく傾きかけるころであった。

奇妙な符合といえばいえるが、進太郎と兵馬から、申し合わせたようにふしぎな話をきかされた。

『朱書き一節』という、見ればただの枝折にすぎない竹切れが、何やら、この身にとって重大な関係があるという話である。

この身ばかりではなく、水町家にとっても月姫さまにとっても、容易ならぬ秘密を含んでいるともいった。

この身に重大な関係があるというのに、知らないのは自分だけで、縁もない他人が熟知しているらしいことが余計奇妙でならない。

いや、『朱書き一節』のことばかりではなく、月姫さまのことでさえそうであった。年に一度ずつお目通りするならわしになっていて、自分はその人をご先祖さまと呼ばされている。

この秘密は命にかけて人にもらすなと、日ごろから、父にきびしくいわれているものを、どうも、その自分よりも、進太郎や兵馬の方がはるかに深くしっているらしい。

何も聞くなといわれてはいるが、もう我慢ができなかった。今日こそは、何をおいても、父の怒りは覚悟の上で、積もる不審を解きあかしていただかねばならぬ——

雪絵は、道々そのことを思いつめ、勢いこんで帰ってきたが、父三郎太は留守であった。

小普請組頭の、斎藤左兵衛から呼び出しをうけ、出かけていったまま、まだもどらないという。

小普請組という閑職に隠居してからは、節季節季のあいさつに出向くほか、組頭から呼び出しをうけたことなど絶えてなかったので、突然のお呼び出しは何事であろう？　と雪絵は少し不安だった。

三郎太は、とっぷり暮れてから、やっともどってきた。

雪絵が案じていたとおり、よくないことだった証拠に、父はふきげんにむっつり黙りこんでいた。

母が死んでからは、父の身のまわりのことは女中の手をかりずに雪絵がやる。

かいがいしく父の着替えの世話をしてから、茶をたててもってゆく。父は、その雪絵の足音にさえ気付かない様子で、あらぬ方へ目をすえながら、何か考えに沈んでいた。

「父上さま、お疲れでございましょう。お組頭からお呼び出しがございました由、ご用は……どのような？」

と、不安そうに、そっと父の顔を見上げながらきいた。

「うむ……」

三郎太は、茶わんに手もふれず腕をこまねいていた。

雪絵にはいつでも優しい父であった。ことに妻をなくしてからは、ことさら雪絵がかわいいらしく、どんなふきげんなときでも、雪絵にだけは笑顔を見せるのに、その沈んだ顔は容易に晴れなかった。

「父上さま、お顔の色がさえませぬ。何か、ご心配事でも？」

「雪絵、おかしな話だ。わしに、甲府へ行けという。甲府山目付御支配を仰せつけられたとな」

三郎太は吐き出すようにいった。

「小普請組の小旗本には、どうして、大したお

役ではないか。いわば、ふたたび花咲く時期が到来したのじゃ、めでたいと、そう組頭が申されたわ」

そういった三郎太の口の端には、冷たい苦笑いがうかんでいた。

「役高百五十俵を賜るというのも、前例ない過分のことだとな」

「して父上さま。甲府山目付御支配と申しますと？」

「なるほど小旗本としては要職には違いあるまい。今、甲府は幕府にとって、かけがえない大事な御金蔵の一つじゃ。甲府山目付の第一の職務は、金銀山の監督、黄金産出の督励じゃという。つまりは、その目付方の総支配役じゃ」

「で、では……あの、金山奉行大久保石見守さまのご支配下になるのではございませぬか？」

「そのとおり……あの山ざるめ、皮肉なことをやりおるわい」

三郎太は舌打ちした。

「わしが、彼を好かんでけぎらいしおることを百も承知で、そのわしを支配下に組み入れるとは……うむ、彼の策略にきまっている。組頭のお話では、駿府の大御所さま（家康）直々のお指図らしいとあったが、大御所さまを自家薬籠中のものに丸めこんでいる、あの山ざるめが仕組んだことに違いないのじゃ」

「そ、それで、父上さま、お受けなされたのでございますか？」

「受けるも受けぬもない。病気勝ち故、ご辞退したいがと申し上げたが、組頭のお話では、それはなるまい……とこうじゃ。病中であっても、旅がならぬほどであればともかく、さもなくば、必ずお受けするよう、上司からお申し渡しがあったとな」

「まあ！」

「ちゃんと手がうってある。わしにいやおういわさぬため、ちゃんと山ざるが仕組んでおいたのじゃ」

雪絵の顔色も変わっていた。石見守長安には、身震いするようないやな思い出がある。父が、その支配下に属するということは、これまで、その身の守りにしていた唯一のものが、いやおうなしにひきはなされるに等しい気持ちがした。

「父上さま、どうあそばします？　どうなさるおつもりでございます？」

と、思わずせきこむ雪絵の顔を、さすがに三郎太は落ち着きはらった微笑で見かえした。

「雪絵、案じるには及ばぬ。少なからず不快ではあっても、それをこらえるのもご奉公の一つじゃ」

「で、では、お受けあそばしますので？」

「今も申したとおり、いやもおうもない。しかし……」

と、三郎太は冷たく笑った。

「わしにも、考えがある。山ざるめが、皮肉なことするなら、こちらも皮肉に出てやるのじゃ。きゃつの支配に甘んじてやる代わりに、自ら獅子身中の虫となって、きゃつの急所を食いやぶってくれる」

「で、でも、父上さま、相手は、今飛ぶ鳥もおとす勢いの大久保さまでございます。そのようなことをあそばしては、父上さまが……」

「父上さま、何か不吉な予感がいたしてなりませぬ。胸騒ぎがいたします」

「ははは、日ごろのそなたらしくもないのう。戦場へ向かうというではなし、ご用の筋で旅立つのじゃ。何も案じることはない」

「でも、くれぐれも、ご自愛くださいませ。みだりなことあそばされて、長安さまの憎しみでもお買いあそばしては……」

「よいよい、分かっている。長安が、皮肉に出れば、わしにも存じよりがあると申したまでだ。彼がどうあろうと、わしにやましいところがなくば、なんのはばかることがあろう。たとえ、

相手が権勢ならぶ者ない長安であろうとも、非のない者をどうとがめ立てできるか」

「仰せのとおりではございますが……でも、日ごろから、長安さまを快からず思っておいであそばす父上さまを、よくご承知のはずであるあのお方が、どうしてそのような役向きをご指名になりましたのでございましょうか？　考えれば考えるほど、不審でなりませぬ」

「わしにも分からん。しかも、山目付支配、役高百五十俵。やせ旗本にとっては過分のことじゃ。聞いただけでも、尾をふって忠勤を申し出る犬どもが沢山あろうに、えりにえらんで、わしを名指しとは彼の真意が解しかねる」

「それ故、不安でなりませぬ。権謀術策にたけておいでの長安さまと伺いますだけに、何か不吉な予感がいたしてならないのでございます」

「雪絵、ことによると、彼のねらいは、思いがけないところにあるのかもしれんぞ」

「と、仰せられますと？」

「そなたじゃ」

「え？　なんと仰せられましたか？」

「雪絵、そなたじゃよ。わしに恩を売って懐柔し、義理をおしつけてそなたに近づかんとする魂胆かもしれぬ。一度ねらったものは、いかなる手段をめぐらしても手に入れずにはおかんという男じゃ。案外、彼の真意はその辺にあるのかもしれん。いや、山ざるのやりそうなことだわ」

三郎太は苦笑いしながら吐き出すようにいう。

「まあ……伺いましただけで、身震いがいたします」

「なに、したいようにさせておけ。いかなることがあっても、この三郎太は娘は売らん」

「でも、父上さまのご上司とあっては、すげないことばかりもいたしかねるのではございますまいか？」

「ともかくも、一通りの礼儀はつくさねばなるまい」

「お留守中、ご用の節はお屋敷へも上がらねばならぬこともあろうかと存じますが？」

「そういうこともあろう。しかし、権勢をかさにきての無体は許すな。たとえ、かみ将軍家といえども従わねばならぬ世間のおきてがある。そのおきてを破る理不尽者は、何者たりとも断じて許すな」

「もしものときは、きっぱりと、心のままにいたしてよろしゅうございましょう？」

「よい、やれ。水町家の浮沈を賭けても断じてやれ。遠慮すな。万一のときは、刀をぬけッ」

「ありがとう存じます。そのお言葉を伺いまして、やっと心が静まりましてございます」

父と娘は目を見合わせて、どっちからともなくにっこり笑った。

当時、佐渡、伊豆、石見などをはじめ、徳川家領内の金銀産出地はことごとく大久保長安の支配下にあったが、甲府もその根城の一つであった。

甲州一帯は、武田氏の領有当時から有数な金の産出地であったが、長安の支配下に属してからは、鉱山の稼業にあわせて、甲府には金座をもうけて黄金の吹きかえ鋳造も盛大にやっている。

三郎太は、足元から鳥のとびたつようなあわただしさで甲府へたっていった。

出発前に、長安のもとへあいさつに出向いた三郎太を、

「やあ、見えられたか。ご苦労だが、お骨折り願いたい」

と、長安は下にもおかぬもてなしようであった。

「さも出しぬけのようで驚かれたであろうが、わしとしては年来の腹案でのう。折り入って、お身の力を拝借したいと、とうから考えていたのじゃ。お身は、以前、遠国目付として諸国を

旅されていたし、ことに、甲斐信濃一帯は、縦横に密行されてことのほか地理にもくわしいと聞いている。近ごろ、甲州一帯の金銀山の稼業がどうも思わしくない。お身の力をかりたいことが多々あるというわけじゃ。なに、いそがんでよい。ぽつりぽつりと、まあ、気長にやってもらってよろしい。頼みに思っていますぞ」

と、至極の上きげんで、薄気味わるいくらいちやほやする。

「あの、甲羅へた山ざるめ。何をたくらみおるか……」

と、もどってきた三郎太は苦笑していた。

旅立ちのいそがしさの上に、顔にこそ出さね、何か気がかりなことでもあるか沈みがちな父の様子に、雪絵は、今度こそ聞いて明らかにしたいと思った月姫さまのことや、『朱書き一節』という奇妙な枝折のことを、ついに口に出しそびれてそのままにしてしまった。

旅立ちの日は、強い東南風が砂塵をまきたてる荒れぎみの空模様で、それさえ、何か不吉な前兆のように思われ、雪絵の心は重かった。

門口まで送って出た雪絵を、三郎太は、つと物陰へさしまねいて、

「何かのときは、呂宋屋彦七に相談せい。彼は頼みになる男じゃ」

と、じいっと雪絵を見つめながらいった。

「それでも足らぬほどに思案にあまったときには、忘れるなよ。三日月堂へいって月姫さまにおすがりするのじゃ」

そして、しばらく目をとじていたが、やがて、目を開くと、ひときわ声をおとして、

「もしものときは……いや、これはもちろん、仮の話だが、わしにもしものことでもあったときには……仙勝寺の母の墓石の下を掘ってみい。もしものときじゃ。それ以外、一切手をふれてはならぬ。人にも話すな。よいか、仙勝寺の、母の墓石の下じゃぞ」

と、いいおくと、やっと気がすんだように、

にっこり笑って風の中へ歩みさっていった。

雪絵は、その後ろ姿が見えなくなるまで、身じろぎもせず、じっと見送っている。

父は死を覚悟して旅立ったのだ……と、そう思った。そうは分かっても、もう、父をとめることはできない。

父も自分も、不吉な運命の歯車の中へ、じりじりまきこまれてゆくような重苦しい思いであった。

いの字

大久保長安の江戸屋敷は、八王子の本邸や伊豆、佐渡などの山屋敷にくらべて、ひどく質素だという評判だ。

さすがの彼も、将軍家のおひざ元だけに遠慮があるのだろうとうわさしているが、それでもとても三万石の小大名の屋敷とは思えない。ことに、一歩邸内に足を踏み入れると、どれほどの黄金をつぎこんだか分からない贅のこらしようにに目をみはらぬ者はない。

三万石の表高だけでは、さかさにふるっても、とてもこれだけの贅沢はできっこないのだから、どこかに不当な利得の道があるに違いないと、だれにでもすぐぴいんとくるのだが、陰で舌打ちする者があろうと、それほど目に余る豪奢が白昼堂々と行われて、しかもなんのおとがめもうけるどころか、隆々と栄えてとどまるところをしらないというのも、つまりは時の勢いというものであろう。

だれがなんといおうと、その特殊な才知と手腕とは当代ならぶ者がないのは事実である。

佐渡、石見、伊豆、甲州の金銀山を経営し、新鉱を開発し、つまりは徳川幕府の財政は、かかって一つに彼の肩にあるといっても過言ではなく、大御所家康の信頼も絶対なものとなっている。

時には中傷したり、悪評する者があっても、

「ははは、さるか……あいつめ、よう働く。少

しは、慰みがあってもよかろう。すててお け」
と、大御所さまが笑って取りあわないのだから、だれ一人指さすこともできるわけのものではない。

あり余る才知は、先年、東海、東山、北陸三街道の開設にあたっても、一里塚の建設という、後代にまで残る仕事を見事にやってのけたし、今では加判の列にならんで、徳川幕府最高の評定にも並々ならぬ手腕を見せている。加判といえば、後代の老中にも相当しようという役柄だ。

黄金と権勢と栄光と、そのことごとくを一手に握って望んでかなわざるはなく、手をつけて成らざるはない勢いの長安は、まさに得意の絶頂にあったといえるであろう。

その華燭きらめく江戸屋敷の中にあって、ただ一人、心沈んでいるのはお梶であった。

長安のご寵愛が並々ならぬものであることは、数知れぬほどいたといわれるご愛妾を一人残らず他へ移して、今この屋敷をお梶一人に独占させていることでもそれと分かる。

それだのに、お梶の心は少しも楽しまない。心進まぬ長安の側女となったのも、兄兵馬のためであった。

兵馬は、長安に肌をゆるして密偵の役をせよ、それが、兄妹のかつての主家への忠節の道であり、兄が世に出るかげがえない手段であるからと、ほとんど有無をいわせず強いた。幼いころから親代わりに世話になった、かけがえない愛する兄のためと思えば、いやとはいえないお梶だった。

なぜ、心進まなかったのか？

そのころには、漠然としていて自分でもよく分からなかった心のすみに、三年前、わずかに出会った進太郎の面影が住んでいたからであったと、はっきり気付いたときには、もうとりかえしのつかない境遇に入りこんでしまっていた。

ことに、この数日、その顔色がめっきり沈んでいる。思いもかけない所で、思いもかけぬ進太郎に出会ったことが、その心の痛みをにわかにはげしいものにしたらしい。

その夜、お梶は供もつれず、ただ一人、屋敷の奥庭を歩いていた。

十三夜の月が、明るく空にかかっている。

しかし、お梶はそれさえ意識しなかった。ただ一人になりたい、はなやかな灯影から少しでも、遠ざかりたいと、うつろな足どりで、広い奥庭の植え込みの陰を、暗い方へ暗い方へと歩いてゆく。

奇妙なことだが、進太郎に出会って、どんなにその人を愛していたかということを、いまさらのように知らされた思いであった。とうから、その人の面影が、心の片すみに巣くっていることは気づいていたけれども、まさか、これほどまでにと、われながら、あっと驚くほど、はげしく深いものであることを知った。

三年会わずにいたことが、しらぬ間に、人の心の中の秘密を、それほどまでに育てあげるものなのであろうか。

進太郎と出会ったときには、驚きとも喜びともつかず、ただ、はげしくゆすぶられる思いだったのが、あとになり、時のたつにつれて、うずくような痛みになって切なく胸に響いてくる。

懐かしい、恋しい。息苦しいほどに切ない……。

しかし、それと、わが心に気づいたときには、もう、すべてが、すでにおそいことを自分にいい聞かせねばならないのだ。自分は、長安の思い者になりはてている。

もとから、心進まぬ長安であった。長安が、江戸へ出てきたときには、いやでもその愛撫に身をまかせねばならない。すでに七十に近い老人とは思えぬ、脂ぎった愛撫であった。

仕事にかけても精力絶倫といわれている長安

は、夜の営みでも、壮者をしのぐ元気さで飽くことを知らない。

兄の言葉を信じて、それが忠節への道だと思い、兄が世へ出るための犠牲だと思えばこそ堪え忍んでいるが、それでも、時には、歯をくいしばって不覚の涙をこらえねばならないこともあったし、夜が白むころには、いつも、ぐったり疲れきって死骸のように眠りにおちてしまうのが常であった。

それも、つい先日までのことである。先夜、進太郎にあってからは、美服に飾られたその体さえがうとましく思われた。

長安の目が恐ろしい。目が出会って、閨へ誘われればいやとはいえない恐ろしさが、お梶を、灯影から遠いすみへすみへと追いやった。

昼となく夜となく、進太郎の幻が目先にちらついている。いくら、恋い慕ったところで、どうなるものではないと分かっていた。

この、けがれた体を、進太郎の前にさらす勇気はなかったし、たとえ、そう思ったところで、己の境遇がそれを許すはずはないと知っている。

知っていながら、それだけにかえって、進太郎への切ない思慕が、うずきになってはげしく胸をしめつけてくる。

——あ！

お梶は、はっとわれにかえったように足をとめた。

数間先のやみの中を、何か、飛鳥のように向こうへ走りぬけた気配を感じたからである。

この辺りは、よくよくの者以外、立ち入り厳禁の場所であった。大胆剛腹をよそおいながら、その実、小心で猜疑心の強い長安は、常に自分を外敵から守ることを忘れない。

じいっとやみの向こうへ凝らしたお梶のひとみに、不審な一個の黒い人影が、庭を横切って、風のように音もなく歩いてゆく姿が見えた。

この屋敷内では、ついぞ見かけたことのない異形な人影であった。ことに不審なのは、その歩きぶりの速さに、邸内の地理を知りぬいているという自信がむき出しになっている。

その人影は、植え込みを抜け出ると、築山のすそをはうようにして、奥座敷の、ぽつんと一つともっている灯影の方へ進んでゆく。

その灯影のさしているのは、石見守長安の居間であった。

はっと、ある考えがお梶の胸にひらめいた。

——いの字!?　いの字という、正体不明な、長安手飼いの忍者ではあるまいか……。

あの異形な風采といい、立ち入り禁止のこの辺りを、あの自信満々たる足取りで歩く気配といい、たしかに、いの字に違いないと思われた。

そう気付くと、お梶はにわかにきびすをかえして母屋の方へもどっていった。

いの字の正体については、とうから、呂宋屋彦七からも兄兵馬からも、できるだけ早くつきとめるよう、堅く頼まれている。

それに、進太郎のためにも、いの字の正体を知ることが火急の要務となっていた。

先夜、三日月屋敷へ進太郎といの字とが、同時に忍びこんだことがあった。そのとき、進太郎もいの字も、まんまと逃げさって、月姫さまの手のものは、じだんだふんでくやしがったが、運悪く、狙矢に射裂かれて残してきた進太郎の片そでから、今では、進太郎がいの字ではないかという疑いが、その連中の中に濃くひろがっていた。

それをいい出したのは兄兵馬であった。どんなところから目星をつけたのか分からないが、その片そでが、小田原浪人桜井進太郎というものの衣類からもげて落ちたものに違いないと指摘したのは兵馬であり、同時に、そのことが、進太郎をいの字だとする主張を裏書していた。

そうでないことをしっているのはお梶だが、まさか、あのときのことを打ち明けてしゃべる

わけにはいかない。
すてておけば、進太郎にどんな危険が迫らないとも限らないと、とうから胸をとざしていた不安も、もし、いの字の正体さえ明らかにできれば、少なくとも、呂宋屋彦七たちの進太郎に対する憎しみを、一時でも軽くするに違いあるまい。
お梶は、人目をさけながら、そっと長安の部屋近く忍びよっていった。外廊下が鉤の手に曲がっている。その陰までくると、長安の居間はすぐ鼻先にあり、庭先も一眺のうちに見渡せた。
「殿、殿……」
と、かすかに呼ぶ声がした。
「殿、いの字でございます」
居間の方から、何か調べものでもしていたらしい気配が、ふっととまって、長安の立ち上がるきぬずれが聞こえてきた。
「いの字か……」
と、小声でいいながら、長安の影が、縁先まできて、ぬうっと立つのが見えた。
「ちこうよれ。いの字、かまわん、寄れ」
「は……」
向こうの茂みの陰から滑り出た黒い人影が、月明かりの中を足早に横切ったと思うと、縁先に近い、とある植え込みの陰へ、すうっと吸いこまれるように入って深く身をかがめた。
決して光の中へ長く身をさらさない。その男が、どんなに正体をかくすことに気をつかっているか、その気配でよく分かった。
「いの字、八月八日はどうであったか?」
と、長安がきいた。
灯影を背にうけて、すっくと立っている長安の影は、とても七十に近い老人とは思えない。
「八月八日、すなわち、雪絵の誕生日じゃ。三日月屋敷はどうであったか?」
「は、雪絵は、墓参にことよせて、例年のごとく、月姫に会いましてございます」

と、黒い人影が答えた。
声まで作っている。それさえも、正体を人につかませまいための、ことさらの含み声であった。
「例年のとおりか?」
「例年のとおりで、格別変わった節もないように存ぜられました」
「ふうむ……そちは、今年こそ月姫の仮面をはいで、その素顔を見とどけくると申したが、どうか? うまくいったか?」
「いや、殿。一筋なわではいかぬやつでございます」
「失敗したのじゃな」
「残念ながら……しかし、殿。もう、しばらく、お待ちくださりませ。信州八ガ岳の奥深く住まいして二百年間の齢を経ながら、なお二十歳の若さを保つと伝えられおりますかの奇怪な女の正体も、このいの字が、遠からず、必ずあばいてごらんに入れます」
「自信があるか?」
「手前をご信頼くださいますよう」
「そちの正体に気付いた者はまだないか?」
「おそらく、未来永劫に、手前の正体を知り抜くものはございますまい。殿お一人のほかには……」
「ははは……自信とうぬぼれにかけては、このわしも人後におちんつもりだが、そちはそれ以上じゃのう」
「恐れ入りましてございます」
「いの字、予定どおり、じゃま者の水町三郎太を甲府へ追いやったぞ」
「存じております。さすがに、殿らしい、大胆不敵な、そしてまた、皮肉極まるなされ方と感嘆申し上げております。しかし、ご用心なされませ。あやつも、相当なしたたか者。ご油断あそばしますと、ご計画の裏をかかれる危険がございましょう」
「何を申すか。わしは、長安じゃぞ。きゃつを

甲府へ追いやったのは、あたかも猟師が、獲物をわなへおいこんだと同じじゃ。きゃつは、もはや、どうあがいてものがれるすきはない。結局、残らずどろをはき出すであろう。そのどろこそ、わしのねらいじゃ。じわじわとやる。まあ、見ていよ」

「『朱書き一節』の一件でございますな？　さよう、彼がその秘密をしらぬはずはございませぬ。いや、手前の見ますところでは、たしかに、彼は、少なくとも、その秘密の一部を存じおります」

「目もくらむような秘密じゃ。武田一族が、命にかけて守り通した驚くべき秘密じゃ」

「殿！　お声がたこうございます」

「安堵せい。この近くには、聞かれてわるい恐ろしい敵はおらん」

「いや、お梶さまが……恐れながらお梶さまは、殿のご寵愛をおうけしながら、その実、呂宋屋彦七一味の諜者を働きおります女でございます」

「はは、わしがそれを知らんと思うか……」

長安は心地よげにいって、人もなげに笑った。

「いの字よ。わしはのう、お梶が奉公にかこつけてこの屋敷にまいった当時から、そのことを感付きおったわ。お梶は、呂宋屋の諜者じゃ。ははは……」

と、長安は、また高声で笑った。

「恐れ入ります」

「諜者としりながら、側女にしたわ。ただの女に飽いたのじゃ。百人千人、抱いて寝てみても、しょせん、女は女でのう。しかし、お梶は違う。諜者としりながら抱き寝して愛撫する。お梶はただの側女ではない。察しがいくか、いの字？」

「わたくしごときから、もはや申し上げることは何もございませぬ」

「お梶を抱き寝するこのわしが、わしを敵視する小癪な水町三郎太を、配下に組み入れて絞めあげようという。その気持ちがわかるであろうが？」

「なるほど、そう伺いまして、おぼろげながら、ご胸中の奥深くあるもの、分かりかけた心地がいたします」

「呂宋屋一味はいかがいたした？　やせ浪人どもめ、まだ、もそもそと蠢動いたしおるか？」

「着々と、浪人らをかりあつめ、商売にかこつけて、あまたの船を買い入れおる様子でございます。関ガ原の合戦以来、天下の政権を失いました大坂の勢力が、たまりかねましてか、やがて近々動き出す気配があり、きゃつらもその機をねらって一旗あげる策略でございます」

「まあ、よい。やりたいようにやらしておけ」

「すてておいてもよろしゅうございますか？　ご指令あり次第、いつなんどきたりとも、即刻彼らをたたきふせる用意がございますが……」

「『朱書き一節』の一件が、片付くまではそっとしておけ。どうせ、わしにとっては大して害にもならんやつらじゃ。やつらを利用して、わしの野心に役立たせる方が利口というものじゃ」

「では、かねてのとおり、彼らとは適当に接触を保っておりますのでございますか」

声がとだえたのは、目と目で何かささやきあっているからであろう。

話の様子で、このいの字という男が、長安にどれほど深く食い入り、信任をうけているかということがうかがわれる。

「殿、ほかに、なんぞご用はござりませぬか？」

と、また含み声がいった。

「そうよのう。よい折じゃ。ちと、策をかりたいことがある。雪絵のことじゃ」

「三郎太の娘雪絵でございますか？　雪絵をどうあそばされますので？」

「この屋敷へ、是が非でも招いてみたい」

「ご執心でござりますな」

「わしは、一度こうと思ったことは必ず仕とげ

ずにはおかん。雪絵はわしのものにする」
「気性のかった女でございます。容易なことでは御意に従いますまい」
「骨のある娘よ。そばにも寄せつけん」
「その手ごわさが、ご執心のほどを一層お深め申すのではございませぬか？」
「ははは……見抜いたな。雪絵をまず、この屋敷へ招きよせたい。策はないか？」
「それほどのことでございましたら、訳はございませぬ」
「訳がない？　ふうむ……しかしやせても枯れても徳川譜代の旗本の娘じゃ。手荒なことはならんぞ」
「もちろんでございます」
と、いの字の声は一段と低くなる。

「殿、雪絵をおそばへ召したくば、明後日、中秋の名月を期して、月見の宴にことよせ、お招きよせなされませ」
いの字の陰気な含み声が、ささやくように続けていう。
「何、月見の宴じゃと？　そのようなことで、やすやすと来る女ではない」
「いや、策がございます」
「策とは何か？」
「『朱書き一節』のことで、尋ねたいこともあり、また、話したいこともある。――と、さようお申し添えなされませ」
「ふうむ、雪絵は『朱書き一節』のことを存じているか？」
「おそらく……」
「そのようなことで、きっとまいるか？」
「前日父三郎太にも申しきけた故、さだめし存じてもおろうが、そのことで直々話したいこともある。気軽にまいられい――とさようお申し添えなされませ。やがてはうそと知れましょうが、三郎太はすでに甲府に旅立っております。雪絵はおそらく……いや、必ずまいるに違いございませぬ」

「こやつ、ふてぶてしいほど確信ありげにいう」
ははは……と笑った長安は、月明かりの中にくっきりと横顔を見せながらつぶやくようにいった。
「そうか、来るか……雪絵も、とうとうこの屋敷へ来るか……」
何か、薄笑いでもしているような心地よげな声であった。
「しかし、殿、あの娘にみだりなことをあそばされては、後がまずうございます」
「なぜ？」
「雪絵は月姫につながりある女故、うかつなことをあそばしては、折角のご大望が水のあわとなる危険もございます」
「わしが妻に迎えたいとさえ執心した女じゃ。場合によっては、雪絵を手に入れるためなら、すべてを放棄してもよい」
「殿らしゅうもございませぬ。大久保石見守と仰せられるお方さまのなされ方らしゅう思われませぬ」
「それほどにほれている。日ごろのわしらしくないと申すほどに執心じゃ」
「しかし、殿……」
「女というものはのう、一度男に体を許し、その愛におぼれてからは、むしろ、あらゆるものをなげうってその男に執着するものじゃよ。雪絵を抱き寝することは、わしの野心の成就を一層早める手段とも存じているのじゃ。いや、いの字、恋の口説、閨のあれこれまでその方の手はかりん」
ずばっと言い切られて、いの字はやみの中に沈黙した。
「よし、大儀であった。当座の金じゃ」
声と一緒に、どすっと音がしたのは、重い金包みを投げたのであろう。
「では、殿、これにて……」
と、陰気な含み声を残し、黒い人影はつと立

ち上がった。

来たときと同じように、風のような速さで月明かりの中を走りぬけ、そのまま、音もなく庭先のやみへ消えてゆく。

じいっと目を凝らしていたお梶にも、ちらとその影を見せただけで、頭巾の間からのぞいている横顔さえしかとは見せなかった。

お梶はいの字の消えさった方角を、またたきもせず凝然と見つめていた。

兄兵馬や呂宋屋彦七から、何をおいても、月姫さま一統に対する最大の敵、いの字の正体を一日も早くつきとめてくれと厳命をうけている。それには、今夜はまたとない機会であった。

こんな間近にたって、こんなにはっきりとその声をきいたことははじめてであった。いの字が身を沈めていた木陰のやみから、たった数間の距離しかなかった。

全身の神経を針のようにとがらせて、耳をすまし、目を凝らし、一部始終を残らず見聞きした。

しかも、はっきりしたことは何一つつかめはしなかった。

奇妙なことに、どこか見覚えのある男のような気がしてならない。その顔さえ見せない影法師のような素早い身ごなしのある節々や、ことさらに作った低い含み声の調子のどこかしらに、何かかすかな記憶があるような心地がするのである。

長安とあれほど密接な関係を保っている人物であるから、白昼明るい光の下で、ぬけぬけと歩き回っている別個の人物としての彼の姿を見知っていて、それが、ふっといの字の印象と重なりあう点があるに違いないと信じている。

以前から、一、二度、いの字の影を遠目にちらっと見て、そのことに気がついていたし、ことに、今夜は、いよいよその印象を深くし、それらしい男のことをあれこれと思いめぐらしてみたが、どうも、はっきり思いあたる人物のないのがふしぎであった。

兵馬や彦七の頼みもさることながら、進太郎のためにも、一日も早くいの字の正体を明らかにしなければならないとあせっている。

兵馬や彦七は、七、八分、いの字の正体を進太郎と信じている。すてておいたら、彼らが進太郎の身に、いつどのようなきびしい攻撃を加えるか分からない。

どうしよう？　いの字のあとを追ってみようか？

どうも、自分の熟知している人物のように思われてならない点から考えても、あるいは、この邸内に、別の姿で堂々と住んでいる男かもしれないのである。

いの字の消えたやみは、すぐ目の前にあった。塀をのりこえて屋敷の外へ消えたのならとにかく、屋敷内にいる人物なら、奥庭と表とを仕切った土塀のくぐり戸を抜けるはずである。

まだ、おそくはない。急いで先回りすれば追いつけるはずだ……。

そう思いつくと、お梶は急いできびすをかえした。廊下を走って、中仕切りのくぐり戸へ先回りするつもりであった。

だが、五、六歩、もどりかけたお梶の足ははたととまってしまった。

廊下を、逆に向こうから、入り乱れた足音が小急ぎに近づいてくる。

気がつくと、すぐ背後の長安の居間の方で、侍女を呼ぶ銀鈴の音が高らかに鳴っていた。

お梶は、いまさらのように、あまりにも長安の居間に近よりすぎていた危険に気づいた。

長安の居間の付近には、数人の特定の警固の侍がつめているほか、呼び出しがない限りなんぴとたりとも絶対に近づいてならぬきびしいおきてになっている。

お梶の顔色が変わった。

長安は、一代にしてなりあがった身分だし、そのためには目にあまる陰険なことも容赦なくやってのけてきたから、自然敵の多いことをよく知っている。

それだけに、身辺の警戒には人一倍気をつかっていて、そのおきてにそむいた者には仮借しないのが例になっていた。

長安が、いの字と密談していた場所からこんな近くに、理由もなくうろついているところを発見されたらどんなことになるだろうかと、お梶は一瞬、青ざめてすくんでしまった。

侍女たちの足音がすぐ鼻の先に迫っている。居間の方では、長安の立ち上がる気配がした。身のかくしようもない廊下のすみである。

お梶は、とたんに目の前にあるふすまを開いて中へすべりこんだ。そこが、長安の居間の次の間にあたっていることはよくしっているが、とっさの場合ほかに手段がなかった。

お梶がふすまをしめきるとほとんど同時に、侍女たちの足音が前の廊下をすり足に通りすぎた。

「お召しでございますか?」

と、その声がすぐ間近から聞こえてくる。

「もう、やすむ。梶は部屋か?」

と、長安がいった。

「それが、あのう……お梶さまは、さきほどお庭先へお出ましのようでございましたが……」

「庭先へ? ふうむ、まだ部屋へはもどらぬか?」

「はい。まだ、お部屋におもどりのご様子ではございませぬ」

「梶を呼べ、わしは寝所へゆく」

「はい、ただいま……」

「すぐ、呼べ。すぐ……」

と、持ち前の気短さを露骨に出していった。

「はい、はい。ただいま……」

と、侍女たちはいっせいに立って、うろたえたように引きさがってゆく。

その足音に耳をすませながら、お梶はそっとふすまをひきあけた。

侍女たちに怪しまれない先に、早く部屋へもどっていなければならぬ。もう、いの字の詮議などに手間どっているひまはなかった。

廊下へ出る。あたりを見回した。

灯影の暗いあたりには、もう侍女たちの影はなく、遠くの方から、お梶さま、お梶さま……と呼びたてているその声が、かすかに聞こえてきた。

お梶は小走りに廊下の曲がり角まできた。そこを曲がると、渡り廊下が母屋の方へつづいている。だれもいない。

ほっとしながら、その角を、つと曲がりかけたとき、

「梶……」

と、出しぬけに名前をよばれた。

「梶、そこにいたか。もう、庭からもどったか……」

思いもかけない鼻先に、さるのようにしわの深い横顔を見せて長安が立っていた。

「今宵は十三夜じゃのう。よい月じゃ。月を見ていたか?」

と、お梶を見つめた目が笑っている。

「それとも、なんぞ、もそっと面白いものでも見たかの?」

じいっと見つめられて、お梶は何かあっ!

と、のけぞる思いで身がすくんだ。

長安の手が、つと伸びて、お梶のすくんだその肩をぐいと抱いた。

「何を震えている? ははは……よいよい、閨へ行く。まいれ、梶……」

寝所には、すでに敷きのべた夜具をめぐって翠帳がたて回され、絹行燈がひっそりと赤い灯影をなげていた。

いやもおうもなく、引きずられるようなかたちで長安のうしろに従ってきたお梶が、次の間

まで入ると、ひかえていた侍女たちが、
「おはよう、お支度を……」
と、左右から素早くより添ってきた。
一度こうと計画をたてたことは、せかず急がず、いやになるほどねちねちと辛抱強くやってのける長安だが、その反面、己の命令が思ったとおり即座に実行されないと、たちまち罵声をあげて口ぎたなく叱咤する長安の気短さを侍女たちはよく知っている。
髪を解き流し、白綸子の一重の寝衣に着かえるまで、侍女の手にまかせたまま、お梶は物憂げに一言も物をいわなかった。
今宵がはじめてのことではない。ご愛妾の地位にすえられてから、長安がこの屋敷にある限り、ほとんど隔日のようにお召しがある。
老人とも思われないかくしゃくたる体力が、覚悟の上とはいえ、その度にお梶にとっては物憂くうとましかったが、ことに今宵は、まるでへびに見こまれたかえるのたとえにも似て、何か身がすくむような思いであった。
長安は、いの字との話の中で、お梶を敵の諜者ととうからしっていて、その危険な女を腕の中に抱き寝することがことさらに好もしいのだと、お梶が思わずぞっと寒けだつようなことをいった。
これまでにも、長安がもしや自分の正体をしっているのではあるまいかと、ふっと疑うような節々も幾度かあって、その度に、お梶は針のむしろに寝ている思いがしたが、あからさまに、長安の口からそれをいわれては、あっ！　とのけぞるばかりであった。
ただでもうとましかった長安の愛撫が、まるで捕らえたねずみをなぶりものにしてもてあそぶねこの残忍さを思い出させ、ぞうっと骨の髄まで凍りついてくるような思いであった。
その上、今しがた、自分を見つめながら、意味ありげに薄笑いした長安の目が、一体何を語っているのだろうかと、お梶の胸が震えている。

ことによったら、いの字を透き見していたことを感づかれたのではあるまいか？　もしそうだとすると、もう何もかも終わりだ。どんな残酷な方法で処刑するか分からない。長安はそういう男なのだから……。
つい、先日までは、お梶はいつ死んでもいい覚悟でいた。長安の側女にあがったときから、死んだものと思いあきらめていた。
しかし、今は違う。死にたくなかった。思わぬ所で進太郎に出会った、その瞬間から、考え方ががらりと変わった。
——ご壮健で……また、会う折もあるであろう……。
いいながら、優しいひとみでじいっと見つめたその人の言葉が耳の底に焼きついている。
こんなにも進太郎への思慕が深いものだったのかと、われながら驚きもし、その進太郎の言葉に、すがりつきたい思いが切ないくらい胸をしめつけた。
生きていれば、また、あのお人に会えるのだ。会いたい。せめてもう一度、お目にかかりたい。どんな思いをしても、それまでは生きていたい……。
支度ができた。長安はすでに翠帳の陰に入っている。
「さあ、お梶さま、お早く……」
と、侍女がせきたてた。
お梶は、おずおずと重い足どりで翠帳の陰へゆく。
いやでもそうするよりほかに道はない。どうあがいても、その運命を変える力はなかった。
褥に近く、ゆったりとくつろいだ姿で茶をのんでいた長安は、そばへ座ったお梶の方を横目で見ながら、
「明後日、月見の宴の折、そなたに会わせたい者がいる」
と、さりげなくいった。

「水町という小旗本の娘で、雪絵という女だが、そなた存じているか？」
「いいえ……」
お梶はかすかにいいながら首をふった。もちろん、知らないはずはないが、そうとはいえない。
「当代、江戸中でもまれに見る美女だというわさじゃ。天下の美女をえりすぐって集めたといわれている大坂城にも、あれほどの娘は、まずまれであろうとさえ申すものがある。梶、このような話はいやか？」
「いいえ、どうぞ、お話しあそばして……」
一瞬でも、いとわしいことから遠ざかっていたいお梶であった。
「その娘がのう、ただ美しいとばかりであるならば、さほどの興もなかろうが、世にもふしぎな素姓の者でのう。一口に申せば、月姫さまの血統をひく、この世でただ一人の女なのじゃ。梶、聞いているか？」
「は、はい、伺っておりまする」
「信州八ガ岳の山奥ふかく住まいする月姫さまと呼ばれるふしぎな女性があってのう。うわさによると、二百歳の齢を重ねながら、しかもなお小娘のごとき若さと美貌を失わずにいる、いわば、魔性の女なのじゃ。
里人でだれ一人、そやつの素顔を見た者はないともいわれているが、その月姫ならびにその血をうけた女性は、生涯にただ一度結婚をするならわしじゃとか。梶、どうじゃ、面白いか？」
「はい。面白う伺っておりまする」
「月姫は、生涯にただ一度、八ガ岳近くを旅する若者の中から、これぞと思われる男を一人選び出し、月の明るい夜半、妙なる笛を吹きならして、その魔性の笛の音に誘われて山深くおびきこんだその男と数夜の契りを結ぶのじゃ。そして、後つぎとなるべき子をはらむとのう。ふしぎなことに、そうして産みおとす子供は、代

代女にかぎられているともいう。つまり、雪絵は、そうして生まれおちた月姫の子孫じゃと、いや、これはうわさでなくてすでに明らかな事実と信じる節がある」
「……」
「その雪絵に、月見の宴で会わせてとらそう。どうじゃ、興味があるか？」
「はい、興深いことに存じまする」
「梶、嫉妬せぬか？」
「まあ……なぜでございましょう？」
「なぜ？　ははは、よいよい」
と、長安は心地よげに、ゆっくりと茶をのみほしてから、
「やすむぞ」
と、じろっとお梶の方を見た。
お梶は石のように体を固くしてうつむいている。
「どうした？　顔色が悪いではないか？」
「あのう、わたくし少し気分が……」
「疲れであろう。やすめば治る」
長安の骨ばった指先が、お梶の腕をぐっとつかんだ。
「あ！」
と、小さく叫んだまま、お梶の体が褥の上へ崩れるように倒れる。
「梶、震えているな？」
と、長安は褥の上でお梶の体を横抱きにした。
「何がこわい？　何をそのように恐れているのじゃ？」
「い、いいえ、何も恐れてはおりませぬ。ただ、気分がすぐれませぬ。……お、お許しくださいませ」
「許せ？　何を許せというのか？」
「気分がすぐれませぬ。何やら頭が痛みまして……今宵は、お殿さま、気分がすぐれませぬ故……」
と、手足をすくめて石のように固くするお梶

うとすきをねらっていたことも、今宵、彼とわしとの密談を終始盗み聞きしていたこともちろんしっていたぞ」

「ああ、死にとうございます！」

お梶は身をよじった。

「わたくしをご処刑くださいませ。斬ってくださいませ。仰せのとおり、わたくしは、お殿さまを裏切った諜者でございます」

「死ぬ？　いや、死んではならぬ。殺しはせぬ。処刑もせぬ」

「諜者でございます。裏切り者でございます。お殿さま、わたくしをおなぶりになるそのお手で、梶を殺してくださいませ。いっそ……い、いっそ、死にとうございます」

逃れようとしても逃れることのできない女の運命を知りつくしている男の指先が、もだえくるっているその胸のおののきを、意地悪くまさぐり味わってでもいるように深くはっていた。心の底では死にたくない。どんなことをしてでも生きのびるのだと、何かにすがりつく思いでこいねがっていながら、この場の切なさが、思わずお梶の悲鳴をかりたてる。

「死にとうございます。わたくしは裏切り者でございますッ」

「恐れることはない。そなたはわしを裏切りはせぬ。わしはとうからそれをしっていて許していたのじゃ。死ぬことはない。死ぬことは許さぬ。梶、わしは、それほどにそなたを愛しているのだぞ」

と、長安の声はささやきつづけている。

しめつけた男の腕の力と、肌をまさぐる指先が、どうにもならない運命をお梶に教えていた。

「梶、よう聞け、わしが、何もかも知りながら、見て見ぬふりをし、そなたのしたいようにさせていたのも、そなたを愛していればこそじゃ。かわいい女のすること故に、わしは笑って許していたのじゃ。何を恐れる？　わしが承知で許していたことが、なんで裏切りになろうぞ。ははは……わしから見ればそなたのすることなど、幼子のたわむれにも等しいわ。この長安が、そなたのようなか細い諜者に足をすくわれて、そのままよろめくようで何ができると思う」

長安はお梶を抱きしめたまま、自信にみちた声で、ねちねちとささやきつづけている。

ささやくことがそのまま愛撫につながっていた。ささやく一言一言が、お梶の肌をはっているその指先のうごめきと一つになってお梶の神経をゆさぶった。

それが、お梶にとっては、捕らえたねずみをなぶるねこのむごたらしいしぐさとしか受けとれない。といっても逃れる道はなかった。切なさに思わずもだえるその肌のおののきを、老人の指先が、まるで待ちうけていたようにまさぐった。

「その証拠に、わしはそなたの前では、何一つ強いてかくすことをせなんだではないか。たっ

た今しがたも、月姫と雪絵のことをあからさまに話したであろうが。そのことすら、呂宋屋彦七のほか二、三の者しか知る者のない秘密じゃ。雪絵自身でさえ、おそらく、しかとは知らされていまい秘密じゃ。そのことさえ、そなたに話した。しゃべりたければしゃべってもよい。内通するつもりなればそれもよかろう。わしが許す。何をしてもよい。ただ……よいか、ただ、死ぬことは許さぬ。そなたの命はわしがあずかっている」

お梶は答える代わりに低くうめいた。何かが、お梶を堪えがたくしていた。

「お殿さま、お許しを……お、お願いでございます」

うわ言のようにいうお梶の耳へ長安の息が、ひときわ近々と熱くかかった。

「梶、しっているぞ。そなたが、わしの目を盗んでひそかにしていることを、今も申したとおり残らず知っている。それと同じように、わしは、そなたの心のすみずみまで知りつくしているぞ。そなたの心のすみに、一人の男が巣くっていることもな……」

お梶の胸をなぶっていた長安の指先がはたとまった。とまりながら、瞬間、ぎくっとした ように高鳴ったお梶の胸の鼓動を、じいっと観察しているようであった。

「そなたは三年前その男に会った。それ以来、この、わしの指先がふれている胸の奥に、その男が巣くっている。北条家の浪人、桜井進太郎とやら申す男じゃとのう。図星であろうが？」

はりさけそうに高鳴っているお梶の胸に、長安の指先は、しつこく触れたまま離さなかった。

「驚いたか、梶、わしは、そなたの心の奥までしりつくしている。知りつくしながら、それを承知でこうして抱いているのじゃ。恐れることはない。諜者であることを許したように、そなたがだれを愛そうと、だれにほれようと、わしはしかりはせぬ。進太郎への、三年越しの思慕が、どれほど深かろうと何もいいはせぬ。しかし、進太郎はわしの敵じゃ」

長安はねちねちささやきつづけた。

「桜井進太郎はわしの敵じゃ」

と、長安は重ねて鋭くいった。

長安の性格をよくしっているお梶は、そういった長安の語調の中に、陰火のように、めらめら燃え上がっている敵意を感じとった。

「彼の父、桜井太郎左衛門は、もと北条家につかえ、忍者の総支配の役にあったとのう。武田四郎勝頼公のご正室は、北条家の出でおいであそばす故に、北条家の家臣の中には、自然武田の家臣と親しい間柄の者もできたわけじゃが、彼、太郎左衛門もそうであった。当時、武田家にあって勇名高かったそなたの亡父泉野左馬之助とはことに昵懇であったはずじゃ。

後に至って、北条、武田両家の間に不和を生じ、ついには、北条家の軍勢に追いつめられたもうた勝頼公が、あえなく天目山山麓の露とお消えあそばしたことはだれしらぬ者のない事実じゃが、その勝頼公ご最期の合戦の折、そなたの父泉野左馬之助が、ひそかにはせつけて勝頼公のおそばにあり、また、北条家の先陣中に桜井太郎左衛門のあったことは今ではほとんどしる者もないであろう。

そもそも、事の起こりはそこにある。勝頼公のご最期をめぐって、同じ戦場にあった旧知の泉野左馬之助と桜井太郎左衛門が、何かの目的をもって、人目を忍んでひそかに会合したという事実が、なかったと打ち消しうるものがどこにいようぞ。

今から三年前、そなたと、そなたの兄兵馬とが、父同士の旧知をたよって小田原の在に桜井親子をたずねていったのも、そなたはしるまいが、過ぐる天目山の合戦に、何事か驚くべき秘密が伏在していた、それを明らかにつきとめるためであったはずじゃ。

梶、その天目山の秘密こそは、わしが十年、いや二十年、必死になって追いもとめていたことだぞ。いかなる手段をめぐらしても、いかなる犠牲を払っても、必ずつきとめずにはおかぬ決意をもってな。しかも、その秘密を掌中ににぎって、歴然とわしに敵意を見せて立ったのが、あいつめじゃ。桜井進太郎じゃ」

いまさら、なんでそのようなことを話す必要があったのか。つまりは、その一語一語が毒矢のようにお梶の体に突きささってゆき、その度に、はげしい反応の起こるのを、お梶の肌を通して、まさぐる指先に味わうためとしか思われない。

「最近になって、やっと、進太郎の居どころもしれた。彼はわしの敵じゃ。必要が生じたときには、即刻彼の一命をとるべき手段もたててある。

梶、なぜそのように震える？　そなたには何事も許していると申したではないか？　進太郎が恋しくば恋してよい。会いたくば堂々と会え。わしが許す。しかりはせぬ。ただし、必要の生じたときは、たちまち彼の一命はなきものと覚悟していよ。何を恐れるのじゃ？　かわいい……かわいいやつが……」

長安の声がばったりととだえた。お梶は、恐怖と屈辱に、はげしくさいなまれるようにあえいでいた。しかし、どうすることもできるわけではない。それを知りぬいている長安の愛撫であった。

お梶は、しらずしらず汗ばんでくる体を感じ、そういう己の体にさえはげしい嫌悪を感じた。

夜あらし

長安から、月見の宴への招待が来たとき、雪絵は勝ち気なまゆをひそめて思わず苦笑した。

執念深い長安のことだから、いつかはそんなこともあるだろうと、薄々予期はしていたけれど、父が旅立つと、とたんに待っていたような

招きの使いは、相手の腹の底が丸見えになったようで片腹痛い思いであった。

といっても、相手は父の上司であるから、理由もなしに断るわけにもいかない。馬子のお静を助けてやった代償に……などという理由でならば、いくらもはねつけてやる口実はあるが、父の名代として上司の祝宴に臨んでほしいという丁重な使者の口上には、どんなに相手の腹の底が見えていても、すげなく拒絶するのは礼を失することになる。

だいいち、長安に、どんな腹黒い策略があるにしろ、うわべはお上の御用という大義名分によって、長安の支配下に属し甲府へ旅立った父のことを思うと、礼を失して長安のふきげんを買うようなことは、父のためにはばかられた。

どんな不愉快な相手であっても、月見の宴の招客といえば、たかだか一刻の辛抱である、と雪絵は自分にいい聞かせる。

それに、使者が持参した長安直筆の、秘と封じ目に書いた親書の中に、

――『朱書き一節』のことにつき、いろいろお聞きしたいこともあり、お話し申したいこともあり、まげてご列席くださるよう……。

と、書き加えている一ことが、ずきっと雪絵の胸をゆさぶった。

そのことは、先日から、何をおいても父に尋ね、是非とも聞きしりたいと熱願しながら、突然の父の旅立ちのため、つい、心にもなく果たさずにしまったことである。

このことが、水町家をめぐり、自分をとりまいて、何か容易ならぬ秘密をはらんでいることだけは知っている。それを、思いもかけない長安の方から話したいといいかけてきたことは、いかなる事情があるにせよ、聞き流しにすててておけないという気持ちにせきたてられた。

それでも、虫が知らせるというか、何か不安なものが決意をさまたげている。

父でもいてくれれば相談するのに……と、雪

絵は、頼りない寂しさに襲われながら、なぜともなしに、ふっと桜井進太郎の面影をまぶたの裏に思いうかべていた。

命を救われた恩人とはいえ、まだ一、二度しかあっていないその人のことが、寂しいと思う心の中に、突然くっきりとうかび上がってきて、われながら雪絵を、はっと驚かせたくらいである。

あの人なら、どんなことでもうちあけて相談できそうな心地がする。どんなに迷っているときでも、きっと、よい決断を下して、力になってくださるに違いない。

あのお方が、もし兵馬どのほどに、親しくおつきあいくださっていたならば……と、雪絵は、そんなとりとめもない思いにとりつかれ、しばらくぼんやりとわれを忘れていた。

断るわけにはいかないから、使者には承知した旨返事をした。

十五日の晩は、たそがれごろからふき出した風が、けたたましく雲を飛ばして、何か不吉なことでも予感させるような晩であった。

雪絵は、約束の時刻きっかりに、長安の屋敷の玄関先に立った。

長安は上きげんで、式台ちかくまで出て雪絵を迎えた。

こんなことは絶えてないことだと、周囲の者は目をみはっている。

どんなに出世しても、長安には、成り上がり者だというひけ目があった。いや、出世すればするほど、そのひけ目は深まるというものだ。そして、そのひけ目が、かえって彼に傲岸不遜なそぶりをとらせる。

大御所家康公のお覚えめでたく、加判の列に加わり、天下の黄金を一手に掌握している長安のもとへは、千客万来のありさまだが、だれが来ようと木で鼻をくくったような態度を見せるのが常であった。

少なくとも、彼が式台までとんで出て出迎えるのは、おそらく将軍家を入れて、この世に十人か二十人にすぎないであろうとさえうわさされている。

「よう見えた。雪絵どの、よう見えたのう。さアさア、こちらへ通られい」

と、手をとらんばかりの歓待であった。

「あなたはひどいお人じゃぞ。この春以来、幾度礼をつくしてお招きしたかしれんのに、この、老い先短き老人を、いつも、すげなくして、いらいらさせてばかりしておいでじゃ。ははは、しかし、ようみえられたのう。今宵こそ、わしにとっては、まさに生涯の吉日というべきじゃ」

などと、聞き方によっては歯の浮きそうなことをぬけぬけという。その傍若無人なあけっぱなしさの中には、散々女を知りつくしてきた男の、どこからともなく相手の胸へくさびを打ちこんでゆくような、それと悟らせぬ老獪さがあった。

雪絵が導かれていったのは、奥殿の、庭に面した広間であった。

すでに、縁先には祭壇をもうけ、型どおり、すすき尾花に、盛り菓子、神酒などうずたかく供えられ、広間のうち外には人影が居ならんで、主客の入来を待ちかねている。

「殿のご出御でございます」

と、侍女の一人が声高にふれる。居並ぶ人影はいっせいにひれ伏した。その間を、雪絵は長安に手をとられんばかりにして中へ通った。

「さあ、ここにお座りあれ。よいよい、今宵は雪絵どのが主客じゃ」

と、長安は、正面の、一段高い己の席のすぐそばを指さした。

いやおうはいわさぬほど、如才ないもてなしであった。

見ると、少しはなれてお梶がひかえ、そのうしろから、左右に侍女が居ならんだほか、縁先の辺りに、護衛のためか男の家臣らしい影が幾

夜の更けるにつれて、風は刻々と強さをましてゆく。

その風に乗ってあわただしく飛ぶ雲の断片が、時折、月面をさえぎってあたりをあんたんと暗くとざしたが、しかし、酒宴の興はますますはずんでゆくようにみえた。

長安のきげんも至極上々のようである。

雪絵をそばへひきよせて、あれこれと、話のすみずみにまで気を配ってとりもちする様子が、まるで他に人なきがごとくではあったが、しかし、雪絵が案じていたような埒をこえた理不尽な気配はちらりとも見せず、ただもう、好好爺然と打ち興じているようである。

雪絵としても、ただ虫の好かない男と思うだけで、父の上司でもあり身分高い長安が、それほどまでに心をつかってもてなしてくれるのを、意地悪くすげなくもしていられない。

相手が埒を越えたいやらしい無礼を働かない限り、それ相応のあいさつもしなければならないから、三度に一度は酒杯もうけ、ほどよく話の相づちもうっていた。

五ッ半（九時）に近いころであったろう。

「雪絵どの、内々の話があるのじゃよ。書面にも書き加えておいた故、ご存じであろうが、それ、『朱書き一節』の一件……」

と、長安が出しぬけに、雪絵の方へのり出しながらささやいた。

「ここでは話ができん。別間までご足労くださらんか……」

いいすてて、すっと立ち上がった。

左右の者へも目顔で知らせてあるから、だれも長安の退席を呼びたてない。

長安のあとについて席をたったのは、雪絵のほかは、太刀持ちの小姓と侍女二、三だけであった。

居間までくると、縁先近く座をしめた長安は、

「雪絵どの、こちらへ、こちらへ……」

と、すぐ近くへ敷物を運ばせ、相変わらず物慣れたとりもちであった。

お付きの者もはるかにうしろへさがってひかえ、灯も遠ざけたので、二人の影は月明かりの中にくっきりと青く浮かび上がっている。

「さっそくだが、あなたは、『朱書き一節』というものをご存じか？」

と、長安は他意なげに、微笑しながら話しかける。

「いや、たぶん、ご承知であろう。少なくとも、そういう、名前ぐらいは耳にしておられよう。だからこそ、わしの今宵の招待に快く出向いてきてくれたのじゃと思う。ははは……雪絵どの、許されい。実はのう、ただでは、あなたがやすやすとはこの屋敷へ来てくださるまいと存じた故に、『朱書き一節』うんぬんのことを申し添えたのじゃ。悪く申さば、つまり、それを餌にしてあなたをここへつりよせたわけじゃのう。許されい、許されい」

と、あけすけにいって笑っている。

つか見えるだけで、客人らしい者はだれもいない。

雪絵はいやな気がした。まさか、招客が自分一人だったとは思ってもいなかった。それだけに、長安の真意がどこにあるのか、いまさらのように露骨に見せつけられた気がし、とうから感じていた不安なものが、急に色濃くなり出したようであった。

しかし、いまさら、席をけって帰るわけにはいかない。

侍女が酒を運んでくる。

「皆のもの、今宵は無礼講じゃ。十分にすごせよ」

長安はますます上きげんで、

「さ、雪絵どの、あなたも一献……何、飲まんでは困る。これは神酒じゃ」

と、これまたいやおういわさない巧みな酒の勧めようであった。

「雪絵どの、わしは、それほどにあなたと、一席ゆっくりとお目にかかりたいと願っていたのじゃ。老人の愚かな執念とお笑いならばそれもよかろう。決して、悪意はない故、まあ、許されい。と申しても、『朱書き一節』のことは偽りではない。是非一度、あなたとそのことを、とっくり話しあってみたいとねんじていたことは事実なのじゃ。雪絵どの、あなたはご存じかどうか、『朱書き一節』のことは、あなたや、ひいては水町家の浮沈にかかわる恐るべき秘密を含んでいることじゃでのう」

ちらっとこちらを見やったその目つきが、気のせいか、何か意味ありげで不気味だった。

「さて、雪絵どの、あなたは、『朱書き一節』のことをご存じか?」

と、長安は、さりげなく微笑しながら雪絵の横顔を見やった。

「いいえ、わたくし……」

雪絵は、まっすぐ前を見つめたまま、低い声で答えた。

「『朱書き一節』というものの、名前をちらっと耳にしたことはございますが……」

「あなたにとって重大な関係のあることもご存じないのか?」

「何か、関係のあることは、薄々察しがつきまして、一度、父にでも問うてみたいと思っておりましたが、その折を得ぬうちに、父が旅立ってしまいましたので……」

「さようか。それならば、わしにもかえって話しがいがあるというものじゃ。あなたとしても、是非知っておらねばならんことと思う故にお話し申そう。人に聞かれてもまずい。もそっとお寄りあれ」

そういう声も、いかにも打ちとけて優しげであった。

「『朱書き一節』とは、四枚一組みの竹片に、孫子にある文句——その早きこと風の如く、その

静かなること林の如し。侵しかすむること火の如く、動かざること山の如し……の一節一節を、それぞれに分かって彫りつけ、それに朱漆をつめた枝折なのじゃが。なんで、このようなとるに足らん片々たる枝折が問題になるか。知らん者にとっては不思議とも笑止千万ともいうべきであろうが、雪絵どの、さあ、話はここからじゃ。知ってでもあろうが、その孫子の文句は、武田信玄公ご愛唱のものであって、馬じるしにもお使いあそばしておられるはずじゃ。

さて、『朱書き一節』と呼ばれる枝折じゃが、これは、信玄公がお手すさびに、おん自ら竹を削られ、文言を書きつけられ、刀をとって彫り、丹漆をつめてお作りあそばされたものじゃときく。

しかも、当時、まだご幼少にわたらせられたおん子、四郎勝頼公にお手ずから与えられ、この枝折を片時もはなさず座右において、勉学をおこたることなかれとおさとしあそばされたとも伝えられている。というのも、勝頼公は天性、闊達勇武にわたらせられ、学問の道をうとんじられる傾きがあった故、それをお案じあそばされた父君信玄公が、とくとそれをいましめられたものじゃとおうわさを耳にしているが……それかあらぬか、勝頼公も父君ご慈愛の品として、いかなる出陣のときにもはだ身はなさずご持参あそばされ、終生変わるところがないと承知している。

天正十年三月、天目山山麓、田野の部落にて、あえないご最期をおとげあそばされた折にも、もちろん、『朱書き一節』は、勝頼公のお手にあったはずじゃ。

さて、勝頼公ご最期の後、問題の朱書きはどうなったか? 詳しく知る者はもちろんないが、ただ、ひそかに伝え聞くところでは、勝頼公ご最期のみぎり、おくればせながらおそば近くはせつけた武田家譜代の臣、泉野左馬之助なるものを召され、勝頼公お手ずから『朱書き一

節』一組みを手渡され、それを、さる所のさる人物のもとまで届けやるよう、きびしいお申し渡しがあったという。

しかるに、秘命をうけて戦場を脱出しようとした泉野左馬之助は、まもなく、何者かの手にかかって殺害され、『朱書き一節』も奪いさられて、そのまま、ようとして行方しれずになってしまったのじゃ」

「雪絵どの、お分かりか？　話の急所はここにある。主君勝頼公の危急をしってはせつけた泉野左馬之助ともあろうほどの武士が、いかに主君のご命令なりといえ、みすみす、勝頼公のご最期の迫るのを目前にして、急遽おそばを離れて戦場から脱出せんと企てたか？

勝頼公のご命令がどのようなものであったかは知らぬが、おそらく、よくよくのことであったと推察されるであろうが。つまりは、その『朱書き一節』に、重大なる秘密が伏在していたと察しがつこうのう。

しかも、そのことを知る者はほとんどいない。勝頼公をはじめ、当時殿に従っていたほどの武田家の家臣は一人残らず天目山山麓の露と消えはて、泉野左馬之助自身も、その使命をはたす以前に人手にかかって死亡してしまっている。

今日、わずかにそのことをしるものは、左馬之助の一子兵馬。そして、もう一人、そのことを知っているはずと推察される人物に、桜井進太郎なる者がいるのみじゃ。彼、進太郎なる者の父、桜井太郎左衛門は、もと北条家に隠密総支配役として仕え、天目山の合戦にも、北条勢の先鋒中に加わりあって、おそらく、泉野左馬之助の横死になんらかの関係ありと思われる節があるからじゃ。

さるにても、勝頼公が危急の場合に、いかなる目的をもって、何者に『朱書き一節』を送りとどけんとして左馬之助に命じたもうたのか？　歴代、甲州一円をご支配されて誉れも高いご名家武田のおん大将勝頼公の、ご執念が凝ってそのまま宿っているとも推察される『朱書き一節』なるものに、そもそもいかなる秘密が伏在しおるのか？

雪絵どの、面白いのう。この世に、かくもすばらしい秘事が人知れず埋もれていようとはのう……」

長安はささやくように語りながら、微笑を含んだ目でじいっと雪絵を見つめている。

雪絵も、しらずしらずその話に引き入れられたようであった。

長安の話が作りごとでないことは分かっている。進太郎や兵馬の話と符節を合わすようにぴったり合致するのが何よりの証拠であった。

なぜ、長安が、わざわざ自分をここへ呼びよせて、そんな話をはじめたのか、それを疑うよりも、心にかかっている『朱書き一節』のなぞを解き明かしたい思いが先だった。

「恐れながら、長安さま……」

と、雪絵は悪びれない美しい目を、ぴったり長安に向けていった。

「その『朱書き一節』が、このわたくしに重大な関係があると仰せられましたが……それは、なぜでございましょうか？　よろしければ、お聞かせ願いとう存じます」

「おうおう、よいとも。話して進ぜよう」

長安は気味のわるいくらい優しい声でいう。

「泉野左馬之助は、勝頼公のご秘命をうけ、何者かのもとへ、『朱書き一節』を送りとどけるために急遽戦場を離脱する途中、人手にかかって相果てたと、今も申したとおりじゃが、彼が断末魔の苦悶の中から、わずかに一言二言、うめくように叫んだ言葉があるという。さて、雪絵どの、彼はなんと叫んだと思いやる？　たった一言じゃ。月姫……月姫……とな」

瞬間、雪絵の顔を、あっ！　という驚きの色が影のようにかすめて過ぎた。

長安は言葉をきって、ゆっくりと空へ目をやった。

さりげないそぶりの間から、雪絵の心の動揺をじいっとうかがっているらしい。

風が雲を飛ばすのか、雲が風を誘うのか、月明かりは、あわただしく息づくように、かげを散らしている。

その度に、庭木をゆさぶった風が、すだれを鳴らして部屋深く吹きこみ、行燈の灯をおどらせる。

「雪絵どの、ご存じであろうな。月姫さまのことは？」

長安は、ふりむきながらいった。

「いいえ、存じませぬ」

と、雪絵はきっぱりと答えた。どんなことがあっても、口にしてはならぬと、父からきびしくいわれている月姫のことであった。

「ほほう、ご存じないかのう？　世間では、毎年一度、八月八日の誕生日に、あなたは月姫さまと会うために寺参りに行かれるとか申しているがのう」

「いいえ……」

と、雪絵は青白んだ顔を、ことさらきつくして、またいった。

「八月八日の寺詣では、母やご先祖さまのご冥福をとむらうためでございます」

「それそれ、そのご先祖じゃ。月姫さまは、あなたのご先祖じゃというわさもきいているが……」

「根も葉もないうわさでございます。わたくし、存じよらぬことでございます」

「ははは……よいよい、よいのじゃ。あなたが知らんといわれるなら、それが真実であろうよ」

と、長安はことともなげに笑う。まるで、むずかる子をあやすような如才なさであった。

「月姫とあなたとの関係は、これは、わしの思い違いであったかもしれぬ。しかし、『朱書き一節』が、あなたや水町家と密接なかかわりのあることには狂いはあるまい。と申すのはのう、雪絵どのは知ってかどうか、あなたの父御、水町三郎太どのは、大きな声では申せんが、徳川家に対して許しがたき罪をおかしておられるのじゃぞ」

その顔が笑っている。笑いながらいうその声には、かえって、奇妙な不気味さがあった。

「お待ちくださいませ」

と、雪絵は思わず、つられたようにきっとなって、

「父が大公儀へ対し奉り、許しがたい罪を犯したと仰せでございますか？」

「うむうむ、申した」

「恐れながら、父三郎太は、とるに足らぬ微禄の臣でございますが、三河以来大御所さまのご恩顧をこうむりました譜代の臣でございます。幾度かの合戦に、命をささげてのご奉公こそつかまつりましたなれど、お上に対して許しがたい罪を犯したなどと……長安さま、たとえどなたさまのお言葉であろうとも、恐れながら聞きずてになりませぬ」

美しいまゆをつりあげながらにらむようにしていう雪絵の顔へ、長安の笑った目があやすように振りむいた。

「さればこそ、世にも奇怪なことがあると申すのじゃ」

「長安さま、お伺いいたしますッ。ち、父がどのような罪を犯しましたか、それを伺いとうございます」

雪絵はせきこんだ。

「のう、雪絵どの。言いづらいこのようなことを口にしたのも、その真意は、すべて父御やあなたのお身を思うからじゃ。悪く思わんで聞かれい」

長安の笑っている目は、まるで、怒りを含んで青白んだ雪絵の顔を見つめて、心ひそかに楽しんでいるかのようだ。

「父御三郎太どのは、若いころから、遠国目付として、特に信濃甲斐一円の各地に潜入し、ひそかに隠密なご用をつとめおったはずじゃ。そのことはご承知であろうのう？

その役目は、もとより隠密なることを第一とするが故に、いかなる仕事をしたかはわしの知らんところじゃが、ただ一つ、明らかなことは、父御が、いつのころか、八ガ岳に住みなす月姫なる奇怪な女性の秘密をかぎつけ、その秘密に深く立ち入ったことじゃ。

まあ、待たれい。わしの申すことが、根も葉もない作りごとであるかどうかはすぐしれてこよう。

父御が、月姫の秘密に立ち入り、はては、『朱書き一節』のことに深いかかわりをもつにいたったことは、あなたがひそかに胸に手をおいて考えられればおのずから明らかになるはずじゃ。

あなたが、墓参にことよせて月姫に会うことも、身に覚えないといわれるなら、それはそれでよい。しかし、父御が、呂宋屋彦七なる男や、また泉野左馬之助のせがれ兵馬なるものをしげしげと身近く引きよせ、ひそかに交際しおることは、もはや、かくれもない事実であろうが。

呂宋屋彦七とは何者と思いやるか？　あなたはご存じあるまいが、彼はもと武田家譜代の臣であった男じゃ。また、兵馬こそは、同じ武田の遺臣でありかつまた、『朱書き一節』の秘密をしる数少ない人物の一人であることはまぎれもあるまい。

そもそも、彼ら武田家の遺臣どもが、ひそかに身分素姓をかくしつつ、何を企てておると思うのか？　彼らは、資金を集め、不平不満の軍船を手に入れて、徳川幕府覆滅の恐るべき陰謀を企てているのじゃぞ。しかも、その陰謀の首魁は月姫であり、父御三郎太どのは、その一味じゃ」

「い、いえ、いえッ、父は……父は、そ、そのような……」

「いや、そのようなことはないとは言わさん」

じろっと雪絵を見やった長安の目は、やっぱり笑っていた。

「父御は、月姫の秘密に立ち入っている。月姫と相通じている。呂宋屋彦七、泉野兵馬と昵懇な付き合いをいたしている」

「で、でも、長安さま、父は、決して！　決してそのような大それた……」

「もし、父御にして役目に忠実であり、徳川家に忠節であるならば、なぜ、とうにその由をしかるべく上司に報告せぬ？　わしの調べたかぎりにおいては、ただの一言一句すら、上申した形跡は認められぬ」

「……」

雪絵の顔は真っ青であった。

まさか、父が……と強く打ち消してはみても、長安のいうことが一度に胸におちてくる。

「かりに、父御が彼らの陰謀を知らんとしても、……そのようなことはありえぬが、たとえ、そうであったとしても、一味でないという言い訳は決してたつまい」

長安は、ささやくような声で、じわりじわりと畳みかけてくる。

「雪絵どの、遺憾ながら、月姫とその一味、呂宋屋彦七、泉野兵馬などの陰謀が、どのような手順により、どのくらい進行しつつあるかまで、わしの手には、すでに残らず確証があがっているのじゃ。問題の『朱書き一節』の件は、兵馬の差し金により、その真相をつきとめることによって、彼らの陰謀に強力な何かを付け加えるものと思われている。彼らはのう、勝頼公ご最期の折のご遺命、ご執念を、このときこそはらすのじゃと豪語しおるのじゃぞ」

長安の底意は、その微笑の陰にかくれている。その柔らかな優しい声音が、その実、まるで、じわりじわり雪絵の手足をくくりあげてゆくよ

うであった。

「思えば、わしも武田家の祿をはんだ身じゃ。同じ武田家の旧臣として、彼らのことをとやかく申しとうはないが、しかし、徳川の天下を覆滅せんとする大それた陰謀は許しておけん。断固として糾弾せねばならぬ。しかもなお、あえてそのことを表に出さず、この手中に握りつぶしにしておるわしの心中、お分かりか、雪絵どの？　つまりは、父御三郎太どのを巻き添えにしたくないからじゃ。

父御を、甲府山目付支配として突然旅立たせたのも、一刻も早く、彼ら不逞の徒輩の側から遠ざかってもらいたかったからじゃ。かつまた、父御に、甲府において一働きし、明らかに大公儀に対して二心なきことを証拠立ててもらいたかったからじゃ。

察しもつこうが、父御は、知ってか知らずでか、すでに容易ならざる危険な穴におちこんでおられる。その危地を脱し、大逆の罪から逃れんためには、月姫の一党に断固挑戦し、自ら進んで『朱書き一節』の秘密を解きあかして、それを徳川家のおんためになるごとく献策する以外に道はない。そのことだけが、父御を大逆の罪から救う道であると思うし、また、父御がそのつもりになれば必ずできようとも信じている。雪絵どの、事態はかくのごとしじゃ。わしが、そのことのため、いかに苦慮し、心労しておるかお分かりか？」

雪絵は、きっとくちびるをかんでうなだれている。さすがに、思いもかけない驚愕が、全身に戦慄の毛穴を逆立てさせ、その顔色は死人のように血の気をうしなっていた。

長安の話が作りごとではないという印象があり、父三郎太がしらずしらず、恐るべき危地にはまりこんでいることをしった。

父が、他意なく、なんの気なしに呂宋屋たちと付き合っていたことも、悪意をもって見る人があれば、大逆の罪に問われる危険が十分にあることを思いしらされた。

「のう、雪絵どの。わしは、父御を救いたい。どうあっても、呂宋屋一味の大罪をあばく以前に、完全な身のあかしを立ててもらいたいと念じている。いや、必ず、そうして見せるつもりではあるが……あなたは、この老人のやり方を、余計なお節介とお思いになるか？　思われるならそれもよい。わしはやるだけやる。というのもつまりは、雪絵どの。あなたのためなのじゃ。いや、はっきり申せば、わしは、あなたが好きなのじゃな。ははは……ほれておるのじゃよ、年がいもなく……」

ははは と笑った顔が、死人のように青ざめた雪絵の横顔を食い入るように見つめている。

「笑うなら笑うもよい。わしはあなたにほれた。年がいもなく、恥を忍んで、あなたを正妻に迎えたいと申し入れたのも、うそ偽りないほれた弱みであった。あなたのためなら、いかなる犠牲を払っても惜しゅうはない。あなたの願いならば、何事でも、命にかけてかなえて差し上げたい。

父御のことでもそうじゃ。あなたがそうしてくれいと願うならば、必ず無事にすむように取りはからう。月姫のこと、呂宋屋彦七のこと、彼らの陰謀がどうあろうと、その罪がどうあろうと、父御の安全は絶対に守ってみしょう。わしには、その力がある。このわしが、全力を傾けてできぬことはない。黒を白とすることも不可能ではない。同時に、また、白を黒とすることもな。お分かりか？　あなた次第じゃ。あなたの気持ち次第じゃよ」

長安の目はもう笑ってはいない。笑わぬ目が、奇妙な光をたたえながら、雪絵の顔に露骨にぎ付けになっている。

常ならば、席を け立てて帰りかねない雪絵だが、今の雪絵にはその力はなかった。

胸の中は、父を思う恐怖にとざされて、居すくんだような姿であった。雪絵の気持ち次第で、

黒を白ともするし、また白を黒ともしてみせるといったその言葉が、何か威嚇的な暗示をふくんで雪絵を金縛りにしていた。

長安ほどの人が、わなをもうけて追いこむようないい方をするとは、なんという卑劣なことを……と、むかつくような怒りはあったが、父のことを思うと、それを表に現す気力はない。

長安は、ちゃんとそれを知っている。知っていて、わなにおいこんできた獲物をじいっと見すえるような露骨な目つきだった。

「雪絵どの、あなたの言葉を伺いたいな。あなたはどのようなことを望まれるか？　と申しても、まさか、父御のことをすててはおかれまい。わしが、聞きたいのは、あなたの一言じゃ。頼む……と、あなたの口から、一言いってくれると、わしもまことに張り合いがあるでのう」

わなの口を絞りあげるようないい方であった。わなの口を絞りあげ、中の獲物に悲鳴をあげさせて、もはや逃れる道のないことを、はっきりと自覚させるむごたらしさであった。

「どうじゃ、雪絵どの？」

と、わなの口をさらにしめつけてくる。

雪絵の死人のように青ざめた顔は、きっとくちびるをかんでうつむいたままだった。

「もし、わしが、ただちに口を開いて呂宋屋一味の大罪を天下に公表すれば、わしの手をくださずとも、すべては終わってしまう。父御はすでに甲府へ旅立たれたが、二度と生きて江戸へはもどるまい」

雪絵の肩がはげしく震えた。

恐怖と無念さが、その勝ち気な性根をゆさぶったのである。

「それとも、長安ごときに何事も頼むいわれはない。いやじゃというなら、それもよかろう。無理にはいわぬ」

「……」

「おう、風がはげしくなり、月もまったく雲間にかくれた。月見も興がうせたぞ。席を変える……」

と、長安が突然さっと立ち上がる。

「お、お待ちくださいませ」

と、雪絵は、あえぐようにいった。

「お、お願い申し上げまする。父のことを、なにとぞ……なにとぞ……」

「ほほう！　父御のことを、頼むといわれるか……」

長安は立ったままふり向いた。顔のしわが笑いに崩れている。思わずにやりと笑った顔であった。

「よういわれた。あなたに頼むといわれて、わしの気持ちもきっぱりと定まった。安心なされい。わしがひきうけたかぎり、すべてをまかせて安心しておられい」

「何分よろしく、お願い申し上げまする」

「よいよい。父御のことはきっと引きうけた。呂宋屋一味のことも、月姫のことも、できるかぎり内聞に、おだやかに処理するつもりじゃ。それには、もう遅滞は許されん。急がねばまずい。わしは、早急に甲府へ立つつもりじゃが……そうよ、のう。明日、いや明後日。明後日江戸をたてば、八王子に立ちよっても、おそくも月末には甲府へ着こう。雪絵どの、そのつもりでいてほしいの。いや、用意など心配いらん。あなたの旅装その他、わしの方でしかるべく手配する」

「ええっ、な、なんと仰せでございますか？」

「明後日江戸をたって甲府に向かう。分かったか？　あなたももちろん一緒じゃ」

「まっ、わたくしが……わたくしがご一緒に甲府へ？」

「あなたを江戸においては、呂宋屋一味の陰謀を助長させる恐れがあって至極まずい。父御を彼らから遠ざけたと同じ意味であなたにも、しばらく旅していただく。父御のもとへまいられるのじゃ。楽しみも多かろうではないか」

「でも、あまりに火急のことで……家には、幼い弟一人、あとが案じられてなりませぬが……」
「弟御はすでに十五歳と聞く。すわ戦場という場合には、槍おっとって出陣する年ごろではないか。いや、水町家の浮沈にかかわる大事のときであることを忘れまいぞ」
と、顔は笑みをふくんでいるが、のっぴきさせない強引さでいう。
「では……わたくし、支度のととのい次第、お後からでも……」
「わしと一緒の旅はいやじゃといわれるか？」
「ご一緒ではあまり恐れ多うございますから……」
「ははは、たまには、わしのわがままもかなえてほしいのう。あなたは、これまでに、ついぞ一度も、わしの言葉に色よい返事をくれたことがない。今度こそは、老人のいい分を通させてもらう」
「……」
「のう、今度のこと……あなたのお頼み故にわしは引きうけた。口では引きうけたと、たった一言じゃが、下手をすれば、わしも巻き添えくって、一身を棒にふりかねない危険をおかさねばならん。だれが好きこのんでこのようなことをしよう。ただ……ただ、雪絵どの、あなたの頼み故じゃよ。あなたのために、よかれと思えばこそじゃよ。分かったのう？　ははは……甲府への旅は、山あり川あり、ながめもよければ楽しみも多い。あなたはわしの客人として、ゆっくり旅を楽しんでくれればよいのじゃ。よいの、明後日江戸をたつ」
長安はきっぱりといい切った。
雪絵は、しらずしらず、どうにも身動きできぬわなにでもおちこんだような息苦しさに胸をふさがれていた。

その夜、雪絵はとうとうまんじりともせず明かしてしまった。

長安の言葉の裏に毒のあることを直感している。さも親切らしくいえばいうほど、その毒気がことさらまざまざと感じられるのが皮肉なくらいであった。
長安の親切さが、決して純粋なものでなく、その裏に、必ず腹黒いたくらみがあるのだと信じている。もし、本当の親切さがあるのならば、なぜ、父が江戸にいるうちに、それをいい出さなかったのか？
父を遠くへ旅立たせてしまったあとになって、なぜ、突然そんなことをいい出す必要があったのか？
甲府へ旅立つ決心はきまっていた。長安に強いられたからではない。長安の言葉がなくとも甲府へ行かねばならないのだと、勝ち気な雪絵はそう自分にいい聞かせている。
甲府へ行き、父にあって、父や自分の身に迫っている危険をつげねばならないし、同時に、長安のいうとおり、それが本当に水町家にとって由々しい危機なのか、それとも根も葉もないことなのか、今度こそ、真相を、はっきり父の口から聞かねばならない。
月姫さまをとりまく秘密を、だれでも知っているのに、自分だけが知らされずにいる。そのことが、雪絵をいらだたせて我慢できないものにしていた。
ただ、これだけの一大事をだれ一人相談する人のないことが、さすがに娘心を頼りなくいらだたせた。
まだ幼い弟に話したところでどうなるものでもないし、やたらな人に相談できる筋合いのものでもない。
兵馬が、ひょっこり屋敷へやってきたのは正午すこし後のことであった。
「昨夜は、大久保長安の屋敷へ招かれておいでの由伺いましたが……実は、お案じ申して、彼の屋敷の塀外に忍び、陰ながら警固いたしておりました。いや、何事もなくて、心からお喜び

を存じていらっしゃいます？」

雪絵は冷たく相手を見返した。それを不審がるよりは、うるさい人だといわんばかりの露骨な目つきだった。

しかし、兵馬は平然として笑った。

「雪絵どの故申し上げるが、妹のお梶が、今朝方呂宋屋へ知らせてよこしたのです。お梶が諜者としてあの屋敷へ住みこんだのも、雪絵どの、ただただ水町家のことを思えばこそです」

「雪絵どの、妹お梶を、心にもない長安の愛妾としてあの屋敷へ住みこむように強いましたのも、ただただ、水町家のために、諜者の役をつとめさせたいためだったからです」

兵馬の口からそういわれると、水町家のためという一言さえ、雪絵には、おしつけがましく不快に聞こえるのも奇妙なくらいであった。

まして、女にとって由々しくもかけがえのない操を、何のためであれ心にもなく捨てさせて、

申し上げます」

と、端麗な顔に微笑をうかべながらいう。

雪絵は、形ばかり目礼しただけで、せっせと旅支度の手をいそがせていた。

どういうものか、このごろになって、この男がうとましくて仕方がない。以前は、ただの客人として、好きもきらいもなく付き合っていた男だが、先日、進太郎をたずねていった帰りに道で出会ってからというもの、何か虫の好かないやらしいものが、雪絵の胸の中で根強くはびこってしまっていた。

「ははア、旅立ちのお支度ですか？」

と、兵馬はじろっと雪絵の手元を見やった。

「聞けば、長安のお供をなさって甲府へ旅されるよう、きゃつめにいやおうなしに詰めよられたと、そのようなことを伺いましたが、では、長安のいいなりに、旅立つご決意をなされましたか？」

「兵馬さま、あなたはどうしてそのようなことしかも、平然と微笑しながらそれを口にする兵馬の端麗な顔が、ことさら冷酷にさえ見えてきておぞましかった。

「水町家のためとやら、それはどのようなことでございます？　わたくしは、一向に存ぜぬことでございますけれど……」

と、雪絵の声は冷たくなるばかりである。

「いや、お分かりにならねばそれでよい。いまにお分かりになるときも、きっとまいろう。ただ、雪絵どの、長安は容易ならざる奸物故、決して彼の口車にのってはならぬと申し上げたいのです。彼と一緒に甲府への長旅など、何が起こるか予測もできません。おとどまりください」

「ご注意はありがたく存じますが、わたくしは甲府へまいります」

「妹も、わたくしも、また、彦七もひどくお案じ申し上げているのはそのことです。とり返しのつかぬことが起こるかもしれませぬ。いかなる理由があるにもせよ、長安の誘いにのって旅立ちなど、まげて、おとどまりくださるよう……」

「長安さまのお供ではあっても、わたくしはわたくしの意志でまいるのです。どうしても、父にあわねばなりませぬ故、甲府へまいるのです。わたくしは旅立ちます」

「さようでございますか……」

兵馬は、憂わしげにまゆをよせながらいった。

「それほどまでのご決意なら、もうお引きとめはいたしますまい、今日は、彦七から命をうけ、旅立ちを思いとどまっていただくためにこうしてまいったのですが、もうおとめはいたしませぬ。その代わり、手前も甲府へ旅立ちます」

「なぜ？　なぜ、あなたさまが？」

「たぶん、彦七も共に旅立つでございましょう。雪絵どのご守護のためです」

「どうぞ、わたくしのことならば、おすておきくださいませ」

「そうはなりませぬ。見すてではおけませぬ。

少なくとも手前には、雪絵どのをお守りする義務もあり、また権利もあるのです」
「まあ、権利などと……なぜ、わたくしにそうあそばす権利などが？」
「父君から、まだお聞き及びではございませんか？」
じいっと雪絵を見つめたまま兵馬の目には、月姫の許しをえて、すでにその人を許婚だと思い定めている男のそぶりがあった。
「父がどうしたのでございます？　父から何を聞いたと仰せなのでございます？」
雪絵のひとみは、まるで、詰問するように鋭かったが、兵馬は微笑にはぐらかした。
「お聞き及びでなければ、いずれ……お分かりになるときがまいりましょう。雪絵どの、ご迷惑になるようなことはいたしませぬ。いや、あなたがどう申されようと、手前はあなたを陰ながらご守護せねばならぬのです」
「なぜ？　なぜでございますッ？」
「月姫さまのおぼし召しで……」
と、兵馬はおちつきはらっていった。
兵馬が帰っていった後まで、雪絵の胸の不快さは晴れなかった。
なぜ、兵馬があんなおしつけがましいことをいうのか？　自分に向かって、そうする権利があるようなことを、ぬけぬけというのが腹立たしい上に、月姫さまのおぼし召しだといって、自分の口を封じてしまうやり方が、なおさら不快さをはげしいものにした。
なぜ、兵馬がそんなことをいうのか？　もし理由があるなら、父にあってそのことを第一に聞いてみねばならないし、是非ともああいう人が水町家へ出入りせぬよう、少なくとも、二度と自分に向かってあのようなロをきかぬよう、父からきびしく申しわたしてもらいたいと、雪絵は、しばらくそのことにとりつかれたように腹を立てていた。

どういうわけか、兵馬への不快さがつのるにつれて、響きの音に応じるように、ふっと雪絵の胸をふさいでくるものがあった。
進太郎のことである。
昨夜から旅立ちのことを思いわずらっている間、何か、物足りないようで、決意をにぶらすものがあるような気がしていたが、実は、それがあのお方のことだったのだと、いまさらのように、はっと気付いた雪絵であった。
進太郎を訪ねていったときには、それほどまでには思っていなかったのに、いつの間にやら、もう一度、あのお方にお会いしたいという思いが、濃く胸の片すみにしみついていたようで、それが、江戸をはなれて長旅に出ることを、しらずしらず、引きとめようとしていたらしい。
そうだ、できるなら、あのお方にもう一度お目にかかってから旅に出たいものだ。何か頼もしく、何か心温まる思いのするお方だ……。
と、ふっとそう思いたつと、もう、矢も盾もたまらず、会いに行きたい衝動にせきたてられる思いだったが、しかし、とりたててなんの用事もないのに、あつかましくそんなことができるわけのものではない。
雪絵は、何やらぼんやりしてしまって、つと縁先まで立ってゆくと、庭の向こうへじいっと目をやった。ちょうどその方角に進太郎の住まいのあることをしっている。
旅といってもただの旅ではない。いつ、この江戸へもどれることやら、場合によっては、この身にどんな恐ろしい運命がふりかかってくるかもしれない旅だと思えば、ますますその人に、会いたくてならぬ心のはげしくなるのが、われながらふしぎなくらいであった。
雪絵がぼんやり見やっている奥庭の、片すみにある木戸が、わずかにあいて、人の顔が中をのぞきこんだようである。
あどけない少女の顔だ。その顔が、そっと開いた木戸の陰から、きょときょと中をのぞきこ

んでいたが、ふと雪絵の姿を認めると、手をふりながらにっこり笑った。
「まあ、お静さんですね」
と、雪絵はやっと気がついたようにいいながら、思わず庭げたをはいて、小走りに庭へおりたっていた。
「お嬢さま、ごめんくださいまし。今、あちらでお聞きしましたら、こちらの木戸へ回れということでしたから……」
「よく、来てくれましたのね。さあ、あなた、こっちへ……よいのです。遠慮なく、さあいらっしゃい」
と、いう間ももどかしそうに、われから歩みよってゆく。
雪絵のひとみは、お静のうしろに、まるで進太郎の幻でも見ているような懐かしさをこめていた。
「この間は、わざわざおいでくださいまして、その上結構なお土産までちょうだいしまして、本当にありがとうございました。わたし、お礼にあがろう、あがろうと思いながらなんだか恥ずかしくて……今日は、思いきってお伺いしましたの。あのう、お嬢さま、わたしが畑に作りました青物を、ほんの少しばかりお勝手へおとどけいたしました。本当に、お恥ずかしいんですけれど……」
と、顔を赤らめながらいうお静を、雪絵は抱きかかえるようにして縁先までつれてきた。
「それはどうもありがとう。そんな心配してくださらないでよかったのに……でも、お静さん、よく来てくれましたね。明日でなくてよかったのです。明日だと、お目にかかれなかったでしょうに……」
「あら、どうしてでございます？」
「わたしね、急に旅に出ることになりました。しばらく、お静さんにもお会いできません」
「まあ、旅に？　明日おたちなさるのでございますか？」

お静は目を丸くした。
「ふしぎでございますわねお嬢さま。進太郎さまも、明日旅におたちになるのでございますよ」
「まあ、進太郎さまが？」
と、思わずいった雪絵の顔に、ほんのりと血の色が散った。
たった今しがたまで、その人のことを思いつづけていた心の中を、そっくりお静に見すかされたような気がしたからだ。
「進太郎お兄さまときたら、本当に気まぐれ坊やなんでございますよ。今朝になって、どうした訳か、急に旅に出るなんて……明日旅に立つなんておいい出しになるんですもの」
「それで、進太郎さまはどちらへ？」
「甲府へですって……」
「甲府？　甲府というと山梨の？」
「ええ、そうでございます」
「まあ、わたしも甲府へ旅立つのですよ」
「あら、あらッ！」
と、お静の目はいよいよ丸くなる。
「まあ、お嬢さまも甲府へ？」
「そうです。明日早々にここを出ます」
「まあ、まあ、まあ……驚いた」
と、お静は声をはずませて、
「それじゃア、わたし、一人ぼっちになってしまいます。いやだわ。わたし、お兄さまがなんといったって、もう、一緒についていくことにきめました。ねえ、お嬢さま。わたし、お兄さまに、ご一緒に連れていってくださるようお願いしたんですのよ。甲府の在に、お母さんの里があるのです。お祖母さんが、わたしの顔を見たいから、是非一度来いって、まえからいってきてるんです。お母さんの病気も大分よくなってますし、馬は裏のおじさんがあずかってくれて、それを使うかわりに、わたしの留守中、お母さんの面倒も見てくれるっていっているんです。お母さんも行っておいでとおっしゃるから、わたしお兄さまにお頼みしたのに、なんのかの

といって……でも、お嬢さまもおいでになるなら、わたし、かまうもんですか。お兄さまがなんとおっしゃったって、たって一緒についていっちゃうことにきめました。ねえ、お嬢さま、そうすれば、また向こうでお目にかかれますわね。まあ、うれしい！　甲府では、これから山ぶどうが沢山なるんですって……」

と、お静は一人ではしゃいでいる。

雪絵の胸は、時ならずはげしい鼓動をうっていた。きっと、顔も上気して赤らんでいただろう。

なんの目的でか、ただ、同じ日に同じ甲府へ向けて進太郎が旅立つと聞いただけで、まるで、それまで雪絵の胸をとざしていた暗いものが、一時にぬぐいさられてぱっと明るく日がさしこんできたような気がする。

同じ甲府へ旅立つと聞きながら、兵馬の場合にはうっとうしくおぞましいものさえ感じたのに、打って変わったようなこの気持ちの動きは、われながらふしぎなくらいであった。

「そうでしたか？　進太郎さまも、甲府へお旅立ちですか……」

と、雪絵の声はしらずしらず弾んでいた。

「わたしもです、お嬢さま。わたしも、ご一緒にまいります。もうこうなったら、何がなんでもお供させていただかねば承知できません」

「ほほほ、大変な勢いですこと……」

「お嬢さま、向こうではきっとお目にかかれますね。お会いくださいますね」

「さあ、どうでしょうか。でも、そうであったら、どんなに楽しいことでしょう」

「ああ、うれしい、うれしい。もうおいとまいたします。帰って、早く支度をしなくちゃア……」

と、何もしらないお静は、ただ無邪気にはしゃいで、そそくさと帰っていった。

あとに残った雪絵は、しばし、何かうっとりしたように空のかなたを見やりながら、上気したほおを秋風になぶらせていた。

雲の中に進太郎の幻がうかんでいる。笑っている。何かいっている……。

楽しいものが体のすみずみにまでしみわたって、ふわふわ雲にのって漂っているような心地であった。

と——

その雪絵が、はっとしてわれにかえったのは、どこからともなく出しぬけに、

「ふふふ……」

と、奇妙な含み笑いが、響いてくるのを耳にした瞬間であった。

「お嬢さま、雪絵さま。あの若侍が甲府へ旅立つのが、そんなにうれしいんでございますか？　え？　進太郎にほれましたね、お嬢さま？」

と、その声がいった。

一瞬、かあっと赤らんだ雪絵の顔は、次の瞬間みるみる青白んでけわしくなっていった。

「だれじゃ？　そういうのは何者です!?」

「お分かりになりませんかね？　この声にお聞き及びはございませんかえ？」

と、底に嘲笑をふくんだ男の声が不気味にいった。天井だろうか、床下だろうか、それともふすまをへだてた遠い向こうの部屋から響いてくるのだろうか。

「今の、お顔を真っ赤になさった様子じゃア、進太郎にほの字の筋は図星でござんすね。へへへ……ねえ、お嬢さま。おあいにくさまといいてえねえ。恋しい男だけが甲府に旅立つとはきまっちゃいねえのさ。いやな野郎もご一緒だ。あっしも、あした甲府へ旅立つぜ」

「うぬっ、何者じゃッ？　おのれ、どこにかくれている？」

「分からねえかねえ。いやな野郎さ。あなたの一番きらいな、恐ろしい野郎さ」

「あっ、青助、おのれ、青助ですねッ！」

そう叫んだ雪絵の声は怒りに震えていた。

「青助、のめのめとよくぞまいったな。もう、許さぬ、成敗する。出ておいでッ。おのれ、どこにいるのじゃッ」

「どこにいるのか、お探しなさいまし。その細腕で成敗するって？　うれしいことを言うじゃねえか。さあ、捕らえられるものなら捕らえてごらんなさいましッ」

「ひきょうな痴れ者めッ。出てこねば、人を呼びますよッ！」

「むだだからおよしなさいまし。とんだ人騒がせをして、お家の恥になるばかりさ。断っておきますがね、あっしを、ただの渡り中間と思うととんだ間違いだぜ。こう見えたって、その昔、関八州を騒がせた、乱波、すっぱのなれのはてなんだ。下手ア騒ぐとけがアするぜ」

せせら笑った声も、どこから響いてくるのかしかとは分からない。

「お嬢さま、おれア、この間から、ずうっとあなたのすぐそばにいて、あなたのすることなすことを、一部始終じいっと見ていたんですぜ。あの小生意気な進太郎という若僧に、あなたがどうやらぼうっときたことまで、この二つの目でちゃんと見抜いているんだ。

一緒に、甲府へ旅立つんですってね。うれしいでしょうねえ。だが、どっこい、そうあめえことはさせておかねえよ。おじゃまだろうが、おれもお供するんだ。あの晩、きっぱり約束したとおり、おれの女房になってもらいますぜ。

甲斐路の秋は、さぞいいだろうねえ。山深い森の中か、それとも野末の草木か、あなたがおれの女房になる、祝言の床にゃアことかかねえ」

「お黙りッ、青助。まだ、そのような雑言をはくかッ。さあ、そのロをふさいで、とっとと去れッ。二度とわたしの身近く姿を現せば、命はないものと覚悟しておいでッ」

「その、目じりをつりあげてきっとにらんだお顔が美しい。たまらねえんだよ、青助にゃア。

へいへい、去れといわれねえでも、今日はおとなしく去りますよ。先はなげえのさ。なにね、ほれた女に旅先での、抱き寝の楽しみをちょいとしゃべっておきたかっただけさ。ははは、とんだ酔狂な野郎でさア。その代わり、お嬢さま。断っとくが、進太郎だろうとだれだろうと、あなたに指一本でも触れるやつがあったら、その場をさらせずたたっ斬るからそう思ってください。お嬢さまは、だれにもやらねえ。おれの女だ。この青助の女房なんだ。嫁入り前の大事な体だ。風邪をひかねえようになさいまし。へへへ……じゃア、いずれ旅先でお目にかかりましょうや」

しゃべっていた声がとぎれると、間近いどこかで、ささささ……とかすかな風のそよぐような音を残したまま、青助の気配はふっつりと消えてしまった。

翌日、雪絵は、まるで暴風の中にもてあそばれる木の葉のような不安さに包まれながら江戸をたった。

一度、長安の屋敷へ上がって、その行列の中に加わったことはもちろんである。

雪絵ののった駕籠は、長安の駕籠のすぐうしろにすえられ、お梶の乗るそれなどはるかうしろにさがっている。しらない人は、長安のご内室であろうと想像したくらい、丁重な供回りであった。

進太郎の一行と、兵馬の一味、それに青助も、同じ日、同じ方角にむかって江戸をたったはずだが、それと思われる姿はどこにも見られなかった。

手首のない男

江戸をたつときは残暑のさなかだったが甲府はすでに秋であった。

ことに山路にふみ入ると秋の清涼さが肌にしみ入るようである。

水町三郎太は、鶏冠山の山懐に立って一息入

れながら、尾花の穂波をとおして紫にかすむ甲斐秩父の連山を懐かしげに見やっていた。

この辺りも、若いころ、主命を帯びて、隠密に忍び歩きしたことのある思い出の地だったからである。

ただ、同じ場所に立ち、同じ景観に目をやりながらも、三郎太の心境はまるで別だった。当時は、ひたすら主命をかしこみ、わき目もふらぬ御用いちずの旅だったが、今はそうでない。長安が、どのように御用の筋をふりかざしても、その底意に何かいやしい我欲、野心がひそんでいるとにらんでいる。主命であるが故に、やむをえずお受けした今度の新しい役目ではあるが、いまに見ろ、逆に長安の野心をあばきたてて一あわふかしてくれるからと、腹に一もつある三郎太であった。

甲府につくと、留守をあずかっている長安の用人笹塚黒太夫という一癖ありげな男から、

「ご苦労だが、すぐ、黒川金山へ出向いてもらいたい。このごろ、金鉱の産出が激減して長安さまはいたくご心痛のご様子でな了、このことは、もちろん、駿府の大御所さま（家康）のおぼし召しでもあるわけだ。黒川金山を見回って、きびしく出鉱を督励してもらいたいのでな」

と、早速の命令であった。

「では、早速、明日にも出立いたしましょう」

と、役目だから二つ返事で引きうける。

そのあと、黒太夫は声をひそませて、妙なことを話した。

「黒川にまいられたら、山室にとじこめてある鳥の目源三という男に会っていただきたい。こやつは、もと武田家の山目付をしておったというだけで、あとは詳しい素姓も分からん人物だが、是非会ってもらいたい」

「会って、どういたすのですか？」

と、三郎太も興味をひかれたように問いかえした。

「『朱書き一節』という竹製の枝折のことをご承知か？　武田信玄公が手ずから作られ、四郎勝頼公に与えられたと伝えられる品でな。そやつが……鳥の目源三と申すそやつが、どこでどう手に入れたか、その二枚を所持しているはずだという。いや、身にはつけておらん。どこかにかくしおおせたに違いない。すでに三年前からその山室にとじこめ拷問の数々を加えてもみたが、ついぞ口を割らん。石のように黙して何一つ語らんのじゃ」

「なぜ、それまでにして、そやつの口を割らせる必要があるのですか？」

「さあ、それはわしもしらん。長安さまのお差し金でな。いかなる儀牲をはらっても口を割らせいとのお言葉じゃ。代々の山目付が皆そやつにはてこずっている。お手前が、当地に見えた第一の御用はそのことにあると思ってくれ」

「代々の山目付がてこずったほどの男を、手前にもどうしようもないと思いますが」

「いや、そうでない。できるはずじゃ」

「なぜ？」

「源三が口癖のようにわめいている。わしの口を割りたくば、月姫さまゆかりの者をこれへよこせ……とな」

いいながら、黒太夫は意味ありげにやっと笑った。

三郎太は黒太夫の話をきいているうちに、なぜ自分を甲府山目付に引きだしたのか、長安の底意がおぼろげながら分かりかけてきたような気がした。

しかし、そんなそぶりはちらりとも見せず、落ちつきはらっていった。

「はて、ふしぎな話を伺いますな。月姫さまとやら、手前は一向に心当たりがござらんが、それは何者ですか？」

「いや、心当たりがなくばそれでよかろう。わしも、そやつが何者か一向にしらんでのう」

と、黒太夫は空とぼけて、

「とにかく、お手前の第一の勤務がそこにある。鳥の目源三に会って、どろをはかしてもらいたい」

「しかし、月姫さまとやらにゆかりの者がまいらんでは、口は割らんと申しているそうではございませんか。手前には、その御用はつとまりかねるかと存じますが……」

「いやいや、案ずるより産むがやすかろうよ。お手前なら、きっとうまくやる。うまくやってもらわんでは困る。うまくいかんと、ちと、まずいことになるでのう」

と、黒太夫は意味ありげにじろっと三郎太を見やった。

「まあ、まあ、とにかく、黒川へいかっしゃい。万事は、お手前の手中にある。源三を、生かすも殺すも自由にしてよろしい。ただ、どろをはかせてくれれば、きゃつの一命はお手前にあずける」

「では、早速、明日出発いたします」

三郎太はそういって、足を休める間もなしに黒川金山へ回った。

黒川金山は、大菩薩嶺の北方にそびえる鶏冠山の東側に発し、やがて丹波川に合流する黒川の谷沿いにある。

武田氏が甲州一円に覇をとなえていたころ、その強大な武力の裏づけであったおびただしい黄金の出所である金山は、甲州各地にあったはずだが、そのうち、ずば抜けて有力だったのがこの黒川谷の金山であって、当時はこの山奥の谷あいに千軒の家が軒をつらねていたとも伝えられている。

その黒川金山は、一説によると牛の形をしていて、武田氏の当時、わずかにその牛の片脚の部分が掘られたに過ぎなかったともいわれ、さてこそ、長安がいちはやく試掘の手をそめたのがここであった。

しかし、今日三郎太が見回った様子では、案に相違して思わしい出鉱がないらしい。

秋の山々を懐かしげに見渡していた三郎太は、やがて、

「山室はまだか？」

とふりむきながらいった。

うしろには、供の山目付が二人ついている。

「は……もうすぐでございます。あれなる森を出ますと、その先に番所が見えまする」

「貴公ら、山室の囚人に会ったことがあるか？」

「いいや、牢の格子戸越しに、ちらと見かけたことはございますが、近々と会ったことはございません。お奉行から特別の許可をうけた者以外、絶対に会うことはならぬきびしいおきてになっておりますので……」

「しかし、何かうわさは聞いているであろう？どのような男だ？」

「それが、うわさをすることすら禁じられておりますので……あの山室に囚人のいることすら、係の者しか存じてはおりませぬ。いかなる素姓の男か、かなりの老人で、それに左の手首がかけております」

「何？」

と、三郎太は思わずいった。

三郎太は黒太夫から山室の囚人に会えと指令をうけたとき、長安の奸策がちらっとのぞけたような気がしながら、やすやすといいなりにここまでのりこんできたのは、自分自身少なからぬ興味を感じたからである。

『朱書き一節』のことはうすうすしっている。兵馬からその一片も見せられたし、話もきいた。桜井進太郎という人物が、さらに他の一片をもっていることも聞きしっている。

ところが、山室の囚人は残りの二片をもっているというではないか。

そのことが、月姫に深いかかわりがあるということだけでもすててはおけないし、まして、長安の野心の正体をつきとめるには、『朱書き一節』の秘密をあきらかにしなければならないの

だと思いあたっている。

鳥の目源三という名に記憶はなかったが、今、左の手首がない男だと聞いて、はっと記憶によみがえってきたことがあった。

森をぬけて出ると、その陰に番屋がたっている。番士は四人。

前ぶれがあったとみえ、番士たちはそろって新任の目付支配役を出迎えた。

「山室はどこか？」

「そこの草むらの陰に入り口がございます。すぐ、お見回りになられますか？」

「うむ、源三に会わねばならん。案内してくれ」

「は、かしこまりました」

とかぎをもった一人が先に立った。

「山室と申しましても、かつて昔、金鉱を掘り進みました坑道のあとでございます。この辺りには、同じような古い掘りとり口が、いずれも草むらにかくれて点在しております」

いいながら、案内の男は生いしげった草むらをわけ、なるほど坑道口らしい岩壁の前に案内した。

入り口には厳重な格子戸をとりつけ、重い錠前がかかっている。

「われわれはいかがいたしましょうか？　お供いたしますか？」

「いいや、わし一人で会う。外で待っておれ」

「では、くれぐれもお気をつけくださいまし。坑道は十間の余もございます。源三は、いつもその奥の辺りにひそんでおりますが、思わぬ凶暴をはたらくかもしれませぬ。くれぐれもご用心を……」

と、いいながら、用意の提燈を三郎太に手渡した。

三郎太は、ただ一人、つかつかっと中へ入っていった。

坑道のあとだから、中は広くなり狭くなりして、くの字なりにつづいている。

三郎太は足をとめて提燈の灯をかかげた。

行きづまりの所に、むしろを敷いて一人の男が横たわっていた。衣類は古びて荒布のように裂け、髪もひげもぼうぼうと伸びるにまかせ、白髪でそれと察するほかは、年のほどもしかとは分からない。

むごたらしい三年の幽囚の痛苦が、その全身のすみずみにまでありありと見えているようであった。

男は、提燈の灯に気づいたか、目をうっすらとあけながら、やせおとろえた体をのろのろともたげた。

「また、来たな、長安の犬どもが……」

と、しわがれた声が坑道の中に陰々とこだまする。その男の、左の手首が付け根からかけていた。

「よせよせ、いくら来てもむだなことだ。しゃべってならぬことは死んでもしゃべりはせぬ。この鳥の目源三は、骨のとおった武田家の遺臣だと、帰って長安にそういうがいい。長安ごとき、山ざるではない。山ざるというのだぞ、長安を……山ざるといわれてもし怒ったらこういってやれ。仮にも人間の皮をかぶっているやつなら、かつてあれほどのご恩義をおうけした、武田家への節義も少しはわきまえているはずだ。さるではいたしかたないがのう、ははは……わしがそういったとそのまま伝えるのだ」

じろっと三郎太の方を見上げた目の光がすさまじい。

「あの、けだものめ。武田家の没落をよそに見て徳川家への忠勤ぶりはともかくとして、徳川をかさに着て、私腹をこやさんとする盗人根性がすさまじいわい。それも、その日その日の食に飢えるとなればまだしものこと、山ざるそのままにおびただしい数の側女をもてあそび、たらふく美食し、ありあまるほどの黄金を懐にねじこんで、まだ足らずして、この源三の口から、ありがたい呪文を吐かせてもそっとむさぼりとろうと飽くことない野心がすさまじいというの

だ。しゃべらんといったらしゃべらん。むだだッ。帰れッ」

歯をむいた憎悪の形相でわめきたてる男の顔を、三郎太はまじまじと見つめている。

「おぬし、このわしの顔に見覚えがないか？」

「何ッ!?」

「シ！　静かにさっしゃれ。戸口には人がいる。聞かれてならんこと故、低く話せ」

「何、何？」

「このわしの顔に見覚えがないかと聞いているのだ」

「だれだ？　そういうおぬしはだれだ？　いや、山室へやすやすとはいってくるやつは、長安の犬どものほかありえまい。犬に見覚えなどあろうはずがないわ」

「よく見い。じいっとこの顔を見い」

と、三郎太は戸口の方へ気を配りながら、提燈を己の顔へ向けてさしかける。

「遠い昔だ。まだ、甲斐一円が武田家の勢威のもとにあったころのことだ。まだ、思い出さぬか？」

「……」

「場所もここからほど遠からぬ大菩薩の峠近い森の中であった。追っ手におわれ、傷ついて、草むらの中に苦しみあえいでいる若い武士に出会った覚えはないか？」

「あっ！」

とその男の声が思わず走った。

「何、何？　なんという？　そのことをしっているおぬしはだれだッ？」

「よく、この顔を見い。その若侍とはわしのことだ。追っ手に山をとりまかれ、逃れるすべもなくあえいでいるとき、ふと出会ったのが左の手首のない武士であった。彼はそのまま、わしを抱いて道もない険しい密林の中をぬけ、大黒茂谷のとある岩陰にのがれて一夜をあかしながら、わしの傷の手あてをしてくれた上、翌日、道もない山中を案内して、無事に追っ手の重囲から脱出させてくれた」

「おうッ、では、あのときの若者が？」

「わしだ。徳川家の遠国目付として、隠密に甲斐一円を忍びあるいていた水町三郎太だ」

「おうそうか。おぬしがあのときの若侍であったか？」

と、源三の声は吐息をつくようであった。

「たしかにきいた。徳川の遠国目付。隠密の役目をもって甲斐一円を回っていたところ、武田家の警固の一団に追いつめられ、逃げ場を失ったといっていた」

「あれが、わしだ。あの若者がこのわしだ」

「うむ、思い出した。刻んだしわの数はふえていても、たしかにその顔に、昔の面影を思い出した。それにしても、よくわしのことを覚えていたのう」

「おぬしは、わしを救って逃がしてくれながら、いくら名前を問うても、ただ、武田の山目付といったばかりで、名乗ってはくれなんだ。しかし、左手首のかけていることが、すぐ、当時のことを思い出させてくれた」

「うむ、思い出す。当時のことを、次々と思い出す。用事があって小金沢から黒川金山へ山越しする途中、ぱったり出あった若者を、見るからに未来豊かな頼もしげな男と見てとった。敵中にありながら、悪びれず、徳川の遠国目付と名乗った態度もすがすがしく気に入った。甲斐の秘密をさぐる徳川の隠密とは分かっても、あの場合、わしとしてはああするほかはなかったのだ。ただ、懐中に忍ばせていた、甲斐一円の要害を、調べ記入した地図を焼きすてさせたのみで、逃がしてやったことも、生涯でただ一度の主家への不忠と、心でわびながら、しかし悔いてはいなかった。そうか、あのときの若侍か……うむ、思い出した。皆思い出した」

「あのとき、おぬしの情けがなくば、わしはこうして生きてはいまい。思うにつけて、その恩

義をわすれたことはなかった。いつか会うときあらばと、武田家の遺臣と聞けば近づいて、左手首のないご仁の安否をたずねたずねしていた。さっき、この山室に、左手首のない囚人がいるときいて、思わず胸おどらせてまいったが……源三どの、改めて礼を申し上げたい。あの折の、世の常ならぬお情けに、心から礼をのべさせてくれ」

「やめい、やめい。それはやめい。もう皆、過ぎさった古い昔の話にすぎん。わしに礼心など出すと、哀れみがわいて、おぬしの役目が果たせんぞ。おぬしが、長安の犬であることに変わりはなかろうからのう。老いさらばえて、明日の命もしれんわしのために、あたら壮年のおぬしの前途を枯らすはつまらん話だ」

と、源三の声が陰気に沈んでゆく。

「分かっている。おぬしは、このわしの口を割らせるために来たはずだ。『朱書き一節』のありかをしゃべれと責めにきたはずだ。それがおぬしの役目であろうが。さあ、役目をはたさっしゃい。つまらん義理など考えず、このわしを責めたてるがよい。いや、皮肉でいっているのではないぞ。大菩薩嶺で救った昔の若者と思えばこそ、ことさらにそうせいといっているのだ。しかし、ことわっておく。わしは口を割らんぞ。旧縁とそのこととは話がちがう。わしは、何者が来ようとも口は割らんぞ」

「いや、月姫さまのゆかりの者が来たときには……」

「そのとおり……」

と、源三は鋭い目でじろっと三郎太を見上げた。

「わしは月姫さまのために死をもってその秘密を守るのだ。それが、武田家以来わしの役目だ」

三郎太は何思ったか、つときびすをかえして坑道の中ごろ辺りまでもどってきた。そこで横穴がくの字なりに曲がっている。

岩壁に背をはりつけて外の気配をうかがうと、番士の侍たちはなんらの疑いもさしはさんではいない様子で、とびらの外におとなしく待っている。

もどってきた三郎太は、源三の前に腰をおろして、近々と顔をよせた。

「お察しのとおり、わしは、長安の指令をうけ、お身に『朱書き一節』のありかを吐かせるためここへのりこんできたに違いない。しかし、わしは、お身の口からあえてそれを聞き出そうとは思わない」

三郎太の声は、落ちつきはらって静かだった。

「しかし、ただ一つ聞きたいのは、長安が『朱書き一節』をさがし求めているのは、徳川のお家のためでもなく、役目の責任からでもなく、ただ私欲をみたしたい邪悪な野心にすぎんといわれたお身の言葉に、しかとした証拠があるのか？　いかなる理由でそう思うのか、それが聞きたいと思う」

「わし一人ではない。節義ある武田家の遺臣は一人残らずそれをしっているはずだ」

と、源三は落ちくぼんだ鋭い目に、はげしい憎悪をこめて吐き出すようにいった。

「お身はご存じないか？　武田信玄公のご末子、海野竜宝さまは、盲者でいらせられる故をもって、武田家滅亡の折も死をまぬがれたもうたが、そのご遺児顕了道快さまは、浮き世をすてて僧籍に入らせたまい、一向宗、長延寺の住職とおなりあそばされておられる。ところが、彼、大久保長安めは、その地位と権力を利用し、威嚇と巧言をもって道快さまご秘蔵の、武田家由緒の宝物をかすめとり、その品々を証拠の品じゃなどと称して、自ら新羅三郎の末裔、武田の直系と僭称しておるそうな。いやうわさだけではない。きゃつめは、その名も天下にかくれない武田家の定紋うった旗指ものをたてつらねて、天下狭しと往来しおる。

一介の猿楽師の小せがれに生まれた山ざるご

ときゃつめのこの体たらくは、ただ単になりあがり者の増長と笑いすててよいものか。彼長安が、長崎に渡来する異国のカピタンと手をむすび、徳川の天下を覆滅し、自ら天下に号令せんという野心を、ひそかに押し進めているなどとのうわさも、まんざら聞きずてにできんと思われる節がある。

三郎太どの、お身故話すのだが、『朱書き一節』は、信玄公お手ずから作りたもうて四郎勝頼公に賜り、勝頼公が終生はだ身から離したもうたことのない、いわば武田家の直系を表徴するにたる貴重な品だと思わっしゃい。しかも、事実その『朱書き一節』は、武田家の、かつて、ありし日の勢威を示すに足る遺産の所在を、ひそかに秘めているのだ。

彼長安が、いかに武田菱の旗指ものを押したてて自ら新羅三郎の後裔と僭称しようとも、世間が相手にせんであろう。彼が、『朱書き一節』を手に入れて、武田家の莫大な遺産を私するとが、つまりはきゃつの野心の後づけとなり、実質的に武田家の直系であることを天下に誇示する意味をもつものと思え。

しかし、そうは問屋がおろさんわい。武田家にも気骨ある遺臣が幾多ある。少なくとも、このわしの目の黒いうちは、断じて、そうはさせんのだ」

「天目山にて勝頼公がご最期のみぎり、その『朱書き一節』は混乱にまぎれ行方しれずになったが、その後、そのうち二枚が、土匪の手に渡り、その価値をしらぬ人間の手に売り渡されて転々としていることを耳にし、長い年月をかけ、苦心の末にやっと手に入れることができた。

このことは、武田家は滅びても甲州山目付としてのわしの役目を全うせよと仰せられる、亡き殿のご遺志のあらわれと推察し、命にかけて死守する覚悟をきめた。

長安はおろかなこと、だれがきてもそのありかはしゃべりはせん。三郎太、たとえ、お身に対しても断じていわんぞ。武田家のご遺産は、その『朱書き一節』とともに……わしの命と一緒に永遠にほうむり去るのだ」

いいきって、きっと口をむすんだその顔には、鬼気をおびた執念の深さがまざまざときざまれている。

「わしは何も尋ねようとは思わん。お身の固い意志をそのまま貫かせてさしあげたい」

と、三郎太はまたいった。

「『朱書き一節』のことは、うすうす知らぬでもないが、わしには興味のないことだ。まして、役目とはいえ、長安ごときの私腹をこやす手先になろうともつゆ思わん。しかし、おぬし、死ぬぞ。命はあるまいぞ。このままにすごしては、いつかはあたら山室の中で野垂れ死にするぞ」

「覚悟している。すでに、七十歳を越えたわしだ。せめても、武田家のご遺産を死守することに最後のわしのご奉公があるものと心得、死はとうに覚悟しているのだ」

「三年この山室にむなしくすごしていたのか？抜け穴を掘って逃れる手段を考えたことはないか？」

「ははは……おぬしは、この辺りの山のことをまるでしらん。その点長安の方がまだしも賢いといえるであろう。この辺りの堅固な岩盤は、道具を使っても掘りとることは容易でないに、わしが片手しかないこの素手で何ができるというのか。よしんば道具を用いても、この山を向こうへ掘りぬけるに幾十年かかると思う……いや、第一に、掘りとったおびただしい岩のかけらを、番士の目をくらましてどこへかくせというのか？」

「わしは、お身を助けたいのだ」

と、三郎太は熱っぽい目でじいっと老人を見つめた。

「わしは、さっきから、そのことを懸命に考えている。なんとかしてお身を助けたい」

「三郎太、その志はかたじけない。しかし、いらざることをすると、お身の一身に災厄がふりかかるぞ」

「お身を死なすことはならぬ。いや、かつて昔、お身がわしの一命をすくってくれた、その恩義によってお身を助けたいというのではない。この山室に幽閉されている者がだれであろうと、罪もなく、ただ長安の私欲のために一命をおとすことを見逃しにはできん。だれであろうと、わしは助けずにはおかぬ！」

「おぬし、まことにそう思うか？　ここにいるわしが、鳥の目源三でなくとも助けるとおいいやるのか？」

「わしは、山目付支配役じゃ。罪科もない男に、私利私欲から無法なことをしかける人物こそ糾弾せねばならぬ。理非はおのずから明らかだ。ご老人、ここからうまく脱出する手段はないか？」

「ある！」

と、源三は静かな声でいった。

「手段があるか？　ここからうまく逃れ出るよい工夫があるか？」

「このわしは、甲州の山々を渡りあるいて生涯をすごした男だ。甲州の山に関するかぎり、草木一本、一本のたたずまいから、かもしかの歩く道にまで通じている」

「お身のことだ。一歩、山室から脱出すれば、あとはどのようにも逃げのびられようが、しかし、この山室は十重二十重に監視されているのだぞ。山室の前には番屋があり、さらに、四六時中、付近の森の中を巡視の侍が見回っている。だれか一声呼びたてれば、一町とはなれぬ黒川谷の金山番所から、いくらでも人数が集まる手はずにもなっている。わしの力をもってしても、容易にお身を救い出す道がないと当惑しているに、この山室のとびらを破って、うまく逃げおおせることができるというのか？」

「おぬしに、もし、わしを助けてくれる意志があるならば、おぬしに迷惑をかけずここから抜け出る手段があるのだ」

「それを聞こう。すでに、かなり時をうつした。表の番士に感づかれてはならぬ。さあ、その手段というのを聞こう」

「おぬしは知るまいが、この辺りには、武田家当時掘りつくした廃坑のあとが数知れず残っている。その中の、ある種のものは、中が迷路のごとく分かれていて、よくよく事情に通じた者でなければ、踏み入ることもならぬし、踏み入ればもどることも容易ではない。ことに、ここから北の方一町余りのところにある、かつて十八番坑と呼ばれていたそれは、中が縦横に分岐しているばかりか、その一本の掘り口が、鶏冠山の思いもかけぬ裏手に抜けているはずだ。もし、天災をこうむって坑道に埋没した個所さえなくば、追っ手の目をかすめてそこを通りぬけることは、このわしにとって易々たることだ」

「うむ、分かった。それで？」

と、三郎太は乗り出すように耳を寄せた。

その耳元に源三がささやいている。三郎太の目が、きらきら光っているのは、源三の語る脱出の手段に、ようやく決意をかためた証拠であろう。

「では、決行する。源三どの、時は移せん。すぐ決行するが、その前に用意はいらぬか？」

「いいや、わしにいまさら用意などはない。しかし、おぬし、あとで後悔することはないか？　いや、思わぬ災厄がおぬしの身にふりかかるのではないか？」

「いいや、わしは、無法のやつらの手にかかって、思わぬ苦難に命をすりへらしている人間を一人、役目をもって救い出すだけだ。天地に向かって恥じるところはどこもない。わしのことに案じはいらぬ。さあ、これを進ぜよう。万一のときに役立つであろう」

と、三郎太は、小柄をぬきとって源三の手に

握らせた。
「遠い昔にふと施した情けが、今、この身に報いとなってもどってくる。当然死を覚悟していたこの山室から思いもかけず脱出して日の目を拝めるとは、ああ、まだ天道地におちずというものか。かたじけない。このことは忘れぬ。三郎太、恩に着るぞ」
と、源三はそのやせ細った片手で三郎太の手をしっかり握りかえした。
「無事に逃れてくれ。また、会うときもあるであろう」
「おう、また会いたいものだのう。今度こそ、天下晴れて、ゆっくり語りあいたいものだ」
「そのときまで、お互いに命を大事にしようではないか」
と、二人は手を握りあったまま、じいっと目を見合わせている。
三郎太は、つかつかっと坑道の戸口まで出ていった。
「どうなされましたか？」
と、番士たちが寄ってくる。
三郎太は石のような表情をしていた。
「囚人になわをうってひっ立ててこい」
「きゃつめ、乱暴でも働きましたのでございますか？」
「いいや、きゃつが自白したのだ」
と、むすっという。
「お手前方もうすうすは存じておろう。きゃつは、お上にとって是非とも明らかにせねばならん、ある重大な秘密を握っている」
「存じております。入れかわり立ちかわり、責めたててみましたが、三年間、がんとして口をつぐみ、石のように沈黙をつづけておりました」
「それを自白したのだ。どろを吐いたのだ」
「おう、それは！　死んでも口は割らんとあれほど頑強にこばみつづけておりましたものを、水町さま、どのような手段で？」

「これだ」
と、三郎太は腕をたたいてみせる。
「恐れ入りました。歴代のお目付衆が手をつくしてなんらのききめもございませんでしたものを……それはそれは、お手柄でございました」
「いや、まだ喜ぶのは早い。したたかな痴れ者ゆえ、苦しまぎれのうそを吐かんともかぎらぬ。きゃつの自白が真実かどうか、その目的の品物をかくしてあるという場所まで、きゃつに直々案内させて、しかと確かめねばならん」
「きゃつめにわざわざ案内させねばなりませんか？」
「ここから北方、一町余りの個所にある、ある廃坑の奥じゃという。迷路のような坑内は、案内なしではつきとめられまいといっている」
「そのようなことを申して、逃亡をたくらみおるのではございませんか？」
「うむ、その疑いはたぶんにある。きびしく縛りあげて、しかとなわじりをとれ。余の者は、その前後を固めて一瞬の油断もあるな」
「心得ております」
「しかし、その廃坑の中は立って歩けん所もあるらしい。胸、腰にきびしくなわうって、きゃつの片腕だけは自由にしておいてやれ」
「片腕を自由にしておくのでございますか？」
「狭い坑道をはいずって上り下りするには、腕の自由がなくば不可能であろう。やむをえん」
「かしこまりました」
と、ばらばらっと山室の奥へ走りこんでいった番士たちは、やがていわれたとおり、胸から腰へかけてくくりあげたなわじりを、しっかりつかんで源三を引ったててきた。
「これ、源三。今貴様が自白したことに、よも偽りはあるまいな」
と、三郎太がことさら冷たい声で詰問する。
「いまさら、偽りはいわん」
「『朱書き一節』は、その廃坑の奥に必ずかくしてあるのだな？　もし、偽りでもあらば容赦は

せんぞ」

「調べてみればすぐわかることだ。もし、偽りであったら、この素っ首を、ぶち落とすなりなんとでもしろ」

「よし、こやつの前後を固めろ。油断すな」

と叱咤するようにいって三郎太は歩き出した。

深い森がつづいている。

ほとんど人の立ち入ることもないとみえ、その下草も生い茂るにまかせて、見通しもきかないほどであった。

しかし、その間を抜けてゆく源三の足取りは、まるでわが家の庭を歩くように自信ありげだった。

一町余りもゆくと、森の茂みがいくらか薄くなって、やがて切りたったような岩壁の前へ行きあたった。見るからに古びた坑道が、半ば草むらに覆いかくされながら薄暗い口を開いている。

「ここか？」

と、三郎太が詰問するように口をひらいた。

「源三、たしかにここか？」

「わしが、命にかけて秘めかくした大事な品物のある場所だ。間違えてなろうことか」

と、源三は落ち着きはらってうそぶいてみせる。

三郎太は番士たちを見渡した。

「だれか、この廃坑をしっていた者はいないか？　中へ入ったことのある者はないか？」

「手前が、一度入ったことがございます」

と、番士の一人が答えた。

「中は極めて奥が深く、各所に迷路のような枝道がございますし、なるほど、秘密のかくし場所には絶好でございましょう」

「よしッ。これから中へ入る。中は狭かろうから、こやつを先頭に立てる。なわじりをとった者はなわ目を強くつかんで寸刻も油断すな。

そのあとから、わしが行く。残りの者はうしろに続いて、透き間を作るな。もしも、ちらとでも怪しい気配をみとめたら、容赦はいらん。即座にねじ伏せてしまえ。手に余ったら、脚一本、斬ってすてて苦しゅうないぞ」

「心得ております」

「源三、中へ入れッ」

となわじりをとった屈強な番士が、源三の肩を小突いた。

あとから、三郎太の指令どおりに一列になって続いてゆく。

すべては、三郎太が源三と打ち合わせ、番士たちを巧みに計ろうとする苦肉の筋書きであった。

なるほど、坑道の中は、左に右にうねうねと折り曲がり、広くなり狭くなり、ときにははってよじ登らねばならない場所もある。

たちまち光が絶えて、番士たちが手に手にかざしている提燈の灯影さえともすれば足元まで届かず、隊列も乱れがちになった。

「源三、まだか？」

と、三郎太はことさら声を大きくしていった。

「そうせくものではない。行くところまで行けば、黙っていても教える。もうすぐじゃ、その角を曲がると、その場所が見えてくる」

源三は、老いさらばえた男とも思えぬ早い足取りでその角をまがった。

地下水が流れこんでいるらしく左右の壁面をぬらした水が、路上にたまって、ともすれば滑って足をとられそうだ。

「見い。『朱書き一節』は、この枝道の奥に、壁面をえぐってかくしてある」

源三の指さしたのは、やっと人一人、身を斜めにして入れるほどの狭い横穴であった。

「その枝道は、たった二間の奥行しかない。そのつきあたりに、かくし場所がある」

「よしッ、入れ」

源三と、そのなわじりをとった男が中へ入り、

三郎太が穴の口をふさいだとたん、
「ぎゃッ！」
と、けたたましい悲鳴がすさまじく坑道にこだました。

一人ずつ、体を横にしなければ通れないほど狭い穴の口であった。
「どうしたかッ？　何事だッ？」
と、わめきながら、三郎太が狭い坑口をふさいで身もだえしてみせたのも、わざと手間どって、源三が追っ手からできるだけ遠のく時間を与えるためであった。
「うぬッ、や、やりゃアがったッ！　痴れ者、ま、待てッ！」
と、番士の声が苦悶をこらえてわめいている。
色めきたった一同が、やっとその坑道の中へおどりこんでいったときには、なわじりをとっていた番士が、行きづまりの奥の辺りに、朱にそまってのめり伏しているほか、源三の姿は煙のように消えさっていた。
「しっかりしろッ。どうしたかッ？　源三はどうしたのだッ？」
と、三郎太がその男を抱きおこしながら、耳元で叫んだ。
かくしもっていた小柄で、ねらいをすまして胸板をぐざっと一突きやられたらしい。
「は、計られました。……出しぬけに……む、無念ですッ」
と、番士はうめくようにいいながらも、虚空をかきむしっている。
「は、早くッ。その穴です。源、源三が逃げこんだのはその穴ですッ」
二間ばかりで行きどまりになっていると思ったその坑道の奥から、垂直に下へくだっているたて坑の口が見えた。
「よし、このわしが介抱する。皆、きゃつを追えッ。おのれ、まんまと計ってだましおったなッ。どうあっても、ひっとらえろッ。逃がしては申しわけがたたんぞッ。なんのたかが、老いぼれの足だわ。くそッ、追えッ」
と、三郎太は口ではげしく下知しながら、内心、おそらく源三はうまく逃げのびるだろうと考えている。
源三の話では、そのたて坑はすぐ三本の横穴に分かれ、さらにその先で幾本にも分岐しているという。
どれもこれも、やがて行きづまってあとへもどらねばならないが、その中のたった一本だけが、迷路のように鶏冠山のわき腹をくぐってはるかかなたへ通りぬけているのだ。
気負いたった番士たちは、なだれるようにたて坑の中へおどりこんでいったが、やがて、次次にもどってきては、どろまみれの顔をたて坑の口からのぞかせるのは、皆、その迷路にまよいこみ手もなく追いかえされてきた証拠であろう。
その連中を、
「何をためらっているッ！　早く追えッ。手を分けて、あくまで追えッ」
と、息つぐ暇もなく追いかえすのは、番士たちをこの坑内に封じておいて、表から源三の逃げ道をふさがせないための、計りに計った苦肉の策であった。
それよりも、三郎太は、手傷を負った番士の手当に必死だった。
いくら源三を助けるためとはいえ、この男一人死なしては心がすまない。
「しっかりせい。傷は急所をはずれている。いいか、死んではならんぞ」
と、耳元にささやく声も祈るようだったが、
「無念ですッ、水町さま。あいつめをひっ捕らえてください。あだをうってください。お、お願いですッ」
と、歯をくいしばっていうその声は次第に力なく弱ってゆく。

夜に入っても源三の行方探索は必死につづけられていた。しかし、いくら、人数を集めての大探索も、もはや間にあいはしないことは、三郎太がだれよりもよく知っている。

源三を助けることはできたが、その手にかかって番士が一人死んだ。菅村万作という若い男だった。

「無念です。源三をひっとらえて、あだをうってください」

と、苦しい息の下から、必死に訴えたその声が三郎太の耳の底にありありと残っている。

刺したのは源三だが、その小柄を与えたのは三郎太だ。まさか、そんなことは予期していなかったが、いわば、承知の上で殺させたのと同じことだという悔いが、三郎太の胸をはげしく責めている。

金山番所に安置した万作の死体のそばに、三郎太は終夜つきそって、せめてもの手向けに通夜をした。

「万作には身寄りがあるか？」

「はい、年老いた母が、甲府の在におるはずでございます」

「妻や子はないのか？」

「いいえ、親一人子一人だったと聞いておりますが……」

「そうか、不憫なことをしたのう」

と、しみじみいって、

「だれか、その母御のもとへ使いをやってくれぬか。些少だが、ここに江戸からの路用の金の残りがある。何かの足しに使ってくれるよう、これを老母のもとへ届けさせてくれ」

と、懐にあり合わせた金を残らずそろえて、さしだしたのは、何かを予期し覚悟をきめていたのかもしれない。

源三が逃亡したことは、ただちに急使をもって甲府へ知らされ、その翌朝早々には、早くも、笹塚黒太夫が配下の者をひきつれてのりこんできた。

「三郎太、えらいことをしてくれたの。これで、わしも長安さまからおとがめをうけることは必定じゃ、礼をいうぞ」

と、黒太夫は露骨な目つきでじろっと三郎太をにらんだ。

「申し訳ないことをいたしました。まったく、手前の不注意から、源三めにうまうまと計られました」

「何をいう。うまうまと計られたのはこのわしじゃよ。よくも、源三と共謀して、きゃつめを逃がしてくれたのう」

「これはまた、何を仰せられますやら……手前はじめ番士一同が、きゃつに巧みにはかられましたのは、番士からお聞きくださっても明らかなことでございます」

三郎太は落ちつきはらっていったが、

「黙れッ。わしの目をたぶらかせると思うかッ！」

と、わめいた黒太夫の顔はたちまち怒気に赤黒く変わっていた。

「これ、三郎太、おぬし、小柄をどうした？小柄が見えんようだの？」

「……」

「それ、返答ができまい。今しがた、そこの番士からの報告をきいたぞ。あの坑道が、鶏冠山の向こうへ抜けている出口に近く、二つに折れた血まみれな小柄が落ちていたそうな。見い、これだ。この小柄だッ。覚えがないといわさんぞ。うぬは、この小柄を源三にくれてやり、共謀して逃亡させたに違いないわッ。方々、こやつをひっくくれッ」

三郎太はもう何もいわなかった。とうから覚悟していたのか、水のように澄んだ姿で、ばらばらとおどりかかってくる男たちを静かに見つめていた。

甲斐の虫籠

甲府は、ながらく武田氏の本拠のあった町だ

が、その滅亡後、文禄三年になって浅野長政がこの地を領し、武田氏の居城跡から南方にはなれて鶴舞城を築き、その周辺に町家をうつした。

これが新しい甲府の城下町であって、それに対し、昔の町を古府とよんでいる。

関ガ原合戦の後には平岩親吉がここに移り、慶長八年、徳川義直に城のあるじが替わり、さらに大久保長安の支配下に入ってからは、甲州一円の金山開発の根拠地となり、あわせて佐渡から職人を移住させて金座をもうけるに至って町の発展は著しいものになった。

雪絵が長安の一行に加わって、鶴舞城についたのは八月末のことであった。

旅の間中、長安は、いつも雪絵をそばへひきつけておいて、手中の玉のようにちやほやともてなした。雪絵にとっては迷惑至極と思っても、まさか、それを振り切って断るわけにもいかない。

甲府についたら、すぐにもお暇が出るだろうと思っていたのに、鶴舞城に入っても、きらびやかに飾りつけた奥の一間をあてがわれてお許しが出ない。

「せめても、父に会いとうございます」

と、幾度となくくりかえしたが、長安は言を左右にして、うんとはいわない。

不吉なうわさが、ちらちらと雪絵の耳にも入ってきた。

三郎太が、何やら重罪をおかして、城中の牢獄にとじこめられているというのである。

父が江戸をたつときから、何か不吉な予感があっただけに、雪絵はぎょっとして色を失った。

「長安さま。このようなうわさを耳にいたしましたが、誠でございましょうか？　お願いでございます。一目なりとも、父に会わせていただきとうございます」

この甲府にきてしまっては、絶対の権力をもっている長安の、許可なくしては何一つできないから、雪絵は必死に願い出た。

「案じることはない。父御は、ちと……間違いがあって取り調べをうけているときくが……まあ、まあ、あなたはそのようなことを心配せず、ゆっくり旅の疲れを休めておられるがよい。秋の山々はまた格別じゃ。名所旧跡も多い。そのうち、わしが案内して甲斐の秋を心ゆくまで味わわせてとらせる」

と、長安は空とぼけていった。

「いいえ、何の罪科か存じませぬが、おとがめをうけております父をよそにして、遊山などとそのようなことは思いもよりませぬ。父のことを思っては、一夜もまんじりとはなりかねます。なにとぞ、一目なりと……」

「それほどに父に会いたいか？　いや、会わん方がよいと思うがのう。あなたのためを思えばこそいうのじゃが……」

と、長安は目を細めて雪絵を見つめている。

わなにかかった獲物のもだえ苦しむのを、じわりじわりと引き絞ってゆくときの猟師の目つきだった。

たとえわなとはしっていても、そういわれては、いよいよ不安の濃くなるのをどうしようもない。

「お願いでございます。是非、是非、一目なりと父に……」

「それほどいわれるなら、会わせんでもないが……あとで、わしを恨んでくれるなよ」

と、長安は目の中で、にやっと薄笑いした。

「雪絵どの、それほどの望みとあらば、父御に会わせぬでもないが、しかし、あとでわしをうらんでくれるなよ」

「決してお恨みなどいたしませぬ。父に、一目なりとお会わせくださいまし」

「いたしかたない。心は進まんが、雪絵どのにそれほどいわれて、わしに否といいきる力がない。これ、黒太夫を呼べ」

と、長安は黒太夫を呼びよせ、

「雪絵どのが、父御に会いたいといわれる。よしなにはからえ。心得ておろうが、父御の罪科のいかんにかかわらず、雪絵どのはわしの客人じゃ。粗略があってはならんぞ」

と、意味ありげに目配せして、そのまま、ついと座をたってしまった。

「では、雪絵どの。夜に入ってからお迎えにあがります。それまで、お部屋でお待ちくださるよう……」

黒太夫は冷たい顔をしていった。

「なぜ、夜まで待たねばなりませぬか？　なぜ、すぐ父に会えませぬか？」

「水町三郎太は虫籠に入っている各人です」

「え？　虫籠と仰せられますと？」

「ご城中にある土牢を、世間でそうよんでいます。その土牢に入った者は、虫籠にとじこめられた虫のように、鳴くだけ鳴いて、やがて羽根が千切れ、手足がもげ、むなしく息のたえるまで、絶えて生きては外へ出られぬと、世間でつけたあだ名のようです」

虫は鳴くために生きているのだが、甲斐の虫籠にとじこめられた人間は、泣くまいとしても泣かされる。どんな荒くれ男でも、夜な夜な、悲痛なうめき声をあげて泣き叫ぶと——それが、虫籠のあだ名のできた由来だが、黒太夫は、まさかそこまではいわない。

いわないけれども、とりすまして冷たい顔でしゃべっているその言葉の裏には、雪絵をぞっとさせるに十分な不気味さがかくれていた。

「父は、……父は、なぜ、そのような土牢などへとじこめられねばならぬのでしょうか？　父は、一体どのような罪を犯したのでしょうか」

と、身ぶるいしながら、せきこんできく雪絵を、黒太夫は横目でじろっと見やった。

「夜までお待ちください。いずれ、おわかりになるでしょう」

「一時も早く、会いとうございます。どうあっても、夜まで待たねばならないのでしょうか？」

「虫籠の各人には、何びとも会わせてならぬ定めがあるのです。殿のお言葉故に法をまげてお会わせはいたしますものの、人目については下へのしめしがつきません。夜までお待ちください」

と、黒太夫は冷然とつきはなした。

不安な暗示を与えておいて、じりじりと時をひきのばす。その間に、暗示が恐怖をよび、恐怖が疑惑をうんで、その後に来るものの衝撃を一段と効果のあるものにする。

つまりは、獲物をじわりじわりとわなのただ中へ追いこんでゆく、老獪な猟師のやり口と同じであった。

男まさりといわれた勝ち気な雪絵も、しらずしらずその手にかかって、夜を待つ間に、不安さと疑惑と恐怖とに、身のおきどころもないほど気がうわずってしまっていた。

約束どおり黒太夫が迎えにきた。

「みだりに声を出してはなりませぬ。そっと、手前のあとについておいでなさいまし」

と、雪絵を庭先から誘い出す。とたん、物陰から滑り出てきた彼の配下が五、六人、二人の周囲をぐるっと取り囲んだ。

城内の一部を厳重に仕切って、牢屋が一棟たっている。長安が、甲府の支配となってから新たに造られたものだ。

金山を経営し、黄金をとりあつかう仕事の性質から、その間にある者にとかくの間違いができやすい。そういう罪科に対し、長安の仮借しない方針がその牢獄の造りを見ても明らかなくらい厳しいものであった。

しかし、雪絵を案内する黒太夫は、黙ってその牢獄の前を通りすぎ、裏手へ回った。

裏手は森だった。その森の中に半ばかくれるようにして、築山のようにこんもりした低い丘がある。

近づくと、その築山の一部が垂直に削りおとされ、三寸角材を組んで作った厳重な格子戸が

とりつけてあった。
「ここが、甲斐の虫籠です」
と、黒太夫は冷然と指さした。
「ああっ、では、父はこのような所に？」
「さよう、三郎太はこの奥にとじこめられております。築山の真下を深くえぐって土牢が作ってあるわけでな。もっとも重い罪人のみ入れることになっているのです。たとえ、親を殺した者でも、ここへは入れません。ここに入る者は、それ以上の……天下覆滅の陰謀を企てた者とか、主殺しとか……二度と生かして娑婆へ出すことのならぬ者のみ入れることになっているのです」
ことさら落ち着きはらっていう声音は、雪絵の恐怖をいやが上にもかきたてるためのように意地悪く響いた。
「父にお会わせください。そのとびらをあけて、わたくしを中へお入れくださいましッ」
「約束故に、お会わせはいたします。しかし、この土牢の中へお入れすることはなりません」
「で、では、どうなさるのです？　どうして父にお会わせくださるのです？」
「雪絵どの、こちらへ……」
と、黒太夫はとりすまして、また歩き出した。
築山に沿って少し回ると、築山の一部の、ちょうど立った人の目の高さほどの所に、五、六寸ほどの、四角い穴があいているのが見えた。
周囲を石で組んで、まるでいぶり出しか何かのように、その穴は深く築山の下の方へのびている。
「これは、土牢の空気抜きであり、かつまた、唯一の明かり取りの窓でもあるのです。土牢の囚人が、いかに神通力をもっていても、絶対に破牢のできぬよう、あの出入り口の格子戸のほか、窓一つない牢の造りです。しかも、囚人の動静は、四六時中、この辺りを見回る番士たちによって、この風窓から一瞥して手にとるよう分かる仕組みになっているのです。雪絵どの、

中をのぞいてごらんなさい」
黒太夫にいわれて、雪絵は恐る恐るその小窓に顔を近づけた。
土牢の天井まで通じているというその小窓は、先広がりに開いているらしく、なるほど、深く地底へ掘りさげた十坪ほどもある土牢の中にあった。
土牢の中には、明々と灯がともっている。
不自然なほどの明るさは、雪絵に三郎太の姿をしかと見せるため、ことさらたくらんで灯の数をふやしたもののようであった。
中には、三つの人影があった。二人の番士と、それに、三郎太。その三郎太は、半身裸にむかれた姿を、まっ赤に血にそめてのめり伏していた。
もろはだぬぎになった三郎太は、土間に敷いた荒むしろの上へ、あぐらをかいて前のめりにうつむいている。
前のめりになっているのは、首にかけたなわをあぐらにくんだ両足首をくくったなわへくぐらせて力まかせに引きしぼってあるからだ。
両腕はうしろへねじあげて縛ってある。
雪絵はしるはずもないが、拷問のうちでももっとも苛酷なものの一つに数えられている海老責めという形であった。
無理やりにへし曲げられた体はそのままほうっておいても、脂汗を流し、目がくらみ、やがて呼吸が逼迫してきて失神してしまうという。
そばに突ったった番士が、その裸の背へ、力にまかせて青竹をひゅっとふりおろした。
三郎太の体が、がくん！　と衝撃をうけたようにはね上がりそうになる。
「う、う、ううっ！」
と、思わずうめいた声は、ぞっとするほどすさまじかった。一語も発すまいと、どんなに歯をかみしめ、こらえていても、その意志にかかわりなく歯の間をくぐってほとばしり出てく

る。

こらえているだけに、かえって五臓をひきさくようにすさまじかった。

この裸の背が、破れ裂けて血みどろになっているのは、その苛責がすでに数しれず繰り返されていることを物語っている。

見まいとしても、その光景は一瞥のうちに雪絵の目に映った。血のしたたるすみずみから、苦悶にさかだつ三郎太の髪の一筋一筋まで、無惨なほどあきらかに照らし出すほど、明々とした灯影であった。

勝ち気な雪絵も、思わず目をそむけてうしろへたじろいだ。

ぞっと、総身の毛穴が空にむかって逆立ち、目がくらみそうであった。

目をそむけても、ひゅっ！　と空を切って背をうつ青竹の音は聞こえてくる。

「うっ！　うう……」

父のうめき声は、雪絵の五臓をかきむしるようであった。

「や、やめてくださいましッ。あ、あのようなむごたらしい仕打ち……お願いです。おやめくださいまし」

雪絵はおびえたように周囲を見回したが、その身のぐるりを、ひたと取り囲んだ黒太夫とその配下たちは冷酷なくらい静かだった。

「なぜ、父があのような仕打ちをうけねばならないのでございますか？　お、おやめください。お願いですッ」

「やめるわけにはいきません」

黒太夫は冷然といった。

「な、なぜです？　なぜでございます」

「三郎太は、重大な咎人であり、しかも、お上の取り調べに対し反抗するしたたか者だからです」

「父は死にます。死んでしまいます」

「そうです。死ぬでしょう。あの拷問にかかって、五日と命の保った者はありません。三郎太は、すでに今宵で三日目ですからな」

「父は小身とはいえ、れっきとした旗本です。その父を、だれが……だれがあのようなことを……」

「だれが命じたとおいいなのですか？　だれでもありません。天下の法というものが命じたのです」

黒太夫のそぶりにはとりつく島もないようであった。

「武士には武士に対する作法があると伺っております。どのような罪があるにせよ、武士を責め問いにかけるのはよくよくのことだと承知しておりますのに……父は、な、なぜあのような目にあわねばならないのでございますか？　一体、父がどのような罪を犯したとおっしゃるのでございますかッ？」

と、雪絵は声をふるわせて詰めよったが、黒太夫は身じろぎ一つしなかった。

「おっしゃるとおり、よくよくのことだとご承知ください」

「そ、それを伺いとうございます。父の犯した罪とやらを伺いとうございますッ」

「三郎太は、主命にそむき、重罪人を逃亡させ、その上、配下の一人を手にかけるような大罪を犯したのです。つまりは、大公儀に対し弓をひきかねまじき反逆の罪を犯したのです」

「な、なんとおっしゃいますッ!?　父が……父が反逆の罪をッ？」

「そのとおりです。三郎太は長安さまのご命令により、その職分の故をもって鶏冠山の山室にとじこめてある、さる重罪人の取り調べにおもむきながら、そやつと通謀し、番士警固の者たちをたくみにたばかってそやつを逃亡させました。しかも、その際、ひそかに小柄をやつに与え、番士の一人を刺殺させたのです。三郎太自ら手にかけたと、まったく等しいことでした」

「まあ、本当に？　本当に父が？」

「れっきとした証拠のあがっていること故、疑いをさしはさむ余地もありません。しかも、それだけの大罪を犯しながら、だれかれをあざむき通し、われ一人、ぬけぬけと安泰をこいねがっている態度は、武士の風上にもおけん所業です。いさぎよく、罪に服し、一切を自白するなればともかく、それだけの証拠証人のそろっている事実を、しらぬ存ぜぬで押し通そうとする白々しさは、断じて許せぬものです。武士を拷問にかけるは作法のほかであると仰せであったが、それも三郎太自身の卑劣さが招いたやむをえぬこと、ご理解ください」

「で、でも、それは何か、訳があるのではございますまいか？　父が、それほどに知らぬといいはるのは、何かの事情があるのではございませぬか？」

「その事情を言えと、責め問うているのです。なんで、重大な囚人を逃がしたか、長安さまから下されたその役目の向きはどうであったのか、それを明らかに言えと責め問うているのです」

「それでも、父は申しませぬか？　そのことにもお答えなさらないのでございますか？」

「そうです。ただ、知らぬ存ぜぬの一点張り、あとはがんとして口をつぐんだまま沈黙を通しているのです」

「きっと、何か訳があるのでございます。わたくしを、父に直々お会わせくださいましッ。必ず、その訳を問いただします。お願いでございますッ」

「それはなりません。いかなる事情があっても、虫籠の中の咎人に会わせることはできません」

「父は……父は、死にます。きっと死にます」

「死ぬでしょう。やむをえません」

「ああっ、ど、どうしたらよろしいのでしょうか？」

「手段はありません。よしんば、三郎太が口を割って自白したとしても、しょせん、死罪はまぬがれますまい」

黒太夫は顔をそむけて、吐き出すようにいった。

いくら願っても三郎太に会うことはゆるされない。その周囲をとりかこんだ黒太夫の部下たちは、寸歩を動くことも自由にはさせなかった。

やがて、雪絵は、土牢のそばからひきはがされるようにして歩き出した。

歩き出しても、そのあとを追いかけるように、あの青竹のうなりと、父のうめき声がしつこく響いてくる。雪絵は、まるでわが身を責めさいなまれる思いで、耳を覆い、せき立てられる足元もよろめくようであった。

立ち出たときと同じように、庭先からこっそり奥の一間へ連れてこられたとき、雪絵は上へあがる気力もないように、ぐったり縁先へくずおれてしまった。

いくら気丈といっても、今見聞きしたありさまは乙女心にあまりにもいたましい。

母を亡くしてから、手塩にかけていつくしんでくれた父の慈愛が身にしみている。その三郎太の、目もそむけるようなむごたらしい姿は、雪絵の胸をずたずたに引き裂いた。

と――

配下の者を遠くさらせた黒太夫が、そっともどってきて、雪絵の耳元にささやきかけた。

「雪絵どの、長安さまにおすがりなさいませ」

「え？　な、なんとおっしゃいましたか？」

「三郎太を救う道はただ一つしかありません。もし、それが可能だとすれば、それは長安さまのお力にすがるしかありません」

「まあ！　長安さまにおすがりすれば、父の一命が助かるとおっしゃるのでございますか？」

「たぶん……」

と黒太夫は意味ありげに力をこめていう。

「長安さまは、この城のあるじでおいでです。つまりは、この国の法そのものでもおいでです。

長安さまにおできなさらぬことは、おそらくないはずと思うからです」
「きっとですか？　きっと、きっと？」
「長安さまのお気持ち一つです。あなたに、長安さまのお気持ちをお動かし申し上げる力がおありかどうか……それが、たった一つ残っている手段です」
「ど、どのように、長安さまにおすがり申せばよろしいのでしょう。どのように？」
「手前には分からんことですな。ただ、長安さまのほか、三郎太の一命を自由にできるものはないと申し上げるだけのことです」
と、吹っこむようにささやいて、黒太夫は、つときびすをかえし消えさっていた。
死の迫ったむごたらしい三郎太の運命を、散散に見せつけておいて、その上で、それを救うというたった一つの手段をほのめかす。
それが、わなにかかった獲物を、身動きならず引き絞ってゆく、たくらんだ手段だとは、気のうわずっている雪絵には悟る余裕もなかった。
さし迫った父のことを思えば、手段をえらんでいる暇はない。どんな恥でも忍ぶつもりで、
「長安さまにお目通り願いとうございます。夜中、勝手ながら、是非是非お取りはからいくださいませ」
と、部屋付きの侍女に申し入れる声もせきにせいていた。
長安は、とうからそれを予期して待っていたはずである。
しかし、そんな気配はおくびにも見せず、
「なんぞ、火急な用事とか？　雪絵どの、遠慮はいらん。さアさア、入られい」
と、ふすま近く手をついた雪絵に、さも好意を丸出しにしたというような微笑を投げかけた。
「雪絵どの、顔色が悪いようじゃが……気分がすぐれんのか？　医師にみせたらどうか？　無理をしてはならんぞ」
と、長安は雪絵を見つめながら、親切らしくいう。
雪絵は、くちびるをかんだまま顔を伏せていた。
「父に会いましてございます」
「おう、さようか？　父御に会われたか……なるほど、それで……」
と、長安は合点しながら、
「顔色のすぐれんわけものみこめた。さもあろう。土牢にとじこめられた父御の姿を見て、楽しかるべきはずはない。それ故、わしは、あなたを父御に会わせようとしなかったのじゃ。同じことでも、会わねば軽かろうあなたの心痛を、さこそと思えばこそ引きとめたのじゃが……雪絵どの、わしを恨んでくれまいぞ」
そういう声も、さもいたましげに沈んでくる。
「父は、お役目にそむき、大事な咎人を逃がしたばかりか、小柄を与え、そのため下役のお方をあやめるような罪を犯したとか伺いましてございます」
「そのとおりじゃ。わしが、父御をこの甲州に送りよこしたのも、その咎人――鳥の目源三と申す不逞の人物を詰問させ、彼の口を割らせることによって大きな功を立て、かつまた、父御が大公儀に対し二心なく、忠節いちずであることを自ら明らかにさせたいためであったのじゃ。しかも、父御なれば、必ず源三の口を割らせうるという、確信をもったればこその取りはからいであったが……わしの志と違って、思わぬ結果をまねいたのは、まことに遺憾至極と思っている。父御は、わしの志をしってか知らずでか、源三を逃亡させ、部下の命まであやめることをしでかしてくれた。しかも、歴然たる証拠証人のそろっている中で、頑強に口をつぐんで潔くしてくれん」
「長安さま、お言葉返しをいたすようで恐れ入

りますが、父がそれほどの罪を犯しながら、口をつぐんでおりますのは、何か事情があるのではございますまいか？　あれほどの父のことでございます。ご恩義深い大公儀に対し奉り、むざむざ反逆の罪など犯すはずはございませぬ。きっと、きっと、何かわけがあるのでございます」

「それよ、雪絵どの。良きにつけあしきにつけ、せめて口を開いて、あからさまに罪に服せばまだしも、知らぬ存ぜぬと白々しくいい張って潔くせぬことが係の者どもの心証をいたく悪くしているようじゃ。わしとしては、雪絵どのの父御のこと故、できるかぎり善意をもって取りはからわんとは思っても、もう、事ここに至ってはいたし方ないのう」

と、長安はさも絶望的に投げ出すようにいう。

雪絵は青白い顔をあげると、恥を忍んで訴えるようにいった。

「お願いでございます。長安さま、お力にすがりとうございますッ」

しかし、長安は聞こえぬふりをして、つとわきを向く。

「わしの案じているのは、父御一人の罪ではすむまいということじゃ。このまま事が表向きになれば、水町家はもちろん、お取りつぶしになるであろう。わしとして、まことにつらいことじゃが、あなたや弟御まで、おそらくそのままにはすむまいのう……」

「お願いでございます。お力にすがりとうございます。せめて、しばらくのご猶予を許されて、父に、身のあかしを立てさせとうございます。父がゆえなく、そのような大罪を犯したとは思われませぬ。何かの間違いか、でなければ、きっと、何かの深い考えあってのことと存じます。その上で、父の罪は罪として、どのようなご処刑もお恨みと存じませぬ。せめて、しばらくのご猶予を……お、お願いでございます」

勝ち気な雪絵は、いまだかつて、こんなにも頭をさげひれ伏して哀願したことは一度もなかった。まして、虫の好かない長安に、これほど弱みを見せることは、胸の煮えかえるような屈辱ではあったが、しかし、今の雪絵にはそうするより道がない。

「困るのう、それは困る」

と、長安はまゆをしかめる。

「雪絵どのから、それほどまでにいわれては、わしとしてはいかなることでもかなえてさしあげたいが、いや、そればかりは困るのじゃ。もはや、わしの力でもどうしようもない。雪絵どの、お気の毒だが、あきらめてくれ。いや、悪く思わんでくだされよ」

「で、でも……長安さまなれば父の命をお救いくださるであろう……長安さまは、この国において、おできにならぬことはないと、そうおっしゃるお方がございます。お、お願いでございますッ」

「何ッ？　だれがそのようなことを申したか？　不埒なことを申すやつがあるものじゃのう」

と、ことさら苦々しげに苦笑して、

「それは、わしが、命令を下しさえすれば、父御は罪のいかんにかかわらず、許しはなたれもするであろう。わしに、その力がないとは申さん。しかし、雪絵どの、思うてもみよ。そうすることは、わしが、自らの手によって、自ら定めた法を破るというものじゃぞ。一国を支配する大事な役目をもつ身として、それで法のしめしがつくであろうか。しかも、父御の罪は重い。もし、そのようなことをして、まかり間違えば、わしの身分地位にも大きな傷がつく。雪絵どの、あなたは、それをしもなお、わしにそうせいといわれるのか？」

「で、でも、長安さま。三郎太は、わたくしにとり、たった一人の父でございます。せめて、数日はご猶予なりと……お、お願いでございます」

「いや、それは、あなたのおすがりようがまずいのです」

いいながら、黒太夫は上目づかいにちらっと雪絵を流し見た。

「雪絵どの。念のため申しあげるが、三郎太の処刑は明後日に迫っておりますぞ」

「ええっ、な、なんとおっしゃいますッ？　明後日？　明後日、父はご処刑を受けるのでございますかッ？」

「他言はならぬことですが、あまりにお気の毒で、つい申し上げる気になりました。三郎太の自白のいかんにかかわらず、明後日の未明、処刑が行われる予定です。場所は、ご城外の広場、獄門にふされて、首は三日間さらされるはずです」

「それは誠でございますかッ？　笹塚さま、それは本当に？」

「すでに、きまっていることで、いたしかたありません」

「処刑されれば、事は公になります。水町家のお取りつぶしはもちろんのこと、弟御やあなたのお身もただではすみますまい。そうなっては、たとえ、長安さまのお力をもってしても、どうなるものでもございません。さあ、一時も早く、長安さまのお力に……」

「ああ、どうしたらよいのでしょうか？　長安さまのお力にすがれと申されても、わ、わたくしの力には及びません」

「そのようなことはないはずです。あなたなれば、長安さまのお心をお動かしするのはたやすいことです」

「どうすればよいのです？　教えてくださいまし。お願いです。教えてくださいましッ」

「お考えにならねばいけません。あなたご自身でお考えなさいまし」

「それが……分かりません。長安さまは、とりつく島もないよう、だめじゃとすげなく仰せになりました」

「それは、あなたの申し上げようがわるかったのです。長安さまは、かつて、雪絵どのを奥方さまに……とさえ、ご希望なされたことがあるはずです。お分かりですか？」

「ええっ？　なんとおっしゃいましたか？」

「そこをよくお考えなさいまし。それほどにあなたを愛しておいでになる長安さまです。あなたのお考え一つで、お心はどのようにも動かせましょう」

「まっ！　で、では、あなたは、わたくしに操を売れとおっしゃるのですかッ！」

顔色を変えた雪絵は、思わずきっとなって、叱咤するようにいった。

屈辱に体が震え、憤怒のまなじりがすさまじくつりあがっている。

「いや、操を売れなどと、そのようなことは申

りません」

黒太夫はことさら沈んだ声で、かんでふくめるようにささやきかける。

し上げません」

「いいえ、そうです。父の命を枷にして、この身を長安さまの前に投げ出せよと申しているのです。わたくし、やせても枯れても、水町三郎太の娘です。た、たとえ、どのようなことがあろうとも、操をひきかえに人さまのお情けを買おうなどとは……あ、あまりと申せば、お言葉がすぎましょう！」

「お静かに！　手前はそのようなこと申しあげた覚えはありません。三郎太の一命のために、ご自身よくお考えくださいと申したまでです。三郎太の処刑が、明後日の未明に迫っていると申したまでです。お気にさわったらお許しください。では……」

と、一礼して、落ち着きはらって去ってゆく。

全身をやきつくような憤怒と屈辱に、真っ青に青ざめて身を震わせていた雪絵は、やがて、その憤怒が冷めてゆくにつれ、みるみるはげしい絶望感に襲われて、その場へ崩れるように突っ伏してしまった。

今こそ、どうにもならない恐ろしいわなの中におちこんだことを、つくづく思いしらされたからである。

それがわなだと悟ったのは女の直感であった。

はじめから、長安がこのとおりの筋書きをかいていたのかどうかは分からないが、おそかれ早かれ、似通った運命が、自分たち親子の上にふりかかってきたに違いなかったのだと、雪絵は、今になって、はじめて長安のやり口が分かった気がした。

きらいぬいていた女を、わなにおとして思いをとげようとする、そのひきょうさが、何にもまして虫酸が走るように不快である。

力をもった男たちの、女に対する貪婪な欲望のとげ方が、日常茶飯事として黙認されている時代ではあったが、こうしたやり方が、雪絵に

は、なんとしても我慢がならない。

たとえ命にかけても、だれが長安などに！

と、はげしい嫌悪が憤怒になって、胸の底から突きあげてくる。

しかし、わなと悟れば悟るほど、それが容易ならざるわなだということも、いまさらのように思いしらされた。

父の処刑が明後日に迫っている。うそではない。冷酷な彼らは、きっと、約束どおりそれをやってのけるだろう。

みすみす、目の前に、父や弟の命を賭けて責めたてるわなであった。わなと悟ればなおさらに、父を死なせてはならぬと思う。

といって、雪絵に何ができたであろうか。

父の命を助ける道は、一つしかないぞといい聞かせながら、父の命をじりじりと縮めてゆく。無念とは思っても、父の命を助けるのは、その一つしかない手段を承知するよりほかはない。

これが、江戸での出来事なら、なんとかほかに手段も考えられないわけではない。しかし、甲府にあっては、すべてが長安の味方であった。

ああ、進太郎さまは、どこにおいでだろう？

絶望に打ちのめされた雪絵は、まるで神に救いを求めるように、その人のことを思った。

たしかに、自分たちのあとを追ってこの甲州へ来ているはずである。せめて、あのお方でもおそばにいてくださったら、どんなに力になっていただけるだろうに……。

そうは思ったが、どこにいるともしれない進太郎に、この警戒の厳しい城内から連絡しよう手段もなかった。

いや、よしんば、進太郎に連絡することができたとしても、この厳しい警戒を冒して、あのお方に何ができるであろうか。

とつおいつ、思案すればするほど、絶望が深くなってゆく。

いっそ、長安の前に、この体を投げ出してしまおうか、とふっと思った。

もちろん、死ぬ気である。長安に身をまかせ、父を救い出した暁には、長安を刺して、自分も死のうという覚悟である。

しかし、それがうまくいくであろうか。あの、長安が、そんな甘い手にうかうかと乗るであろうか。

ああ、どうしたらいいのであろう……。

と、雪絵は、思い迫って胸も張り裂けそうであった。

「雪絵さま……」

と、ふすま越しに、忍びやかに声をかけた者があった。

「雪絵さま、ご内密に申し上げたいことが……」

いいながら、人目をはばかるようにして、そっと入ってきたのはお梶であった。

雪絵もお梶のことはしっている。

泉野兵馬の妹として、一度お茶の水の屋敷へたずねてきたこともあったし、雪絵の今度の甲府への旅立ちにも、折々、人目を避けてはそっと姿を現して、何かと勇気づけてくれた人であった。

なぜか、虫の好かない兵馬にくらべて、お梶のことは、優しい良い人だと、雪絵も好意をもっている。

「雪絵さま、ご事情はよく存じあげております。でも、決して勇気をお落としあそばしてはなりませぬ。おそば近く、お味方もおることでございます。少なくとも、わたくしと兄兵馬とは、命にかけてお味方申し上げておりまする」

お梶はそばへくると、思いやつれた雪絵の顔を、いたましげに見やりながら、声を忍ばせていった。

「ありがとうございます、お梶さま。でも、父の処刑が明後日に迫っているのです。どうしたらよろしいのか、わたくし……」

「はい、そのことは、わたくしも聞いております。お父君が、どのような罪をお犯しあそばしたのかは存じませぬが、雪絵さま、しっかりなさいませ。その実、長安さまは、そのことに枷して、あなたさまを……失礼ながら、あなたさまに対するよこしまな思いを、とげようとなさっていらっしゃるのでございますよ」

「しっております。長安さまが作りあげた、恐ろしいわなだとは、よく存じております」

「負けてはなりません。決して、負けてはなりません」

と、お梶は声をはげまして、

「実は、そのことについて、昼ごろ、兄の兵馬から、内密の書面がまいりました」

「え、兵馬さまから?」

「はい。兄や、彦七さまたちも、雪絵さまのお身をお案じ申しあげ、こっそり、この甲府にまいっているようでございます。兄たちも三郎太さまのことをよく承知し、いろいろ苦心しているらしゅうございます」

「そうでしたか。兵馬さまや彦七どのが、それほどまでに、案じていてくださったのですか……」

「それにつき、兄からわたくしに、是非一度、雪絵さまにお目にかかり、お話し申し上げねばならぬことがある。手引せよと、そのように申しよこしましたので……雪絵さま、恐れ入りますが、ご縁先まで、そっとお出まし願いとうございます。庭先まで、兄が忍び寄っているはずでございます」

「まあ、そうでしたか? 兵馬さまが……」

「是非、お声をおかけあそばしてくださいませ。兄は、必死の思いで、その庭先まで忍んでおりますほどに……きっと、よい知恵をもっておりますと存じます。雪絵さま、さあ、ご縁先まで……」

お梶にうながされて、雪絵は、思わず小走りに縁先まで来た。

何か虫の好かない男と思っていた兵馬だが、それまで自分の身を案じて、危険を冒して会い

にきてくれた好意は無にはできない。まして、わらをもつかみたい今の雪絵であった。

「おう、雪絵どの。おつつがなく……お元気で、兵馬、何よりも心うれしく存じます」

と、近くの濃い草むらの陰から、兵馬の忍びやかな声がもれてきた。

姿の見えないのは、人目を恐れる用心からであったろう。

「兄上さま、どこにおいでですか？　あたりに人目はございません。もそっとお近くお寄りなされませ」

と、お梶が兵馬の所在をたしかめるように、草むらの辺りをすかし見ながらささやいたが、やみの中の声がしっ！　と制した。

「お梶、声をたてるな。ただ、黙って聞け。当家には、いの字というあだ名の油断のならぬ忍者が見張っている。どこにかくれた人目があるかもしれん。雪絵どのも、悟られぬようさりげなくおふるまいください」

姿を見せぬ兵馬の声は、やっと聞きとれるほどに低かった。

「雪絵どの、父君のことはすべて存じあげております。しかし、くれぐれもお気落としなさいますな。ご心痛のほどはお察ししますが、お味方のあることをお忘れないように……口はばったい申しようながら、この兵馬をはじめ、彦七とその一味が着々と事を運んでおります。もしものときは、月姫さまのお助けをかりる手段もございます」

「そ、それほどまでに、皆さまで、父のことをお案じくださるのでございますか。兵馬さま、父になり代わって、皆さまに、心から……本当に心からお礼申し上げとうございます。でも……父を救う手段はございましょうか？」

雪絵の声はすがりつくようであった。

「それにつき、是非一度、あなたにお目にかかってお力をかりねばならぬと苦心しておりまし

た」

「わたくしの力で及びますことならば、どのようなことなりとも……兵馬さま、是非是非、お申しつけくださいまし」

「まず、明後日に迫った父君のご処刑を、ここしばらくでも引きのばさねばなりません。第二……あの甲斐の虫籠とよばれた城内の土牢は、外からもってしては到底破ることは不可能なのです。何かの手段をめぐらして、半日一日でも、父君を土牢のそとへ……できうべくんば、城内までお連れ出しいたさねばなりません」

「そのようなことができるのでございましょうか？」

「今しがた、笹塚黒太夫が、これにて雪絵どのをそそのかすように語っていた一部始終を盗み聞いておりましたが、あれこそ、天来の妙策です。雪絵どの、彼らの言葉に乗って、彼らの期待するようになされませ。彼らのわなをそれと承知して、黙ってそれにお従いなされませ」

「ええっ。な、なんと仰せられるのですか？　わたくしに、長安さまの……」

「さようです、彼の望むがままに、奥方さまになりと、お側女になりと、喜んで体をさしあげますとお申し出なされませ」

「わ、わたくしに、あの長安さまの閨へ入れとおっしゃるのですか？」

「もちろん、策略です。よく、お聞きください、雪絵どの。長安めに身をおまかせになる条件として、父君の釈放をお申し出になるのです。黒太夫のあの口ぶりでは、必ず、易々として聞きとどけられることでしょう。少なくとも、死罪はまぬがれて江戸送りになることと思います」

「で、では、父を救うためには、どうしても、この身を犠牲にせねばならぬと仰せなのですか？」

「いや、お待ちください。雪絵どのを、あの山ざるめの生贄などに、どうしておさせ申してよいものですか。そのようなこと、この兵馬の目の黒いうちは、絶対に！」

兵馬は吐き出すように鋭くいいすてた。

「長安のわなに、うまうまかかったと見せるのも、つまりは苦肉の策略です。父君が一歩城外へ立ちいでられさえすればしめたもの、二度と長安の手へもどしはいたしませぬ。安全な地へお移し申し、死守いたします」

「それからどうなるのでございますか？　わたくしは、どうすればよいのでございますか？」

「父君のお姿が、城外へ去るのをしかとその目でお見送りなさるまでは、いかなことがあろうとも、そのお体に長安の指一本も、絶対に触れさせぬと固くご主張なさるのです。長安も、よも、それまでは待てぬとは申しますまい」

「は、はい、分かりました。で、それから？」

「それ以後は、手前におまかせください。手前を信じて、じっとお待ちください。山ざるめに、あなたのお体へ指一本触れさせはいたしませぬ。神かけて……命にかけて、お身に危険の迫る以前に、必ずお救い出しいたし、父君のもとへお連れします。すでに、その手はずもととのっているのです。お分かりですか？　この兵馬をご信頼くださいますか？」

「はい、分かりました。よく分かりました。お力にすがります。ご恩に着ます」

わらをもつかみたい今の場合に、たとえ相手が兵馬であっても、雪絵にはそういうより外に道はなかった。

「お梶、心得てもおろうが、油断すな。命にかけて雪絵どのをお守りせよ」

兵馬がいった。

「はい、心得ております」

「もしものときは命をすてても、長安の手をさえぎるのだ。わしが雪絵どののお身近く、忍びよるまで時をかせぐのだ」

「ご安心ください。とうから覚悟はできております」

「よし……」

と、いいかけて、兵馬の声がぷっつりととぎれた。

庭のどこかで、梢をわたる風の音が鳴っている。

「もし、兄上……兄上さま」

「しいッ……」

と兵馬の声がきびしく制した。

「この庭先にだれかいる。たしかに、だれかひそんでいるやつがある」

「えっ？」

「油断すな。この城中には、いの字という恐ろしいやつがいるのだ。どこに目を光らせ、耳をそばだてているかもしれぬ。くれぐれも油断すな」

では……と一声残したまま、草むらの底をはうように、兵馬の気配は次第に遠ざかっていった。

あとには、森閑たる静けさが立ちこめた。

兵馬は、庭先にだれかがひそんでいるといったが、いくら耳をすましてもそれらしい気配はなかった。

お梶は雪絵の手をとって部屋の中へ引き入れ、障子をしめた。

とった手をそのまま、ぐっと力をこめ、

「勇気をお出しなされませ。どうぞ、わたくしたち兄妹をお信じくださいませ。そして、どうぞ、兄が申しましたとおり……」

と、はげますように熱をこめていった。

「はい。もう、わたくしの決心もきまりました。皆さまのお力にすがらせていただきます」

雪絵も、その手を握りかえしながら深くうなずいてみせた。

だが、二人は気づかなかったが、そのころ、庭先を音もなく向こうへ横切ってゆく人影があった。黒頭巾の忍び姿、やみよりも濃いその影は、やがて、長安の居間近くまでくると、

「長安さま、いの字でございます」

と、含み声でいいながら、くつ脱ぎ近く、つ

とひざまずいた。

長安は鼓をうっていた。

西国のさる大名が、何かのことでひそかに長安の助力を請いたいといって、はるばるこの甲府まで使者をよこし、その手土産と称していていった品である。

作者は分からないが、古作の名品でその大名の秘蔵と伝えられる鼓であった。

長安にとっては猿楽は、もともと家業ではあったが、鼓をうっても名手として自他ともに許している。

「長安さま……いの字でございます。お目通り願わしく……」

と、また、庭先の方から、忍びやかな声がもれてきたが、長安は見向きもせず、鼓をうちつづけている。

さすがにうわさの高い名器であった。自ら打ちながら、その音にほれぼれと耳をすましているような長安の姿であった。

——あの吝嗇者めが、とうとう、たまりかねてこの鼓を手ばなしおったな……。

ざまを見ろとあざ笑いたい気持ちが、ことさら鼓の音を快く聞かせているようである。

日ごろから、自分のことを成り上がり者といって侮蔑しているような徒輩から、彼らがもっとも大事にしているものを強引にとりあげて楽しむ癖がある。

それを所有したという欲よりは、彼らを屈服させる己の力を信じ、それを誇示したいという方が本当であった。

鼓の音は高く澄み、それを打つ手は正しく見事であった。ほれぼれと、心を吸われたように打ちつづけている。

かなりたってから、長安は、鼓を手にしたまま、つと立って縁先へ出た。

「いの字……」

と、いきなりいった。

「首尾よくしたか？　命じたとおり事を運んだか？」

「は、仰せのとおりに……」

と、さっきからくつ脱ぎの向こうにひざまずいていた黒い影は、そのままの姿勢を崩さずうやうやしくいった。特徴のある、低い、含み声である。

「泉野兵馬は、お梶の手引で雪絵に会ったのじゃな？」

「は、何者にも気づかれず、縁先近くにて雪絵どのに会いましてございます。そうせいとのご命令故、そのとおりに運ばせましてございます」

「うむ、それで？」

「兵馬は、三郎太を助けるためには、殿の御意に従うと見せかけるよりほかに手段はない。三郎太を城外までつれ出せば、三郎太を救うは易易たることである故、そうせいと申しました。しかも、三郎太を救い出した直後、雪絵どのにも救いの手をのべる故、心迷わず、殿の御意に従うよう申し上げよと、さよう申しました」

「よし……」

と、長安は表情も動かさずにいった。

「それでよい、すべては筋書きのまま運んでいる」

「殿、兵馬のほかに彦七の一党、また、桜井進太郎の一味もご当地に潜入しております。雪絵どのを、むざむざと彼らの手にお渡しになるおつもりでございますか？」

「たわけが！」

長安は冷然といった。

「雪絵はわしが思いをかけた女じゃ。雪絵が、進んでわしの側女になると申し出たそのときから、わしの女にする。だれにも渡さぬ」

「たとえほれた女でも、手込めにしたとあっては男がたつまい。ましてや、雪絵はれっきとした旗本の娘じゃ。しかも、月姫の血筋をひくといわれている由緒ありげな女じゃ。ただ腕ずく

で手込めにしてはあとがうるさかろう。それより、雪絵の口から、進んでわしの閨に入りたいといい出させるのじゃ。

仮に、それが一時のいいのがれであり、心にもないうそであろうとも、わしの知らんことだわ。女が望みどおりに、閨に入れて妻にする。一度、夫婦と名前がつき、筋が通れば、たとえ腕ずくで抱いてねようと、そこはそれ、男女の道、だれはばかるところもあるまいが……」

長安は、言ったまま、植え込みのかなたにかすかに光っている灯影を見つめていた。その灯の辺りに雪絵の居間がある。

「仮にそれが、一時のがれのうそであろうとも、わしの妻にも側女にも、喜んでなろうといい出した言葉の責任は雪絵が負わねばなるまい。女というものは、どれほどきらっている男でも、一度肌を許せば一度の情をうつすものじゃ。二夜は二夜の、三夜は三夜の、情をしらずしらずに移し深めて、いつしか、予供を産み、そのまま二人ない男として愛さずにいられなくなる。それが女の本能、女の運命というものなのじゃ。つまりは、それが女の正体なのじゃよ」

「おそれながら……」

と、いの字は平伏したままいった。

「殿ほどのお方さまが、ただ一人の女のためにそれほどの策をめぐらし、ご苦心あそばすご心中が分かりかねます。雪絵どのをどれほどにお愛しあそばされますかは存じませぬが、これほどまでに深く計って、妻にあそばされるご心中を不思議とさえ存じあげます」

「いの字、貴様にも分からんか？　それがふしぎか？」

「は、ご無礼な申し上げようながら……」

「雪絵は、月姫の血をひく女じゃぞ。わしの妻にするということは、わしの子孫に、さらにその血を伝えることじゃ。甲斐の山ざるめとわしのことをあざ笑いおる徒輩に、二度とうしろ指ささせぬことになるのじゃ。いや、そのときこそ、名実ともに、わが大久保家は、新羅三郎の後裔、甲州の名門武田の直系と誇示してはばからぬようになるのじゃ。

しかも、いの字、雪絵が継承すべきあらゆる名誉と富、月姫の遺産、武田家の遺産は、黙っていてもおのずからわしの手中におちると思わんか。

雪絵がわしの妻となった以上、もはや、何者の力をもってしても……月姫自身でさえも、そのわしの野望をさえぎることはならんのじゃぞ。

とうから、雪絵をわしの妻にと望んでいた真意はここにある。今こそ申すが、いかに女にほれたとはいえ、ただ、閨のなぐさみにのみ、乳臭い小娘に、これほどの執心を示しこれほどの苦心をはらっていたと思うのか？　雪絵はわしの妻にする。いかなる犠牲をはらってもそうさせずにはおかぬ」

長安は昂然としていいきると、やおら、鼓を打ちならしながら、足調子をとって部屋の中へ消えてゆく。

いの字は、頭巾の陰から、その姿をじいっと見送っていた。奇妙なくらい、冷たい目の光であった。

霧　魔

高い櫓の武者窓から見おろす甲斐の山々は、まだ、薄明の中にしっとりと眠っていた。

山国のせいか、この季節になると毎朝のように狭霧がかかって、日の昇るにつれて晴れてゆくのが例になっているが、それがすっきり晴れ上がらぬと、そのまま雲をよんで雨に変わることもある。

雪絵は武者窓にひたと身をよせて、ほのかに煙る紫紺の霧をじいっと見おろしていた。

その視線がくぎ付けになっている辺りに、ひときわくっきりと濃い森がある。森の茂りと、

「お側女の末になりと……お、お加えいただけますれば、し、幸せと存じまする」

あえぎあえぎ、それだけいうにも必死だった。

そのあと、どんな言葉のやりとりがあったか、それさえはっきりとは意識にない。

「しかとそうか？　雪絵どの、あなたは、本心から、しかとそう申されるのか？」

と、長安は二度三度、くぎをうつようにくりかえしたあげく、

「われながら笑止じゃが、わしはそなたに恋をした。この身にとって、生涯に二度ない心からの恋をした。側女などにはせぬ、妻にめとる。天下晴れて、祝言の杯ごとをかわし、あなたを大久保長安の正室に迎える」

と、あたりにはべる侍女たちに、聞こえよがしに公然といった。

「安心さっしゃい、雪絵どの。あなたにとって父御である三郎太は、わしにとってもまた義父じゃ。悪うはせぬ。望みどおり、明早朝、甲府をたって江戸へ向かわしょう。あれだけのことを起こした当人故に、甲府へおいては問題もあろう故、江戸の自宅にひきこもらせ、しばらくしたなら、またこの甲府へよびよせることにしよう。よいよい、わが妻のためとあらば、どのようなこともする。この地位や名誉を賭しても必ず悪うはせぬ。したが、よいのう。今日からは、あなたはわしの妻じゃぞ。しかと、異存はないのう」

長安の一語一語は、まるで巣にかかった餌食にからみつく蜘蛛の糸のように、雪絵をじわりじわりしめつけた。

兵馬との約束はあったが、はたして、うまく救い出しにきてくれるかどうか。

何か、最後まで長安にはかられたという恐ろしさがひしひしと身に迫ったが、今となっては、ただただ、父の救われることをじいっと見守るよりほかはない。

「時刻じゃ」

と、うしろに立った長安がいった。

「雪絵どの、まもなく父御の姿が見えよう。あの森の辺りを見守っておられよ」

淡く霧のよどんでいる森陰の辺りに一団の人影が現れた。しかとは分からぬが、なわ打った囚人を間にはさんだ番士の一隊らしいと知る。

その一団は、建物の間をめぐって、櫓の真下辺りまできて、ふと足をとめた。

そこまでくると、雪絵の立っていた場所からは真下だし、あたりに建物の影もなく暁の薄明をまともに受けているので、その一人一人の姿まで明らかに識別できた。

番士の間にはさまれていた囚人は、たしかに父三郎太その人であった。

わざと、雪絵に確認させるためにその場所を選んだのか、立ちどまった番士の中の一人が、ゆっくりと三郎太のなわを解いている。

三郎太が番士に向かって何か詰問したらしい

が雪絵には聞こえない。おそらく、その突然の釈放を怪しんで理由を問いただしていたのだろう。

もし、三郎太がその事情を知ったら、たとえ、やむをえない場合の苦肉の策とはいえ、雪絵が、心にもない長安に身をまかせるのを条件にして、自分の罪が帳消しにされたという卑劣な取り引きを、どんなに激怒するだろうか。

雪絵はいまさらのように父の怒りが恐ろしく、思わず窓から身をひいた。

しかし、三郎太は、とうとう雪絵には気がつかず番士にうながされるままに城門の方へ去っていった。

その方角には霧が濃くかかっている。城門からさらに外へ……その一団は、次第に淡い影になり、やがて霧の中へとけこむように消えさっていった。

「雪絵どの、見られたか?」

と、うしろに立った長安がいった。

「あなたの望みどおり、すべて、とどこおりなく取りはからわせた。どうじゃ、異存はなかろうな?」

「ありがとう存じます」

雪絵はうつむいたまま答えた。青ざめた顔には、一つの難事をなしとげたときの、ほっとした安堵と新たに身に迫っている恐怖におののくものが、入りまじって陰を作っていた。

「もう気にかかることはないのじゃな? 思い残すことはあるまいな?」

「は、はい……」

「それでよい。わしも安堵した。三郎太は江戸へ送って、しばらく謹慎させた上、しかるべき時期に改めて必ず重い役にひきたてる。誓って悪いようにはせん。心安らかにまかせておけ。ああっ快い、今朝はわしにとって生涯での喜ばしい日じゃ。雪絵どの、これへお座りあれ」

長安は、いいながら、うしろにひかえていた侍女に目配せした。

とうから用意させてあったのであろう、素早く酒器が運ばれてくる。

「雪絵どの、杯をとらそう」

長安はまず、自らほした杯を、おもむろに雪絵にさした。

「祝言は改めて行う。大久保長安が、妻をめとるにふさわしいはればれとした式にしようぞ。しかし、それはいそがぬ。今は、仮の杯じゃ。父御の無事な姿を祝い、江戸へつつがない旅を祈っての、心ばかりの祝いの酒じゃ。受けてくれ」

雪絵はいやとはいえない。

「ちょうだいいたします」

と、その苦い苦い杯の酒を、目をつむってのみほした。

長安は、じいっとそれを見つめていたが、やがて、

「めでたい日じゃ」

と、一言いい残して出ていった。

雪絵は、一人残って武者窓の前にたっていた。父の立ち去った方角をじいっと見つめている。

濃い霧であった。

いつの間にか、日がのぼりかけて、室には明るい光があったが、しかし、常ならばとうにうすれてゆく霧が、日の光をさえぎっている。

何か、不安さが去らなかった。いや、まるで今朝の霧と同じように、不安なものが、胸の中へ刻一刻と立ちこめてくるようである。

父のことではない。何か、妙に虫が知らせるような予感がわだかまっていた。

兵馬は約束どおり、この身を救い出しにきてくれるであろうか。わらにもすがる思いで、易易としてその言葉を信じたが、それが容易ならざることだとは、時がたつにつれ、はっきりとしてきた。

どうやってこの厳しい城内の見張りをかすめ

てこの身を救い出すというのであろうか？

なぜだか、兵馬という男は虫が好かない。ぬぐいきれない不信がまといついている。もし、同じことを、進太郎というあのお人のお口から聞いたのなら、一も二もなく信じきって、安らかな気持ちでいられるであろうに……と、雪絵は、ふっと、ふしぎな自分の心の中をのぞき見たような気がした。

もし、救いの手が間にあわねば、この身はどうなるのか？

もしものときは、死ぬ覚悟をきめている。もしも、長安の指先が、ちらりとでも、この肌にふれたときは、わたしの死ぬときだと思いつめている。

霧はいよいよ濃くたちこめてきて、高殿の武者窓から、中へも流れるように吹きこんできた。うっとうしい。何かめまいのようなものを覚え、胸がおされるように重苦しかった。慣れない酒を飲んだためかもしれない。

侍女が三人、そっと入ってきて片すみに座った。

それさえ、雪絵は気がつかないように、窓の前に立ちつくしている。その姿を、流れこんでくる霧が濃く包んでいた。

遠くを見つめているそのひとみが、いつの間にかどんより曇ってきた。立ちこめた霧が、まるで魔物のような力で、上からぐいぐいのしかかってくるような錯覚を覚える。

奇妙な眠気であった。胸苦しさやめまいが、いつの間にか眠気に変わって、まるで、雪絵の意識をぐいぐいと、井戸の底へひきずりこんでゆくように思われる。

雪絵は、突然、いいようもない不安さに襲われたように、愕然としてふりむいた。しかし、それが、はっきり意識の中に残った最後のものであったようである。

よろめきながら、窓の縁につかまり、そのまま、下に崩れるように座った。

侍女たちは、じいっとその姿を見守っていた。

そして、雪絵が、畳の上へ突っ伏して、身じろぎもしなくなってから、急に立ち上がって、小走りにそのそばへよっていった。何が起こるのか、とうからちゃんと予期していたというそぶりであった。

二人が、左右から、雪絵の両手をつかんで抱きおこし、一人がうしろへ、ひたと付き添って、そのまま、その部屋の戸口までできた。

「まっ、皆さん、お待ちなさいッ」

と、出しぬけにその前へたったのはお梶であった。

よほど急いで走ってきたとみえ、はげしく息をはずませていた。

「お待ちなさいッ。あなたがた、何をなさるのです？　雪絵さまをどこへお連れなさるのですかッ？」

立ちはだかったお梶が、せきこみながら詰問した。

「あちらへ……ご寝所へ、でございます」

と、侍女たちは口ごもる。

「ご寝所とは、雪絵さまのお部屋ですか」

「……」

「雪絵さまのお部屋なら、わたくしがお連れします。あなたがたはおひきとりください」

「いいえ、雪絵さまのお部屋へではございませぬ。奥の、ご寝所へ……」

お梶のけんまくにたじろぎながら、侍女たちはしぶしぶといった。

「何？　なんとおっしゃいましたか？　奥の？　奥のッ？　奥のご寝所とは、すりゃ、お殿さまのご寝所のことですかッ？」

「このような所におやすみなされてはお風邪を召しますでございましょう。いそいで、ご寝所へお連れ申せとお言葉でございます」

「いいえ、いけませぬ。そのようなこと、わたくしがさせませぬ」

お梶はおろおろしながら呼びかけたが、雪絵は、聞こえたのか聞こえないのか、びくっとわずかに動かしかけた首を、そのまま、がっくり下へ落としてこんこんと眠りつづけている。深い眠りであった。ただごととは思われない。

「わたくし、お殿さまに申し上げてきます。お願いです。それまで、しばらくお待ちくださいまし。どうか、しばらくここで待っていてくださいまし」

叫ぶようにいいすてると、お梶は夢中で階下へ走りおりていった。いつにもなく、すそをけ乱して走りこんできたお梶を、長安は居間に座したまま、

「ほほう、お梶か。どうしたのじゃ？」

と、薄笑いを含んだ目でさりげなくふりかえった。

「お殿さま、雪絵さまのことにつき、お願いにあがりましてございます。お願いでございます。あのお方を、もうしばらく、そっと一人にしておいて差し上げてくださいましッ」

「なんのことかと思うたら、雪絵どののことか。そっと一人にしておけというが、なんぞ不都合なことでも起こったか？」

「お腰元衆が、お殿さまのご寝所へ、雪絵さまをお連れすると申して、今しがた……」

「待て、お梶。それなら、わしの命じたことじゃ。夫が妻を寝所へ招くに不審はあるまい。時刻もまだ黎明を過ぎて間もない。早起きして疲れた故、わしは一眠りする。そなたも下がって休むがよい」

「いいえ、お殿さま、そ、それはなりませぬ」

「何ッ、ならぬ？　わしに向かって、ならぬと指図するのか？　ははは、そなたやくのじゃな？」

長安は意地悪くにやりと笑った。

「やくのか、梶。日ごろ、石のように冷たいそなたにも、嫉妬の火をもやすことがあるとは面白いのう」

ははは……と笑いすてて立とうとする長安を、

「しばらくお殿さま、しばらく」

と、お梶は必死にひきとめる。

前後不覚の眠りにおちた雪絵が、長安の閨に運ばれたら、何が起こるかは知れている。兵馬の救いの手が伸びるまで、なんとしてでも時をかせいで待たねばならないと、長安のすそにとりすがった指先には必死の思いがこもっていた。

「お情けないことを仰せられまする。梶は、嫉妬などから申し上げるのではございませぬ。わたくしは、とるに足らないこのような女、雪絵さまは奥さまになりあそばすお方でいらせられます。なんで、嫉妬などいたしましょう」

「嫉妬でなくばそれでよい。その手をはなせ」

「いいえ、しばらく……お殿さま、あまりと申せばごひきょうではございませぬか。ご身分高

「でも、お殿さまのお言葉でございます。お言葉に従わぬわけにはまいりませぬ」

「よい。わたくしが、お殿さまにそう申し上げます。お許しを願いますから、雪絵さまを奥へお連れしてはなりませぬ」

「いいえ、お梶さま。わたくしどもは、お殿さまのお言葉に従わねばなりませぬ。そこをおどきくださいまし。おくれては、お怒りが恐ろしゅうございます」

「どうしても、わたくしのいうことをきいてくださらないのですか？　このようにお頼みしているのに、聞き入れてはくださらないのですか？」

「で、でも……お殿さまのお言葉でございます。ご命令でございます」

と、お梶を押しのけて雪絵を連れ出そうとする。

「雪絵さま、雪絵さまッ！　しっかりあそばしてくださいまし。もし、雪絵さまッ！」

い、お殿さまほどのお方のなされることとも思われませぬ」
「何、ひきょう？　聞きずてならんことをいう、何がひきょうじゃ？」
「梶は存じております。お殿さまは、ご酒に眠り薬をまぜて雪絵さまにお勧めあそばされました」
「何かと思うたらそのことか。ははは……悪いか、梶？　それがわるいか！」
「眠り薬をしいられて、雪絵さまは前後不覚でおいであそばします。そ、その雪絵さまを……」
「祝言の杯事こそすませぬがすでにわしの妻となった女じゃ。夫婦の間で、どのようなことが起ころうと、何を天下にはばかることがある」
「いいえ、いえ。お殿さまは、女心というものをご存じあそばしませぬ。どのように愛しあい、たとえ夫婦の誓いをかわした間柄とは申せ、女が自由をうばわれ、意識を失ったその間に、もしそのようなことをなされましたら、おそらくお恨みこそすれ、なんで喜びなどいたしましょう。百年の恋も一日にさめるたとえのとおり、その心の傷が終生つきまとって、決してお幸せとはなれますまい。
お殿さま。お願いでございます。お殿さまご自身のおんためにも、また雪絵さまのおんためにも、そ、それだけはおやめくださいまし。奥さまでいらせられます。ご夫婦でいらせられます。それ故にこそ、晴れて、だればばからぬお姿でおめでたい契りをあそばしませ。お願いでございます。せめて、雪絵さまのお眠りがおさめあそばしますまで……」
「梶……」
と、長安はじろっとお梶を見おろした。
「さらばいうが、一昨夜、そなたの兄兵馬が、雪絵どのの部屋近く忍びよって、何やら入れ知恵をいたしおったのう」
「ええっ！」
「わしが、それを知らんと思うか。父三郎太の

助命を請うて、その姿が城門外に消えるのを待ち、兵馬が雪絵どのを救い出してこの城中から逃走することやら、笑止な策略をめぐらしおったのう。どうじゃ!?」
「あっ、そ、それは……」
と、いったまま、お梶は絶句した。たちまち顔から血の気がひいてゆく。
「兵馬を手引して、雪絵どのに会わせたのは、梶、その方じゃぞ」
と、長安は、ぎらぎら光る目で真っ向からお梶を凝視している。
「わしは、そなたの兄兵馬が、呂宋屋彦七の一味であり、かつまた、雪絵どのの後ろ盾であることも、もとよりよく承知している。そなたがわしの側女になったのも、彼らのための諜者の役目をはたすためであることも存じている。すべてを存じながら、あえて、そなたをそば近く召しつこうているのも、それだけの覚悟と用意をもつからじゃ。
そもそも、彼らに何ができようぞ。わしは、そなたにも兄兵馬にも、好きなようにさせておく。しかし、わしが何も知らんと思うは大きな誤りじゃぞ。
わしは、一昨夜のこともよく存じている。兵馬が雪絵どのに何を語らい、なんとそそのかしたかもよく存じている。存じながらに、易々として彼らの望みのまま、三郎太を許して城外に放ちやったのもつまりはそれだけの覚悟と用意があればこそじゃ。
そなたは、雪絵どのを、わしの手のそまらぬ生娘のままにしておき、兄兵馬の救いを待ちたい所存であろうが。それが、兵馬の語った策略であろうが。
わしは、それを存じている。いや、兵馬ばかりではない。雪絵どのの背後には、まだほかにも後ろ盾と自称する徒輩が幾らもいる。わしは、そやつらが、苦しまぎれの手をうつ以前になす

べきことをなすまでじゃ。
雪絵どのは、自らの口から誓ってわしの妻となった。その妻を、わしは名実ともにわしの妻にするのじゃ。
眠り薬を盛ったをひきょうと申すのか？　何が、ひきょうか？　わしは、雪絵どのを安らかに、そのロから誓ったとおり、わしの妻にしてつかわすまでじゃ。意識があっては、むしろ、苦しみもだえることも多かろう。
いらざる無益な苦しみあがきはさせとうない。安らかに……何一つ知らぬ間に、苦しい垣を越えせる。眠りからさめて、名実ともに、わしの妻になりおおせたと知ったとき、雪絵どのがわしを恨み、心に傷を作ると申すのか？
それもやむをえまい。しかし、意識あるままに、わしの閨へ運ばれるよりは、その苦しみははるかに軽く、その傷もまた浅くすむであろう。女心とはそういうものじゃぞ。分かったか、梶。まだ、申すことがあるか？」
お梶の顔色は死人のようであった。
長安という男が、自分らの手には、到底おえない恐ろしい人物だったという思いが、いまさらのようにひしひしと胸に迫ってくる。
もはや、尋常では雪絵を助ける手段がなかった。
もしものときは、そなたの一命にかえても、雪絵どのをお守りせよ——と、くりかえしささやいた兄の言葉が忽然と意識の底にうかび上がってくる。
思わず指先を懐へ滑らせたのは、そこに忍ばせてある懐剣を握るためであった。
とたん、
「ははは……」
と、長安は高声で笑った。
「梶よ、そなた、このわしが斬れるつもりか？　む、どうじゃ、しかと斬れるか？」
じろっと一瞥をくれて、もう一度、高らかに笑いすてると、長安は、そのまま大股に部屋か

ら出ていってしまった。
山地には雨が降り出したらしく、濃霧は甲斐盆地を一面に覆って、いよいよ重くたれこめてきた。
明けそめた天地はふたたび暗くたそがれ、城中にともった灯影が急に明るさを増したようである。
雪絵はこんこんと眠っていた。長安の寝所の、きらびやかな夜具の中であった。
麻薬に強いられた眠りは深く、そのくせ、何か無意識のうちに抵抗させるものでもあるのか、ときどき低くうめき声をあげもだえるようにかすかに肩先を動かしたりする。
侍女たちにここへ運びこまれ、帯をといて衣類をぬがされ、白綸子の夜のものに替えられたことも、もちろん意識にはなかった。
しかし、雪絵の中にある何かがそれに抵抗している。いわば、奇妙な夢うつつの状態というのだろうか、肉体も神経も眠ってはいたが、雪絵の中にある何かが目覚めていて、それに抵抗しもだえつづけていたのである。
寝所に入ってきた長安は、そのそばに立って、しばらくじいっと雪絵の寝姿を凝視していた。
この男は好色だといわれている。あくことない情欲は、一時に数人、いや十数人の愛妾に向けられてもなお足りないようだとさえ嘲笑するものもいる。
しかし、今そこに立った長安の目は、かならずしも好色漢のそれではなかった。
冷たい、しっかりした理性に光っている。
この男にとって、雪絵の肉体をわがものにすることは、単なる情欲のためではなく、なんびとも予測しがたいような野心の貫徹を目的とすることにあるからだ。
つまりは、彼が金山を開発し、前代未聞といわれるほどの多量の黄金を産出し、そのことによって今日の地位と名声を手に入れたに等し

い、一つの事業につながることであった。
「……」
長安は無言のまま、背後の侍女へ目配せした。
さっと侍女が寄ってきて、左右から手をのばし、長安の着替えを手伝う。
「やすむ。今日はなんびとにも会わんぞ」
いいすてて、さがれというようにあごをしゃくって指図した。
侍女たちがいっせいに去ってゆく。
あとには、深夜のように明々とともった絹行燈と、長安と、それに、こんこんと眠りつづける雪絵だけが残った。
長安は、夜具のそばに片ひざついて、雪絵の体を覆っていた布団をはねのけた。
雪絵は仰向いた下半身を横に向け、くの字なりに、きっちりと両ひざを合わせている。無意識のうちに自然と取った身を守る娘の寝姿である。
少しはだけた襟元と、そで口から、肌につくものの緋色が、燃えるような赤さでちらとのぞいている。
長安は、投げ出したように意識なく置かれている雪絵の手をとって、その指先をまさぐった。まさぐりながら、六十八歳の老人の指先が、その下をくぐって上へ上へとはってゆく。
雪絵は無抵抗であった。
「いとしいやつじゃ」
と、出しぬけにいって、長安ははじめてにんまりと笑った。
それまで、水のように冷静だったそのひとみに、男の欲望がにわかにめらめらっと燃え上がってくる。
「申しあげます……」
と、突然、ふすまの向こうから声がした。
「お殿さま、おそれながら……」
長安はふきげんな顔を、ちらとその方へ向けた。
「だれ?」

「初でございます。おそれながらお目通りを……」
と、答えたのは侍女の声であった。
「ならぬ。用事ならば 黒太夫まで伝えておけ。正午まで、だれにも目通り許さんと、あれほど申しつけてあるのを分からんか!」
長安はふきげんさを露骨にむき出しにしてきめつけたが、侍女の声は押しかえすようにしていった。
「火急のご用でございます。朱書きの文がまいりましてございます」
「何?」
と、長安はまゆをしかめたまま、つかんでいた雪絵の腕をはなした。
「朱書きの文か?」
「は、ただいまわたくしの手元へ……」
「よし、入れ」
初と名乗った侍女は、ふすまをあけて入ってくるなり、長安の手へ、やの字に結んだ文を手渡して、そのまま足早にさがってゆく。
長安が手にしたその文の一隅に、朱墨で「文」という字が一つ書かれている。
これは、いの字から長安にあてた密書であった。長安といの字との間にひそかに取りきめてあり、二人のほかにはだれ一人知るもののない極秘の手段の一つであった。
いの字が、長安に火急の用事で面会したいとき、しかも、長安が直接居間にいないときには、侍女お初の部屋の、その机の上へこの朱書きの文をおいておく。お初は、何も知らぬまま、この文にかぎって、何をおいても長安のもとへ届けねばならない定めになっているのだ。
長安は、引き裂くように荒々しく文を開いた。
中には、同じ朱書きで「いの字」とだけしるされている。
文面でこと足りるときは、これに用件がしたためてあり、いの字とだけ書いてあるときは、直々会って話す必要のある場合であった。

朱書きの文はよくよく火急の場合にかぎられる。

——はて？

と、長安はいぶかるように小首をかしげた。たそがれのように濃霧がとざしているとはいえ、いの字が、深夜以外直々の面会を求めてきたことは、いまだかつてないことだったからだ。

しかし、それだけに、何か容易ならざる事態が起こったのかもしれない。

長安は、こんこんと眠りつづけている雪絵の方へ、じろっと一瞥をくれた。情事を中断されたふきげんさは覆うべくもなく、寝所から立ってゆく足取りも、畳をけ立てるように荒々しかった。

いの字とは、居間の縁先か、やみにまぎれた庭先以外では会わない定めになっている。

長安の姿が消えてから、ほんの四、五秒がたった。

閨へはだれも近づかない。しいんとして、深夜のような静けさがよどんでいる。

と——

それまで、凍りついたように静止していた行燈の灯がちらちらっと、かすかにまたたいた。どこからか、風が吹きこんでくるらしい。

出しぬけであった。部屋の一隅に、ぬうっと黒い人影が立ったのは……。

黒装束をつけ、顔も黒頭巾に包んでいる。足にはわらじをはいているが、足跡の残らないのは、この建物へ忍び入ってからつけかえたものであろう。

とうからこの機会をねらっていたもののように、ひどく落ち着きはらっていて、そのくせ敏捷であった。

彼は、つかつかっと雪絵のそばへきた。

「雪絵どの、身どもです。兵馬です。お約束どおり、お助けにまいった……」

肩へ手をかけてゆさぶりながら、耳元へ、さ

さやきかけたが、雪絵はまだ眠りからさめない。

彼は、むずと雪絵の体を横抱きにした。白衣の雪絵は何もしらず、その腕の中にぐったりしていた。

兵馬は、ゆっくりあたりを見回した。自信にみちている。この敵の奥陣ともいうべき城中で、まるでわが家にあるがごとく落ち着きはらっていた。

ふすまをひらいて廊下へ立ち出た。

長安の寝所をとりまいて、どこにも人目があったはずだが、たった一個所、さらに奥へ通じているその廊下にだけは人影がない。それを、ちゃんと予期していたらしい。

もちろん、だれ一人気づいた者はない。

廊下はすぐ行きづまって、がんじょうな板戸が前をさえぎっている。長安の書庫であった。

日ごろから、みだりに立ち入ることが禁じられ、そのとびらには大きな錠前がとりつけてある。

兵馬の手がその錠前にふれて、ほんの五、六秒もたつと、ぴいんとかすかな音をたててそれがはずれた。

彼は、雪絵を抱いたまま吸いこまれるように中へ消えた。

とびらがしまる。と、ほとんど同時に、廊下をあわただしく走ってくる足音が聞こえた。

「曲者じゃ！　曲者が忍び入ったぞ！」

「殿のご寝所へ立ち入ったやつがあるぞ！」

「雪絵どののお姿が見えませぬッ。雪絵どのをかどわかした曲者がございますッ」

口々に叫んでいる声は、男女入り乱れて四、五人はいたであろう。

黒太夫の叱咤する声もまじっていた。

「いの字の名前をかたって、殿をおたぶらかした不敵なやつじゃ！　偽って殿をお誘い出し、そのすきにご寝所を侵した曲者があるッ！　遠くには行かん。そこらにひそんでおろう。ひっとらえろッ」

兵馬はとびらの内側に立ってその声をきいていた。

廊下の人数は刻々と増してくるらしい。

まさか書庫へかくれたとは思いもよらないのか、とびらの錠前がはずれているのに、まだ気がつかない。

いや、よしんば気付いても、とびらの内側には太いかんぬきがさしてある。それを破るにはなお、幾分の間があるであろう。

兵馬の行動は、何もかも、精密な計算の上にたっているようであった。

外の騒ぎを知らぬ顔に、ゆっくりと書庫の奥まで歩いてゆく。その一隅の床に、鉄輪のとっ手がついている。

とっ手をつかんで引きあげると、三尺四方くらいの床板が、そのままあげぶたのように音もなく口をあけた。

そこから、暗い地下へ向けて狭い階段がついている。

それは、長安のほか、ほんの二、三の腹心の者しかしらないはずの非常用の抜け穴であった。

階段をおりると、そこは真っ暗な穴蔵であった。

兵馬は、とうからそのことを予期していたように、一度雪絵を下へおろして、懐中から火なわの束をとり出し、それに灯を点じた。

やっと九尺四方あるかなしの狭い穴蔵が、天井も床も、四方の壁も、ぎっしりと石垣を組んでかためてある。

兵馬は、火なわをかざしながら、何かを探し求めるように、ぐるっと周囲を見渡した。

頭上から響いてくる物音が、急に近くなり、けたたましく高くなったのは、書庫の錠前の破れていることに、追っ手の連中がやっと気づいたのであろう。

しかし、かんぬきをかけたあのとびらを破り、その上地下道に気付くまでにはまだ間があるはずだ……。

兵馬は、一隅の石垣造りの壁の前へつかつかっと歩みよりざま、その石と石との透き間へ小柄をさしこんで、力まかせにぐいとこじった。

石はわけなく動き出し、やがて、その一個がすっぽりと抜けおちると、続いてあと二個三個を抜きとるのは容易だった。

石の抜け落ちたあとは、やっと人一人はい出ることのできるほどの穴になって、火なわの灯が、その向こうに奥深い横穴のつづいているのをおぼろげに照らし出した。

頭上では、とうとう書庫のとびらをおし破ったのであろう。足音がなだれるようにけたたましく響いてくる。

兵馬は、雪絵を抱きあげると、石壁の穴をくぐりぬけ、横穴の奥へ脱兎のように走りこんでいった。

やっと立って走れるほどの地下道であった。築城と同時に作られた抜け穴なのか、それとも、ここが長安の所管になってから作られたものか、蒸れて腐ったような空気が重苦しくよどんでいた。

どこをどう抜けているのか、道はゆるやかに登り、そして下っている。ところどころ、地下水がもれ出て、それが足元に氷のような冷たい水たまりを作っていた。

背後から、突然、があーん……と、地響きともわめき声ともつかぬ物音が、大気を震わせながら襲ってきた。追っ手が地下道へなだれこんできた証拠である。

しかし、大丈夫、まだ距離がある——と、兵馬はふてぶてしいくらい落ち着きはらって計算をたてていた。

とうとう道がつきた。地下道が行きづまっている。

目の前に、書庫の下の穴蔵で見たと同じ石の壁があった。

もう、手間どっている暇はない。兵馬は、走

ってきた体を、そのまま、その石壁に向かってたたきつけた。

石の一個がぐらっと動いた。

二度、三度と体当たりをくれる。ぐらぐら動いていた石が、つづけざまに二つ三つ、歯のかけるように向こう側へ抜けおちた。

どぶん……と鈍い音が聞こえたのは、その向こうに水のある証拠であった。

兵馬は、すぐ、その石のかけ落ちた穴から向こうをのぞき見た。

すぐ目の下に堀の水があり、その向こうには濃霧にとざされた森がつづいている。

そこは、奥山に面した外堀の、城壁の一角だったのである。

濃霧のたちこめた山中を、森伝いに兵馬は走りつづけていた。

堀を泳いで渡ったため、兵馬も、その腕に抱きかかえた雪絵も、髪からすそまで、ぐっしょりとぬれて、走るたびに水がしたたりおちていた。

霧のためにどこともはっきりしないが、兵馬の足取りには、地理を知りぬいている確信さがあった。

森を出はずれようとする辺りで、ふと、そびえたった岩壁の前へ出た。岩壁のすそがえぐれて浅い洞穴を作っている。

そこまでくると、兵馬はやっと足をとめ、その洞穴の中へ入っていった。

いつか、眠りからさめかけていたのだろう、草むらの中に横たえられた雪絵は、ああ……とかすかに声をたてながら、わずかに体をくねらせた。

けがれをしらない、神々しいくらい気品をたたえた美しい寝顔である。その額からあごの辺りへ、水にとけて崩れた黒髪が海藻のようにまといついていた。

兵馬は、その顔をまたたきもせず見つめている。見つめているその目がきらきら光っていた。

秋の山はただでも冷える。まして、煙のように流れよってくる霧は、水にぬれた肌をさすようであった。

その冷たさのためか、それとも、己の胸の中に燃え上がっている思いにゆさぶられたためか、兵馬は、ぶるっと一つ身震いした。

彼は、気づいたように、洞穴の裏をさぐって油紙に包んだものをとりだした。とうから、万一の場合を予想して用意しておいた雪絵のための衣類が入っている。

兵馬は、雪絵の寝衣の帯に手をかけ、ゆっくりとそれを解いた。

白綸子の下に燃えるような赤いはだ着をつけている。その襟元へ手をかけたとき、兵馬ののどが、思わずごくりと鳴った。

ぬれたものが、一枚一枚雪絵の体からはがされてゆく。

まだ眠りの中にある雪絵は無抵抗であった。

あたりにはだれ一人いない森閑たる山の中である。

その静けさの中に、それよりもさらに静かに、雪絵の裸身が横たわっていた。

じいっと見おろした男の目が、その肌の上をはって行く。ほっそりしたうなじから、胸乳の辺り、きちんとそろえてくの字なりに曲げている腿から足先へ——

豊かに肉付きながら初々しく、触ればそのまま手のひらの中に消えてなくなるかと思われるほどぬめやかに白いその肌に、男の目が、露骨にじいっと吸いついてはなれない。

はあ……とあえぎながら、思わず指先をふるわせたのは、兵馬の全身に、むらむらっと男の欲望が燃え上がったからであった。

しかし、彼は雪絵の肩先へ、わずかに手をかけただけで何もしなかった。何か、雪絵の中にある神々しいものが、荒々しい男心をきびしく拒否したのであろう。

兵馬は、思いかえしたように雪絵の体へ着替えの衣類をまとわせたが、草むらの中へねかせたその無心に眠りつづける顔を見つめているうちに、こみあげてくる欲望を堰きかねたように、突然、がばとその上へ身を伏せ、雪絵の体を固く抱きしめた。

「雪絵どの。そなたはわしの女じゃ。わしの妻になる女じゃ。だれにも渡さぬ。断じてだれにも渡さぬぞ」

うめくようにいいながら、物いわぬそのくちびるへ、やにわに己の口先を寄せていった。

「おのれ、長安め。思いしったであろう。この雪絵だけは、命にかえても渡してなろうか。いや、長安ばかりではない。進太郎も思いしれ、雪絵は、月姫さまのお許しをえて、晴れてわしの許婚となった女じゃ。だれにも渡さぬ。わしの妻にする。天下晴れてわしの妻にする」

兵馬は、何かに憑かれでもしたようにいいつづけながら、雪絵のくちびるへかみつくようにくちびるをよせた。

雪絵は眠っている。無意識のはずであったが、

「あ……」

と、かすかにうめき声をあげながら首を振った。

「雪絵どの、そなたはわしの妻じゃ。月姫さまのお許しをえて、わしの妻にする人じゃ。その誓いのしるしを……そのしるしを……」

一、二度、わずかに首をふったが、兵馬のくちびるはしゃにむにそのくちびるを覆った。

冷たいくちびるであった。そのくちびるの奥に、さらに冷たい歯が、食いしばるように固く閉じている。

兵馬は、雪絵の体を、首を、抱きしめ、その冷たいくちびるを吸った。

「雪絵どの、夫婦の誓いじゃぞ。これが、そのしるしじゃぞ。月姫さまのお許しを、今こそ、このくちびるとくちびるで明らかに固く結びおうたのじゃぞ」

「あ……」

と、雪絵は、何かにうなされでもするように、低くうめきながら、抵抗するように、かすかに身もだえした。

眠りからさめかけている。その浅い眠りの中で、雪絵は何かを感じていた。

いや、そのときがはじめてではない。薬に強いられた眠りのためだったか、肉体は眠っていても、その奥にある意識の一部が、悪夢にうなされるようにすべてのことを感じとっていたのだ。

長安の閨のことも、老人の指先がその腕をまさぐったことも、兵馬に抱かれて走ったことも、冷たい堀の水をくぐったことも、さらに、今男のくちびるが、夢魔のように己のくちびるを吸っていることも……。

そして、その耳元であえぐようにしゃべりつづけていた男の声がはたとだえたのは、こみあげてくる激情にたえかねた男の指先が、あらわに、己の肌をはってまさぐりはじめたためだということも……。

雪絵は、悪夢の中で、必死に抵抗し、のたうちもだえながら、どうにもならぬはかない己の姿を、おびえるような思いで見つめながら、しかし、次第に眠りから覚めてゆきつつあった。

「あ！」

一声高く叫んで、かっと目を見開いたのは、男の指先が乳房にふれた瞬間である。

「な、何をなさるのですッ！」

「おう、雪絵どの、気づかれたか。わしじゃ。兵馬です」

「何をなさるのです。な、何を！　お、おのきくださいましッ」

まだ、もうろうとしている意識の中で、雪絵は必死にもがいたが、兵馬の腕はいよいよ堅くその体を抱きしめるばかりであった。

「あなたはわしの許婚じゃ。月姫さまのお許し

をえて、あなたは晴れてわしの妻となられるお人です」
「そ、そのようなこと、存じません。は、はなして！」
「雪絵どの。わしはお約束どおりあなたを、このように救い出してきた。いまさら恩着せがましくいうではないが、そのことが、どんなに困難な、命がけのことであったか、ご想像がおつきか？」
「それはよく分かっております。ご恩に着ます。それ故、そ、その手をおはなしくださいまし。改めてお礼が申しとうございますッ」
「それもこれも、あなたをいとしく思えばこそだ。この身の妻となるお人とこそ思えば、命をすてても惜しゅうはないと思っていた。あなたはわしの許婚じゃ」
「わたくしは存じませぬ。わたくしの知らないことでございます」
「月姫さまのお許しが出ている。父君は、とうからご承知のはずだ。だれはばかることもない。天下はれて、わしの妻じゃ」
「ご恩はご恩、あまりにもご無体なッ。日ごろの兵馬さまとも思われませぬ。は、恥をお知りなされませ」
眠りからさめたが、毒酒の酔いが、まだ手足にしびれとなって残っている。雪絵は、兵馬の腕の下で、もだえる息も苦しげであった。
「そうだ。いわれるとおり日ごろの兵馬とは違う。わしの身には危険が迫っている。明日の命もわからぬ身じゃ。それ故、命にかけて救い出したいとしい人を、名実共に命にかけてわが妻にするのじゃ。雪絵どの、わしに礼を申したいといわれたのう？　口での礼など空々しい。そ、その体で、礼をいうてくれ。わしの愛に答えてくれ」
と、しゃにむに抱きしめられ、雪絵の青ざめた顔には、覆いようもない侮蔑の色が怒りにまじってむらむらとこみあげてきた。
「兵馬さま、は、恥をお知りなされませッ。たとえ、どのようなご恩をうけ、どのようなお約束のあるお方でも、武士にあるまじいご無体をあそばされましては……雪絵はご尊敬できかねます。お憎しみいたしますッ」
「よい、憎むなら憎め。わしはだれにもはばからぬ。妻となる女を妻にするのじゃ。命にかけてかち得たいとしい女を、命にかけて妻にするまでじゃ。雪絵どの、そのような目でわしをにらむのか？　そのような、けだものでも見下げるような侮蔑の目で？　よしッ、わしはけだものになる。けだものになって恥を忘れ、この恋をひたむきに貫くのじゃ」
たしかに、兵馬は異常であった。日ごろの彼とは違っている。何かにせきたてられ、一刻も早く雪絵の体を征服し、わがものにしてしまわなければ、とりかえしのつかないことにでもなるというような、いささか狂気じみてさえ見える執拗さであった。
兵馬の様子ががらりと変わった。
人間が恥をすてるとけだものになる。自ら、けだものになるといった言葉そのままであった。
一段と濃い霧がさあっと吹きつけてきて二人を包んだ。その灰色の底に、男と女の影が争っている。黒と赤と白と、三つの色がもつれ、ひるがえり、怪しい影を作った。
「あ、あっ！」
と、低い、しかし鋭い悲鳴がもれた。雪絵が、正気づいてからもらした、たった一つの悲鳴であった。
黒と赤と白と三つの色が一つに固まって、じいっとそのままになった。
ちょうど、そのときである、ひゅっ！　と鋭い羽音を響かせて、一本の矢が兵馬の影をめがけてきらめくようにとんできたのは！

愕！

と、顔をあげた兵馬の、今度は鼻先すれすれをかすめて、第二の矢がひょう！　と流星のようなきらめきを見せながら飛びすぎていった。

ただごとではない。

二本の矢を間髪をおかず射かけてきたのは、それが単なる流れ矢ではなく、また無意味なたわむれでもないことは明らかだ。だれかが兵馬をしかとねらって射かけてきたのだ。

がば！　とはじかれたようにはねおきた兵馬は、とっさに岩壁へぴたりと背をつけ、大刀の柄に手をかけながら、

「なにやつ!?」

と一言わめいた。

一瞬その声が谷間にこだまして、けたたましく帰ってきただけで、何の答えもなかった。

あたりは、森閑たる濃霧の海である。まるで、今までのことがうそだったかのようにあたりは何者の気配もないようであった。

兵馬の圧迫がさって、思わずも自由になった雪絵は、まだあえぐ胸をおさえながら、やっと体をおこした。

乱れた髪や、襟元や、すそを、震える指先で静かに直している。その乱れの一つ一つが、兵馬の無法さを物語っていた。

雪絵は、すぐそばにいる兵馬の方をちらりとも見向きはしない。

自ら、けだものになると絶叫した男を、憤るよりも無視しているという気配であった。

兵馬は、片目を霧にかくれた未知の敵に向けながら、残る片目で、じいっと雪絵のそぶりを凝視していた。

女に無視されればされるほど、男の執着がしつこくなる——兵馬の目には、そういう執着がヤニのようにねとねと光っていた。

「ほうーいッ……」

突然、遠い谷間の方から呼ぶ声が響いてきた。

「ほうーいッ。雪絵さまあッ。雪絵お嬢さまあ

ッ」

甲高く、そして鈴をふるように澄みとおった少女の声であった。

「雪絵さまあッ、雪絵さまあッ。聞こえたら、お返事くださいましょうッ」

耳をそばだてていた雪絵が、よろめくように立ち上がった。

「雪絵さまあッ。わたくし、お静でございますようッ。お迎えにまいりましたッ。聞こえませんかア?」

霧のせいか、その声は遠くなったと思うと、今度は突然間近に聞こえたりする。

「ああ、お静さん。馬子のお静さんですか?」

「まあ、雪絵さまッ。こっちよ、こっちでございますよ。谷間の方へおりておいでなさいましッ」

「は、はい、行きます、今行きます」

雪絵は、よろめく足を必死にふみしめながら、霧の海へ泳ぐように歩き出した。

「ま、待たれいッ。雪絵どの、待たれいッ」

兵馬が叫んだが、雪絵は返事もなく遠ざかってゆく。

「待てッ！　待たれんかッ。雪絵どの、どこへもやらぬぞッ」

兵馬が、目じりをつりあげて、思わずその方へ一歩踏み出そうとすると、とたん、その顔面をかすめて、第三の矢がひゅっ！　と鋭く飛びすぎていった。

兵馬は、あっと声をあげながら、またもとの位置へとびすさる。

どこからか、ねらいすまして射かけてくる矢とは知れていても、相手の姿は濃霧の向こうにかくれて見通しもつかなかった。

いくらひとみを凝らしてもこちらからは皆目見えない曲者が、どうしてねらいをつけて鋭く射かけてくるのか分からない。兵馬の頭上や鼻先を、ぎりぎりのきわどさで、威嚇するように

かすめて飛び、兵馬を雪絵から引きはなしてその場にくぎ付けにしてしまう鋭いねらいであった。

「動くな、兵馬ッ」

と、太い男の声が聞こえてきた。何か、故意に作ったような含み声であった。

「動くな、動くな。寸歩も動くな」

「うぬッ、そういう貴様は何者だッ？　どこにいるッ？　かくれて人をねらい撃つとはなんたるひきょうなッ。やいッ、なんの恨みがあってか。さあ、名を名乗れッ」

「これ、兵馬、ここにいるわしの姿が見えんか。わしが分からんか。さもあろう、魂の腐った人間には、このわしの姿を見ることはかなうまい」

ふふふ……と、あざけるような笑い声が、木立の向こうの、一段と暗く濃い霧の中からひびいてくる。

「うぬッ、痴れ者めが、何者かッ。名を名乗れッ」

兵馬はじだんだふんでわめき立てたが、向こうの声は笑っていた。

「わしか？　わしは天狗じゃよ」

「な、何ッ!?」

「これより北の方、金峰山の奥深く住まいなす、千年のよわいを重ねた大天狗じゃよ」

ばかにしてあしらわれていると悟った兵馬の顔は蒼白に変わっていた。

ここへ自分をひきとめて、その間に雪絵を逃がしてしまう魂胆と知れきっている。

その手を食うものか。雪絵だけは手ばなすことはならぬ。どうあっても、己の妻にしてしまわねば、何もかも水のあわになってしまう……。

雪絵の姿はとうに霧の向こうにのまれてしまい、ただ、かすかに、谷の方へおりてゆくその足音が聞こえている。

――くそッ、どうなるものかッ！

と、兵馬がとっさに行動に移ろうとすると、それをまるで予知していたように、

「動くなッ！」

と、叱咤する声が響いてきた。

「うぬッ、だれだッ。ひきょうなやつめ、姿を現せッ」

「わしは、金峰山の大天狗じゃ。兵馬、申しきけることがある。よく、心を静めてきけ」

と、霧の向こうの声が、落ち着きはらっていった。

「これ兵馬よ。わしはのう、今朝、金峰山の奥深くより甲府城に飛来し、その城中において、いかなることが起こるかをつぶさにこの目で見とどけてまいったのじゃぞ。兵馬、もちろんそなたのしたことも残らず見しっている。残らずだぞ、兵馬、何もかも残らずだぞ……」

「な、何ッ？　何を見たというのだッ？　いや、このわしが何をしたというのだッ？」

「白々しく、何をしたか？　と問いかえすのか？　この、大天狗の前に、白々しく大見得をきるつもりか？　たわけものッ。そなたの所業は、もし天狗の世界においてなれば、股裂きにして峰の大樹の梢にかけられる罪に値するものじゃぞ」

「な、なんじゃとッ!?」

兵馬の体ががくがくと震えた。顔には死人のように血の気がない。

「兵馬よ、よく胸に手をおいて、己のなし来った所業を反省してみよ」

と、霧のかなたから、作った含み声が陰々と響いてくる。

「兵馬、なんじが今日まで、何をなし来ったか、天地神明に向かってそれを明らかに公言できるか」

「な、何ッ？　わしが、何をしたというのかッ。よし、天にも地にも、明らかに向かって叫んでみしょう。この泉野兵馬は、ひたすら雪絵どのへ愛をつらぬくため、命にかけて、その人を救い出してきたのだわ」

「そのとおりじゃ。そして、それから何をしたのか？」
「何もせぬ、天地に恥じるようなことは何もせぬわッ」
「黙れ、兵馬。わしは、なんじの所業をくまなく見つめてきたのじゃ。おぬしが何を考え、何をたくらみ、いかなる行動をとったか、その一つ一つを天日にさらすがごとく明らかに見知ったのじゃ。恐るべき所業じゃ。人面獣心、鬼畜にもおとる。愧死せい、兵馬！」
「う、うぬッ。き、貴様、何者かッ！」
「金峰の大天狗じゃ！」
ははは……とその声が笑った。
「ひきょうなやつッ、姿を現せッ。正体を見せろッ」
「姿を見せれば、うぬらは恥じて即座に死ぬるであろう。姿を見せぬはいっときの慈悲と思えッ」
「な、何ッ！」
「兵馬、よく聞け。うぬの所業は死をもってもつぐなえんぞ。しかもなお、雪絵どのを甲府城中より救い出した手柄は認めてやらねばならぬ。その手柄故に、しばしの命を与えてくれよう。今後の所業が、うぬの命を決定するものと思え。よいか、兵馬。よく胸に手をおいて考え、反省せい。今後二度と、人間の道をふみあやまるなよ。もしものときは、この金峰山の大天狗が許しおかんぞ」
「むむむ……」
うめいた兵馬の顔には、この世のものとも思われぬすさまじい殺気がみちていた。
——生かしてはおけん。こやつ、何者かはしれぬが、生かしてはおけん。おれの秘密をしっている。それを悟ったやつは、生かしてはおけんのだ……。
ぎらっと大刀を引きぬいたのはしゃにむに霧の中へ斬りこんでゆく前ぶれであった。
「わっはっはは……」

と、霧の向こうに、高らかな笑い声がおこった。
「このわしを斬る気かッ。この大天狗を斬る気かッ。姿も見えん神通力をもったこのわしを斬れるつもりかッ。兵馬、うぬは、まだ目がさめんとみえるな？」
「うぬッ、待てッ！」
兵馬は盲滅法に、大刀をふりかぶって霧の中へ突進していった。
わっはっはは……という笑い声が、思いもかけないわきの方から聞こえてくる。
「くそッ！」
兵馬はまるで狂気だった。ただの怒りではない、その相手を生かしておいては己の身が破滅する。
——生きるか死ぬかの瀬戸ぎわであった。
霧の中を泳ぐように遠のいてゆく笑い声を追って、
「待て、待てッ！」
兵馬はあえぎながら夢中で追ってゆく。
そのころ、谷あいまでおりきった雪絵は、待ちかまえていたお静に手をとられて、沢伝いの小道をあえぎあえぎ走っていた。
「大丈夫ですか？　お歩きになれますか？　さあ、わたくしの肩におつかまりなさいまし」
と、お静は小さな肩ひじはって、けなげに雪絵をかばっている。
兵馬から遠ざかるまでは、まるで虎のあぎとを逃れる思いで夢中だったが、毒薬のしびれが、まだ手足のどこかに残っているようで、一歩一歩があえぐように苦しげであった。
「もう少しのご辛抱ですよ。もう少し行くと森を出はずれます。そこまで行けば、お天狗さまに会えるでしょうから……」
「え？　お天狗さまですって？」
「ほほほ……」
と、お静は明るい声で笑った。

「わたくし、よかったわ。無理にせびって甲州へやってきて、本当によかったと思います。だって、また、こうしてお嬢さまにお目にかかれたでございましょう」
「お静さん、どうしてわたしのことが分かったのです？　わたしが、このような山の中にいることを、一体どうして？」
「それはちゃあんと分かっていましたわ。お城の中で、どういうことが起こっているか、ずうっと見通しに分かっておりましたのよ」
「まあ、あなたにそのようなことが？」
「いいえ、お天狗さまに……お天狗さまが、ずうっとお目を光らせてにらんでいらしたのですもの……お嬢さまが、兵馬さまとおっしゃるお方に助けられてお城をぬけ出し、この山の中へおいでになることもちゃんと分かっておりました。お天狗さまは、あの上の洞穴の中に、お嬢さまのお召しかえあそばすお着物がかくしてあることまで、ちゃんと見抜いていらしたのです

よ」
「お静さん、そ、そのお方は？」
「お天狗さまですよ。金峰山のお天狗さまですよ」
　ほっほっほ……とお静は、また、うれしそうに笑った。
「そうら、もう森を出はずれました。この辺りで、お天狗さまにお会いする約束なんですけどね。どうしたんでしょう？」
　と、立ちどまって、霧のかなたをすかすように見つめた。
　ほどなく、すたすたと落ち葉をふむ足音が聞こえ出し、霧の中にもうろうたる人影が現れ、こちらへ向けて歩みよってきた。
　山袴をつけた武士らしい影で、小わきに弓矢をかかえている。
「わあい、お天狗さまア！　ここ、ここよ！　こっちですようッ」
　と、お静が手をふって呼びたてる。

すうっと濃霧を割って、忽然と二人の前に立ったのは、目もさめるばかりまゆの秀でた秀麗な若者の顔であった。
「ああ、進太郎さま！」
　もしやとは思っていたが、夢にまで見ていたその澄んだひとみを真っ向から見ては、雪絵はわれにもなくうろたえて、一瞬そのほおをかっと燃えたたせた。
「お静、これをもて」
　と、弓矢を手渡した進太郎は、くるっとこっちへ背を向けて大地にかがんだ。
「ごあいさつは後刻……雪絵どの。さ、この肩へ……」
　ぐいと伸びた手が、ためらっている雪絵を捕らえ、何もいわせず軽々と肩へ背負いあげてしまった。
　あっという間もない無造作さであった。
「お静、石堂峠への道をしっているな？」
「しっていますとも、進太郎お兄さま。わたし、小さいころ、この辺の山は散々駆け回ったものよ」
「峠の近くに石室のあるのもしっているか？」
「はいもう……その前に大きな松の木があって、その根元に蟻塚があって、その女王蟻は甲州中の蟻の中で、一番器量よしだってことまでちゃんと知っていますとも……ほっほっほ……」
「ははは、そのように器量よしの女王蟻なら、是非一度拝顔の栄に浴したいものじゃのう。案内、しっかり頼むぞ」
「はいはい、おやすいご用です」
　ほっほっほ……と明るい笑い声をたてて、お静は元気に前を走ってゆく。
「雪絵どの、ご安心なさい。父君三郎太どのはご無事じゃ」
　走りながら進太郎が、背中の雪絵にいった。
「甲府城を出られてから、待ちうけていた呂宋屋彦七の一味がお迎え申し上げ、そのまま濃霧

にまぎれて山中へ逃れられたのです。おちつかれた先は、ここから山伝い、石堂峠の石室と、藤兵衛が見とどけて知らせてきました。これから、父君のもとへご案内する」

「まあ、何から何まで……」

と、やっといっただけで、雪絵はあとの言葉も出ないようであった。

なんだか、夢を見ているようで、今の自分が信じられない。

江戸をたってから今日まで、どんなに進太郎のことを考えたか？　どんなに会いたいと思ったか？

どうして自分がこんな気持ちになったのか、われとわが心を疑うくらい、その人のことを考えつづけてきた。

苦しいことや悲しいことがあると、すぐその人のことが胸にうかんでくる。どこかで、その人が見守っていてくれて、いざというときにはきっと助けにきてくださるのだと、奇妙なくらいに信じきっている何かが胸の底にあった。

今こそ、そのとおりになったのだ。夢に見、幻に描いていたとおり、その人の背にすがって山道を登ってゆく。

その人の腕が雪絵の腰を抱き、自分の手がその人の肩にしっかりとすがっている。その人の血脈の動きも、そのまま雪絵の肌に伝わるように近かった。

夢ではないのだ、これは本当のことなのだ——と自分にいいきかせながら、雪絵はなぜかしら、かえって顔をこわばらせ、おびえた目つきになっていた。

——月姫さまのお許しをえたのじゃ。そなたはわしの許婚、妻になる女じゃ……。

そう、くりかえしていた兵馬の声がいまさらのように耳の底で鳴っている。

あの執拗さ、あの執念深さ、あのただごとでない狂気のそぶりは、その言葉がうそでない証拠だとも思われる。

もし、それが本当だとしたら……。

おそらく、自分の運命はもうきまったも同じことであろう。何者もそむくことはできない。だれだって、さからうことはできないのだ……。

「さあ、お兄さま、もうすぐよッ」

「よし、いそげッ」

と、何もしらぬ二人は闊達に走りつづけてゆく。

盛りあがるようなたくましい肩、雪絵の体をすっぽりとのみこんで余りある広い背——その進太郎の背にすがりながら、

——ああ、好き！　好きです！　わたくし、進太郎さまが好きなのです！

と、雪絵は心の中ですすり泣くように叫んでいた。

兵馬は霧の中をさまよい歩いていた。

金峰の大天狗と名乗って霧の向こうからあざ笑う正体不明の怪物を、生かしてはおけないと殺気立ったまま、思わず夢中でふみこんだ一歩一歩が、そのまま未知の山中へ深くひき入れてしまったのだ。

気づいたときには、その誘いこむような嘲笑の声も聞こえず、道もない濃霧の世界が周囲をとざしていた。

だれだろう？　何やつだろう？　何やつであろうとも、自分の秘密を感づかれたからには、どうしても生かしてはおけないやつだと、兵馬は、まだそのことだけにとりつかれていた。

どうして、きゃつの正体をつきとめてくれようか？　どうやって、そやつの息の根をとめてくれようか？　だれであろうと生かしておけば、自分の身が破滅する、自分が生きぬくためには、いかなる手段をめぐらしても、そやつを片付けてしまわねばならぬ……。

今、兵馬がとりつかれている妄執の前には、霧にまかれ道に迷ったことなど、ほとんど眼中にないようであった。

心を空にして、まるで夢遊病者のようにあてもなく、足にまかせてよろめき歩いていた兵馬が、そのうち、何かに気づいたように、ぎくっと首をうしろへねじむけた。

背後から足音が聞こえてきたからだ。だれかつけてくる。いや、もうさっきから、つけていたのかもしれないが、心をほかにそらしていた兵馬が気がつかなかっただけであった。

天狗!?

兵馬は、まだ手にさげたままでいた白刃を、びくっと震わせながら息をのんだ。

しかし、天狗ではない。さっきの曲者とは気配が違っている。

「だれだッ!?」

兵馬はわめいた。今の兵馬は、とたんにだれでも斬ってすてるほどすさんでいた。

足音は、一瞬とまったが、またすぐ聞こえ出した。近づいてくる。いやに落ちつきはらった自信満々たる足音であった。

「だ、だれだ!? うぬッ、何者だというにッ!」

兵馬が、真っ青な顔をふるわせながらじだんだをふむ。

「たんと、わめくなり叫ぶなりしなせえましよ。遠慮はいらねえや、人っ子一人いねえ山ん中だ」

憎々しいくらい落ちついた声が、その足音の方から答えてきた。

「だ、だれだッ!?」

「おれだよ。あっしさア」

霧の中から忽然と現れ出た雲つくような人影が、ぬうっと顔をよせてきた。

「おっと、刃物はしまってもらいましょうや、おれア、金峰山の天狗じゃアねえんでさ。え、だんな、お久しぶりでしたねえ。お見忘れですかい? そうら、江戸の、水町家のお屋敷で……」

「うっ! おう、うぬは、青助とか申した水町家の中間だなッ?」

「そうそう、その青助でさア。よく思い出して

くれました、お懐かしいねえ、だんなア!」

「うぬは、何やら不埒な所業があって水町家を逐電したと聞き及んでいる。おのれ、なんでこの甲州へ……」

「おいさ、だんな。そうせきこんで、がなるもんじゃアねえやな。天狗が笑うぜ、あの大天狗がよう」

「さては、うぬ、さきほどからのこと存じているなッ?」

「存じていたらどうするんだい? え、大将、どうするんだよう!」

ぐいと片そでまくって目をむいた、そやつの上背は六尺に近かった。

「兵馬さん、やめようぜ。おれアけんかしにのさばり出てきたんじゃねえんだ。おれア、お前さんの味方だよ」

青助は、にやっと笑いながらいう。

「おれア、お前さん方のあとを追ってこの甲州へやってきたんだ。今日のことだって、ずうっと見ていたさ。あんたが雪絵さんを手込めにしかけるところも……おっとっとっと、怒っちゃいけねえ。怒ったって、見てしまったものをどうも仕方あるめえ。さあ、話はその先さ。そこへ、金峰の大天狗の出現だ。はっはっは……兵馬さん、大分いてえところを握られているとみえて、ひどくうろたえていなすったねえ。おっとっとっと……そんな目つきはしっこなしだ。え、それとも、大天狗の正体を知りたくねえのかえ?」

「では貴様、それをしっているのか?」

「しってるさ」

「だ、だれだッ? 何者か? さあ、それをいえッ」

「せくなってことよ。さあ、その物騒なものを鞘におさめて、岩角へでも腰をおろしなせえ。ゆっくり話そうじゃねえか」

青助はふてぶてしくいって、またにやりと笑

った。

「おれア、何もかも、腹をわってぶちまけるぜ。そのつもりで、心をおちつけて聞いておくんなせえよ。第一に天狗がしっているといった、お前さんの秘密を、このおれも、ちゃアんとしっていることさ」

「な、何ッ！」

「まアさ、おれアお前さんの味方だといったろう。悪くはしねえつもりだから、最後まで聞けってことよ。なるほど、その秘密をしられては、お前さんが生きるか死ぬかの瀬戸ぎわだと思って、あいつをたたっ斬ろうと殺気だったのも無理はねえさ。あんたの本名は、泉野兵馬とはいわねえはずだからねえ。武田家の忠臣、泉野左馬之助のせがれだなどとは真っ赤ないつわり、その実、名もない土匪の小せがれだったんだ。それが、お前さんの秘密なんだ」

「……」

兵馬は目をとじた。血の気のうせた顔が、霧の中に、まるで魚の肌のように気味わるく青ざめている。

「ねえ、兵馬さん。今だからいうが、お前さんが、泉野左馬之助の遺児と称して、呂宋屋彦七につれられ、はじめて水町家へやってきたとき、おれア一目見て偽者だとさとったのさ。なるほど、左馬之助には、お前さん兄妹と同じくらいの年ごろの男女二人の子供のあったことはたしかだが、左馬之助が死んでまもなく、兄妹とも流行病で急死したことをしっていたからさ。

いやねえ、兵馬さん。もっとはっきりいえば、天正十年三月、武田勝頼公が天目山麓であいはてたとき、その命令で、何か大事なものをもってそこを脱出しようとした泉野左馬之助が、名もない土匪の襲撃をうけ、あえない最期をとげたんだが、その土匪の、当時まだ幼かった小せがれが、やがて年を加えてゆくうちに、いつか妹をつれて他の地方へ流れてゆき、さらにいつの間にか、泉野左馬之助の遺児、兵馬にお梶

だなどとぬけぬけと名乗ってしまったことを、このおれアちゃんとしっていたのさ。

うん、そうだ、おれとあの天狗と、お前さんと、この三人しかしらねえ秘密だろうねえ。お前の妹、お梶さんだって知らねえことなんだ。まだ幼かったお梶さんまで、いつの間にかだまして、ぬけぬけと泉野兄妹になりすましていたんだからなア、相当なもんだよ、兵馬さん」

「兵馬さん、あんたが、なぜ泉野左馬之助の遺児に化けたか、底の底までおれア感づいているんだぜ。つまり、こうだろう。あんたのおやじさんが左馬之助を殺して奪いとった品々の中に、『朱書き一節』とよばれる竹片がまじっていた。

おやじさんは、その竹片の価値なんぞてんでしらねえから、金にもならねえと思ってほうっておいたのさ。それを、後になってあんたが気付いたんだ。左馬之助の死んだ当時のいきさつも、すっかり調べあげた上で、その陰に容易ならねえ秘密のかくれていることを知ったのさ。そこで、とうに死んでいるはずの、左馬之助の遺児に化けたんだ。何もしらない妹さんまでだましてねえ。

何のためか、きまってらアね。武田家の忠臣、泉野左馬之助の遺児と名乗って、月姫さまにとり入るためさ。そうして、あわよくば、『朱書き一節』にまつわる、富も権力も、残らずその手にかき集めようためだったのさ。のう、兵馬さん。図星だとおいいなせえよ」

青助は腕組みしたまま突っ立っている。かっと目をむいた顔は、もう笑ってはいなかった。

「化けたねえ、よく化けたねえ。さすがの呂宋屋彦七も、したがってその陰にいる月姫も、あんたの手口にゃア、苦もなくひっかかった。そうだろう、左馬之助の遺品だといって『朱書き一節』をもってるし、妹のお梶を長安のめかけにまでしての忠節ぶりには、こりゃア彦七でな

くったって、だれだって、手もなくやられてしまわアね。兵馬さん。さっき、雪絵を口説いていたせりふに、月姫さまからあの娘を女房にするお許しまで得たんだって？　うん、大したもんだよう、兵馬さん。

しかし、どっこい、待ってくれ。そう安々とはこの青助が通らせねえぜ」

兵馬は青助の目を、真正面からじいっと見すえていた。一瞬の驚愕や狼狽がすぎさると、かえって不敵な落ち着きがそれに代わった。

「青助、なんの証拠がある？　わしが左馬之助の遺児でないという証拠がどこにある？」

「なんの証拠もありゃアしねえさ。皆、古い過去のことだからねえ。しかしたった二人だが、恐ろしい証人がいるぜ。いつ、どこへでもおそれながらと訴人できる証人がいるんだぜ。このおれと、そして、あの金峰の大天狗さ」

「だれだ？　あの天狗とは何者か？」

「桜井進太郎だッ」

と、青助は吐き出すようにいった。

「おれア、あとをつけてきて、野郎の影をはっきり見たんだ。もと北条家の隠密支配役桜井太郎左衛門の小せがれ進太郎に相違ねえのだ」

「そうか……おそらく、そうであろうと想像をしていたが、やっぱりあいつか……」

兵馬は顔をゆがめた。

「青助、もはやかくしはせん。わしは、名もない土匠であった父の遺品の中から、『朱書き一節』の一片をさがし出して以来、その秘密にとりつかれた。そこで、故郷を去って他国へ移るとともに、幼かった妹をだまし、自ら泉野左馬之助の遺児と名乗って、大野心の実現に乗り出したのだ。何もかも貴様のいうとおりだ。青助、しからば、なんとする？　このわしをどうしようというのか？　このわしに何を要求するのかッ？」

兵馬の目が青助を見つめている。へびのような、鋭く陰のある目つきであった。

「兵馬さん、よくいった。そう来なくちゃア話にならねえ。あんたがその気なら、よし、腹をわって話そうじゃねえか。おれア、あんたと手を握り、協力しようといってるんだぜ」

青助がぐいっとひげ面をよせてきた。

「素姓をばらせば、おれアもともと北条家に抱えられていた乱波のはしくれだ。忘れもしねえ、天正十年の三月、支配頭の桜井太郎左衛門に従って、北条勢の急先鋒として、天目山麓、田野の部落へ潜入してのう。勝頼公の秘命をうけて脱出する途中泉野左馬之助が、お前さんのおやじに襲われて手傷を負うところから、かけつけた桜井太郎左衛門に、何か重大なことをいい残して息絶えたことまで、物陰にいてちゃんと盗み見していたんだ。

ところが、それを太郎左衛門に感づかれて、危うくたたっ斬られるところを、命からがら逃げ出してのう。もちろん、北条家はそのままおさらばよ。その後、太郎左衛門の小田原の浪宅へ忍び入って、その手に一つ残っているはずの『朱書き一節』を、うまくこっちへせしめるつもりがからりとはずれ、あの小せがれの進太郎めにふんづかまった上、犬っころのようにほうり出されて逃げ出すという、いやもうさんざんの体たらくよ。

兵馬さん、分かったろう。進太郎は、あんたにとっては恐るべき敵であると同時に、おれにとっちゃア恨み骨髄に徹した憎い野郎なんだ。な、手を握ろうじゃねえか。あんたとおれと力を合わせたら、この世にできねえことはあるまいが」

「手を握るとはどうするのだ？　力を合わせるとは、どういう意味だ？」

兵馬は、もうくそ落ち着きに落ち着いていた。相手の正体を、その性根の底まで見抜いてしまったという目の色であった。

「兵馬さん、あんたはすでに月姫にとり入り、雪絵まで手に入れかけているほど、目当ての山

に踏みこんでいる。しかし、おれア、お前さんの秘密を握ってるんだ。この二つを、互いに仲よく出しあおうってのさ。おれア、あんたの秘密を握りつぶす。その代わり、あんたの登りかけてる山に一口のせてもらう。もちろん、あんたの秘密をしっているやつが、もう一人ほかにいる。進太郎だ。こいつは、おれがひきうけて片付けようじゃアねえか……どうだい、兵馬さん?」

「条件は?」

「まっ二つに割って、山分けだ」

「金のことだけだな?」

「いいや、何もかもさ」

と、青助はすごい目つきをして、にたっと笑った。

「何もかも?」

「そうだ、雪絵のことも山分けだってことさ。あんたがほれてるように、おれもあの女にほれてるんだよ。さあ、権利は同じだ。雪絵を二人のどっちがせしめるか勝負できめよう。兵馬さん、裏か表か?」

と、青助は腕をぬっと前へつき出した。その手のひらに鐚銭が一枚のせてある。ぐっと握りしめて頭上へふりあげながら、

「さあ、裏か? 表かッ?」

「雪絵はだれにも渡さん。わしの女だ。わしが命がけで助け出してきた女だ」

「おれも、あの女にゃア命がけでほれてるんだ。いやならいいぜ。敵に回れ、腕ずくで取れというなら、いつでもそうするぜ。さあ、どうするんだよう。いなかおうか? いやさ、裏か表かッ?」

「雪絵はわしの女だ。わしが命をかけた女だ」

と、兵馬がうめくようにくりかえした。

「妹お梶を犠牲にし、長安のめかけにまでしたのも、彦七に取り入り月姫さまの信頼をかちえて、結局は雪絵をわがものにするためであった」

「くどいなア、兵馬さん」

「ほかの望みなら何事でもきき入れる。欲しいものは残らずくれてやってもいい。雪絵はいかん。雪絵には手を出すな」

「敵になるか味方になるかだ。さあ、どうするのか返事をしな。敵になるならそれでもいいんだ。おれア、この足で呂宋屋一味のもとへはせつけてゆき、洗いざらいぶちまけて、あんたの野心を粉々にしてやるまでだ」

青助は、兵馬の痛いところをつかんで、のっぴきならず責めたてる。

「さあ、勝負するのかどうか? 裏か表かよう、兵馬さん?」

「青助、わしが勝ったらどうする気だ?」

「どうもこうもあるものか。おれも男だ。雪絵のことはさっぱりあきらめて、あんたの片腕になるぜ。その代わり、おれが勝ったら、雪絵のことはおれの心次第だ。兵馬さん、おれの思うとおりにさせてもらいましょうぜ」

「よし、青助。勝負をきめよう」

「合点だ。兵馬さん、裏か? 表か?」

「裏!」

「よしッ、おれア表だ」

勝負ッ! と叫びながら、青助は手に握った鐚銭を宙へ投げあげた。

小銭は、ひらひら舞いながら落ちてきて、一度、小石にあたってはねてから、ぴったり、二人の足元に静止した。

「表だア!」

青助の顔に、みるみる勝ちほこった憎々しいものが赤黒くふくれあがってくる。

「見たか、兵馬さん。おれの勝ちだぜ。雪絵はおれのものだぜ」

「……」

兵馬は黙っている。青ざめた表情には氷のように冷たいものがあった。

「いいなア、今日、このときかぎり、雪絵はおれの女ときまったんだ。だれにも手を出させね

え、分かってるなア、兵馬さん。恨んでくれるなよ。男と男の勝負できめたんだ」

青助は叫ぶようにいいつづける。

「おれア、雪絵にほれてたんだよ。いい年をしたひげっ面が、いやもう、ぞっこん参っていたんだよ。笑いなよ、兵馬さん。一度は、すんでのところで思いをはたすところまでいったんだ。あの女をねじ伏せて、この指先が、ありありとあの肌に触れたんだ。そのとき、じゃまアしゃアがったのは進太郎さ。おれア、それが桜井太郎左衛門の小せがれとは、そのときうっかり気がつかねえでねえ。気がついていりゃア、なんとでもして殺してしまっただろうによ……。

さあ、今夜改めて祝言のしなおしだ。あの女を、この腕の中に、しっかり抱いて夜をあかすんだ。兵馬さん、その手引をしてくれるねえ。おれと雪絵の祝言の、仲人役をしてくれるねえ。いまさら、いなやはねえだろうねえ?」

「わしも男だ。いまさら、とやかくはいわん」

と、兵馬がいった。

「ただ、雪絵は進太郎に連れさられてしまっているぞ」

「大丈夫だよう。あのお節介焼きの進太郎が、石堂峠にかくれている、雪絵のおやじのところへ連れていってるはずさ。あいつも雪絵にほれていやがるんだ」

わっはっは……と青助は乱杭歯をむき出して、さも心地よげに高笑いした。

石堂峠

甲府城内のどこかだった。

「若、雪絵さまはご無事に?」

「うむ、石堂峠までお連れした。峠から、父御のかくれておられる山室までは、お静一人に案内をたのんで、わしはここへとってかえしたのだ」

声はない。指と指を握りあってささやく指語法で語っている。

進太郎も藤兵衛も、ぴったりと張りつくように身を伏せていた。真っ暗だ。どこか、天井裏らしい。

「山は霧がひどい」

と、進太郎がいう。

「追っ手は甲府一円にとんで要所要所を蟻のはい出るすきもなくかこんでいる。山もそのとおりだが、濃霧が救い神となっている。霧の晴れぬかぎり、雪絵どの父子は安全であろう」

「ここもそうでございます。濃霧がわれわれを助けてくれております」

「お梶どのは無事か? 藤兵衛、大丈夫、お梶どのを救い出せる成算があるか?」

「分かりませぬ。こうなりましては、何もかも運でございます」

「ここはどの辺りか」

「書庫の真上、長安の寝所が間ぢこうございます」

「う? 藤兵衛、あれは? あの人声は?」

「若、動いてはなりませぬぞ。あの声は、お梶どのでございます。長安の寝所の方にその声が聞こえます」

そのまま、二人の姿は化石したようにやみの中に静止してしまった。

斜め下の長安の寝所には、まだ行燈の灯がともっていた。その行燈の陰に、主のない夜具が敷きのべたままになっている。雪絵が連れこまれ、そして連れ去られたときとそのまま同じであった。

その中央に長安がたっている。

「ああーっ……」

と、あえぐように悲鳴をあげたのはお梶であった。

お梶は、侍女たちに両腕を左右からとられ、背を小突かれるようにして連れてこられると、長安の前へ、どっと突きはなすように引きすえられた。

「お情けでございます。お手ずから、ご成敗く

だございませッ。お殿さまを裏切りました罪は、どのようなお憎しみをうけ、ご処刑をくだされましょうともおうらみには存じません。兄兵馬の罪はわたくしの罪でございます。兄とわたくしは共謀したに相違ございません。は、はよう、ご成敗をッ……」

着物のあちこちが裂け、解けかかった帯をうしろに引きずっている。髪は乱れに乱れ、蒼白な小額には、何かに打たれでもしたのかかすかに血の色さえにじんでいた。

兄兵馬が雪絵を連れて逃げた恐るべき罪を問われ、あちらの部屋ですでにさんざんな苛責をうけたことが、その姿の乱れで一目に分かる。

しかし、とうから死ぬ覚悟のできているお梶は、いまさらうろたえはしなかった。

「ご成敗くださいませッ」

と、訴える声は、長安の憎悪のはげしさを察して、すぐにも立派に死んでみせる覚悟のほどを示していた。

しかし、長安は何もいわない。何もいわず、ただ、ちらっと皮肉な薄笑いをうかべて侍女たちに目配せした。

その目が、お梶を寝所の夜具へ運べといっている。

お梶は、そのときになって己の身にどんな事態が起こりかけようとしているか、はじめて気付いたらしい。

「ああーっ」

と、うめいた声は無惨なくらい悲痛にみちていた。

手で足で体で、ありとあらゆるもので抵抗し、もがきながら、侍女たちの手でひきずられてゆき、臥所の前へ突きのめすように投げ出された。

「ご成敗を！　お、お殿さま、殺してくださいましッ」

「殺しはせぬ。死ぬことはならぬ」

「お願いでございます。罪深い梶をご処刑くださいましッ」

「死ぬことはならぬ。死ぬことは許さぬ。梶、おのれは、その体で、犯した罪のつぐないをするのだ」

長安の冷たい声がいった。

その目の底に憤怒の火が燃えている。雪絵を失ったことが、どんなにこの男の怒りをはげしくかきたてたか、その目の色を見るだけでまざまざと分かるようであった。

憤怒がはげしいときには、長安の性根の底にある残忍な皮肉さがむき出しになる。その皮肉な目が射るようにお梶を見すえていた。

「あーっ！」

お梶はうめいた。悲鳴であった。そのくせ、絶え絶えにかすれて、かすかなすすり泣きと聞こえたのは、あまりの屈辱がお梶の最後の気力まで奪い去ったのであろうか。

のがれることはできない。長安の腕が、その体を抱き、胸をひき裂き、夜具の中へ押し倒した。

すでに、幾夜となく肌にふれた男の指先ではあったが、今日は違っている。

愛撫ではなくて、辱めるためにのみ動く指先のようであった。

そこには、さっきまで雪絵が寝ていたのである。雪絵を抱くはずの男の腕が、お梶を抱いている。そこにあるのは、愛ではなくて、情欲だけであった。いや、女をなぶる男の、無惨な皮肉さだけが感じられた。

つまりは、それが長安の処刑であったのだ。女にとって、一番堪えがたい、皮肉な、むごたらしいなぶり方であったのだ。

お梶は、すすり泣き、もだえ、そして、やがて死んだように黙してしまった。

「うっ！」

天井の一角に身を伏せたまま、進太郎がかすかにうめき声をあげた。いや、うめき声ではなく、思わず五体を走った戦慄の響きだったのか

もしれない。
そこでは、何一つ見えはせず、しかとした人声も聞こえなかったが、しかし、今真下でどんな無惨なことが行われているか、彼の五体が感じとったのかもしれない。
「若！」
と、藤兵衛の指先が堅く進太郎の指先をつかんでささやきかけた。
「忍びとは、しのぶことです。耐えることですぞ」
「分かっている。藤兵衛、分かっている！」
答えた進太郎の指先には怒りがあった。怒りが、戦慄になって五体を吹きぬけてゆく。
お梶は妹にひとしい懐かしい人であった。その妹が、今、十間とははなれぬ真下で……。

静寂がきた。
寝所にも声はなく、どこにも物音はなかった。息がつまるくらいの静けさであった。
静寂が、たった一つの救いである。そのくせ、これ以上のむごたらしさはないような静寂であった。
やがて、
「死ぬことはならん。殺しはせん」
と、出しぬけに長安の声がした。
「梶、生きていて果たさねばならん責任があるのだぞ」
お梶の答えはなかった。その場にいるのかいないのか、気配さえ感じられない。
「兄に会っていえ。怒りにまかせて一命を断つことなど、わしにとっては易々たることだが、殺しはせぬ。死ぬこともならん。生きていて果たさねばならん責任があるのじゃと、兵馬に言えッ」
「……」
「たとえ、わしの怒りのとける日はあっても、いの字の怨念は終生解けんぞ。いの字は、怨霊となってなんじの周辺にまといつき、その息の根のたえるまでたたりをしよう。救われる道はたった一つじゃ、たった一つじゃと兵馬に言えッ」
それでもお梶の答えはなかった。
「分かったな？　しかと伝えるのじゃ。兄兵馬にあって、大久保長安が、かく申していたと明らかに伝えるのじゃ。いの字のことを忘れるな。いの字の執念を忘れまいぞと、よいか、梶、兄に会ってしかと伝えよ」
長安は立って、何事もなかったような足取りで寝所から出ていった。
入れかわりに入ってきた侍女たちが、
「お梶どの、お部屋へさがって、至急お着替えなされませ」
と、うむをいわさず、両手をとってひったてた。
「あなたは、ただいまかぎりご追放になるのです。二度とお城へ近づいてはならぬのです。でも、よくよくの殿のお慈悲だと思いなさい。命がいくつあっても足らぬものを……」
それでも、お梶は、とうとう一言すら口にしはしなかった。
やがて、濃霧のたちこめた城の裏門から、まるで突きはなすように追い出されてくるお梶の姿が見えた。
手にはなにももっていない。身にまとった衣類も、つい先刻までの豪華なものとは打って変わって、おそらくはじめて長安のめかけとなるため屋敷へ上がった折のものであろう、貧しげな小そでの色もあせていた。
橋を渡って、茫然と、歩むともない足どりで霧の中へ遠ざかってゆく。
「藤兵衛、お梶どのは兵馬の居どころをしってであろうか。長安は、そう信じて疑わぬようであったが……」
と、物陰に身をひそめていた進太郎が、お梶のうしろ姿へじっと凝視を送りながらいった。
「いや、長安は、だれかがお梶どのを救い出し

に、この城近くへ、または城中へまで入っていることを明らかに予期しているのです。黙っていてもその者が、やがてお梶さまを兵馬のところへ導いて行くものと信じているのです。若、それ、ご覧なされませ」

藤兵衛の指さしたのは、城の裏門を見渡す森の、ひときわ霧の濃い一郭であった。

何者ともしれぬ黒い影が、霧にまぎれてもうろうとうごめいている。

二人、三人……いや、いる！　十人、十五人……。

「もちろん、あいつらは長安の手のものでございます。ご覧なされませ。あいつらはお梶さまをつけてまいります。お梶さまの行きつくところに、兵馬も、雪絵さまもおられることを知りぬいているのです」

藤兵衛がいった。

「では、長安は、兵馬や雪絵どのの居どころをつきとめるためにお梶どのを許し、放ちやったのであろうか？」

「いいや、許しはいたしますまい。長安の怒りや憎しみが、あまりにもはげしければこそと思われます。長安の言葉をお聞きなされましたか？　殺しはせぬ、死ぬこともならぬ。生きていて責任をつぐなえ――そう、兄兵馬に申し伝えよと、くりかえしていたではございませんか。自分の怒りが静まるときはあっても、いの字の執念は終生つきまとうぞとも申しておりました。

若、この甲斐一国に関するかぎり、彼長安の勢威は驚くべきものがございます。彼はその力をもって、たちまち、甲斐一円にわたってきびしい監視の網目をはりめぐらしたでございましょう。兵馬一人ならばともかくも、少なくも雪絵さまをつれては、もはや絶対にその網目をくぐりぬけることはできますまい。

つまりは自由を束縛された囚人に等しいのでございます。そして、生きながらに長安の処罰をうけねばならないのでございます。いの字の執念に終生つきまとわれねばならないのでございます。

その、皮肉な、憎悪にみちた長安の憤怒の深さが、若、お分かりになりましょうか？」

「爺、お梶どのは死ぬぞ」

と、進太郎の声は悲しみに沈んでいた。

「はい、死ぬかもしれませぬ」

藤兵衛は静かに答えた。

「不憫な……あのように、不幸な人はない。爺、お梶どののことを思うと、わしは胸が張りさけるような気がする。あの人を、むざむざと死なしとうない」

「死なしてはなりませぬ」

「どうすればよいか」

「若、それには、まず、あの恐るべき真相を、絶対に、お梶さまに知らせてはならぬということでございます」

二人とも、はたと口をつぐんだ。

霧の中をよろめくように歩いてゆくお梶の周囲へ、物陰から現れた二、三の人影が、さっとお梶をとりかこむと、そのまま、素早い身ごなしで道をそれ、森の中へのまれるように姿を消した。

「若、はたして、まいりました。呂宋屋彦七と、その配下の者らしゅうございます。これで、お梶さまも無事に石堂峠へ行きつかれるでございましょう。ご覧なされませ、長安の手の者が、いち早く感づいてあとを追いはじめました」

「藤兵衛！」

と、進太郎がうめくようにいった。その目は、はげしい怒りをふくんで、お梶たちの消えた方角をにらんでいた。

「あの人数に、兵馬はいたか！」

「いいや、若」

「おのれ、兵馬め。とうとう救い出しにも来なんだか」

「兵馬の脳裏からは、とうにお梶さまのことは消えておりましょう。とうから、お梶さまを犠牲にする覚悟だったのです」
「うぬッ、わしは許さん。他の悪行はすべてゆるしても、肉親の妹をあざむき通し、犠牲にしてはばからぬ無慈悲さは断じて許さぬ」
「若、それをお梶さまに知らせてはなりませぬぞ。それを知れば、お梶さまは死にます」
藤兵衛は物静かに、しかし、きっぱりといい切った。

石堂峠にもうまもなくたどりつくという辺りであった。
お梶を抱きかかえるようにして、山道をひた走りに走ってきた呂宋屋彦七とその配下の者たちは、だしぬけに足をとめて、行く手の方をきっとにらんだ。
霧の中にぼうっと人影が立っている。
「だれだッ!?」
追っ手の連中は、濃霧を利用して巧みに後方へおきざりにしてしまったはずである。
「何者かッ、名乗れッ!」
「そういう声は、彦七殿ではないか……」
と、その人影はつかつかっとこちらへ歩みよってきた。
「わしだ。兵馬です」
「やあ、兵馬どのか!」
喜びに、わっとわき上がるような声であった。
「兵馬どの、無事か? うむ、何より!」
「して、雪絵さまは? あのお方は?」
と、せきこんだ声が問いかけてくる。
「雪絵どのはご無事です。一足先に、石堂峠へ着かれたはずです。わしは、今そのあとを追って峠へゆく途中であったが……」
いいかけて、ふとお梶を見たとたん、兵馬はまるで落雷にうたれでもしたように愕然とした。
「やっ、お梶じゃな! どうしたな、なんで、このような所へ?」
喜びのかけらもない、ただもう驚きに啞然としたような声であった。
「兄上さま、梶は追放になりました。御門の外で途方にくれておりますところへ、彦七殿が……」
「追放に? ただ、それだけですんだのか? 長安は、それほどのことでそなたを許したのか?」
「は、はい……とうから、死ぬことを覚悟しておりましたのに、死ぬことはならぬ、殺しはせぬ、兄にあって、わしの言葉をしかと伝えよと仰せられました」
「な、なんといったのじゃ。梶、長安はこのわしになんと伝えよといったのか。さあ、それを早くいえッ」
「死ぬことは許さぬ。生きながらえて、己の責任をはたせと、そう申されました」
「何? 死ぬことは許さぬと? このわしにそういったのか?」
「わしの怒りのとけることはあっても、いの字の執念は終生つきまとうぞ、とも申されました」
「な、な、何ッ?」
兵馬の顔色が変わった。
「それからなんと申したか?」
「それだけでございます。それだけ、しかと伝えよと申されました」
「それだけか? ほかには何もいわなんだか?」
「いいえ、それだけでございます。そう申せば、兄上さまには分かるはずだと申されました」
「ふん、いの字か……いの字の執念か……」
ふふふ……と、不敵にあざ笑うように顔をゆがめたが、その、心の底から五体をゆり動かすようにつきあげてくるはげしい恐怖をかくしようもなかった。
「ああ、やはりそうか? 長安め気付いていたのだ!」
兵馬は口の中でつぶやきながら、目に見える

ほど、がくがくっと肩先をふるわせた、いまにも、よろめき倒れるかと思うほどに……。

長安が、気付いていたとはどういう意味か？何を気付いていたというのだろうか？

それにしても、兵馬は、妹お梶の無事を見ながら、ただ一言の喜びさえいわずにしまった。

峠からさらに奥へ入って、ふと道を切れ林をぬけると、まるで巨浪のように巨岩の起伏している場所へ出る。

急場の雨をしのげるほどの洞穴がところどころにあるので、土地の猟師たちは山室、岩室等と呼び、山歩きの足だまりにすることもあるらしい。

雪絵父子を救い出してから、一同の落ち合う個所にきめられてあるのがこの山室であった。

雪絵父子をはじめとして、兵馬兄妹に彦七の一党も残らずそこに集まったのは、かれこれ正午に近かったころであったろう。

さっそく、岩室の一つに集合して、これからどうするか、善後策について相談がはじまった。

しかし、雪絵はただ一人、そっと席をはずして表へ出た。

兵馬の顔を見るのが耐えられなかったからである。

兵馬は雪絵と顔をあわせても平然としていた。唖然とするほど平然たるものであった。

さっき、彼が自分に対してどんなことをしかけたか、けろりと忘れてしまったのだろうか？それほど、あれほどのことをしても、なんでもない些細なことだと気にもとめないのか？

腕ずくでこの身をねじ伏せ、恥しらぬ指先であくどいまでに肌をまさぐり、すんでのところで手込めにまでしようとしたことを、なんでもないことと思っているのか？

よしんば、だれが許した許婚にせよ、それが、女にとって、どんなにはげしい屈辱であったか

分からぬほど、ぬけぬけしい神経の持ち主なのであろうか？

しかも、兵馬は山室の英雄であった。ほとんど不可能と思われていた雪絵の救い出しを、命がけでなしとげた手柄を、だれも認めないわけにはいかない。

当然のことといえばいえるが、兵馬は悠然と称賛の言葉をうけ笑っている。雪絵は、その兵馬の顔を見るのがいやだった。

今となっては、兵馬に助けられたということすらが、悲しい。なぜ、あのような男に助けられたのか？助けられれば、その恩義が目に見えない手枷足枷となってしめつけてこないではいまいに……。

雪絵は不快な思いをふり払うように、大きく息をしながら、霧にかすんでいる森の方を見やった。

さっき、自分を背負って送ってきてくれた進太郎は、その森まできて、引きかえしていったのだ。

「お大事に……」

と、微笑と一緒に、たった一言いいおいただけで……。

それが、まるで永遠の別離の瞬間でもあるように悲しかったことを、いまさらのようにまざまざと思い出す。

それは、進太郎の背に負われていたときの、夢のように心をときめかした幸せさの反動であったのだろうか。

「ああ、お会いしたい！　お目にかかりたい……」

会いたいと思う心がせきあげてくると、もう胸がはりさけるほど切なかった。

「雪絵さま……」

と、彦七がうやうやしく背後から歩みよってきた。

「父君がお呼びでございます。重大なお話があるそうで……」

雪絵の顔色が変わった。重大な話とは、兵馬との婚約のことに違いないと直感したからだ。

岩室には三郎太ただ一人が雪絵を待っていた。ほかの人たちは遠慮してどこかへ出ていったらしい。

「今後の身のふり方につき、いろいろと意見も出、相談もいたしたが、結局、わしは江戸へ立ちもどる。いや、江戸へもどらねばならんのだ」

と、三郎太は荒むしろの上にあぐらし、背を岩壁にもたせかけたままいった。

甲府城の土牢に幽閉され、連日連夜のはげしい苛責に責めさいなまれた体は、見るかげもなくげっそりやつれて、雪絵はその痛々しさを正視するさえ堪えがたい。

「たとえどうあろうとも、わしは己の犯した罪から逃げかくれしようとは思わぬ。わしが、黒川金山の山室から鳥の目源三を脱走させ、そのため、あたら部下の一人を死なせた罪はまぎれもないのじゃ。わしは江戸表へ到着後、ただちにそのことを訴え出、正しい裁きに服するつもりじゃ。しかし、雪絵、わしは、むざむざと長安をそのままにはさしておかんぞ。実はのう……」

と、三郎太は、落ちくぼんだ鋭い目を、じろっとあたりへ投げながら、雪絵をさしまねいてその耳へ口をよせた。

「わしは隠密じゃ」

「ええっ、な、なんと仰せられましたか、お父上さま?」

「幕閣ご重役の……さるお方の秘命をうけていった隠密なのじゃよ」

「まあ!」

「驚くのも無理ないが、長安の奸策によって、わしに甲府勤番のお指図が下ったとき、その、さるお方から、同時にひそかなお招きをうけ、この機を利用して長安の内情をさぐれ。とかくのうわさ高い長安に不正あるや否やそれをさぐれと内々のご沙汰をうけたのじゃ。わしが、易易として長安の命に服し、この甲府へまいったのも、実はそのことがあったからなのじゃ。雪絵、心得てもおろうが、絶対他言無用じゃぞ」

「は、はい、それはもう、お父上さま」

「わしが、息あるうちに江戸へ立ちもどりたいと熱望しているのもそのためじゃ。わしの甲府にあった日は短いが、しかし、長安の不正を指摘しうる幾つかの証拠をにぎっている。まず、江戸にもどってそれを報告しなければならぬ」

「分かりました、お父上さま。それなれば一刻もはよう、そして、わたくしも、お供させていただきます」

「いや、待て。そなたを伴うわけにはまいるまい」

「な、なぜでございます?」

「おそらく、甲州一円に、蟻のはい出るすきもないほど追っ手の手が回っているであろう。男のわし一人ならともかくも、女連れでは脱出すること、ほとんど不可能であろうと彦七どのが申される。わしも同意見じゃ」

「すりゃ、わたくしはどうなりますか?」

「皆の衆とあれこれ相談いたしたが……そなたは、兵馬どのと、しばらくこの山中にかくれているが最善であろうと思う。彦七どのから、月姫さまへ知らせの者がとんでいるげな。まもなく、姫から救いの人数がつくはずじゃ。それまで……兵馬どのは、きっと、そなたにとってはこよなき保護者となってくれるであろう」

三郎太は、青ざめた雪絵の顔へ優しい微笑をなげた。

「雪絵、そなたはあの仁がきらいか! いや、兵馬どのを、未来の夫に定める気はないか!」

「実は、雪絵。先日来、今日話そうか、明日申そうかと思いためらっているうちに、つい、うかうかと時を移してしまったのじゃが、彦七殿から折り入っての申し入れがあってのう。月姫

さまから、泉野兵馬どのをそなたの婿に定めてほしいと、さようご沙汰があったとか……」

三郎太は雪絵を見つめながらいう。

やっぱり、自分の恐れていたとおり、その話であったのかと、雪絵は、全身がぞくぞく冷えかたまってゆく思いであった。

「わしも、その話をきいた当時は、いささか不審でもあり、笑止に思うた。泉野は旧武田氏につかえた名ある家柄とはいえ、月姫さまから、突然、そなたの婿にと申しよこされたことを、いささか押しつけがましくも存じたのじゃ。

しかし、仮そめにも月姫さまの仰せとあっては、むげにお断りもなりかねるし、と心迷うていたのじゃが、さて、この度のわしら二人に対する兵馬どのの真心にはしみじみと打たれずにはおられなんだ。ましてや、そなたを救い出した彼の恩義は、忘却できるものではない。聞けば聞くほど、不可能とも思われるなしがたい難儀をおかしてそなたを救うてくれた真心は有り難くも、また頼もしいかぎりと思う。どうじゃ、雪絵。そうは思わぬか？」

そうは思わぬかと問われて、否とはだれが答えられよう。兵馬に救われた恩義を並々ならぬものに思えばこそ、まるで搾め木にかけられた思いでもだえているのだ。

「雪絵、わしは明朝、霧の晴れ間をまってここをたち、江戸へ向かう。ことによると、しばしの別れとなるかもしれん。実は、わしは、とうから話そう、打ち明けようと思いつつ、いや、まだ幼い、まだ早い……とのばしのばしてきたことがある。とはいえ、そなたも、人の妻に求められる時期がまいったのじゃ。もはや子供ではない。いや、わしの手元をはなれ、空高く羽ばたいて去ってゆく身かもしれん……よい折じゃと思う。話して聞かせることがある故、もそっとよれ」

三郎太は、そういいながら、しみじみとした目つきで雪絵を見た。

「察してもおろうが、話と申すのは、月姫さまのことじゃ。そなたが、幼いころから、何かにつけて不審に思い、わしや亡き母者人にあれこれ尋ねかけてきたそのことじゃ。さあ、このことを話して聞かせる。もそっとよれ」

雪絵は思わずひざ頭をがくがくっと震わせた。

長年、心をとざしていた疑惑の雲が晴れるのだという感動よりも、むしろ、なぜ急に父がそんなことをいい出したのか、それを不審に思う心がはげしかった。

ことによったら、父は、これが、親子の永遠の別離になることを、何か予感でもしているのではあるまいか……。

「月姫さまのご素姓については、わしもよくは知らん。北国のさる大名の姫君が、旅の途中、八ガ岳にすむ野武士の群れにかどわかされ、やがては彼らの女首領となったものだというものもあるし、いや、遠く源平の昔、戦い敗れて屋島の海から逃れてきた平氏のさる姫君の末裔じゃなどともうわさする者がある。しかし、わしの語ろうと思うのはそのようなことではない。そなたとかかわりある、世にも奇妙なめぐり合わせについてじゃ」

「今から数えて十八年前の昔、文禄の三年と申せば、天下はまだ豊臣氏の掌中にあり、表向き太平の波おだやかに見えていて、その実、何か物さわがしい年であった。わしが、遠国目付、隠密回りの役を仰せつかり、主として甲、信二州に潜入してひそかに地勢、国情を調査して歩き回っていたころじゃ。

忘れもせん、その年の秋もようやく深まったころ、わしは諏訪から八ガ岳を東へ越え、南佐久へ出る山旅をしたことがある。あくまで人目を避けねばならん役目柄、一夜、月明を利しただ一人、ひそかに諏訪をたったのじゃが、ようやく八ガ岳の山懐深くわけ入ったのは、もはや

深更であったであろう。

と——どこからともなく、突然聞こえてきたのは笛の音であった……」

三郎太はいいながら、ふと目を閉じた。

何か、しみじみとした感懐めいたものが、その表情をさっとかすめてゆく。

「この人里絶えた深山に、笛の音をきくことはいぶかしいこともあるものよ。この八ガ岳の奥深くには、昔から妖怪が住みついていると伝えきくが、さては、何か物の怪のなせるわざかと、わしは、ことさらまゆにつばし、気をひきしめて、ひたすら道を急いでいったが、笛の音は、まるでわしにつきまとうかのごとく、しかも、刻一刻と高く、美しく響いてくる。

その音のたぐいない美しさ、心にしみ入るような懐かしさ……わしは、のう。この世に、これほどの美しい音色というものがあったのかと、いつとはなしに、しらずしらずその音に引きつけられてしまっていたらしい。心を引かれ、足を誘われ、ついうかうかと迷いこんだらしく、はたとその笛の音がやんだとき、わしは、道もない未知の、深い深い森の中にたたずんでいたのじゃ。そして、笛の音の絶えたあたりに、もうろうと幻のように立っている女人の姿に目をみはりながらのう。

わしは、そのとき聞いた笛の音を、この世にたぐいない美しさと申したが、そこに立っている女人の美しさ、気品の高さは、とてもこの世の者とは思われぬほどであった。

雪絵。そなたは、そのときの父のなしたふるまいを、愚かしいといって笑うであろうか？いや、笑うまいのう。愚かではあっても、それがのっぴきならぬ運命というものであったことは分かってくれるであろうから……。

わしは、その女人の美しさ、清らかさに魅入られてしまい、ほとんど夢心地のうちに、その人の誘うがまま、とある洞窟の中にかくれて、三日三夜を共にすごしたのじゃ。

美しく気品高いその人は、また、心やさしく情の深い人でもあった。白々と清らげな肌の下には熱い血潮の通っている、二十を幾つも越さぬ人間の娘であったのじゃ。

名前は花姫という、花とお呼びくださいと語っただけで、あとは何を問うても答えない。

いかなる素姓のものか、なんでこのように深山に一人住むのかと、問い尋ねても、ただ、絵のように、優しく美しくほほえむだけで答えようとはせぬ。

ふしぎな娘、いぶかしい女と怪しみながらも、わしはその人の情におぼれて、つい、うかうかと三日三夜をすごしてしまったのじゃ。

そして四日目の朝、わしが深い眠りからさめたとき、その花姫と名乗った人の姿はもうそばにはなかった。幻のように消えてしまって、二度とわしのもとへは帰ってこなかったのじゃ……」

「わしにとっては、美しくもはかない旅路の夢であった。どれほどの深い思いがあろうとも、夢と思いあきらめるよりほか仕方があるまい。事実、当時わしに課せられた御用の筋は極めて繁多。八ガ岳の笛の音を、忘れたではないが仕事の多忙さに追われて、ついうかうかと月日をすごしたのじゃ。

しかし、その夜の思い出が、わしの胸から消えさったわけではない。いや、むしろ、時をへるにつれ、次第に八ガ岳への思慕、花姫への思いが病のように深まり重なっていったのじゃ。

会いたい、せめて、もう一度、その顔だけでも見たい。その声だけでも聞きたい……と、旅寝の草まくらにやるせなくもだえたことが、幾度あったことか。

雪絵。愚かしい父を笑うてくれるな。今こそ、わしは、すべてを懺悔するつもりで語っているのじゃ」

三郎太は目を閉じたままいった。

長年、胸の奥に秘めていた罪を、今、娘の前にのこらずさらけ出して許しを請おうとしている父親の苦悶がありありと感じられる。

「その、次の年……夏が終わり、ようやく秋の声をきこうとするころであった。わしは、また、要務をおびて甲州路へふみ入り、諏訪のほとりにいったことがあった。

もはや、そのままに、そこを素通りはできぬ、はげしいもだえに責めたてられ、とび立つ思いで八ガ岳へ登ったのじゃ。

一年前と、同じ道を、同じように月明かりをふみながら、あの妙なる笛の音が、今聞こえてくるか、今響くかと胸をとどろかせながらのう。

そして、わしは、その笛の音をきき、それに誘い導かれながら、道もない密林の奥の、あの洞窟に立ち至り、そこで、一年ぶりに花姫に再会したわけじゃ。怪しく魅入られたように思いをこがしていたふしぎな美女にのう。

しかし、その喜びは同時に悲しみであったのじゃ。花姫は、片手に、生後まもない赤子を抱きながら、瀕死の病床にあえぎもだえていたからじゃ。

花姫は、涙にぬれた目で、じいっとわしを見つめながらかき口説くように申したぞ。

——お待ちしておりました。きっとおいでくださると信じ、お待ちしておりました。さあ、あなたさま、この子を抱いてやってくださいまし。この子は、あなたさまのお子でございます。あなたさまとわたくしの、命と命をつなぐ新しい命でございます。わたくしは、まもなくあの世へ旅立つでございましょう。この、不幸な子を、なにとぞよろしくお願いいたします——

くりかえしくりかえし申してのう。そして、ただもう、それをいい、その子をわしに託したいばかりに生きながらえていたごとく、やがて、眠るように息をひきとったのじゃ」

三郎太は、霧の流れゆく洞窟の外へじいっと目をやった。まるで、その霧の向こうに、花姫の幻でも見えるように……。

「雪絵。わしが、月姫さまにはじめてお会いしたのがそのときであったのじゃよ。月姫さまは、花姫のそばに影のようにじっと立ちながら、かわいそうな娘……とたった一言切なげにつぶやいて、そのまま声もなく泣いておられたのじゃ」

その夜、三郎太は、月明かりに導かれて寂しくあの世へ旅立った花姫のなきがらを見守って通夜しながら、月姫とただ二人きり夜もすがら語りあかした。

月姫とその子花姫が、これよりずっと奥の山中に庵をむすんでただ二人きり住んでいることや、その配下に属する一族徒党の者が、この八ガ岳一帯におびただしく山住まいしていることなどを、月姫が口重げに物語ったのもそのときのことであった。

それから、その家系は常に女性が頭領であること、そして、その後継をうるために、頭領たる女性は、その生涯のある時期に、ただ一度、里人の中からこれはと思う男子を選んで、月明の夜、笛をふいて山中へ誘いこみ、幾夜かの契りをむすぶ定めになっていることなども、それとはなしに月姫の口から語られた。

「三郎太どの。花姫があなたをこの洞窟にさそったのも、その定めにしたがい、世継ぎをうるために生涯にただ幾日かの愛を求め契りをむすぶためでした。二度と二人が会うことはなく、会ってはならないきびしい定めになっているのです」

月姫はいった。

「ところが、花姫はその禁制を破ろうとしました。生まれたわが子を、里に下ろして、そのまま世俗並みの娘に育て、世俗並みの女で死なせたいというのです。この八ガ岳の支配者にはしたくない。女の本当の幸せは、世俗の女の道をたどる平凡な生き方の中にだけあると気がついた、月姫の系図は自分をもって打ちきらせてほ

しい——日ごろは、すなおで口答え一つしたことのないあの子が、このことに関するかぎり言いはってきかないのです。

三郎太どの、わたしは、言葉をきびしくして山のおきてを守るべきことをいい聞かせておりましたが、しかし、あの子の病が重なり、死期の近づくのを知って、もはや反対する気力はうせました。あの子のいうとおり、生涯にたった一つの必死の願いをききとどけてやらずにはいられなくなったのです。

三郎太どの、頼みます。不幸な花姫のために、そして、この子のためにどうぞ頼みます」

月姫はそういって、涙をかくすように顔をそむけた。

「雪絵、もうわかっているであろうな？　その、花姫の産んだ子供というのがそなた、雪絵だったのじゃ」

と、三郎太はここまで語って、ほっと大きく吐息した。

「わしが、そなたをひきとって、わが子として育てると、固く約束したこともちろんじゃ。わしら夫婦の間には子宝がなかった故、そのことを、わしから聞いた妻も、むしろ、天からのさずかりもののように喜んで、己の産んだ子としていつくしみ育てたことは、だれよりもよくそなたが知ってであろうのう。

やがて、月姫さまからの指令をうけ、呂宋屋彦七が牛込仙勝寺隣の屋敷跡を買いとり、あの能楽堂を建てたりしたが、それはもう、そなたよく知ってのとおり、月姫さまが、せめて年に一度、そなたの誕生の日に会って、すこやかに成長するそなたの姿を見たいと申された、そのたってのご希望からであったのじゃ。

いや待て、雪絵。もう一言、話すことがある。そなたの実の母、すなわち八ガ岳の花姫と、さらに、その花姫の父なる人のことを話さねばならぬ」

「雪絵、よく聞きなさい」

そういった三郎太の声や姿には、心なしか居ずまいを正したという印象があった。

「元亀三年——すなわち、今からいえばちょうど四十年前じゃ。越後の上杉謙信が一万余の大軍をひきいて突如川中島に出陣したのはその年の四月。その報に接し、武田家の急先鋒として急遽川中島にはせむかったのは、高遠の城主であった伊那四郎勝頼公であったのじゃ。

ひきつれた手兵わずかに八百余騎。しかも、なぜか、目前に武田勢を一瞥するや、謙信は一万余の大軍をひきいながら、突然風のごとく陣をひいて越後に帰ってしまったのじゃ。

これが、さしも名高い上杉、武田両家の、川中島をさしはさんでの、華々しくも長々とつづいた合戦の最後のものとなったのじゃ。信玄公はその翌年病没されたのじゃからな……。

さて、その年、勝頼公は二十八歳の血気盛んな青年大将であられたが、謙信のため肩すかしを食い、一戦もまじえることのできなかった鬱憤がおありだったからであろう。八百余騎をひきいて高遠へ帰る途中、旗本の将卒数十名を供につれて諏訪から突如道を変え八ガ岳山麓にいたって、そこに数日陣し、狩りくらに鬱を散じられたということなのじゃ。

それが八ガ岳のどの辺りの地点であるか、また、その狩りの模様がどのようなものであったか、わしは何もしらぬ。ただ一つ、分かっていることは、その夜、深更にいたって、どこからともなく、ふしぎな笛の音が聞こえてきたということじゃ。

たれぞ、将卒の中に心得ある者が、月明かりにうかれ興をもよおしてのゆかしい笛の音であろうと、おおかたの者はそれ以上不審とは思わず心にもとめなんだようであったが、その中でただ一人奇妙なほど心をそそられ、知らずしらず陣屋を立ち出てさまよい出していかれたのは勝頼公であったのじゃ。しかも、笛の音に魂を

うばわれ、ひそかに森の奥へ消えてゆくそのお姿に気づいた者がただ一人もなかったという。

勝頼公は、やがて、その森の奥で一人のふしぎな女性に出会われた。この世のものとも思われず臈たけて美しい——明らかにいえば、それは月姫さまその人であったのじゃ。

勝頼公は、それから数夜、その狩り場に陣しておられる間中、毎夜のように、ひそかにぬけ出し、笛の音に導かれては森にわけ入って月姫さまにお会いなされたという。月姫さまは、わが夫として、武田四郎勝頼公を選ばれたのじゃ。そして、その胤をうけて産みおとされたのが、雪絵、そなたの産みの母、花姫だったのじゃ。

雪絵、今こそ、あきらかに申すが、そなたの身内には武田家の血が流れている。四郎勝頼公はそなたのおん祖父でいらせられるのじゃ。そなたこそ、武田氏の嫡流なのじゃ！」

雪絵は、化石したように顔をこわばらせてうつむいている。うすうすは察していないこともなかったが、まざまざと、父の口から秘密の数数をきかされては、さすがに、娘心に余る衝動であった。

その顔を見つめながら、三郎太は慈愛にみちた声でいった。

「そなたの生母花姫は、そなたを市井の平凡な女として生涯をおくらせてくれと望んでいた、わしも、そなたを八ガ岳へもどそうとはつゆ思わぬ。しかし、その身内を流れている血をおろそかにすることもできん。雪絵、月姫さまは、そなたが兵馬どのを婿に迎え、武田家の遺臣をようしてその頭首になることを望んでおられるようじゃぞ」

「月姫さまはそなたの身をひどく案じておいでじゃ。一時も早く婿を迎え身をかためることを望んでおいでときく。その仰せもみだりにはなしがたいし、また、兵馬どののわしら親子に対する恩義、さらに、そなたに対するひたむきな

誠意も粗略にはなしがたい。わしは、彦七、兵馬ご両所に向かって、そなたを兵馬どのにめあわせよと申された月姫さまのお言葉をつつしんでおうけしたのじゃ」

三郎太は、かつて八ガ岳の森の中からわが腕にだいてひそかに江戸へ運び、十八歳の今日まで手塩にかけていつくしみ育ててきたわが娘を、いまさらのようにしみじみとした、慈愛の目で見つめていた。

「その縁を、そなたも喜んでくれればわしもうれしい。この濃霧も夜半までには晴れるであろう。さすれば明早朝、ここをたって一人、江戸へ行く。そなたを心やすく兵馬どのに託してのう。兵馬どのは、そなたにとってまたなき良い保護者となってくれるであろう。そして、やがて、月姫さまのご一行に連絡できるはずじゃ。そなたたちの身のふりかたは、月姫さまのおぼし召しにおまかせするのが何よりであろう。どうじゃ、雪絵？　兵馬どのをどう思うか？」

雪絵は声もなくうなだれていた。

今、父から聞かされた、この身にまつわるふしぎな秘密が、その胸を重くしめつけている。自分を産みおとしてそのままこの世をさったという哀れな花姫のこと、義理の子を、実の子以上にいつくしんで育ててくれ、つい、今しがたまで生母とばかり信じて疑わなかった懐かしい義理の母のこと、そして、武田勝頼につながるという、自分の体内を流れているふしぎな縁の血潮のこと——何か、ぼうとして夢見る心地ではあったが、ただ一つ、雪絵の心の中に、終始はっきりと脈うっていたのは、兵馬への憎悪の情であった。

とはいってもはっきりした理由はあげられない。彼からうけた恩義にくらべたら、彼をいやだと拒否するたしかな理由がない。

さっき、霧にまぎれて、手込めにしようとした理不尽さえ、月姫の許しをえてわが妻と思い定めていた女を、情に激して思わず手荒なこと

をしたのだともいえる。それが、男の情というものだというのかもしれない。

理由はない。理由はなしに、雪絵は、ただ、兵馬がいやで仕方がなかったのだ。

「しかし、雪絵。何事も、そなたの心まかせじゃぞ」

と、父の優しい目は、雪絵の心の中までさぐるように、じっと見つめながらいった。

「わしは、彦七、兵馬のご両所に、月姫さまのお言葉をおうけする、兵馬どのとそなたの縁談を承知したとは答えたが、しかし、そなたの意志をたしかめるため、明朝まで最後の返事を保留してあるのじゃ。そなたが承知ならば、わしは何もいわずに江戸へ旅立つし、もし、そなたが不承知ならば、明朝改めて破約する約束をしてあるのじゃ。

のう、雪絵。よく、考えてみよ。生涯の大事じゃ。今宵一夜、よう考えて、明朝わしに返事をきかせてくれ。そなたのいやなことを、無理には強いぬ。明朝改めて破約するまでじゃ。よいな、分かったのう」

心の奥を見抜いたように優しくいわれ、雪絵は思わず胸迫って、ほろりと涙をひざへおとした。

「少し、風が出たのう。これで大丈夫、明日は晴れるであろう」

と、三郎太は洞窟の口に立って、あわただしくうず巻く霧の流れに目をやった。

「いずれにしても、わしは一人江戸にたつ。しばしの別れになろうが、雪絵、体を大事にせいよ」

「は、はい。父上さま……」

そばに立った雪絵は、胸が迫ったような涙のうるんだ目を伏せている。

「おう、そうそう。それについて、もう一言申しのこしておかねばならんことがあった。そなたの実母花姫から、そなたに残されたたった一つの形見の品じゃ」

「まあ、実の母上さまがわたくしに下されました形見のお品とは？」

「しっ、声が高い」

と、三郎太はたしなめながら、表の気配へじっと目を配った。

「武田勝頼公が笛の音にひかれて八ガ岳の山懐へ分け入られ、ひそかに月姫さまと数夜の契りをむすばれた折に、もし、吾子が生まれたならば、他日わしが甲州のあるじとなったとき、これを証拠に訴え出よと、形見のしるしに残されたと伝える品じゃ。月姫さまより花姫の手に渡り、さらに花姫がその臨終の折、後日そなたが成人してめでとう嫁ぎ行く日を待って、母の形見としてその品を渡してくれよと、くれぐれもいいのこしていってのう」

「その品は？　父上さま、その形見の品と申されますのは？」

「まあ、待て、雪絵。その品は今ここにはない。虫がしらすか、江戸をたつとき、わしはひそかにその品を所持してまいったが、事情あって、今ここにはないのじゃ」

「お懐かしゅうございます。一目でも見とうございます」

「ここにはないが、さほど遠くない所にかくしてある。実はのう、黒川金山の山室から、鳥の目源三という男を逃がしてやるとき、誤って部下の一人を死なしてしまった。しょせん、わしはその罪を負わねばならぬが、そのとき、とっさに心を苦しめたのは、そなたに伝えるべきその品のことであった。その品を身につけたまま捕らえられ、それが長安の手に入っては、花姫の遺志もむなしゅうなる——とっさに思いついて、わしは、廃坑の中にそれをかくしたのじゃ」

「では、そこまで行けば、その品が拝見できるのでございますか？」

「必ずある。だれ一人、気がつくはずはない。よいか、雪絵。しかと覚えておけ。黒川金山の、

かつて十八番坑と呼ばれた廃坑の奥じゃぞ。横穴が一度行きづまってから下へおりている。その行きづまり個所の右手、高い所を指でさぐれば岩の透き間にその品を見つけ出すであろう。雪絵、それは守り袋じゃ。勝頼公が、かつて身につけておられた守り袋なのじゃ。よいな、分かったな?」

「は、はい。分かりました」

「もしものときは、きっとそこへ行き、それを手に入れてみよ。きっとだぞ」

「は、はい。父上さま……」

二人ははたと口をつぐんだ。

さあっと吹きよせてきた風が、霧の間から、落ち葉をちらちらと降らせてくる。

その落ち葉の中に白々とさえてひるがえるものが混じっていた。白紙らしい。

怪しむように目をすえた雪絵が、

「まあ、父上さま、文字が……」

と、思わず声を高くして叫んでいた。

「いの字! いの字と書いてございますッ」

けたたましい雪絵の声をきいて、霧の中から、ふらふらっと現れ出、はせ集まってきたのは彦七、兵馬兄妹であった。

ぐるっととりまいた目が、いっせいに雪絵の手にした紙切れの上にくぎ付けになっている。

——いの字。

と、挑戦するように、たったそれだけ書いてあった。

「しかも、まだ、墨がかわききっていない」

「そういえば、さっきから、この付近を、ひっそりと歩き回る奇妙な足音をきいていた」

「足音ばかりではない。向こうの森陰に、霧の間からちらっと怪しい人影を見たぞ」

紙切れをのぞきこんだ顔が、みるみる緊張にこわばってゆくようであった。

「お梶、長安は、いの字の執念を忘れるなと、さようこの兵馬に伝えよといったのだな?」

「はいはい、兄上さま。たしかに申しました。わしの怒りがさめるときがあっても、いの字の執念は生涯つきまとうであろうと、そうおっしゃいました」

「あいつめ、挑戦してきおったなッ。いの字が、わしらをつけねらっているのだ。やつは、霧の中にかくれてこっちをねらっている。近くにいる。近くにいるから、じいっとねこのようにねらっているに違いないのだ」

兵馬がうめくようにいった。

「なんの目的で? わしらの命をうばうためか?」

「分からぬ。何をするかしれたものではない。しかし、おそらく、雪絵どのを、また、かどわかして甲府へつれもどそうとするであろう」

「うぬッ、そうやすやすとさせてたまるか」

彦七が、目をぎょろっとむき出して、はげしく叱咤するようにいった。

「面白い、ちょうどよい。あの恨み重なる、憎憎しい敵、いの字をたたっ斬って後難を断つ絶好の機会だ。奸智にたけたきゃつめには、これまでさんざん苦杯をなめさせられているが、何かしかけてくるためには姿を現さずばなるまい。それが機会だ。断じて片付けてしまわねばならん」

「しかし、妙じゃのう」

と、ふと口をはさんだのは三郎太であった。

「この紙切れはまことにいの字の仕業であろうか?」

「何を仰せられるのです。いの字でなくて、だれの仕業だとおっしゃるのですか?」

「いや、わしは、伝えきくのにいの字なる人物の、常々のやり口とあまりに違うことを不審に思うているのじゃ。奸智にたけて陰険無比、やみにひそんでいて敵の不意をつくことのみ心がけているといわれるいの字が、なんのためにこのような、予告めいた紙切れをよこしたのでござろうか。予告すれば仕事はやりづらくなるは

ずです。きゃつは、かつてそのようなまずいことはただの一度もしたことはないはずだが……」
「いや、三郎太さま」
と、兵馬が陰気な声でいった。
「長安の言葉を思い出してください。いの字の執念……と申しておりましょう。いの字は、おそらく、雪絵どのの責任を負わされていたに違いなく、それをむざむざと裏をかかれた無念さと、敵意が、執念になってこの兵馬に向けられているに違いありませぬ。きゃつは、わたくしを、そしてわれわれ一党を、この手段により脅迫し、じりじりと追いつめてむごい復讐をする所存に違いございませぬ」
霧のかげりが日の傾きかけてきたことを知らせていた。
どこか、森の奥辺りで梟が鳴いている。霧にとざされた森の暗さが、その夜鳥に時刻を間違えさせたのかもしれない。無理もないと思うほど、森の奥は暗かった。
それを、一番耳ざとく聞きつけたのは、洞窟の警戒のため、とある岩角に突っ立っていた兵馬であった。
梟は、ほうほう、と二声短く鳴いて、ちょっと間をおいてから、さらにほう……と一声長く尾をひいて鳴いた。
ほうほう……ほう……
兵馬は、軽く舌打ちしながらあたりを見回した。少しはなれた所に、だれか淡い人影が一つ見えているだけで、ほかにはだれ一人いない。
彼は、とっさに岩角から飛びおりて、小走りに森の方へ歩いていった。こそとも物音をきかせぬ、忍びのときと同じような慎重な、そして素早い歩き方であった。
ほうほう……ほう……
と、また梟がなく。
兵馬は、耳を澄まして方角をさだめると、そのまま、つかつかと森の中へ踏みこんだ。

ほうほう……と、今度鳴いた梟の声は、もうすぐ間近であった。
足をとめた兵馬は、その方角をじいっとのぞきながら、口先へ手をかざし、
ほうほう……ほう……
と、梟の鳴きまねをした。
「兵馬さんだね?」
と、間髪を入れず、太いだみ声が答えるように聞こえてきた。
「うむ。おれだ。そういう声は、青助だな?」
兵馬は、暗い向こうをにらむようにして突っ立っていた。
「約束の合図を聞いたからきた。青助、なんの用か?」
「兵馬さん、この霧は夜になると薄れてきて、月が高く登るころにゃアやがて晴れるぜ。霧がはれては、そうそうお前さんのそばへは近寄れめえ。人目について困るのはお前さんの方だからよ。だから、今のうちにゆっくり、今夜の打ち合わせをしておきたかったんだ」
「早く話せ。この森の辺りには、見張りの目が光っているのだ」
「分かっているよ。兵馬さん、心配することはねえやな。悪事にかけちゃア、おれの方が一枚上なんだ」
姿を見せない青助が、声だけでせせら笑った。
「兵馬さん、今朝方の約束は忘れめえな?」
「おれも男だ。約束したことは忘れはせん」
「銭を投げて勝負をきめた、あのことも、よも忘れはしめえな?」
「雪絵を貴様にくれてやることであろう?」
「よしッ、覚えていてくれて結構だった。さすが、兵馬さんだ。そこで、話というのは、約束どおり、雪絵を今夜このおれに引き渡してもらいてえというわけさ。この青助が、ほれてほれてほれ抜いた女なんだ。何を犠牲にしても手に入れずにはおかねえと心に誓った女なんだ。その雪絵を、今夜は、真実、この腕の中にだきし

めて、金輪際おれの女にしてしまわにゃアおかねえのだ。いいんだねえ、兵馬さん？」

「兵馬さん、約束どおり、おれのいうとおりにうまくやってくれるだろうね」

と、青助の声が押しかぶせるようにいった。

「なに、むずかしいことじゃねえのさ。あんたは、雪絵のお婿さんときまったお人だ。さっき、三郎太から月姫さまのおぼし召しをお受けする、雪絵と兵馬さんとの縁組みを承知したと、はっきり返事があったじゃねえか。へへへ……おれア、なんだって見通しなんだ、地獄耳なんだよ。

亭主になるんだ。雪絵に対してどんなことだってできるわけだし、また、何をしたって怪しまれはしねえ。

そこで、今夜、あんたが雪絵を誘い出してきて、しっかりと、おれのこの手に渡してもらいてえね。時刻は、月が大菩薩の頂にかかるのを合図にしよう。霧がかかっていたら、例の梟の声が合図になるんだ。場所は、この森を向こうへ出はずれた岩山の鼻だぜ」

「雪絵を引き渡したあと、どうなるのだ？　その後、雪絵をどうする気だ？」

と、陰気な兵馬の声が静かに問いかえした。

「雪絵をどうする？　ふふふ……どうしようと心配はいらねえよ。あんたは、ただ、黙って雪絵を誘い出してきて、おれのこの手に渡してくれりゃそれでいいんだ。女なんてもなア、一度男に抱かれて寝てしまえば、もうそれだけのものなんだ。おれア、雪絵を女房にする。それでおれも本望だよ。本当のところ、もう武田家の秘宝もへったくれも、何もねえんだ。どうでもいいのさ。雪絵さえ女房にしたら、そんなものなア、あんたにそっくり進呈しますぜ。もう、絶対、じゃましねえから安心しな。

どうだい、兵馬さん。雪絵のことは、しかと

引きうけてくれますかい？」

「よし、分かった」

と、兵馬のむっとしたような声が低く答えた。

「今宵、月が大菩薩の頂にかかるころ。森を出はずれた岩山で……」

「きっとだな、兵馬さん」

「くどいやつだ。おれも男だ」

ふふふ……と、勝ちほこったような青助の笑い声が、樹間に低くこだましながら、次第に向こうへ遠ざかってゆく。

兵馬が、ちっ！　とはげしく舌打ちした。

森の奥を見つめているその顔が、はげしい憎悪をこめてゆがんでいた。ゆがんでいる顔が、嘲笑を含んでいるようにも見える。敵意と殺気をむき出しにした、ぞっとするような表情であった。

やがて、兵馬はこっそりと森をぬけ出し、何食わぬ顔つきで洞窟の方へ歩き出した。

と——

出しぬけに、目前の霧の間からちかづいてきた人影が、彼の前にひたと足をとめた。

「あ、兄上さま！」

と、声を忍ばせて呼んだのはお梶であった。

「おう、梶ではないか。どうしたのだ？」

「どうしたとは、わたくしからおたずねしたいことでございます。兄上さま、今あの森の中で、どなたに会っておいでしたか？」

「な、何ッ？」

「存じております。梶は、奇妙な兄上さまのご挙動を怪しんで、そっとお跡をつけてまいったのでございます。皆聞いておりました。あ、兄上さまッ、あ、あれはどなたです？　なんのご相談ですかッ!?」

「梶、聞いたか」

「聞きました。兄上さま、残らず聞きましてございますッ」

「あの声の相手が、青助だということも分かっ

たか？」
「分かりました。何もかも分かりました。兄上さまッ、雪、雪絵さまをなんとあそばすおつもりですか？　さあ、お返事を伺いましょう。お返事を伺いとうございますッ」
と、つめよってくるお梶の形相には、事と次第によっては、兄であろうとただはおかない、必死の思いがこめられていた。
「梶、聞かすことがある。寄れ。絶対、人に聞かれてはならぬことじゃ」
兵馬は青白い顔を、お梶の耳のそばまで近々とよせてきた。
「梶、あの青助を何者じゃと思うか？」
「え、何者とは？」
「あいつめは、水町家の中間奉公はしていたなれど、もとを洗えば、北条家召し抱えの乱波諜者のなれのはてなのだ。しかも、驚くまいぞ。梶、あいつこそは、今大久保長安に使われて犬馬の労をいとわぬ不敵な曲者、あのいの字と名乗る不審な人物の正体なのじゃぞ」
「ええっ、あ、兄上さまッ。そ、それは？」
「疑うのも無理ないが、よく胸に手をおいて考えてみい。長安は、いの字の執念を忘れるなと申しよこした。先刻は、いの字とかいた威嚇めいた白紙が降ってきた。何者か、この辺りを徘徊するやつがいる。つまりはいの字だ。そして、われら以外、この辺りに、青助のほか何者を見かけたというのか。分かるか、梶？」
「は、はいッ」
「しかも、あいつは、わしが、この峠までくる途中、そなたとおうたそれより以前、忽然とわしの前へあらわれて、あらゆる威嚇的言辞を弄し、すなおに雪絵どのをひきわたせと強要したのじゃ。それ以外に、われら兄妹の助かる道はないぞと、さんざんにおどしたのじゃ。わしが、こやつこそいの字じゃと直感したのはその瞬間であった。考えてもみい。雪絵どのを城中から助け出し、この山中へ逃れくるまで、ひたとその

行方をつきとめ、執拗にまといついてくるほどのことのできるやつが、いの字をおいてほかにあると思うか？」
「は、はい。分かりました。兄上さま、やっと、ふにおちかけてまいりました」
「のう、梶。そこで、わしはとっさに一計を案じたのじゃ。この機をとらえて、その神出鬼没、これまでわれらをさんざん悩ましたいの字の正体をあばき、天誅を加えてくれようとな。分かるのう、梶？」
「は、はい。分かります。分かりましてございます」
「あいつは、たった今しがた、またわしを呼びつけて、雪絵どのを引きわたせと強要した。今だ。この機会じゃ。この機会を捕らえて、あいつめを葬りさるのじゃ。梶、それにつけても、そなたに一臂の助力を頼むぞ」
「まあ、わたくしに？」
「仮にも雪絵どのを、いの字に手渡すことなどできはせん」
「はいッ、そ、それはなりませぬ」
「梶、そなたが雪絵どのの身代わりとなっていの字のところへ……」
「ええっ！」
と、さすがにお梶の声は高かった。
「兄上さま、わたくしが、雪絵さまのお身代わりとなっていの字のところへまいるのでございますか？」
「といっても、すべては一時の策略じゃ。月はあっても、深山の夜、被衣に顔をかくせばうかとは感づかれまい」
「いの字に会ってどういたすのでございますか？」
「わしが手をひいて、あいつの前までゆく。あいつはおそらく手をのべて被衣をはぐであろう。とたん、抜きはなったままかくしもっていた匕首で、すかさずあいつめの胸板を突けッ。

分かったか?」
「は、はい……」
「突け、突け。間髪を入れずしゃにむにつくのだ。いの字と思うな。六尺豊かな形相に恐れるな。ただ、突けッ。われら兄妹の敵。雪絵どのの敵。皆の敵と思って、まっしぐらにただ突けッ」
「はい。は、はい……」
「瞬間、わしがあいつの背後から抜き打ちをくれる。ひきょうのようだが、相手は、名だたる曲者じゃ。六尺豊かな膂力といい、奸智にたけた不敵さといい、その場を去らせず、しかと討ちとって、後日に悔いをのこさぬためにはやむをえぬ。分かったか、梶?」
「はい、分かりました。兄上さま、よく分かりましてございます」
「きっとやるか? きっと、命にかけていの字を葬る決意をするか?」
「いたします。きっといたします。いえ、兄上さま……それほどの深いお考えあってのこととは知らず、さきほどの密談を盗み聞きいたし、一時たりとも、兄上さまを怪しみ疑いましたこと、まことにあさましく、お恥ずかしゅうございます」
「いやいや、それもこれも、皆旧武田家へのご恩報じ、月姫さま、雪絵どのへの節をつくさん思いからじゃ。しかし、梶、くれぐれもさとられるな。敵を討るにはまず味方を討らねばならん。雪絵どのにも、もちろんしゃべるな」
「はい、よく分かりました。決して、どなたにも気どられはいたしませぬ」
「では、しかと頼んだぞ。時刻がくるまで、さりげなくしていよ」
いいすてて、兵馬は、そのままのまれるように霧の中へ消えさっていった。
その日、甲斐の山脈を覆って朝からたちこめていたさしもの濃霧も、青助が予言したように、日没のころから次第に薄れてゆき、東の方大菩薩嶺の辺りに月の出を前触れするほのかな光がさし昇りはじめたころには、わずかに淡く尾をひいた狭霧が、石堂峠の一郭を覆って消えのこっているだけであった。

と——
例の、三郎太が占めている洞窟の中で、突然奇妙なことが起こったのはちょうどそのころのことであった。
洞窟には三郎太ただ一人、じっと目をとじて何か考えに沈んでいた。雪絵は、今しがた、お梶に呼ばれてそっと外へ出ていったところである。お梶が、雪絵になりすますには、その衣類を借用する必要があったからだ。
「う?!」
と、三郎太が、夢からさめたようにかっと目を見開いた。
いつの間にか、その眼前に真っ黒な人影が忽然と立ちはだかったからである。
月の出前の暗がりがあたりをとざしていた。
「だれじゃというにッ!」
と、三郎太はもう一度詰問するように叱咤した。
鋭く叫ばないのは、まだ敵とも味方とも、しかと判じかねるためらいがそうさせたのであろう。
洞窟の入り口に背を向けて、光を背負ったその人影は、ただ黒々と巨大に見えた。
「お静かに……」
と、ささやくような声が答えた。
「水町さま、身どもです」
「何? そういうお手前は?」
「兵馬です」
「おう……兵馬どのであったか」
三郎太が、ほうっと詰めた息をはきながら、身構えていた姿勢を崩し、すわというときの用心にすでに二、三寸切っていた大刀の鯉口を、静かにもとへ納める気配が聞こえた。

「お驚かせ申し恐縮です」
「ははは、悪いいたずらじゃのう。なんぞ、ご用か？」
「はい、実は、ちと内密で……失礼ながらお耳を……」
と、兵馬の影がにじりよってくる。
耳近く口をよせて、
「水町さま、いの字が現れました。ただいま、いの字と会ってまいりました」
「ふうむ……」
と、うめくようにいった声は、思わず兵馬の話に気をとられた気配を感じさせた。
三郎太は聞こえた剣の使い手であり、戦場できたえた危険に対処するその直感は、どんなときにも油断を見せない。しかし、兵馬の一語に思わず気をとられたとき、さすがそこに一瞬のすきを生じた。
がば！
と、その影がはね起きようとしたとき、すでに、三郎太の首になわがかかっていた。黒々とやみにとけこんで識別もつかぬ黒いなわが、その首へ、ぱっさりとかかって、そのまま、ぐうっとしめつけてきた。
「う、うぬ！」
さすがに、一瞬、腰の大刀がさや走って、とたん、その切っ先が洞窟の壁を削りながら火花をとばした。
だが、兵馬の動きはもっと速かった。普通では、とても手に負えぬ強敵を倒すために、とうから練りに練られていたかと思われるような、奸智にたけた手段であった。
彼は、なわの先に作った輪を、三郎太の首へ投げかけ、絞りあげたと見る瞬間、はねおきた三郎太の背後へ素早く回って、なわを肩へ引っかつぐようにしたまま、くるりとうしろ向きになり、腰を曲げた。
ちょうど、笹の先端に通した鮭を背にかついだ蝦夷の熊そのままのかっこうであった。

三郎太は、首へなわの輪をひっかけられたまま、仰向きに兵馬の背中にのって苦悶のうめき声を低くあげている。のたうつ手も足も、むなしく虚空をけるだけだし、右手に抜きはなった大刀もただいたずらに洞窟の壁をたたくだけであった。
そのまま、兵馬はじっとしている。三郎太のあがきが、みるみる弱ってゆくのが手にとるように分かる。
やがて兵馬はどさりと三郎太を投げ出した。三郎太はもうことりとも動かない。
兵馬は落ち着きはらったしぐさで、三郎太の右手から大刀をもぎとると、悶絶しているそののど元へあてがい、ぐさりととどめの一太刀をくれた。
「もろいもんだ」
と、つぶやいた声はぞっとするほど冷酷であった。
「三郎太、おぬしに生きていられると、ちと都合が悪いのでな。ふふふ……」
少しはなれた岩陰で、雪絵とお梶が衣類を交換している。
「梶、まだか？」
と、岩の向こうから、さも待ちくたびれたように尋ねたのは兵馬の声であった。
「はい、兄上さま。お待たせいたしました。もうよろしゅうございます」
「やれやれ、やっと支度ができたか？　うまく、雪絵どのに化けおおせたか？」
笑いながらおちつきはらって姿をあらわした兵馬のそぶりには、たった今しがた、残忍無類な人殺しをしてきた気配などまるでなかった。
「うむ、なるほど、馬子にも衣装とはよくぞ申したのう」
と、兵馬は二人の姿を見くらべて、
「梶のような不器量者でも、その上被衣で顔を

かくせば、どこから見ても雪絵どのと変わりはない。さすがのいの字も、見事、だましおおせるであろう」

と、笑っている。

三郎太のいるはずの洞窟の方で、急に人声が騒がしくなりはじめたのは、ちょうどそのときであった。

「はてな？　何事が起こったのか？　どうも、ただならん様子だ。さあ、まいってみよう」

と、さも気がかりそうに、真っ先に立って歩き出したのも兵馬であった。

三人がかけつけたころには、彦七たちほとんど全部の男が洞窟の入り口に集まって、すでに火を点じられた燈火の下に、すさまじい形相で虚空をつかんだ三郎太の惨死体が明々と照らし出されていた。

「あっ！」

と、叫んだのは雪絵だったか、それともお梶か。

「まあ、父上さまッ。いつの間に、このようなお姿に！」

しっかりあそばして！　と走りよった雪絵は、狂気のように父の体にとりすがったが、並みいる男たちは、ただ、しいんと声をのんでいたましげに目を伏せているだけであった。もう、手のほどこしようがないことが、一目でそれと分かっていたからである。

「いの字だ！」

と、兵馬がさも無念そうにうめいた。

「いの字だ。いの字の仕業に違いないッ」

「そうかもしれん。いの字かもしれん」

「ほかにだれがこのようなことをするか。この辺りにさまよっている不敵な曲者はいの字のほかにないッ。このような巧妙、機敏な手口で人をあやめることのできるのはきゃつのほかにあるものではない。見られい、この首へまきついた黒い麻なわ……これは、忍者が敵中にあって、ひそかに目的の相手を暗殺するときに用いる手

段だ。うぬッ、いの字だッ！」

「もはや、安閑と待っておれん。手分けして、あたりを探せッ。下手人をひっとらえろッ」

と、彦七が叫んだとき、

「待たれい。わしにまかせていただきたい。きっと、この敵はうつ。きっと、いの字をしとめてみせる。騒げば、いたずらにきゃつを警戒させるだけだ。しばらく、わしにまかせていただきたい」

と、その耳にささやきかけたのは兵馬であった。

「梶！」

と、うながして人垣からはなれた兵馬は、東の山嶺に今しも明るく昇りかけている月影へじっと目をやった。

「水町どのの恨みを忘れるな。いよいよ、命がけだぞ。命にかけて、ただ一突き、しゃにむに青助の胸を刺せッ」

月はもう東の空へ出はずれていた。

ほうほう……ほう……

と、遠くから梟の声が聞こえてくる。

「合図だ。青助が催促している合図の鳴き声だ」

兵馬がお梶に向かって、敵意を吹きこむようにささやきかけた。

「青助め――いや、あのいの字と名乗る希代の痴れ者め、三郎太どのを殺害し、このわしを脅迫しおるのだわ。いうとおりにせねば、三郎太と同じ運命が待っているぞと威嚇しおるのだ。聞け、梶、あの、勝ちほこった合図の声を……」

お梶は雪絵の衣装をまとい、被衣をかぶっている。どこからみても雪絵の姿であった。

「あいつが、三郎太どのを殺害したことは、たぶん、長安の指令の中に含まれているのであろう。三郎太どのを生かしておけば、江戸へ逃げのびた上、上司へ訴え出、長安にとって極めて不利な事実を公表すると信じているからだ。あいつは、その上、わしをおとして、やすやすと雪絵どのを手に入れ、おそらく、もしあいつの

そこは、森を向こうへ出はずれた岩山の陰で、足下に遠く谷間のせせらぎの音があった。

月がくまなく男女の影を照らしている。とある岩陰から、青助は二人の気配をうかがっていた。当然、兵馬の裏切りを予期したであろう。万一の場合を思って、月の昇る時刻と、その光をさえぎるもののない、この岩山をえらんだのだが、しかし、彼の鋭い目にも、その女の姿が偽者だと見破ることはできなかった。

青助は、二人をやりすごしておいて、ぬうっとその背後に立った。

「よう！　兵馬さん、ここだぜ」

にやりと笑った影は六尺を抜いていた。

「よく約束を守ってくれたのう、では、花嫁さんはいただくぜ」

ぐいとのばしたその片腕がお梶の肩先をつかんでいた。すごい力で手元へ引きよせながら、

「雪絵さま、お久しゅうござんすねえ。え、どうだい、約束どおり、また会ったでしょう。会

意に従えばそのまま雪絵どのを慰みものにしてもてあそび、雪絵どのが当然継承すべき武田家の遺産をそっくり己の手におさめてしまう所存であろう。そして、もし、雪絵どのが意に従わねば、長安のもとに送りかえして、その方で手柄をたてる。奸智にたけたあいつの考えそうなことであろうが。梶、分かったか。どうあっても、生かしておけんやつだぞ」

さあ、約束の場所が近い、七首を抜けと、ささやいた声はいよいよ低かった。

お梶はいわれるままに、七首をぬき、被衣の陰に堅く握りしめた。死を覚悟したその顔は、ぞっとするほど青白い。

「いよいよ、約束の場所だ。いの字はこの辺りのどこかにかくれている。いいか、梶。助かると思うな。命をかけてやれッ」

ささやく声は鋭いが、遠目には、いかにもさりげなく、月にうかれて女をさそい出した男のそぶりであった。

ったが最後、二度とはなさねえと約束したねえ、はなさねえぜ、え、もう絶対、はなしゃアしねえぜ」

片方の手がのびて、さっと被衣をはねのけようとする。

とたん、のけぞりながら、

「うわッ！」

と、叫んだのは青助自身であった。

「や、やりゃアがったなあッ！」

わめきながら青助はお梶の体をふりはなした。

血まみれになった七首を逆手につかんだまま、お梶ははねとばされたように、一度うしろへのめったが、

「覚悟ッ！」

はねおきざま、弾丸のようにその胸めがけてとびついてゆき、しゃにむにしがみつき、

「覚悟、覚悟ッ！」

と、七首を突きたてた。

「くそッ、このあまッ！」

青助は悪鬼の形相であった。

片手でお梶の髪をむしりとるほどひっつかみ、片手で七首をもぎとってほうり出し、

「うぬッ、くそッよ、よくも、このあまッ！」

どうすれば、爆発した憤怒がいえるかというように、すさまじい力で、お梶の体を引き裂こうとする。

すべてほとんど一瞬間の出来事であった。

兵馬は——

冷然とこれを見守っていた。水のように冷たい、落ち着きはらった目の色であった。

次の瞬間、音もなく大刀を抜きはらい、つつつ……と二人のそばへよってゆく。

「うぬッ、は、はかりゃアがったな、兵馬！ただではおかねえぞ。こ、このままにゃアすませねえぞッ。こ、こんなことで、うまうまやられる青助と思うのかッ」

彼は懐にのんでいる匕首を抜こうとしたが、その手にお梶が必死でしがみついていた。

「うぬッ！」

と、振りほどこうとする。すごい力だが、お梶はさらに死に物狂いであった。それに、不意をうたれた最初の一刺しが、青助の脾腹をえぐって、その力をそいでいた。

兵馬は一語も発しない。やにわに大刀をふりかぶった。

青助はしがみついてはなれないお梶を、盾にとるようにこっちへ向けている。

斬りつければ当然、二人を同時に斬る。しかし、兵馬は冷然とそれを見ながら、ためらいもなく、さっと一太刀斬りさげた。

「ぎゃあーッ！」

と、叫んだ声は青助だったか、それともお梶か。

青助はよろめいた。

「う、う、う、う……」

うめきながら、その両の手が、すさまじい力でお梶の体を引きさいている。髪も、襟も、裾も、憎悪をこめた指先に、みるみる無惨にひきちぎられてゆく。

それでも、お梶は青助にしがみついたまま離れない。青助の肩先から胸元へ深く斬りさげた兵馬の大刀が、お梶の肩にまで食いこんで、その姿はもう、血達磨のようであった。

兵馬は、冷然と二の太刀をふりかぶり、物もいわず斬りおろした。

「ひいーッ」

と、のどの奥から息のもれるような奇妙な声をたてながら、青助の巨大な影は、よろめき、泳ぎ、一瞬、岩山の鼻から、逆落としに谷間へおちこんでいった。お梶をその両の手で、引きむしるように絞めつけながら……。

「じゃま者が一人片づいた……」

と、つぶやきながら、兵馬は崖の鼻に立って

じっと谷底を見おろした。

青助とお梶が、相抱いておちていった辺りは、月明かりもとどかぬほど深く暗かった。

「梶も——助かるまい。かわいそうだが、死んでくれよ」

まるで、お梶の死んだことをむしろ好都合にさえ思っているのではないかと疑われるほど冷然たるいい方であった。

兵馬は、ゆっくり血刀をぬぐい、鞘へ納め、そして、谷に向かって、ぺっ！　とつばをはきすててから、きびすをかえして悠然と立ちさっていった。

少しはなれた所に、ひときわ高くそびえている岩峰がある。その陰に、さっきから、人影が二つ、じいっと息を殺していた。

「藤兵衛、兵馬はあのまま去ってゆくぞ。とうとう、妹を見すてて去ってゆくぞッ」

「彼はむしろ、お梶さまの死を待っていたのかもしれませぬ」

「なぜ？」

「若、お分かりになりませぬか？」

「なぜ？　なぜ？　なぜ、兵馬が肉親の妹の死を待っていたというのか？」

「それは、お梶さまが、ことによると兵馬の秘密を見抜いているかもしれないと疑っていたからです。兵馬が青助を斬った瞬間、お梶さまへの殺意がなかったとは申せませぬ」

「うむ！」

「あの位置で、あの太刀の斬りさげようは、彼が二人を同時に斬る意志があったと疑われても弁解の余地のないものでございました」

「うむ！」

うめいたのは進太郎の声であった。

「恐ろしい、世にも恐ろしい人間がいたものじゃ」

「お梶さまを死なせてはなりませぬ」

と、藤兵衛のきびしい声がいった。

「助かるか、藤兵衛？」

「それは分かりませぬ。が、死なせてはなりませぬ」
「うむ！　死なせてはならぬ。お梶どのを死なせてはならぬぞ！」
「若、すぐ、即刻、谷へおりねば間に合いませぬぞッ」
「おう、分かった」
二人が岩の陰をはなれて走り出したとき、すでに兵馬の影は見えなかった。
一瞬、藤兵衛は岩角に立って下を見おろしながら、じいっと耳をすませていたが、
「おう、一人はまだ生きております。うめき声が聞こえております」
「よし、急げ、藤兵衛」
進太郎は一瞬の間も惜しむように、目もくらむような絶壁にとりついて、下へ下へとおりはじめた。
藤兵衛がすぐつづく。
三十尺はあったであろう。おり立った谷間の、巨大な岩石の上に、男と女の影が一つに固まって折り重なっていた。男が下に、女が上に……。
青助は、すさまじい形相で、かっと目をむき歯をくいしばっている。そして、まだ生あるもののように、片手をお梶の首にまき、片手をあらわに引き裂いた胸元の、乳房の辺りにかけて、皮膚も肉もむしり取らんばかりにつめを立てていた。
青助は、頭蓋骨を岩角へたたきつけたとみえ、脳漿をあたり一面に発散させて、もちろん完全にこときれていたが、その腕の中にしめつけられているお梶はまだ息があった。
青助が憤怒をこめて引き裂こうと、その腕の中にしめつけていたことが、落下する途中や、この岩盤の上へおちたとき、かえってその身を守ってくれる役目をしたようである。
青助の腕の中から、失神しているお梶を助け出した進太郎は、

「この人を死なしてはならぬ。どうしても助けたい。このまま死なせては、あまりにも哀れだ」
と、何かに祈るように叫んだ。
「兄兵馬にだまされ、利用され、生涯をめちゃめちゃにした気の毒な人だ。兵馬のためとはいえ、心にもない男に肌をゆるし、今また、兄にそそのかされて何も知らず死んでいこうとしている。頼む、なんとかしてくれ。なんとでもして、一命だけは助けてくれッ」
「若、ご安心なされませ」
と、藤兵衛は静かな声で制した。
「天佑と申しましょうか、兵馬に斬りつけられた肩の傷は、思いの外にあそうございます。おそらく、青助の巨大な肋骨が兵馬の白刃を防ぎとめる役目をしたのでございましょう」
「では、助かるか、爺？　お梶どのはきっと助かるか？」
「気を失われたのは落ちた衝撃と、青助にのど首をしめつけられたためと思われます。大丈夫助かります」
「そうか助かるか？　そうか、そうか、そうか……」
と、思わず早口にいった進太郎の目にはうっすらと涙さえにじんでいた。
「とにかく応急の手当を……」
と、藤兵衛が用意の薬と布切れをとり出して手早く手当をする。
最後に、その口を割って気付け薬をのませると、お梶はやがてうっすらと目をあいた。
目はあいたが、まだ、しかとは正気がもどってこないらしく、苦痛をこらえるうめき声にまじってそのくちびるをもれてくるのは、力なげなかすかなうわ言であった。
「お、おのれ、青助。思いしったか……ああ、お兄さま。青助を、いの字を……はようはよう……わたくしは死にます。どうせ、恥多いこのけがれた体、潔く死んで清らかにすすぎたいと思います。そうしたら……あ、あのお方さまに

も……進太郎さまにも、晴れがましゅうお目にかかれるでございましょう。ああ、進太郎さま……お目にかかりたい。もう一度お目にかかりとうございます。進、進太郎さま……」

「爺、この人を、早く里の、お静のもとへ運んでくれ」

と、進太郎が顔をそむけながらいった。

「は、かしこまりました。どうでも、兵馬のもとへはもどせぬお方でございます。兵馬のもとへもどれば、この人のお命が危のうございます」

「頼む、爺。この人の看護を頼む。哀れな人だ。不幸な人だ。お静に手伝わせ、できるかぎりのことをしてやってくれ」

「それで、若は？」

「わしか？　わしは……雪絵どのを見守っておらねばならぬ。今度こそ、あの人の一命が危ない……」

と、進太郎は吐き出すようにいった。

その夜、峠の洞窟の中では、三郎太の遺体をかこんで悲痛な通夜がいとなまれた。

まるで通り魔にでも襲われたような、あっという間の三郎太の死が、ことさらに一同を無念がらせ、歯ぎしりさせていた。

「むごいひきょうなことをするやつだ。武士に対して、刀槍をもって立ち向かうならとにかく、なわをもってくびり殺すなどとは……」

「いの字という痴れ者のやりそうなことよ。いや、長安の——といいかえた方がいいかもしれん。お梶どのを使って、奇妙な威嚇めいたことを通告しておき、そのあとから、いの字をつかって、これ見よがしな無惨なことをやってのける。うぬッ、考えただけでもむかむかしてくるわ」

「しかし、そのいの字を、すばやくしとめたのはせめてもであった」

「青助の死にざまの哀れさは、まさに因果応報というやつだわ」

「だが、青助が、しかといの字と同一人物であろうか」

「それは間違いない」

と、口をはさんだのは彦七であった。

「兵馬どのの知らせをうけ、真っ先にかけつけて谷へおりたのは、兵馬どのとわしの二人であったが、そのとき、青助の懐からのぞいていた〝い〟の一字がかきとめてある懐紙にすぐ気づいたのはわしであった。それが、昼間、この洞窟の入り口に降ってきたあの紙切れとまったく同じであったからのう。青助がいの字である動かぬ証拠だ」

「なるほど……」

「わなにかかると見せて逆にわなにかけ、そのいの字を、素早く討ちはたした兵馬どのの手柄はたたえられていいと思う」

「三郎太どのは、わしの舅御じゃ」

と、さも控えめに、物静かな声でいったのは兵馬であった。

「青助は、わしにとって舅御の敵じゃ。敵をうったまでです」

舅々とくりかえす、その何気ない言葉の中に、雪絵にしかと聞かせておこうとする深い意味がある。

三郎太が、雪絵と兵馬との縁組みを、彦七らの前で承諾したことは事実だが、もし雪絵に異存があれば、明朝ここを出立するまでに破約する約束ができていた。

雪絵の気持ちはすでに兵馬にわかっていた。否！　にきまっている。少なくとも、その日、濃霧の中で、一思いに己のものにしてしまおうとして、むざむざと仕損じた以上、雪絵がおいそれと承諾するはずはないと計算していた。

三郎太を、一思いに殺害してのけたのは、第一にそのためであった。否！　という返事をいわせる前にその口を封じてしまう。

あとで、雪絵がどういおうと、すでに三郎太が、彦七、兵馬、ひいては月姫さまに対して確

約した結果になっているのだ。父が確約したこと、娘として、むざとは拒否できないはずだと、兵馬はそろばんの玉をはじいていたのだ。

「三郎太どのは、わしが最後にお会いしたとき、わしに、雪絵のことをくれぐれも頼む……と、二度、三度、くりかえし申されたが、今思えば、何か死期を予期されておいでだったのではあるまいか……」

と、さもしみじみといいながら、その目はじろっと雪絵の方を盗み見た。

「兵馬どののいわれるとおりだ。三郎太さまが、昨日になって急に雪絵さまのご縁組みのことをいい出されたのも、おそらく、死期の近づいたことをそれとなく悟っておられたのかもしれない」

と、彦七もしんみりした調子でいった。

「ご不幸は無念の極みだが、しかし、雪絵さまを、しかと兵馬どのに託されたことは、せめてものご安堵であったろう。われわれとしても、また月姫さまとしても、これに勝る喜びはない」

雪絵の心の中をしる由もない彦七は、雪絵と兵馬の結ばれることを、もう動かしがたい約束のように思いこんで喜んでいる。

だれでもそう思っているのであろう。つまりは、雪絵を兵馬へ縁付ける約束が、三郎太のたった一つの遺言になったのだ。

雪絵は、それらの話が耳にはいるのかどうか、なきがらのまくらもとに近く、石のようにじっと座ってうなだれている。

すでに涙のかわききったひとみが、まるで放心したようにうつろだった。

「それにしても、お梶どのはどうしたのか？青助に組みついたまま、一緒に谷へおちて死んだというのに、われわれがはせつけたときにはすでに影もなかった。やっぱり、長安の手の者にさらわれていったのだろうか？」

そうつぶやいた彦七の声は沈鬱であった。

「いの字の背後には、長安の手のものが影のようにつきそっている。ほかにだれが瀕死の女をさらっていこうか？」

いや、ことによったら、金峰山の天狗と称してつきまとっていた桜井進太郎の仕業かもしれないと、兵馬は、内心怪しい疑惑にせめたてられながら、そのことはおくびにも出さない。

あくまで、お梶を長安にしいたげられる犠牲者にしたてあげるためだ。

「しかし、長安の手の者にさらっていかれたことが、お梶のまだ生きていた証拠になる。それがせめてものことではないか。たとえこの先、どのような苦難が待っていようとも、お梶はもとより覚悟のはずだ」

「お梶どのの心中を思うと涙なしにはおられん。いまさらながら、おぬしたち兄妹の、ただ一筋の真心には感じ入るばかりだ。三郎太さまも、どれほどのご満足か……」

「わしにとっては勇御だからな」

と、兵馬はまたくりかえしながら、横目でちらっと雪絵を見た。

もう逃がさない、どんなことがあっても、お前はわしの妻になるのだと、意地悪く宣伝しているような目の色であった。

雪絵はうつむいたまま身じろぎもしなかった。ある疑惑が、はげしくその胸をゆさぶって、周囲の話し声などほとんど耳に入らなかったのだ。

――父を殺したのは何者だろう？

青助がいの字であろうとなかろうと、彼が父を殺したはずは絶対にないと信じている。

なぜならば、あれほどの父が、いかに油断をねらわれたとはいえ、青助にのどをしめて殺されるまで一語の叱咤も発しなかったということはありえないではないか。

青助は悪事を犯して水町家を脱走した人物なのだ。その青助を、やすやすと安心して身辺に近づけるだろうか？

いや、父を殺したのは、よく顔見知りで、しかも、父が安心してやすやすと近よることを許した人物でなければならない。

だれだろう？

父三郎太を殺したのは青助でないとすれば、その下手人は雪絵の周囲にいる者でなければならない。

人並みすぐれて武術に秀でた父が、あのような惨めな殺され方をするほど、相手を油断しぬいていたことから考えても、その下手人は味方の中のだれかでなければならないということになる。

だれだろう？

だれをあげてみても、良い味方であった。まさか、と一人一人を強く否定するほかはない。ちらっと兵馬の名前も脳裏をかすめたが、すぐ雪絵は打ちけした。

兵馬は、雪絵にとって虫のすかない——いや、今となっては指さされても身の毛のよだつほどきらいな男である。

といっても、それは好ききらいという感情の問題なのだ。兵馬が無体をしかけ、手込めにまでしかねなかったあの無礼も、善意に解釈すれば、彼の恋情のはげしさがさせた行為だともいえる。まして、彼は、雪絵との婚約が、もう半ばかためられているものと信じていたのだから……。

きらいなのは雪絵の方であって、兵馬の方では雪絵を愛し、雪絵のためにも父三郎太のためにも、これまでに、どれほど命がけの危険をおかし、誠意をつくしてきたかしれない。

その兵馬が、なんで三郎太を手にかける必要があったであろうか。

考えてみると、だれ一人疑わしい者もないのだが、しかし、それでも雪絵は、父を殺したのは青助ではない、味方の中のだれかなのだと信じきるほかはなかった。

その思いが、執拗に雪絵をせめつける。

堪えがたくなって、雪絵はそっと席を立ち、洞窟のそとへ出ていった。

一同、それに気がつきながら、——そっとしておいてあげろ——

というように目と目で制しあいながら、だれもひきとめるものはなかった。

父の死を目の前に見ながら、必死に涙をこらえ、取り乱すまいとつとめている雪絵のけなげさを哀れと見る目はだれも同じだったのだ。

空には傾きかけた月があった。

さすがに、雪絵は茫然と、ただ歩いてゆく。歩くというよりは、心の苦しみにたえかねて、あてもなしによろめきつづけてゆくという様子であった。

「雪絵どの——」

突然、呼びかけてきた声は、うつろな雪絵の耳にはほとんど聞きとりかねたほど低かった。

「雪絵どの、身どもです」

今度の声は、はっきりと雪絵の耳に入った。

はっとしてふり向こうとしたその体は、とたん、男の腕に軽く抱かれ、すばやく岩陰へ引きよせられていた。

「ああ、進太郎さまッ」

泣くような声であった。訴えるような、すがりつくようなといった方がいいかもしれない。

本当に、その瞬間、雪絵は夢中でその幅広い胸にしがみついていた。

「お会いしとうございました。お会いしとうございました！」

と、まるで狂気のように取りすがられ、男の腕には思わずひしと力がこもってくる。

知らず知らず顔と顔が寄ってきた。くちびるとくちびるがいまにも触れあいそうな近くまで……。

「雪絵どの、申し上げる言葉もない。父君に、思いもかけないご不幸があったようだが……」

と、進太郎にいわれて、雪絵の涙はいよいよはげしくせきあげる。

男勝りなどといわれた勝ち気さなどあとかたもなく、ただもう父親のひざにすがって悲しさを訴える頑是ない幼子のようであった。

「しっかりなさらなくてはならない。あなたには、しなければならないことが沢山残されているはずです。第一に、父君を手にかけた憎むべきやつをつきとめねばならぬ」

「は、はい」

「月姫さまに会われて、今後のお身のふり方もきめねばならぬし、父君のご遺言もはたさねばなるまい。また、江戸に残された弟御のこともあなたの力で処置なさらねばならぬことだ」

「は、はい、進太郎さま」

と、涙にむせながら、子供のようにこっくりこっくりする。

「しかし、あなたには幾人もの味方がおるはずです。心丈夫に思っていてください。少なくとも、身どもは……いつでもあなたをじっと見守っています」

「お力に存じてよろしいのでございましょうか？」

「喜んで、どんなことでも……」

「おすがりしてよろしいのでございましょうか？　ご迷惑では？」

「迷惑？」

雪絵を見つめた進太郎の目が笑った。すがすがしいばかりの美しいひとみであった。

「雪絵どの。身どもが江戸へ出たのは、父の遺言により、あなたのお味方になるためでした。しかし、今ではたとえ、父の言葉がなくとも進んであなたのために役立ちたく思うでしょう。あなたが好きだから……あなたがいとしいから……」

「ああ！」

雪絵は進太郎の腕の中で戦慄した。はげしくあえぐ息が、震えになって伝わってくる。

「う、うれしゅうございます。う、うれしゅうございます……」

日ごろなら到底容易に口に出せないようなことも、切羽つまったこうしたときには、思わずすらすらとすなおに口をついて流れ出すのであろうか。

雪絵は進太郎の胸にすがりつき、進太郎の腕がそれを抱いている。とうから、そうあることが約束されていたかのように自然であった。

「雪絵どの、今夜あなたにお会いしたかったのは、父の遺言を申し伝えたいからだったのです」

と、やがて進太郎が言葉を改めていった。

「今までは、あなたの父君があなたに対してかくしておられた、そのことを、身どもからお話しするわけにはいかなかったのです。しかし、もうよい。先刻、あなたは、あなたの血筋のこと、月姫さまのこと、一切父君から聞かれたはずだから……」

進太郎は、あたりへ気をくばりながら声をおとした。

「天正十年三月、武田四郎勝頼公が、天目山麓に無念のご自害をなされた当時の話は、あなたもすでに聞かれてご存じのことだと思います。勝頼公ご自害の直前、その秘命をうけた泉野左馬之助が戦場から脱出を企ててむなしく賊刃に倒れたということも……」

「当時、身どもの父桜井太郎左衛門も、北条勢の急先鋒として、すでに天目山麓に潜入していたのです。そして、たまたま、やぶ陰に血みどろになって倒れている旧友左馬之助に出会ったのです。しかも、彼はまだ息があり、父に向かってこのようなことを語ったといいます」

進太郎は雪絵の耳元へ口をよせ、一語一語力をこめて語った。

「勝頼公は自害なさる直前に、左馬之助ただ一人を手元へよびよせ、はだ身はなさず所持しておられた『朱書き一節』四枚をならべ、その裏

面へ、矢立の筆をとって手早く何やら書かれてから、これをもって、八ガ岳の月姫なる女のもとへ行き、わしの形見じゃと申して手渡せよ。武田家は滅びても、滅びることのない遺産がある。それをわが子花姫に伝えたい。この『朱書き一節』は、武田家の正統を伝えるあかしであるとともに、その遺産の所在をあきらかにしたものじゃ――

と、勝頼公のお言葉はそのようなものであったということです。

そして、左馬之助は、無惨にも土匪の手にかかって使命をはたさぬうちに倒れたが、男として、友として頼みたい、折あらば自分の代わりに八ガ岳へ行き月姫さまにそのことを伝えてもらいたい――それだけいった左馬之助は事切れたのです。

父は、すぐ左馬之助の身辺をさぐってみたが、賊の手に他のものと一緒にうばいさられでもしたものか、わずかに彼の体の下敷きになって草むらにおちていた、『朱書き一節』の一枚を手に入れただけだったそうで、他の三枚の行方がしれません。

父は、その後、その三枚の行方をたずね、八方手をつくしたようだが、ついにむなしく失敗に終わったらしく、したがって、左馬之助の遺言をはたすために八ガ岳へ行くこともならず世を去っていきましたが、その臨終の折、はじめて身どもに向かってその秘密を話し、父の遺志をついで左馬之助の悲願をかなえてとらせるようにと遺言したというわけです。

雪絵どの、これがその『朱書き一節』です。いつぞや、一度見せたことがありましたな。たった一枚ではあっても、とにかく、左馬之助の願いを……いや、武田四郎勝頼公のご遺言にそうため改めてあなたにおうけとりいただきたい」

進太郎がさしだしたのは、例の、不動如山（動かざること山の如し）と朱彫りした一枚の竹片であった。

いわれて裏返してみると、なるほど、かすかな薄墨の走ったあとが読みとれる。文字の断片とも、また絵や線の切れはしとも、しかと分かりかねる墨色であった。

「ありがとうございます、進太郎さま」

雪絵はひしとその手の中に握りしめた。

「見もしらぬ勝頼さまのお形見と思うよりも、あなたさまやお父さまの、そのお志がうれしくてうれしくて……わたくしにとりまして、生涯のよい記念の品となりました」

「では、雪絵どの。あまり長居して人目についても悪かろう。失礼します」

「あれッ、しばらく……もう、しばらく」

と、雪絵はあわててひきとめた。

別れたくない、はなしたくない、もし進太郎が去ってゆくなら、いっそ自分も一緒に……などと、切ない思いが、ふっとそんなことまで考える。

「進太郎さま、さきほど、父の下手人を早く探せよと仰せられましたが、皆さま、父を手にかけたのは青助だと申しておりますが……」

「ばかな！」

と、進太郎は一蹴した。

「青助は、水町家から逃亡した札付きの曲者ではありませんか。父君が、その青助をみだりに近づけるはずはない」

「まあ、あなたもやっぱり……」

「父君を手にかけたのは、父君が信じて、安心してそばへ近づかせた男です」

「でも、皆さまは青助だと信じておいでです。青助こそいの字の正体であって、そのいの字が父を殺したのだと……」

「青助といの字が同一人物だというのですか？だれが？」

「兵馬どのやお梶どのがそう申しておいでです。それに、何よりの証拠は、谷におちて死ん

だ青助の懐から、いの字と書いた紙切れが出てきたと、これは彦七どのがしかと見ておいでです」

「え、なんといわれた？　青助の懐からいの字とかいた紙切れが出たと？」

「はい、彦七どのが、そう申しておられます」

「そのとき、真っ先に谷へおりたのは、彦七一人でしたか？」

「彦七どのと、それに兵馬どのが……」

「雪絵どの、ふしぎなことがあるものです」

進太郎が、意味ありげに雪絵の顔をじいっと見入った。

「身どもは藤兵衛と二人、兵馬が青助を谷へ斬りおとすところを見ていたのです。そして、だれよりも早く、谷へおりました。お梶どのを救うために……そのとき、たしかに青助の懐も見たが……そのような紙切れは影も形もなかったはずです」

「まあ……それはどういうわけでございましょう？」

「青助がいの字と同一人物であると見せかけた方が、父君の下手人を青助と思いこませるに好都合だと思う人物がいたからです。だれか、身どもたちが去ったあと、彦七どのが青助の懐をしらべるまでの間に、故意にその懐へ紙切れを入れたと考えるより道がありますまい」

「で、では、その男が父の下手人だとおっしゃるのでございますか？」

「たぶん……」

「だれでございます？　もし進太郎さま、それは？」

「身どもには分かりません。推察はついても証拠がないのです。雪絵どの、あなたの役目ですよ。あなたでなければ、そやつの正体をあばくことのできる者はないはずだから……」

進太郎は西の山の端へじっと目をやった。

「明朝、すべての人がいっせいにこの峠をひきはらって、別の道へ旅立つのでしょう。雪絵どの、くれぐれもご注意ください。敵は、あなたがそれを気づいたと感じた瞬間、たちまち牙をむいて襲いかかってくるでしょうから……恐ろしい敵です。冷たい、氷のような神経をもった恐ろしい敵です」

進太郎は雪絵の手をとって堅く握った。

「しかし、身どもはいついかなるときでも、じっとあなたを見守っています」

「お、お力に思います。進太郎さま、本当に……本当に、おすがりいたします」

雪絵は握られた指先にそっと力をこめながら、いつまでもはなしともなげに立ちつくしていた。

かくし山

一日一夜を、濃霧と夜陰にまぎれて石堂峠におくった人々は、やがて次の朝、夜の白むのを待ちかねたように、倉皇として洞窟を引きはらい思い思いの方角へ去っていった。

三郎太の遺骸は、とりあえず森の一隅へ埋葬して形ばかりの自然石の墓石を建て、その遺髪は二つに分けて半分を雪絵の肌につけ、残る半分を、他の遺品と一緒に、彦七が持ったのは、万一の場合を考慮したからである。

「これらの品々、いかなることがあろうとも、必ず弟御さまにお渡しいたしますからご安心ください」

そういった彦七は、配下の者たちとともに、腕ずくでも囲みをぶち破って、しゃにむに江戸へ駆けつける覚悟をきめている。

雪絵一人は、うかつに甲州の国境へ足をふみ出すわけにはいかない。長安の執念は、何を犠牲にしても雪絵をとりもどそうとしているかのように、昨日から国境一帯の見張りは急増され、ことに女の出国者に対してはただごとならないほどきびしい監視の目を向けているという情報が入っている。

甲州から脱出するためには、どうしても月姫

さまの力にすがるよりほかないと衆議一決していたし、ことに、父を失った今となっては、雪絵には祖母にあたるその人に会って、是非とも今後の身のふり方を相談したいと、雪絵自身も熱望していた。

「しかし、兵馬どの、雪絵さまのお供がおぬし一人では心もとないと思うが……万一ということもある、屈強のもの二、三、お供の数に加えてはどうか？」

と、彦七は案じ顔にいったが、

「いいや、人数が多くては、かえって敵の目につく恐れがある。明日か、おそくも明後日には月姫さまにお目通りできる予定だ。その間の一日二日、山にかくれているのだからさらに心配はない。大丈夫、わしがお供じゃ」

と、兵馬は強く打ち消した。

雪絵は、すでに支度のととのった体を、ようやく白みはじめた東の方へ向け、凝然と立ったまま二人の話になんの口出しもしなかった。

「なるほど……」

と、彦七が微笑して、

「花婿花嫁二人きり、水入らずで月姫さまにお目通りするのも何かと趣向であろう。父君をなくされて、さだめしご傷心の花嫁を、何かとなぐさめるにも、二人きりの方がよいであろうのう。いや、年寄りがいらざる口出しして、とんだ憎まれ者になるところであった」

と、信じ切った目で二人をいたわるように見比べるのも、明日の命もしれない浮き世のならい故、せめて、一日二日でも二人きりの楽しい時をすごすがいいと、まるでささやきかけているようであった。

「では、また江戸で会おうぞ」

「元気で行けよ」

と、手と手をふりあった二組みが、道を二つにさいてわかれてゆく。

金峰山（きんぷせん）の山懐をくぐって、そのまま山伝いに黒川金山まで行くのが雪絵と兵馬の道すじであった。

黒川金山の十八番廃坑――あの三郎太が手首のない男鳥の目源三を逃がしやったあの坑道の中で、月姫さまに会う約束ができていたからである。奇妙といえば奇妙な話だが……。

雪絵と兵馬とは、ただ二人きり金峰山塊の山懐を、東に向けてたどっていた。

敵か味方か、しかとは分からない、思えば奇妙な二人連れであった。

兵馬が雪絵と、ただ二人きりの旅を望んでいた理由は分かっている。

第一に、三郎太が死の直前、雪絵にその素姓に関する秘密と一緒に、雪絵の受けつぐべき武田家の遺産なるものを語って聞かせたと信じているからである。

雪絵は、当然、遺言となった父の言葉に従って行動し、実母花姫から譲られたはずの何かを手に入れ、そして月姫と会っていよいよ武田家の正統、その遺産の継承者として名乗りをあげるであろう。

その間、自分は一歩も雪絵のそばをはなれてはならないし、また、なるべくじゃまになる余人を近づけたくないと思っているのだ。

第二には、いつ雪絵を屈服させ、実質上己の妻にしてしまうかということであった。

濃霧にまぎれて、腕ずくで雪絵を征服してしまおうとし、もう一歩というところで仕損じたのは重大なつまずきであって、そのため、あわてて三郎太を殺害せねばならないことになった。

ただ、今となっては公然と衆目が認め許しているのだから、なんの遠慮もいらぬ。機会あり次第、腕ずくで屈服させてしまおう、女というものを意に従わせるにはそれが何よりの手段だと心得ているから、しゃにむに雪絵と二人だけの旅を主張したわけであった。

ところが、さだめし文句の出ると思った雪絵

が、一言の反対もせず自分に従ってきた。これははなはだ意外であるとともに、兵馬を大いに喜ばせた。

おそらく、雪絵も、もう抵抗することを断念したのであろう。ただ一人の味方であった父が死に、月姫はじめ余人はことごとく兵馬に味方している。黙って二人きりの旅についてきたことが、もう、すべてを観念し、承知した女の態度だと信じたのだ。

もし、雪絵の方がそのつもりなら、何もあわてて、腕ずくで屈服させるような荒々しいまねはする必要がない。とにかく、月姫にあい、雪絵がきちんと武田家の遺産の継承者であることが確認され公表されてから、堂々と祝言の床の中で抱き寝をするに越したことはないではないか——と、胸の中でそろばんをはじいている。

雪絵は——

まるで逆であった。

父を殺したのは青助ではなく、また、青助はいの字その人でもなく、だれかが故意に青助をいの字らしく仕立てあげ、その陰にかくれて何かしようとしたのだと——そういった進太郎の言葉が、ぎょっとするほど雪絵の胸につき立った。

ただ一人きり、終始、青助をいの字だと主張してやまなかったのが、兵馬だったからだ。

——もしや、青助をいの字に仕立てあげ、その陰にかくれて父を手にかけたのは兵馬自身ではあるまいか？

一度、胸をかすめたその疑惑は薄れるどころか、思いつめたように刻々と濃くなってくる。

雪絵が唯々として、兵馬と二人きりの旅に出たのは、兵馬の心の奥をさぐり、その真相をつかみ取ろうと決意したからにほかならない……。

峰を越え谷を渡り、雪絵と兵馬が黒川金山の裏山にたどりついたのは、その日もとっぷりと暮れてからであった。

さいわい、空にはとぎすましたような明るい

月がかかっていて、燈火を使えぬ忍びの旅人にはうってつけであった。

「雪絵どの、月姫さまとお会いする約束の、十八番坑というのへ、もうまもないはずです。そこから数町はなれた辺りには番所もあるそうで、多少の危険は覚悟せねばならぬと思うが、いっそ、その廃坑までいって夜をあかされるか、それとも、この辺りで一夜をすごされるか？」

兵馬は、手にした地図を月明かりにかざしながら、何気なくいった。

「どこにいても危ないことは同じこと、いっそ、十八番坑まで行きとうございます」

「そう、わしも賛成ですな。月姫さまにお目にかかる前に、ご遺言となった父君のお言葉を実行しておかれるのが順序であろうと思うから……」

「父の遺言？」

「ははは、何をそらぞらしゅう申される。あなたの実の母君から、あなたに伝えられた形見の品を手に入れておかねばならぬと申したのです」

「そのようなものが一体、どこにあると仰せなのですか？」

「およしなさい。わしの目を節穴とお思いか。その品が、十八番坑の中にかくされていることは、もうはっきり分かっていることではないか」

と、いいながら、どうだ図星だろうといいたげに、にやっと笑う。まるで、何もかも透き見し盗み聞かれたように雪絵はぞっとした。

「わたくしが、十八番坑に早く行きつきたいと申したのは、いつ月姫さまがおいでくださっても、すぐお目通りできるよう、同じことならお約束の場所へ行っていたいと申したまでです。実の母の、その形見のと、そのようなこと、わたくし何も存じません」

「夫婦になったも同じ二人の仲で、水臭いことをいうものではありません。それならいうが、父君が、月姫さまにお会いするため、なぜ、わざわざとその危ない廃坑などを選んだのか？

幾らも場所はあろうに、十八番坑でお会いしたいと、なぜ、月姫さまへの使者に伝言させたのか？　つまり、父君は、月姫さまにお会いするには、どうしても、その十八番坑でなければならない理由がおありだったのだ。

なぜ？　父君は、何かそこに重大な用件をもっておられたというほかはない。つまり、何か貴重なものを、そこにかくしておかれたと考えるよりほかに、説明のしようがないではないか。

父君は、はじめ単独で月姫さまに会われ、その貴重な品を月姫さまにお渡ししてあなたのことを一切託し、ご自身は、死ぬ覚悟をもって江戸へ向かわれるつもりであったのだ。

ところが、わしが不可能といわれていたあなたを救い出して父君にお会わせした。そこで、父君は、もはやご自身月姫さまに会われる必要はない。あなたに一切を打ち明け、あなたを直接十八番坑へ向かわせて月姫さまにお会わせする方がよいと思案し、そうされたのだ。あなたは何もかも聞かれた。そうでしょう。あなたは、花姫さまの形見のかくし場所をご存じです」

いいながら、雪絵を見つめたひとみが、まだ薄笑いをつづけていた。

「雪絵どの、おかくしになるのは水臭いというものです。あなたが言いたくないとおっしゃるなら、無理にまで聞きたいとは思いません。しかし、それほど明らかなことを、おかくしになるのはむだなこととお思いにならぬか？」

兵馬は妙にからんだ皮肉な口調でいった。いくらかくしても、おれの目はごまかせんのだと、威嚇でもするような響きも感じられる。

「これまで、わしがどれほど雪絵どののために、また水町家のためにつくしてきたか、自分で口にするのはおかしいが、月姫さまで、わしと雪絵どのの縁をお喜びくださったのは、わしの誠意をお認めくださったからこそだと思う。あなたを、甲府城から救い助くことも、だれも彼

もほとんど絶望視し不可能視しておったのを、ただただあなたを思う一心があればこそ、わしはやりとげたのです。

あの濃霧の中で、思わず手荒なことをいたしかけたが、あれはままある男心というもの。むしろ、あなたへの思慕があまりにも強く激しいためだったと、わしはあえて言いわけもしたい。まさか、あなたへのわしの本当の誠意が分かってもらえぬはずはないと思うのだが……」

「よく分かっております。そのありがたいお心、ご恩の数々は決して忘れなどいたしませぬ」

雪絵は冷たい声でいった。しゃべっている間にも、どうかして、兵馬の心の奥底をのぞきこみたい、この男が父を手にかけたのかどうか、それを明らかにしたいと何かじいっと見つめているそぶりであった。

「兵馬さま、お気を悪くなされてくださいますな。父が、だれをも信じるな、だれにも油断するな、月姫さまにお目にかかり、そのお指図をお受けするまでは、だれにも一切口外すなと、きびしく申し聞かしたのでございます。敵ばかりではない、身のまわりにあるだれ彼、小石や落ち葉にまで心許すなと申されたのでございます」

「味方にまで、心許すなと申されたのか？」

兵馬の表情に、ぎくっとしたものが動いたようである。

「すりゃ、このわしもか？　この兵馬にも油断するなと、父君が？」

「いいえ……そうは申されませぬ。兵馬さまこそ、お信じ申し上げてよいただお一人の方だと申されました。ただ、兵馬さまのすぐ背後に、いつどのような敵が、目を光らせ耳をそばだてているかもしれぬと申されたのでございます」

「なるほど……」

と、兵馬はほっと顔色をやわらげたが、しかし雪絵を見つめるひとみにはまだ警戒の色が残っていた。

「父の申したことを、はたと思いあたりましたのは、あの父の死でございます。あのように味方のお方が群れているただ中で、あのように突然父が非業の死をとげましたのが何よりの戒めでございます」

「まことに、父君の申されたとおりであった。油断はならぬ。いつどこに敵がかくれていることか……まさかあのような所へ青助が侵入し父君を手にかけようなどとは……」

「いいえ、青助ではございません」

雪絵は氷のような冷たさでいった。

「父を手がけました下手人は、父が心を許して、やすやすと身近く近寄せた男でございます」

愕!!

言葉はなかった。いや、声が出なかったのであろう。今度こそ、兵馬は一瞬慄然と身震いした。

「父を手がけたのは青助ではありませぬ。味方の中の、だれかに違いないのです。ですから、わたくしは、もうだれ一人信じることができないのでございます。だれ一人……いいえ、兵馬さま。兵馬さまお一人だけは別でございますわ」

雪絵は、兵馬の挙動の異様さなどには、まるで気がつかないふりをして、まっすぐ前を見つめたままいった。

「今となっては、ご信頼できるのは兵馬さま、たったお一人だけなのです。父を、甲府城の土牢からお救い出しくださったのも、結局は兵馬さまのお力でございますし、わたくしのことは申すまでもございません。わたくしが、こうして生きていることのできるのも、人間業とも思えない兵馬さまのお働きのお陰でございます。だれが何をいおうと、何が起こってこようと、その事実だけは信じることができると存じております。その真実だけを見つめて、雪絵は兵馬さまにおすがりしているのでございます。でも、兵馬さま、その兵馬さまの向こうに、どんな悪者がかくれていて、ひそかに耳をそばだてておりますことやら……それが恐ろしくてなりませぬ」

「おっしゃるとおりだ、おっしゃるとおりだ……」

と、思わず力をこめていった兵馬の声は、まるでほうっと安堵の吐息をつくようであった。

この分では、雪絵はまだ真相を感づいていないらしい。もし、それを感づいていたら、まさか自分と二人きり、こんな旅に出るはずがないからなア……と思いかえし、やっと一息はついたが、しかし、兵馬の心中は穏やかではなかった。

十分計って見事にやってのけたつもりの三郎太殺しを、計画したとおりに青助の仕業と思いこんでだれ一人疑う者もない中で、雪絵がそこまで洞察していた直感が恐ろしい、この分では、いつ、真相がばれぬとも限らないし、そのときは、あらゆる未練をかなぐりすてて、とたんに雪絵を斬ってすてねばなるまい。

そして、雪絵を斬ってすてることがあるかもしれないとすれば、是が非でも、うまく雪絵にもちかけて、いっときも早く花姫の遺品とやらを探し出してしまう必要がある。でなければ、何もかも水のあわになってしまうではないか……。

「十八番坑はたしかこの辺りのはずだが……」

と、兵馬は手にした図面をしきりにしらべている。

三郎太が十八番坑で月姫さまと落ち合うことを望んだとき、兵馬たちに書いて示した図面であった。

兵馬は敏捷に草むらを分けて走り回っていたが、やがて、とある岩壁の前に立って雪絵の方へ手招きした。

「この草に埋もれた所に、古い坑道があります。十八番坑に近い。やっとたどりつきました。さあ、お疲れであろう、中へ入ってゆっくりお休

した兵馬の忠節も、結局、自分に対する欲情と、自分の背後につながっている武田家の遺産とやらに目的があったに過ぎないのだと、とたん、彼の心の底の底まで見抜けたような心地さえした。

しかし、兵馬が下手人であるという、なんの証拠もあるわけではない。

むきになって問いつめたところで潔く白状するような男ではなし、その場はあれこれ言いぬけしておいて、その後になって、なんらかのひきょうな手段で自分の命を奪いとろうとするかもしれない。

もう、こうなっては、月姫さまのお力にすがるよりほかに手段はない。月姫さまに会うまでは、もうおくびにもそのことを出すまい。それさえ、兵馬にさとらせず、彼の言いなりになっていれば、まさか、ひきょうな手段で危害まで加えようとはすまい……。

一刻ばかりたった。

みなさい」

兵馬は先に立って、五、六間奥まで入ると、手ごろな所へ荷をといて席を作り、蠟燭に灯をともしたりなどしてから、

「わしは、坑道の口に見張っています。いつ月姫さまがおみえになるかもしれぬし、よくよく敵を警戒せねばならぬから……雪絵どの、あなたはどうぞご安心して……」

いいすてると、あっさり坑口の方へ出ていってしまった。

燈火を見つめている雪絵の横顔はこわばっていた。

さっき、父の下手人のことを話したとき、異常な反応を示した兵馬のそぶりは、ちゃんと見てとっている。瞬間、兵馬がこの下手人に違いないのだと直感した。

一度そう直感すると、これまでは終生忘れてならぬ恩義と信じていた、父や自分に対して示

甲斐の連山は、しいんと寝しずまって、なんの音もなかった。

雪絵の胸の中をしってかしらずでか、兵馬は、坑道の入り口にがんばって神妙に見張りをつづけているらしい。時折、そこらを歩き回るかすかな気配が伝わってくる。

雪絵は、そっと荷を開き、提燈をとり出すと蠟燭の灯をうつした。

立ち上がった。

父の言葉に従って、実母花姫の形見を探しにゆくつもりだ。

兵馬が感づくかもしれない。彼は坑道の入り口から目を光らせて、それをねらっているのかもしれないとは思ったが、しかし、雪絵はもうじっとしてはいられなかった。

とにかく、実の母の肌にふれたはずのその品を、いっときも早く、己の手に握りしめて確かめたかったのだ。

雪絵は用心深く、足音を殺して奥へ向かった。

兵馬は気づいた様子がない。

うねうねと長くつづいた坑道はやがて体を横にしてやっと通れるほどの岩と岩との透き間になり、それを抜けると、はたと行きどまっていた。

その行きどまりの奥からさらに下へ抜けるたて坑があり、その先は迷路のように分岐しているらしいが、父三郎太が教えた行きどまりの個所とはここに違いないと雪絵は思った。

いっぱいに背のびし、手を伸ばして岩盤の突起している高い位置を、あちこちとさぐってみると、そのうち、かさっと指先にふれたものがあった。

しっかと握って取りおろした雪絵の指先は、さすがにわなわなと震えている。

油紙包みであった。その油紙を解き開くのも、さももどかしげな指先であった。

中は、さらに二つの紙包みになっている。

まず一つを開いた。

出てきたのは古金襴の守り袋――その上には、金糸をもって、武田家の定紋がくっきりと刺繍されてあった。

雪絵は提燈を岩角につるすと、おののく胸をおさえながら守り袋をひらいた。

まず出てきたのは、武田家の守護神諏訪明神の、さも色あせて古びたご神符であった。

それと一緒に、もう一枚、それよりもやや年代の新しいと思われる書きものが入っている。ひろげて提燈の灯にかざすと、流れるような達筆でこんなことが書いてあった。

おん身こと、もし身ごもり候て無事出産の暁には、諏訪明神のご神符を証拠に添え、しかるべく届け出候べし。その子、男子たるときは武田の嫡流たり。またもし、その子女子たるときは、おん身の望みによりおん身の手元に育てたもうべし。成人の暁、甲斐国中、かくし山一つ、引き出物として

つかわし候べきこと、後日の証としてかくのごとくにござ候。

月姫どの　　四郎勝頼

雪絵はしばし凝然とその文字に見入っていた。遠い昔、若かりし日の月姫と、武田の御曹司勝頼とのあやしくも美しい交情が、ほうふつとして目の前に去来するようであった。

しかも、その勝頼が月姫に対して送ったこの誓いの文を、遠い遠い年月を経て、孫にあたる自分が思いもかけないこのような廃坑の奥で、はじめて開き読もうなどと、一体だれが予測していただろうか？

そして今、雪絵のしみじみと胸にしみて感じるのは、己のふしぎな運命ではなくして、人の世の、あまりにもはかない興亡盛衰の姿であったのだ。

もう一つ紙包みがある。

雪絵が、何気なくそれを開くと、からりと音をたてて手の中へ落ちたのは、なんと二枚の竹

片ではなかったか……。

「まあ、『朱書き一節』が二枚までも……」

と、雪絵は思わずつぶやきながら、しばらくは啞然として、目を疑うように見つめていた。『朱書き一節』は、武田信玄公が手ずから竹を削って作った枝折に、孫子の文句『風林火山』を四つに分けて彫りつけ、朱うるしをつめて作りあげたものといわれている。

その一つ、不動如山（動かざること山の如し）と彫りつけてある一枚は、進太郎の手から今は雪絵自身の手に渡って、今も懐の中に大事にしまわれてあり、もう一つ、其疾如風（その早きこと風の如く）と彫った一枚は兵馬の手にあるはずである。

残りの二枚、すなわち其徐如林（その静かなること林の如し）と侵掠如火（侵しかすむること火の如く）と彫った二枚は、鳥の目源三という男の手にわたって行方がしれないはずと、父からきかされていた。

なるほど、今出現した二枚には、源三の手にあるはずのものと同じ文句が彫りつけられてある。

どうして、それがここにあるのだろう？　いや、これが本当の『朱書き一節』なのだろうか？

雪絵は、ふと思いついて、懐にある一枚をとり出し、手の上へ並べて見た。

其徐如林
侵掠如火
不動如山

と、最初の一節をのぞいて、きちんと合う。三枚並べたまま裏を返した。

話によれば、勝頼公は、その死の直前月姫さまへの使いを命じた泉野左馬之助を前にして、四枚の『朱書き一節』を並べその裏に何か書きしたためたということである。

何をかいたのか、もし、これが本当の『朱書き一節』なら、それが読みとれるはずだ。

そして、黒川金山こそは甲州きっての宝庫、無尽蔵な金鉱と称され、その牛の形をした金鉱脈の、ただわずかに片脚だけが掘り出されただけで大部分がそっくり残されているのだといい伝えられている。

しかし、一説には、それは世間の目をくらます策略から出た虚説であって、黒川金山はすでに大部分が掘りつくされてしまっているが、そのほかに黒川にまさる大金山が、極秘のうちにだれにも知らされず温存されていて、それを、武田のかくし山と呼ぶのだといわれ、そのことは雪絵も耳にしていた。

もし、勝頼が最期の直前に、『朱書き一節』の裏面へこれをかき、急使をもって月姫さまのもとへ送らせようとしたのが事実ならば、おそらく、月姫さまとのかつての約束をはたし、己の血をひくただ一人の遺児花姫のために『武田家が滅びても永遠に滅びることのない遺産』としてそのかくし山の所在を知らせやったのに違いない。

『朱書き一節』をそろえてならべ、その裏面に何か書いてある。

薄墨の走り書きが長い年月をへて散々に手ずれている上、兵馬の手にある一枚がかけているので、しかとは分からないが何か簡略な図面らしい。地名らしい文字が見えるので、どこかの地図だということが分かる。

しかし、その文字もかすれて、雪絵にはしかとは読みとれず、ただ一個所、やや大きく『富里』とかいた二文字だけが明らかに目に映っただけであった。

富里とはどこのことなのだろう？　それが、うわさにきく武田のかくし山のある場所なのだろうか？

武田家が繁栄を誇っていた当時、その武力の根底をなすものは、甲斐の山々から掘り出されたおびただしい黄金の力だったといわれていた。

あるまい。

そしてまた、武田家の遺産であるそのかくし山こそが、長安はじめ野心に目のくらんだ男たちの欲望を地獄火のように燃え立たせたのであろう……。

しかし、雪絵は武田家の遺産を開くかぎであるそれらの品を手にしながら、少しも興味をそそられはしなかった。

自分の血縁のことをしり、先祖のことを明らかにしたのはうれしい。その人たちが、子孫のために苦心してくれた志はありがたいと思う。けれども、その遺産とやらのために人間が醜い牙をむいていがみあい、はては父まで失った悲しみが、むしろ、いまさらのようにはげしくその胸をさいなんでやまないのであった。

いや、それにしても、まだ解きがたいふしぎなことが残っていた。鳥の目源三の手にあるはずの二枚の『朱書き一節』が、どうしてここにかくされていたのだろうか？　父は一言もそれに触れなかったではないか？

雪絵の目が、二枚の竹片を包んでいた紙切れの上にふと落ちた。何か文字がかいてあるのに気がついたからだ。

――『朱書き一節』二片に添え、水町三郎太に、取り急ぎ書きのこし申し候べきこと。

と書いて、下に、鳥の目源三と名前が見えている。

……まず、『朱書き一節』二片、改めてお受け取りくだされたく候なり……。

と、源三の文章は書き出してあった。

……お情けをこうむり、この坑道より脱走いたし候節、実は、ただちに脱出することなく、間近きある個所に身をひそませ騒ぎの静まるを待ちおり候。永年山室に監禁いたされおりそうらいて、疲労衰弱はなはだしき身には、追っ手の急追を無事ふり切ることもかたきやと存ぜられ、追っ手をやりすごし時を待つべく身をかく

し候ものに候。

かくて、身をひそめおり候折から、貴殿が、人目をさけつつとっさに一物を岩盤の陰に押しかくされ候こと、承知つかまつり候。思うに、それがしの脱走のことに連座あそばされ、不意の取り調べを受けることもあるべきやを案じられて、彼らの目に触るること許しがたき品をとっさにかくされ候ものと推察いたし、失礼ながら、後刻手にとり拝見つかまつり候条、重々ご海容こい願い上げ奉り候。

勝頼公ご染筆、ならびに公がおんはだ守り、謹んでうやうやしく拝見つかまつり候。驚愕のほどご推察くだされたく。

さるにてもこの儀、神助なり。公のみ霊のお導きとのみ、うやうやしく拝し奉り候。

ご貴殿こそは、さだめし武田のご正統、勝頼公がおん血をひきたもうおん方さまにご縁深きお人と存じ候。されば、多年それがしの心労いたし候『朱書き一節』をお託し申し上げ、そのおん方さまにお伝え願うべきまたなきお人とこそ存ぜられ、かくは、急遽『朱書き一節』を秘匿いたしおき候個所へまいり、くだんの品を取りいだし、また料紙を得候て、かくのごとくしたためおる次第にこれあり候。

ご貴殿が、秘匿いたしおかれ候位置に、勝頼公おんはだ守りとともども、この品々納めおき申すべく候。これは、ご貴殿またはご貴殿のご意志をうけ候ご仁が、他日必ずこの個所へまいられ、その品々お取り出され候べきことを信じ候ためにこれあり候。ご貴殿がご好誼ならびにご神助、ただただ一重に祈り上げ奉り候

以上謹言

思えば奇妙な巡りあわせではあったが、しかし、なぜ源三の手にあるべきはずの『朱書き一節』が、忽然とここに出現したかその理由はのみこめた。

源三は、多年心を苦しめていた『朱書き一節』二片を、三郎太に託して正当なる所有者の手に

渡そうとし、その願いどおり、はたして雪絵がそれを手に入れたわけである。

考えてみると、進太郎の手にあった一枚と、源三の手にあった二枚が、長い長い年月をへた後、ほとんど同時にわが手におちたことが、雪絵にはただの偶然とは思えなかった。なぜだか、残ったもう一枚が、必ずその三枚に合わさって一つにならずにはいないような予感がするのだ。

その一枚は兵馬の手にあるはずである。

兵馬——と、ちらっとその男のことを思いうかべた瞬間、なぜか、雪絵ははっとしたようにわれにかえった。

だれかが、すぐうしろに立っている気配を感じたのだ。すぐうしろに立って、無言のまま、じいっと自分を見つめている。

ぞっとしたように、振り向くと、それはいつの間に入ってきたのか、兵馬その人であった。

雪絵がぞっとしたのは兵馬がそこへ姿を現したことではなく、彼が近づいてくる足音も、気配さえも感じさせなかったその隠密な行動にあったのだ。

いくら、守り袋や『朱書き一節』に気をとられていたとはいえ、夜陰の静けさの中を、しかも、どんな小さな音でも反響させずにおかないこの坑道の中を、気配さえも感じさせずにいつの間にか忽然と背後に迫っていたその不気味さが、父三郎太の身近く迫ってゆく残忍な加害者の姿を、ふっと連想させたからであった。

「雪絵どの、おめでとうございます。それで、何もかもそろいましたな、あなたがご先祖からうけつがるべきご遺産のありかを知る手がかりが……」

と、兵馬の言葉は、何もかももちゃんと見てとったぞといいたげな、のっぴきさせない言い方であった。

「長安が必死になってさがし求めていた武田のかくし山が、これで無事にあなたの手に入るわ

けだ。三枚の、『朱書き一節』……それに、もう一枚はわしがもっている。これがそうです。雪絵どの、さあ、その三枚をお貸しください。この一枚とあわせてみようではないですか」

雪絵は化石したように突っ立ったまま、きらきら光るひとみでじっと兵馬を見つめていた。

「どうなさったのです？　なぜ、わしの顔を見つめてばかりおいでなのです？　さあ、『朱書き一節』をお出しなさい」

「月姫さまにお目通りするまでは、どなたにもこれはお見せしません」

と、雪絵は低い声でいった。

「いいや、雪絵どの。余人はしらず、このわしには、それを見せよと命令する権利があるはずです。いや、『朱書き一節』ばかりではない、あなたが今手にしておられるものすべてを……わしは、あなたの夫なのだから……」

兵馬は、薄笑いしながら、ゆっくりと一歩近寄ってきた。

「なぜ黙っておられるのです？　なぜ、夫の命令に従わないのです？　あなたは、ただ一人、わしだけが信頼するに足る男だといわれたではないか。なぜ、拒むのです？」

「あなたのうしろにかくれている、あやしいものが恐ろしいからです」

と、雪絵は低い声でくりかえした。気のせいか、その顔は引きつったように青白い。

「わしのうしろに？　ふふふ……だれもおりはしませんよ」

「いいえ、おります。父を手にかけた恐ろしい男がおります」

「父君の下手人が、青助でないとおっしゃるのですね」

「青助ではありません。絶対に！」

「では、だれだと思うのです？」

「青助をいの字に仕立てて、父の下手人らしくつくろった男です」

「何ッ!?」

兵馬のこめかみに、一瞬血脈が怒張したと思うと、その表情にはみるみる陰鬱なものが垂れこめてきた。

「青助をいの字に仕立てたと？　では、青助がいの字ではないとでもおっしゃるのか？」

「青助はいの字ではなかったのです。青助が谷へ落ちて死んだときには、その懐には、いの字とかいた紙切れがなかったはずですから……」

「何を、ばかなことを！　わしと一緒に、真っ先に谷へおりた彦七殿がちゃんとその紙切れを見つけているではないか」

「兵馬さま、それはだれかが、故意に懐へ入れておいたのでございますよ」

一瞬、兵馬の呼吸がとまった。

「雪絵どの、みだりな想像をたくましゅうなさるものではない。真っ先に谷におり、青助のところへかけつけたのは、わしと彦七殿だ。彦七殿が見つけたいの字の紙切れは、わしもしかと見たのですよ」

兵馬の顔色も真っ白い。へびのような目が、まるでねらいをつけるように雪絵を凝視しながらいった。

「でも、青助はそれをもってはいなかったのです。だれかが、故意に彼の懐へ入れたのです」

と、雪絵も執拗にいいはりながら、きっと目をみはって兵馬を見つめかえしている。

「うむ、分かった」

と、兵馬は声を高くした。

「わしにはその理由が分からぬが、もし、あなたのいうことが事実ならば、それは、青助と一緒に谷へおちたお梶を、さらって逃げたやつの仕業に違いない。いの字です。あなたのいうとおり、ほかにいの字がいたのです。彼が何かの理由で青助をいの字と思いこませようとしたのです。うむ、そうだ。やつは、その手段によっていの字がすでに死んだものと思いこませ、われわれをあざむき油断させようとたくらんだに

と、彼はまた吐き出すようにわめいた。
「それは、進太郎だッ。雪絵どの、あなたは桜井進太郎に会いましたなッ!?」
「お会いしました。はい、進太郎さまにお会いして、そのお話を伺いました」
と、雪絵もはね返すようにいう。
「分かった、雪絵どの。今こそ、何もかも分かったぞ！」
兵馬のわめきは最後の虚勢であった。
「父君を手にかけたのはきゃつだ。進太郎に違いないのだ！」
「な、なんと仰せられますッ！」
「思うてもみなさい。父君を手にかけたのは、青助でもない、いの字でもない。そのほかのだれかだ。あの峠のあたりには、わしはじめ味方の連中のほかにだれがいたか？　今のあなたの言葉で、進太郎がうろうろしていたことが分かった。きゃつだ！　きゃつのほかに父君の下手人はありえない」
違いありますまい」
「いいえ、いの字の仕業ではありません」
雪絵の声は、いよいよ冷たく執拗であった。
「兵馬さま、いの字などという怪しい人物ではなくて、しかも、あなたが青助を斬って谷へお落としになるときから、ずうっと見ていらした証人がいるのでございます。そのお人が、青助はいの字ではない、父を殺した下手人が、青助に罪をなすりつけるため巧みに仕組んだ芝居だったと、はっきり、見通してそうおっしゃったのでございます」
兵馬は沈黙した。もはや、彼にはいうべき言葉がなかったのか。
物憂げなそのまゆの陰には、はげしく去来する表情の動きがあった。その性根の奥底に、ひたかくし通している凶暴なものが、いまにも表へ噴き上がろうとして、しかもからくもこらえ忍んでいるという印象があった。
「今こそ分かった！」

「いいえ、青助が父の下手人でありえなかったと同じように、進太郎さまもまた、父を手にかけることは不可能だったのです」
「なぜ？　なぜ、なぜッ!?」
「父は進太郎さまとは一面識もございません。あの、用心深い父が、場所もあのような洞窟の中で、不意に現れた見も知らない進太郎さまをみだりに近づけて、むざむざとくびり殺されるようなことは、絶対にないはずだからでございます」
いまや、雪絵の声は犯しがたい確信にあふれていた。
兵馬は絶句した。もはや、彼には言うべき言葉が何一つなかったはずだ。
彼の猜疑にみちたへびのようなひとみは、雪絵の確信の奥にある何かを読みとろうとするように、瞬きもせず凝視しつづけていた。
「雪絵どの、あなたは進太郎に会われた。夫たるわしの目を盗んで、素姓もしれぬ男と密会されたのだ。武士の妻として恥ずかしくは思われぬのか？」
「いいえ、まだ、わたくしはあなたの妻ではありません。いえいえ、わたくしは月姫さまにお目通りし、あなたとのご縁をきっぱりとお断り申し上げるつもりです」
「わしをだましていたのだな。いや、お見事であった」
兵馬はにやっと笑った。それこそ、まさに彼が仮面をぬぎすてようとする瞬間であった。
「あなたがどういわれようと、父君が、わしや月姫さまのおぼし召しを代表する彦七の前で二人の縁を承知されたのだ。あなたはわしの妻だ。あなたが一方的になんといわれようとも、わしは不承知だ。あなたはわしの妻なのだ」
彼は、いいながら、じりっと一歩よった。
「さあ、そのあなたが手にしている品々を渡しなさい。夫が妻に命令するのだ。妻としてのあ

なたの屈従は、まずそのことからはじまらねばならぬ。さあ、渡さぬかッ」

雪絵はさっと一歩あとへ退いた。が、それよりも、兵馬のつめよる身ごなしは速かった。

ぐいとのびた片手が雪絵の肩先をつかみ、同時に、するっとその体が雪絵の背後にまわった。

「夫の命令だ。なぜ、いうとおりにせぬッ」

片手で体をつかんだまま、うしろから、その片腕がぐうっと首にまきついてくる。

瞬間、雪絵は総身の毛穴が、ぞっと天に向かって逆立つのを覚えた。

父の死の瞬間が、ありありとのどをかすめてすぎたからである。父の不意をついて身辺にすりよった黒い影が、あっという間もない早さで父の首へなわをかけ、力にまかせてぐうっと絞りあげる姿をまざまざと見たと思ったからだ。

父を殺した下手人がここにいる。憎い憎い仇敵がここにいる！

猛然とその腕をふりほどいた雪絵は、とびのきざま、すさまじい形相ではったと兵馬をにらんだ。

「父を殺したのはあなたですッ！」

「……」

兵馬は、声もなく、にやっと笑う。

「敵ッ！　味方の仮面をかぶった憎むべき敵は、あなた、兵馬どのですッ！」

兵馬は、また、笑った。雪絵が生涯かけて忘れることのできないほど、冷酷な、残忍な笑いであった。

雪絵はぎらっと懐剣をひきぬいた。

「敵ッ！　覚悟ッ！」

兵馬は無言のまま、三度にやっと笑った。

「お、おのれ、覚悟ッ！」

すさまじい裂帛の声とともに、雪絵は怒髪天をつく形相でぱっと地をけった。

提燈の灯がかけたたましく瞬く。

瞬いた灯の下で、二つの影がもつれ合い、一度、はじけるように飛びすさってまたもつれ、

そして、一つに固まったままどっと地に倒れた。

兵馬が、雪絵の利き腕をねじあげたまま馬乗りになっている。そして、四度、にやっと笑った。

「むだなことだ！」

兵馬は、雪絵の背に馬乗りになったまま、利き腕をねじまげ、その指先から懐剣をもぎとった。

それから、そばに落ちていた守り袋や『朱書き一節』を、一つ一つ、ゆうゆうとひろいあげて懐に入れる。

「むだなことだ。もがくのはおよしなさい」

冷然といった。

「わしは、あなたにほれていたのだ。命がけで、甲府の城内からあなたを救い出した心にいつわりはない。さよう、あなたの父君を手にかけたのはわしだが、それも、あなたをわしのものにしたいばかりの執念からなのだ」

「うぬッ、人非人！　ひきょうものッ」

「ひきょうかもしれん。しかし、わしのあなたにほれぬいた心にいささかの偽りもない。わしは、何を犠牲にしても、あなたを自分のものにせずにはおかぬと誓っていたのだ。雪絵どの、わしは思いを通すぞ」

「人非人！　けだもの！　わたしは、おのれのごとき人非人の妻ではない、死んでも、自由にはならぬ」

「よしッ、もはや、こうなっては、女房にするというわけにはいくまい。それは断念した。あなたには死んでもらう。そして、わしは天下晴れて、武田家の遺産を相続する。しかし、ただは死なせぬぞ。分かるか、雪絵どの。男としての執念、男としての恋情はあくまでとげるからそう思え。あなたの心までは手に入れられずとも、その体だけは思いのままにする」

雪絵を押し伏せたまま、その片腕が雪絵の首にまきつき、ぐうっとしめつけてきた。

「う、ううッ！　ひ、ひきょうものッ」
「もがくのも、一瞬のことだ。あなたはまもなく失神する。もはや、舌をかみ切ることもできまい。自決するにしても、もはやおそすぎたと思わぬか。せめても、あなたを失神させ正気を失わせるのがわしの慈悲だと思え。ここは甲州も山深い金峰山の、しかも、だれしらぬ廃坑の奥だ。月姫の一行がやってくるまで、何一つじゃまの入るおそれもない。わしは、ゆっくりと楽しむのだ。分かるか、雪絵どの？」
雪絵は、ただううう……とうめきつづけるだけであった。全身がけいれんしている。もがく手足の力も弱りかけていた。
「わしは、楽しむ。ゆっくりと楽しむ。あなたの体を楽しむのだ。男の執念を晴らすのだ。存分に晴らすのだ。そして、すべてが終わったとき、あなたはたぶん、一糸もまとわぬ裸のまま死んでいるであろう。二度と、息をふきかえさぬよう、それがすんだら、息の根をとめる。その方が、あなたにとっても、恥をしらずにすんで幸せであろうからな。そして、あなたの裸の死体を、だれもしらぬ谷間に投げこむ……」
正体をむき出した兵馬は悪鬼の姿だった。
うしろにねじりあげた雪絵の片腕が、びくびくっとけいれんしている。その肩先の辺りまで、襟がはだけ、白蠟のような肌が、肩から胸乳のあたりまでむごたらしく露出し、しめつけられる苦しさをそのまま伝えるように、はげしく波打っている。
兵馬は、その波打つ胸乳の辺りへ食い入るような視線をくぎ付けにしながら、ぐうっと最後の力をこめて絞めつけにかかった。
とたん、背後にあたって、
「うぬッ、痴れ者がッ！」
と、出しぬけに一喝する声が聞こえた。坑道が鳴りひびくようなはげしい声である。
「うおッ！」

と叫びざま、兵馬ははねおきた。その叫びにも挙動にも不意をつかれた狼狽がありありと見えていた。
「き、貴様、進太郎だなッ！」
兵馬がにらみすえた灯影の向こうに仁王立ちになっていたのは進太郎であった。
目と目が、宙に火花を散らしてにらみあっている。まるで、生まれながらにして敵同士であったような二人の対峙であった。
「兵馬、貴様はよくよく神を恐れざるやつだな」
と、進太郎は怒りをこめていった。
「濃霧の中で、金峰山の天狗の名をかりて、再三警告をはっしたわしの言葉をよも忘れはすまい。しかも、貴様はその直後、あろうことか、三郎太殿を手にかけおった。それと知ったときには、即座に成敗すべきやつではあったが、雪絵どのが自らの手で、しかと父君の敵の正体をつきとめ得心なさるまで、じっとこらえていたとも知ってか知らずか、はたして、この重ね重ねの、あさましい所業だ。これをしも、天道が見逃したもうとぬけぬけと思っているのか、恐れを知らぬ痴れ者めがッ」
「ふふふ……」
と、兵馬はことさら不敵をよそおって笑ってみせた。だが、のどにつまったひからびた声であった。
「よう来たのう。進太郎、よくやってきたのう。うむ、しゃべるのはやめろ。むだだからな。貴様とおれとの間では、もはや何もいうことはないはずだ。ただ一つ、きまっていたのは、いずれは、なんとかせずばなるまいと思っていたということだわ。進太郎、貴様のことをだぞ。よいところへ出てうせた。よしッ、この際きっぱりと片をつけてくれよう。勝負だッ」
「勝負！」
進太郎はにたっと笑いかえした。殺気を含んだすごい目の光であった。
「よし、表へ出ろ」

「出ろ、貴様から……」

兵馬ははね起きて身構えたときから、雪絵を片腕にかかえて身を防ぐ盾にしていた。失神しかけている雪絵の細いのど首に、太い男の腕がまだへびのようにまきついたまましめつけていた。

「雪絵どのをはなせッ」

「そうはいかん。進太郎、妙なそぶりをすると、とたん雪絵の命がなくなるぞ」

兵馬は、いつの間にか引き抜いた刀の切っ先を、雪絵のわき腹につきつけていた。

進太郎は岩壁にさしかけてあった提燈をとって、無言のままくるりときびすをかえし、坑道の出口に向かって歩きはじめた。

兵馬が雪絵を盾にしたまま、そのあとにつづく。

へびのように狡猾なその目が、すぐ前を行く進太郎の背をにらんで、一瞬のすきでもあらばとっさに襲撃に移ろうとする危険な気配を見せていた。

しかし、狭くて凹凸のはげしい坑内では、進太郎との間にある距離が、兵馬に容易にそのすきを見いださせなかったらしい。

出口まで来た。

進太郎が出る。つづいて、兵馬が一歩……。

表へふみ出したと思った瞬間、彼は雪絵の体を投げ出しざま、

「くそッ！」

ふりかぶった大刀をたたきつけるようにして進太郎の背に襲いかかっていった。

夜気をつんざいて飛んだ白刃の切っ先に、兵馬が手ごたえ！　と感じたのは、二つに切り割られて宙に舞い上がった進太郎の持っていた提燈であった。

しまったッ！

と、のめってゆく体勢を、とっさに立て直した兵馬の足元に、舞いおちてきた提燈が、めら

め ら炎をあげて燃え上がっている。

その、かあっとあたりを照らし出した明るさの向こうに、間髪を入れず大刀を抜きはなって正眼に構えた進太郎の隆々たる影と、射るように鋭い二つの目が、まるで兵馬の卑劣な不意打ちを冷笑するような静けさで立ちはだかっていた。

「くそッ！　くそッ！」

ほかにはいう言葉を知らないかのように兵馬はののしり、そして、ばりばり歯がみした。

振りかぶった大刀の切っ先が、けたたましく震え波打っているのが、彼の全身を焼いている死に物狂いに殺気立ったものを暗示しているようであった。

提燈が燃えつきた。頭上に月はあったが、提燈の燃える明るさに慣れた目には、一瞬やみを感じた。

まるで、それが合図でもあったかのようである。

「いやあッ！」

兵馬は身を丸め、豹のように宙をとんだ。

襲う影と受ける影と、影と影とがもつれ合い、はじけるように飛びすさり、また、がっし！と組みあった。

ぶつかり合う肉体の響きと、はげしくあえいでいる呼吸の気配、刃と刃がふれあって火花の散った瞬間、歯をむいた男と男のすさまじい形相が、ちらっとやみに浮かんで、またすぐ消えた。

一つの影がのめってゆく。転んだ。すぐ、はねおきたが、

「ちっ！」

と、はげしい舌打ちをしながら、とっさに握っていた大刀をすて、脇差に抜きかえた。大刀の刃が二つに折れて飛んだらしい。兵馬である。

その、憎しみに燃えたつ目の底には、ようやく絶望のあせりが見えはじめていた。進太郎という人物が、容易ならざる敵であることがいま

さらのように明らかになり、このまま事態が推移すれば、遠からず、自分が完敗しなければならないことを、ちらっと予感したからだ。

「くそッ！」

と、露骨にむき出した、食いしばった歯は虚勢であった。額に脂汗がにじみ出てきた。じりじり、後ろへ後ろへとさがってゆく。今は、下がるよりほかに手段がないかのような兵馬であった。

と——

ちょうど、そのときであった、彼らをとりまいた周囲のやみの中から、

「わあッ！」

と、けたたましいわめき声をあげながら、おびただしい人影がいっせいに飛びたってきたのは……。

「獲物はわなにおちたぞッ。ひっ包んで捕らえてしまえッ。男二人に女一人だッ」

と、叫んでいる声が聞こえてくる。

「ちっ！　長安の手のものだ！」

と、思わず叫んだのは、進太郎だったか、それとも兵馬か。

たしかに長安の手の者であった。

三人をとりかこんで、喊声をあげながらいっせいにおどり出てきた人数も多かったが、さらにその向こうの森の茂みからも、時を同じゅうして、ふらふらっと群れあがるように姿を現したおびただしい提燈の数があった。

おそらく、三人のあとを辛抱強くつけてきた諜者の通報によって、黒川金山から急遽人数をかり集め、絶対逃がさない決意のもとに計りに計った二重三重の追っ手の構えだったのだろう。

その先頭に立って、はげしく下知している人影は、まさしく長安の懐刀といわれた笹塚黒太夫であった。

その、容易ならざる事態を一瞥して、とたん、

しまった！　と直感したのは進太郎も兵馬も同時だった。

はげしい私怨はあっても、長安の手に落ちては万事休すだ。ことに、雪絵のことがちらっと胸をかすめた瞬間、進太郎は兵馬をすてた。

一瞬のすきを得て、やみに向かって脱兎のように走り去る兵馬の影をちらと見ながら、進太郎は雪絵のそばへ走った。

雪絵はやっと正気づいて立ち上がったところである。

「長安の追っ手です。ともかくも、ここを脱出しなければならぬ。しっかりしてくださいッ」

「は、はいッ」

「どんなことがあっても、わしのそばからはなれてはならぬ。よいか！」

「はいッ。進太郎さまッ。も、もう……死んでもおそばを離れはいたしませぬッ」

敵が近づいていた。

進太郎は脇差をぬいて雪絵に渡すと、

「よいか、雪絵どの、行くぞッ！」

と、一声叫んで、突風のように走り出していた。

間近に迫っていた追っ手の先鋒が、一人三人、右左へけ散らされたようにけし飛ぶのが見えた。

走る、走る。進太郎はただ走る。片手に雪絵の手をとり、崖をとぶときには軽々とその体をひっ抱えていた。

しかし、二重三重に取りかこんでいる追っ手の陣形から脱出することはほとんど不可能ではないか。

「逃がしはせぬ。絶対、逃がさぬ」

月明かりの下に立った黒太夫は、うめくように叱咤していた。

「三人だッ。袋のねずみだぞッ。ことに、女は生け捕りにせい。男は、手に余ればたたっ斬ってよいが、女だけは、是が非でも生け捕りにせいッ。恩賞、望み次第だぞッ」

わっわっと山谷にこだまする喊声が、右へ左へと動いてゆく。その喊声の向こうに、追われる獲物の逃げまどう影があった。

黒太夫の立っていたのは、こんもりと高い草むらの中だったが、そのとき、黒太夫は思いもかけない方角に、わあっと新しい喊声のあがるのを聞いた。

一個の人影が矢のようにこちらめがけて走ってくる。喊声をあげながら、それに追いすがってくるのは黒太夫の配下たちであった。

黒太夫と、その側近にいた男たちが、きっとなって身構えるまもなく、その人影は間近まで走りよってきて、何思ったか、地上へばっとうずくまり、

「黒太夫さま、おそれながら……」

と、鋭い低声で、しかしうやうやしくいいながら、何か差し出した。

黒頭巾で深々と顔をかくした男である。

かけつけた男たちにぐるっと取り巻かれながら、その黒頭巾の男は水のように冷ややかな姿でじっとうずくまっていた。

獲物と信じて追いつめてきた男たちも、その男の自信満々たる姿に、一瞬気をのまれたように、人垣を作って立ちどまった。

黒太夫は、じいっとその姿をにらんでいたが、そのうずくまった黒い影に、ふっと何かを感じたらしい。

そばにいた配下の一人に、無言のまま目配せしたのは、ひざまずいた男の差し出しているものを、持ってこいと命じたのであろう。命じられた男が、その紙片らしいものをもって小走りにもどってくる。

黒太夫は、提燈の灯にかざして、ちらと一瞥した。

この者儀、いの字なり。役目をもってまかり通るべく候ほどに、甲州一円、関所はもとより獄舎城中たりとも出入り勝手たるべきこと。

月　日　　石見守長安

と、したためてある。長安が直書していの字に与えた通行切手ともいうべきものであった。

黒太夫は、つと配下の男たちから離れ、頭巾の男をさしまねいた。

「いの字か？」

「は、黒太夫さま、お役目ご苦労に存じまする」

と、身近くよったその男は、例の、いの字特有の低い含み声でささやいた。

「して、おぬしは、なんでここへ？」

「雪絵どののあとをつけまして……と、申しますのも、つまりは、追いつめて、例の……武田家のご遺産をめぐる一切のものを手に入れますために……」

「それで、首尾は」

「ご安堵なされませ。すべて、ここに……」

と、軽く懐をたたいてみせる。

「『朱書き一節』も？」

「は、全部、四枚とも、手に入れましてございます」

「おう、さすがよのう。いの字、手柄であった。殿も、さぞかしお喜びであろう」

「それよりも、黒太夫さま。いっときも早く、獲物をひっ捕らえねばなりませぬ。雪絵どのもさることながら、一緒に逃げ回る桜井進太郎なるやつ……絶対に、逃がしては殿のおためになりませぬぞ。この場を去らせず、斬っておすてなされませ。しかも、黒太夫さま、時をすごしましては、月姫が到着いたします」

「何、月姫がここへ？」

「ご存じあるまいと存じ、それをお知らせにまかり出ました。月姫が、その手の者山の衆、およそ三、四十も引きつれてまもなく到着いたすでございましょう。うるそうございますぞ、これは……」

「うむ、なるほどよいことを知らせてくれた。少しも早く二人を始末して、あわよくば月姫も

しとめくれよう。いの字、力をかせ」
「は、かしこまりましてございます」
と、一礼して、すうっとそばをはなれて行こうとする頭巾の男を、
「待て、いの字！」
黒太夫の目がじろっと見すえた。
「わしのそばにいよ。よいか、絶対にそばからはなれることはならん」
いの字は、何かぎくっとしたようであった。何もいわなかった。

進太郎と雪絵は、高所へ高所へと逃げのびた。もう、見渡すかぎりの足元は、追っ手の人数にふさがれている。追いつめられて、やがては行き場のなくなることは分かっていたが、しかし、そのとき、追っ手との間にわずかな距離を生じた。
「雪絵どの、ご覧なさいッ！」
と、進太郎がいつにもないはげしい声でたたきつけるようにいった。
「あすこを、雪絵どの！　あすこに立っている、あの男を！」
「黒太夫でございますか、進太郎さま？」
「いいや、黒太夫のすぐそばに立っている、もう一人の男です。黒頭巾で顔を覆っているあの男です」
進太郎に指さされて、雪絵がじいっと目を凝らしたのは、目の下に見える、月明かりのさんさんと降りそそいでいる辺りであった。
「お見覚えはないか？　あの男の姿にご記憶はないか？」
「ああ、そう伺えば、たしかにどこかで見かけたような……」
「雪絵どの、あいつがいの字です」
「まあ、あれがいの字？　では、やっぱりいの字と青助とは別人だったのでございますね。いの字は生きていたのでございますね。で、でも……進太郎さま、ふしぎでございます。わたくし、いの字と申す男は、名前こそ存じておれ、まだ一度も姿を見たことはございませんのに……あの男は、たしかにどこかで……」
「見た覚えがあるとおっしゃるのですか？」
「はい、進太郎さま」
「そうでしょう。あなたは幾度も見たはずです。先刻も……いや、たった今しがたまで、その男はあなたのすぐ前にいたのですから……」
「ええっ、な、なんと仰せでございますか？」
「お分かりにならぬか？」
「分かりませぬ。たった今しがたまで？　わたくしの目の前に？」
「兵馬です」
進太郎の声は、鞭でぴしっと宙をたたく鋭さに似ていた。
「兵馬こそ、いの字です！」
「え？」
唖然とした雪絵は、まだ進太郎のいった言葉の意味がよくのみこめないようであった。
「兵馬がいの字と、仰せられますのは？」
「いの字の正体が、実はあの兵馬という男だったと申しているのです。長安の片腕となって、月姫さまや水町家の秘密をさぐり、はては武田家の遺産なるものをかすめとろうとしていた、いの字と呼ばれる希代の曲者が、あの泉野兵馬だったと申しているのです」
「え、えっ、えっ、そ、そのようなこと、信じられませぬ。どうしても信じられませぬッ」
「ご覧なさい、あの男を。あの男の姿にお見覚えがないか？」
と、進太郎は、はったと人影の方を指さした。
「ああ、進太郎さま。あ、あの男は、たしかに兵馬でございます。あの姿は兵馬に違いございませぬ」
「それが、兵馬といの字が同一人物だという何よりの証拠だとはお思いにならぬか。わしは、とうからあいつの正体はしっていたが、あなたが直接そのお目で、しかと、その正体をご覧に

なるまでじっと機会をまっていたのです。ご覧なさい。今こそ、あいつは正体を露出したのだ！」

「雪絵どの。今こそお話しするが、兵馬という男のすべてが偽りだったのです。彼ら兄妹が、武田家の名門泉野左馬之助の遺児と称するのも偽りで、その実、天目山山麓のやぶ陰で左馬之助を手にかけた土匪の小せがれだったといわれているのです。

やがてあいつは、お梶どのを伴って郷里を出奔すると同時に、左馬之助の遺児と偽称するようになったのですが、それも、ただただ、あいつがかぎつけた武田家の遺産を独り占めにせんという野心から発した深慮遠謀からだったのです。もちろん、お梶どのは何も知りますまい。当時、幼かったあの人は、ただただ兄のいうことを信じるほかなかったのが当然でしょう。

そうしてあいつは、彦七に近づき、水町家に近づき月姫さまに近づき、一方、ひそかに長安の犬となり、いの字の仮面の下に正体をかくしたのです。おそらく、あいつめは、その双腹行為により、いずれかの手づるをたぐって己の野心をみたす、狡猾極まる考えだったに違いありません。

そのために、まず、己の妹、お梶どのをだまして、無理強いに長安の玩弄物に献じました。表面、武田家に対する忠節という美名を用い、隠密の目的で長安に近づくためと称しながら、実は、長安にとり入り、その信任をうけるためのむごたらしい生贄に供したにすぎなかったのです」

「恐ろしい！　進太郎さまッ、恐ろしいことでございます。あまりにも、恐ろしいことでございますッ」

と、さすがに気丈な雪絵も、耳を覆いたげにいう。

「恐ろしいことです。信じられないくらい恐ろしいことです。しかし、わしはその動かしがたい証拠を、この目でしかと見ているのです。最初は、あなたが三日月堂で月姫さまにお会いなされた晩のことでした。あの屋敷へ忍びこんだわしは、たしかに、いの字の影を見たのです。しかも、そのいの字は、わしの目の前で……いや、おびただしい月姫さま警固の人数の目前で、たちまち姿を消してしまったのです。わしが、はじめて、いの字の正体に疑惑を覚え、もしや、月姫さまお味方の中に、いの字の正体がかくれているのではないかと、ふっとそう感じたのがそのときでした。

そして、先日。兵馬が甲府城内からあなたを救い出したとき……わしは、城中に忍んでいて、あいつが、いの字から兵馬に変貌する瞬間を、しかとこの目で見てしまったのです。いや、あのとき、あの甲府城内から、雪絵どのを救い出せる者は、実は、長安の信任深い、そして、城内の地理にだれよりもよく通じているいの字のほかにはありえなかったのだ、とお思いになりませんか。

わしは、あいつが何者であろうとも、だれの手にもなしがたかった雪絵どの救出のことを、しとげてくれた手柄を認めずにいられなかったのです。それ故、あいつに警告を発し、なお反省すべき余裕と時間とを与えたのです。

しかも、あいつは、父君を殺し、青助を手にかけました。じゃまな父君を排除すると一緒に、あいつを脅迫していた青助にいの字の罪を背負わせて葬り去り、ことによると、兵馬の正体を見破りかけているかもしれないと案じた、このわしの目までたぶらかそうとしたのです」

「恐ろしい！　恐ろしいことです。でも分かりました。兵馬がいの字だということがよく分かりました。そして、兵馬は父の敵ですッ」

雪絵は身もだえしながら悲痛な声で叫んだ。

進太郎が高所へ高所へと逃げたことは重大な

過失であった。
　鶏冠山の頂は円錐形の岩山をなしていて、体をかくす一木の陰もなかったし、登りつめればもう逃げ場もなかった。
　しかも、月は意地悪いくらい明るくさえ、その上、足元には追っ手の提燈が群れ集まって、逃がしもやらず二人の姿をありありと照らし出していた。
「神妙にしろ、じたばたすれば撃つぞッ！」
と、下からだみ声がわめいている。
「二人とも、刀をすてろッ。刀をすてて、女を先に下へおろせッ。女は撃たぬ。女は助ける。早くせいッ。抵抗すれば二人とも撃つぞッ」
　火なわの焼けるにおいが流れてきた。どことも分からないが、鉄砲が二人にねらいをつけているらしい。追っ手まで数間の距離しかなかった。
「こうなっては、もはや後へは逃げる道がない。敵中へおどりこみ、斬って斬って斬りまくるほかに活を求める手段はないが、雪絵どの、しかしあなたにはよも危害は加えまいと思う」
　雪絵の肩をしっかり抱いた進太郎は、岩角に足をふんがけ、追っ手の影をきっと見おろした。
「ここまで来て長安の手におちるのは無念だが、しかし、今となってはやむをえまい。ここでお別れする。さあ、あなた一人、先に下へおりてください」
「まあ、な、なんと仰せられますかッ。い、いやでございます。雪絵はおそばをはなれませぬッ」
　と、雪絵は恥も忘れて、ひしと進太郎の腕にすがっている。
「一命を助かりたいために、みすみす長安の手におちよ——と仰せられるのでございますか。思っただけでもぞっといたします。ましてや、あの追っ手を指揮している兵馬は……あの兵馬は、父の敵でございますッ」
「兵馬を父君の敵と思えばこそ、なんとしてでも命をまっとうされねばならぬ。さもなくて、だれが三郎太殿の恨みをはらすというのですか？」
「いいえ、いえ！　もはや、父の敵も恨みもございませぬ。進太郎さまッ、ただただ、おそばにいとうございます。生きるも死ぬも……ただただ、お願いでございます。おそばに……」
　と、いよいよはげしくしがみついてはなれようとはしない。
「では、雪絵どの。父君の敵のことさえ忘れて、この進太郎と生死をともにしてくださるというのか？」
「お願い申し上げます。おそばに……ただ、おそばにおらせてくださいませッ」
「よし、分かった。では、行くぞッ」
「は、はいッ」
「もはや生死はしらぬ。ただ、斬って斬って、斬りぬけるだけだ。生死、ともに一緒に！　雪絵どの、しかとそばをはなれられるなよッ」
「はいッ、はなれませぬッ。死んでもおそばをはなれませぬッ」
　大刀をふりかぶり、うおうッ！　とほえながら岩角に突っ立ち上がった進太郎の気勢は、すぐ追っ手に響いてその殺気をよびたてた。
「くそッ！　撃てッ！」
と、だれかがわめいた。
だが——
それにつづいて起こるはずの銃声は聞こえず、
「ぎゃあーッ！」
とたまげるようなけたたましい悲鳴がそれにとって代わった。
　その悲鳴はとある岩角に起こった。
　岩角にとりついて鉄砲をかまえていた男が、宙にはね上がりざま、仲間の頭上へおちてきた。その背に、胸まで貫いて矢が突きささっている。
「わっ、矢だッ！」

「気をつけろッ！」
「うしろに敵がいるぞッ！」
そんな叫び声が同時に起こり、立ち上がった影はただろつき騒ぐように見えた。
間髪を入れなかった。
ばらばらっと矢が雨のように降ってくる。どこに敵がいるのか分からない。ただ、うしろから、まるで白日のもとにねらいをつけたかのような正確さで射かけてくるのをしるだけであった。
みるみる、追っ手の中に手負いができてくる。しかも、急な岩山の斜面であった。どこからともしれず降ってくる狙矢に、一人が傷つく間に数人が混乱し、足を滑らせて下へ転げた。
「静まれッ、落ち着けッ！」
と、だれかが声をからして叫んだが、もうその混乱は収拾がつかなかった。
しかも、その狙矢の雨がとだえた瞬間、何者ともしれぬ黒装束の一隊が、追っ手の人垣をぶち破って、疾風のようなすさまじい勢いで、鶏冠山の頂めがけて駆けのぼってきた。
みるみる、追っ手をけ散らして近づいてきたその人影は、進太郎、雪絵のそばまではせ登ってくると、
「お二人さま、こちらへッ！　月姫さまのおそばまでご案内つかまつりますッ！」
と、低声に鋭くいったとおもうと、前後左右からさっと取り囲み、そのまま、抱きあげるようにして脱兎のように走り出した。
どこをどう走ったのか、二人にはまるで分からない。
ただ、いつか岩山の急傾斜を下り、草原を突っ切り、どこかの森の中へ導きこまれたのをしっただけである。
走る、走る——二人を間にして一隊の黒影は、まるで山に生まれて山に死ぬというかもしかのような速さでひた走りに走りつづけた。
と——

森の中の、とある木の下陰に、数個の提燈に守られ、静かに地におりている山駕籠らしいものを見た。
雪絵と進太郎が、その山駕籠の前まで行くと、
「雪絵かえ？　間におうてよかったのう。けがはしませんでしたか？」
垂れの向こうから、優しげな声がしみじみと聞こえてきた。
「ああ、月姫さまッ！　お、お目にかかりとうございましたッ……」
と、おもわず大地にひざまずいて叫んだ雪絵の声には、かつて三日月堂でその人の前に出たときのような恐れもなく、疑惑もなく、ただただ血が血を求めて呼ぶ懐かしさ、親しさ、いとしさに震えていた。
「おう、わたしもどれほど会いとうおもっていたことか……よいのです、雪絵。何もかも分かっています。そこのお人が、桜井進太郎殿とやらのう。進太郎どの、わたしからも、一言、しみじみと礼が申したい。ちこう……」
と、いいながら、垂れのはしがわずかに動いて透き間を作った。
そして、その間から外をのぞいた、あの世にも神々しく朦たけた女性の目が、若い二人の男女を、さも懐かしげに、そして、いたわるようにじいっと見やった。
今朝も甲府城には朝霧が立ちこめていた。濃い霧が立つ度に、山の秋はいよいよ深くなってゆくのだという。
「いの字、大儀であった……」
と、居間の縁先まで出てきた長安は、庭先にうずくまっている男に、じろっと一瞥をなげながらそういった。
「黒太夫を通してわしの手元までさし出した、『朱書き一節』四枚、それに武田勝頼公のおはだ守りとお墨付き、たしかに受納したぞ」
「ありがたき幸せに存じまする。これにて、手

前も、永らくのご指令をはたし、欣快至極に存じおります」

と、いの字はうやうやしくいう、黒頭巾をしているが、彼がこのような白日のもとで長安の御前に出るのは異例のことだったし、しかも、一人ではなしに、その背後には警固の武士たちが十余人も、ぎっしり並んで目を光らせていた。

「多年さがしもとめていた武田家のかくし山も、これでようやく世の光を見るであろう。黒太夫に命じ、すでに富里向けて出発させたわ」

と、長安はいった。

「これ、いの字、なんぞ申すことがあるか?」

「は? と、仰せられますと?」

「息のあるうちに、何かいいのこすことがないかと尋ねているのじゃわ」

いの字は覆面した顔をあげた。肩先がふるえている。

「わたくしは、ただただ、殿への忠節一徹に生きてまいりました。雪絵の父三郎太を殺害しましたのも、彼が江戸表へ脱走し、殿のおんためにならぬことを公儀へ訴え出ると知ったからでございます。青助なる鼠賊を手にかけましたのも、武田家のかくし山にくちばしをはさみ、殿のご計画にじゃまだてする危険をすてておけぬと感じたからでございます。しかも、そのために、みすみす妹梶まで、あえて斬ってすてました、わたくしの心中、お察しくださいますよう」

「それだけか? まだ申すことがあるか?」

「雪絵をたくみに誘導し、かくし山の所在をしるための品々、無事にこの手におさめましたのも、いささかわたくしの働きかと存じまする。雪絵と進太郎の両名を、まんまとわなにおとし、黒太夫さまのお手におびきわたすべき直前、すんでのところで逃がし去りましたのは無念ながら、これはやむをえぬ事情にて、わたくしにさらさら他意なきこと、ご推察くださりませ」

「それだけか、いの字? もう申すことはないか?」

「……」

いの字は、うなだれた。頭巾にかくれて分からぬが、その額には脂汗がにじみ上がり、ひとみの奥には絶望の色が暗い陰を作っていた。

「よしッ、もう、申すことはないのじゃな」

長安は、叱咤するように下知した。

「こやつになわうてッ」

待ちかまえていたように、背後の警固の侍たちが、ばらばらっと立っていの字の周囲をとりかこんだ。

一瞬、いの字は反射的にさっと立ち上がり、逃れる道をさがしもとめるかのように、ぎらぎら光る目を四方へ素早くなげたが、しかし、彼はすぐ、断念したように、力なくそこへうずくまってしまった。

庭の向こうにも、ずらっと警固の侍が垣を作って固めているのを見たからである。

いの字はたちまちねじ伏せられ、うしろ手にくくりあげられ、そして、引き裂くように覆面をはぎとられた。

白日のもとに、ありありとむき出しになったのは兵馬の顔である。

「殿ッ、お情けのうございます。これは、なんのおとがめにございましょうか? いの字は、ただただ殿のおんためにのみ粉骨砕身いたしまいりましたものを。こ、このようなわ目の恥をおうけいたす覚えがございませぬッ」

と、今は兵馬の正体を露出したいの字は、哀願するように額を大地にすりつけた。

「黙れ、この痴れ者がッ!」

長安は縁先を踏みならして叫んだ。顔が火をふくように紅潮している。こんなにも彼が憤然としたのを、これまでだれ一人見たものはなかったくらいであった。

「うぬッ、よくぞ、この長安を裏切り、煮え湯をのましおったなッ。わしをたばかって雪絵をかどわかし、連れ去ったなッ」

「おう、殿ッ。お、おもいもよりませぬことを！　このわたくしが雪絵どのをかどわかすなどと、そのような……余のことはしらず、それはあまりにもおもいがけないぬれぎぬにございますッ」

「何ッ、おもいがけぬぬれぎぬじゃと？」

「は、殿ッ。お聞きくださりませ。雪絵どのをご城中より、かどわかし去りましたのは、桜井……桜井進太郎と申す浪人者にございますッ」

「黙れッ。うぬッ、まだぬけぬけとこのわしをたばかるつもりかッ。あの、城の床下の抜け穴をしるものは、このわしと黒太夫、そしてうぬのほかにはないはずじゃ」

「天地神明もご照覧あれッ、絶対に！　殿、絶対に、わたくしではございませぬ。進太郎めの仕業……間違いなく、きゃつの仕業にございます。なにとぞ、きゃつをひっとらえお取り調べくださりませ」

「黙れ、黙れ、黙れッ、この痴れ者がッ。うぬは、己の野心のためには妹梶の操を犠牲にし、はては一命までその手でうばって悔いなきやつだ。梶をだまし、月姫をだまし、三郎太をだまし、雪絵をだましたのも、皆わしへの忠節と見せかけ、実はそのわしをさえ、だまし裏切った憎むべきやつだ。うぬは、わしと雪絵とに二またかけ、そのいずれかを手づるにして己の野心をとげる所存であったろう。しかも、いよいよとなって、雪絵への恋慕がつのるにつれ、たまりかねて雪絵をかどわかし去り、欲と色との二道を一手におさめんとたくらんだのじゃ。世にも、憎むべき奸悪とはうぬのごときやつをこそ申すのじゃッ」

「ああ、存じませぬ。おもいもよらぬこと、進太郎めの仕業でございますッ」

「まだ、いうかッ。まだ、このわしをたばかり通せるとおもいおるのかッ。いの字、いやさ兵馬。梶の口をかりて申し聞けたこと、よも忘れはすまい。うぬは終生いの字の執念につきまとわれるやつだと申したこと、しかと覚えておろう。仮にも侍のはしくれであるならば、事露顕し、進退窮まったそのときは潔く身を処すべき手段もあろうに、うぬは黒太夫の手の者に包囲され、到底逃れ去ることは不可能であろうと見てとったとき、潔く身を処する代わりに、ぬけぬけといの字の仮面をかぶって、ふたたびこのわしをたばかり、生きながらえんとひきょうな手段に出おったのじゃ。見い、兵馬。うぬは、わしの予言したとおりいの字の執念にとりつかれ、もっとも恥ある死に方をするのじゃぞッ。ひきょう未練な、この痴れ者がッ」

「お情けのうございます。さらさら、身に覚えもございませぬことを……」

と、兵馬は必死にいいつづける。

「まだいうかッ。この期に及んで、まだ、ぬけぬけといいくるめ、その一命が助かりたいかッ」

「命は惜しみませぬが、名が惜しゅうございます。ぬれぎぬにございます、殿ッ、覚えないことでございますッ」

「うぬ、斬れッ！」

と、長安は縁先を踏みならした。

「あっ、し、しばらくッ。殿、お慈悲！　なにとぞ、しばらくッ……」

「斬れ、斬れッ！」

と、長安はまた叫んだ。

「お慈悲、お慈悲ッ、お情けのうございます、さらさら覚えないことでございますッ」

「斬れと申すに、斬れッ！」

ついに、長安は三度くりかえした。

背後に、さっとふりかぶった白刃の気配を感じて、なわじりをとられたまま、兵馬はがば！とはねおき、

「殿ッ、お、お恨みに存じますぞッ。お恨み申し上げますぞッ」

かあっと見開いて長安をにらんだ目には、今こそ、その男の性根の底にひそんでいた恐るべ

き執念が、ありありと露骨にむき出していた。
「うぬ、無礼者がッ！」
叫んだのは、背後にいた一人であった。
どんと背をけられて前のめりに体の伸びた兵馬の頭上に、びゅッ！　と大気を斬りさいた白刃一閃、
「うおーッ！」
悲鳴とも呪詛のうめきともつかぬ、けたたましい叫び声を、聞いたと思った瞬間、胴体をはなれた兵馬の首は、かっと口をあけ歯をむきながら、まるで長安ののど笛めがけてかみつくかのごとき形相で、一間の余も宙をとび、どさっと地におちた。
地に落ち、横倒しにころげながら、まだ、その首はかあっと両眼を見開いて長安をにらんでいる。
「わっはっはっは……」
長安はけたたましく笑った。
彼がこれほどまでに激昂し、これほどまでに己を失ってけたたましい笑い声をたてたのを耳にした者はなかった。
「見い、あの恨めしげな面つきを見いッ。世にもひきょうなる人非人の最期のざまを見いッ。わっはっはっは……」
笑った声が、中途ではたとやんだ。
一瞬、妙な沈黙がきた。どきっとしたような目つきが、いっせいに長安の方に向けられる。
激昂のあまり、朱を含んだように紅潮していた長安の顔が、急にゆがみだしたと思うと、その口の端から、たらたらっとつばが流れ出し、泳ぐように両手を動かしながら、一、二歩よろめいたかと思うと、そのまま、どさっと崩れるように倒れ伏してしまった。
まるで、兵馬の執念が、そのまま長安をあの世へひっさらっていこうとしたのではないかと、ぞっとしたと後日語った者がある。
駆けつけてきたお医師が、暗い顔をして側近の者にささやいた。

「卒中でいらせられます。なにぶんにもご老体……一時、お命はとりとめましても、もはや、もとのお体には……」

富里伝説

甲斐盆地に注ぐあらゆる流水を一つに集めた富士川は、盆地の南端鰍沢の辺りからけわしい山あいを割って一直線に南下している。
その渓谷をはさんで、日蓮宗の霊場身延山と相対する辺に下部の湯があった。
かつては武田のかくし湯の一つといわれ、傷創に特効ある霊湯ではあったが、武田氏の没落後は、なにぶんにも山深い位置の関係もあって、農閑期に近在の農夫たちが訪れることがあるくらい、浮き世から忘れられたようなわびしさであった。
噴泉の傍らに、湯守りの小屋が一軒、ぽつりとたっている。
湯守りといっても、日ごろは山畑をたがやし炭を焼いて生計をたてている老爺が一人いるきりである。
ある日の午後、その湯守りの老爺が、小屋前の日だまりで、刈り入れてきたそばを粉にひいていると、下の方から細い山道を、しゃにむに馬をいそがせてはせ登ってくる一隊の騎馬を認めた。
総勢十五、六人。先頭の馬側に下の部落の長がつきそって、息せき切りながら走ってくる。
武田家全盛時代ならいざしらず、これだけの侍が隊をなして馬を乗りつけてきたのは前代未聞だから、湯守りはただあっけにとられたように見守っていた。
「大久保さまのご家来衆じゃ。笹塚黒太夫さまじゃ。粗相がないようにのう……」
と、駆けよってきた部落の長がささやくまもなく、先頭の馬背から、ひらりととびおりた黒太夫は、
「おやじ、君命じゃ。お上の御用じゃぞ」

と、高飛車にあびせた。
「すぐ、炊飯の用意をせいッ。米はある。かまどと薪をかせッ」
いう間もあらせず、その背後におりたった配下の武士たちが、遠慮会釈なく小屋へふみこんで炊き出しにとりかかった。
それも、いっとき分ではなしに、二食分の弁当の用意までするのだから、湯守りの老爺も、しばしば目の回るようないそがしさであった。
長安から指令をうけ『朱書き一節』の図面をたよりに、武田のかくし山をつきとめるため、急遽、馬をとばしてここまでのりつけてきた一隊であった。
やっと飯も炊きあがり、食事がすむと、
「おやじ！」
と、黒太夫が湯守りを物陰へさしまねいた。
「この奥に回り沢というところがあるか？」
「へえ、別に人家はございませんが、そういう地名のところはございます」
「では、湯の奥という場所は？」
黒太夫は白紙にかいた地図らしいものに見入っている。『朱書き一節』の裏面から、うつしとった地図であった。
「湯の奥と申しますのは、つまり、この沢の行きづまりでございます。やはり、人家などはございませんが……」
「そこから、山奥へ向けて登る道があるはずだが？」
「さあ、わたくしは一向に……」
「では、きくが、この奥に富里と申すところがあろう？　そこへ行きつく道を知っているか？」
「いいえ、お武家さま」
「何ッ、しらんというのか？　この辺りにすみながら、奥地のことを知らんではすまさぬぞ」
「ほ、本当でございます。昔から、湯の奥から向こうへはだれも入ってはならぬといういきびしい言いつたえがございまして……」

「おやじ、それは誠か？　だれ一人、この奥に立ち入った者がないとは本当か？」
「お疑わしくば、里の衆のだれにでもお聞きくださいまし。武田さまご支配の昔から、決して立ち入ってはならないという言い伝えがございまして、万が一にも山奥へ迷いこみましたものは、二度と生きてはもどらないという恐ろしい話が伝わっておりますので……」
と、湯守りは真顔になっていう。
黒太夫は、内心しめた！　とほくそ笑んでいた。
武田の昔から、愚民を脅して山の中に立ち入らせないのは、かくし山の秘密を守りとおすためでなくてなんであろうか。してみると、この奥に目的のもののあることはいよいよ間違いない事実だし、しかも、それが今日でもそっくりそのまま秘蔵されていることも間違いないのだと、そう確信したからだ。
「しかし、困ったな。お上の御用で山中へ立ち入らねばならぬ。せめて途中までででも案内できる猟師でもおらぬか？」
「さようでございますなア、杉作がおりますれば、御用のお役にたとうかと存じますけれど……」
「杉作？　それは何者か？」
「先祖代々、この奥の山中に住みついております猟師でございまして、その一族だけは、昔から山歩き御免ということになっておりますので……時折、里へおりてまいりますが、のべつ山歩きしておりますので、ただいまどこにおりますやら居どころがしれませぬ。二、三日、お待ちいただけますれば、なんとか探し出させますでございますが……」
「いや、二、三日はおろか、一刻も待ってはおれん。ほかに案内を得られずんば、やむをえん、このまま出発する」
なあに、山歩きはなれている。なにほどのことがあろうかと、黒太夫は、もう目的の宝の山

に一歩ふみ入れたかのような意気ごみで、配下の侍たちに出発の指令を発した。

「おやじ、早くば今日の夕刻までに——おそくも、明朝はもどる。それまで、乗馬をしかとあずけおくぞ」

いいすてると、湯守りと、部落の長をあとに残し、十四、五人の武士は、さっそうと隊伍を組んで出ていった。

そこからは、沢伝いの道は次第に細くけわしくなってゆき、やがて、湯の奥とよばれる沢のつきる辺りまでたどりつくと、同時に道もふっとだえてしまって、なるほどこれから奥へはだれ一人踏み入る者もないらしいと合点された。

『朱書き一節』にしるされた図面では、その地点から、富里とかいた地点まで、ただ一本無造作に直線が引かれているのだが、道でもあるならともかく、これから先、どうたどっていいのか、黒太夫ははたと当惑した。

と——

そのとき、左手の崖に生いしげったやぶの中をがさがさかきわけながら、上から下へ向け、かもしかのような素早さでかけおりてくる人影があった。

突然のことで、侍たちも驚いたが、その人影の方でもふと足をとめ、けげんそうな顔つきでこっちをじっと見かえしている。

年のころ六十に近いとおもわれる、しかし、見るからにたくましい猟師体の男だった。

一瞬、凝視していた黒太夫が、

「これ、そこの者、その方は杉作とか申す猟師ではないか？」

と声をかけた。

「へえ、わしは杉作でございますが……」

愚直そうなその男は、ぺこりと一つ頭をさげ、歩みよってくる。

下部の湯守りから聞いたばかりの猟師杉作

に、ここでばったり出会うなどとはなんという好都合なことだろう。天は我に味方したもうと、黒太夫が欣喜雀躍したのも無理はなかった。

「お上の御用じゃぞ。みだりに、かくし立てや偽りごとをなせば容赦せんからそうおもえ。ただし、懸命にご奉公をつとめれば過分のごほうびをたまわる。いいか、何もかも正直に申せよッ」

と、黒太夫に頭から威嚇され、ただでも物々しい人数の侍にどぎもをぬかれていた杉作は、すくみあがって平身低頭するばかりであった。

「へえ、お言葉のとおり、わしはじいさまの代からこの奥に住みついておりますで、山の案内でございましたら、どんな所でもよく知りぬいております。へい……。

富里という場所があるかとおっしゃいますので？　へえ、よくまア、そのことをご存じでいらっしゃいますな。今では、わしのほかにはだれ一人知らんことだとおもっておりましたのに……。

ございますとも、だんなさま。ずうっとこの奥でございます。人一人住んでいるわけでもないのに、富里という名前だけついたふしぎな場所でございます。亡くなりましたじいさまの話では、なんでも、昔神さまが宝物をおうめになった場所だそうで、うっかり他言したら、たちまち神罰をうけて命がなくなるとか聞いておりましたが、でも、お上の御用ではおかくし申すわけにはまいりません」

と、杉作という猟師はぺらぺら知ってるかぎりをしゃべってしまった。

「よしッ、これから、そこへ案内しろ。ほうびは望み次第とらせるぞ」

「でも、だんなさま。山がけわしゅうございますし、道らしい道もございません。これからまいりますと、帰りは夜になりますが、よろしゅうございましょうか？」

「夜道の支度もととのえてある。場合によって

は野宿も覚悟じゃ。かまわん、すぐ案内しろ」
と、黒太夫は気負いに気負ってせき立てた。
「では、皆さま、こうおいでくださいまし」
と、杉作は先にたって、今しがたおりてきた急な崖をよじ登ってゆく。
それから先は、なるほど道もないひどい登りの続きだった。
密林をぬけ、岩山をよじ、体も没するほどの草むらをおしわけ、一体、幾時間歩きつづけたであろう。
あとになって思えば、故意に、あっちこっちと回り道をし、迷路の中へ迷いこませたような形跡があったが、もちろん、そのときはだれ一人、そんなことには気づかない。
やがて、一つの突起の上に立った。
たちまち眼前がうちひらけ、屏風を連ねたような雨ガ岳山嶺のかなたに、すでに白雪をいただいた富士山が忽然として夕空高くそびえ立つのが見えた。
「だんなさま、ご覧くださいまし。あの、峰の肩から少し下って、盆地のような小平地がお見えになりましょう。あれが、お尋ねの富里でございます」
と、杉作は、目前の谷を越えた辺りをじっと指さした。
そこが富里と指さされては、黒太夫たちの足はもう空をふむ心地だった。
休もうと声をかけるものもない。しゃにむに、先を争って足をいそがせる。最後に、削りおとしたように深い谷に、たった一本危なげに渡した丸木橋を渡ったことさえ半ば夢中だった。
「ここから先、一帯を富里と申しますが……でも、こちらへおいでくださいまし。昔、神さまが宝物をおうめになったといい伝えられている場所にご案内いたしましょう」
と、杉作が導いていったのは、ただ一望、岩頭のむらがりが集まったはげ山の上であった。

「ここでございます。この辺へ、神さまが宝物を……」
と、杉作が指さすのを見るまでもない、その辺を一瞥した瞬間、黒太夫の顔が、驚愕と歓喜にあっとひきつっていた。
折から、ようやく傾きかけた夕日をまともにあびながら、そこに点在する岩頭の中に、脈をなしてきらめいているおびただしい自然金の粒子を見たからである。
彼の金山に関する知識は相当なものだっただけに、そういう露頭の点在がどれほど莫大な価値をもつ金鉱脈を地下に埋蔵しているか、とたんに見抜いていた。
黒太夫は有頂天であった。部下を督励して露頭をかいては資料を集めさせ、さらに、右へ走り、左へ飛んで鉱脈の広がりやその方向の調査に夢中であった。
ふと気づいたときには、もう、あたりはたそがれはじめている。いつか風が出て、秋深い山の冷気がぞっと身にしみてきた。
「ひとまず、下部へ下る。松明をともせッ」
と命じてから、黒太夫ははじめて気がついたように、
「杉作は？　杉作はどこへ行ったのだ？」
と、あたりを見回したが、どこにもそれらしい影も見えず、その行方をしっている者もだれ一人なかった。
「おかしなやつだ。彼がおらんでは下部へ下るは容易でないぞ。探せッ」
黒太夫の下知に、配下の侍たちはいっせいに右左へと走ったが、ふしぎなことに、呼べど叫べど答えがない。
そのうち、とある草むらの中のくぼ地の中へ踏みこんだ一人が、
「ああっ！」
と、仰天したようにけたたましい声をあげた。
「なんだ？　どうしたのかッ？」
と、ほかの連中がはせ集まってくる。

見ると、そのくぼ地の中に、おびただしい人間の白骨が折り重なって転がっていた。少なくとも、十人、十五人の白骨であろう。

しかも、よく見ると、すべての頭蓋骨が胴体からはなれていて、その切り口が、鋭い刃物で、一気に切断されたものであることを示している。

おそらく、このかくし山の秘密をさぐり取ろうとしてここへたどりついた人間たちが、例外なく、だれかの手によって捕らえられ、首をはねられて、屍をここへすてられたものに違いあるまい……。

さすがの黒太夫も、ぎょっとしたように息を殺した。

いつか、とっぷり暮れはててしまったが、とうとう、杉作の姿は見あたらない。

場合が場合故、さしもの屈強な男たちも、何か不吉な予感に心安らかでないらしく、燃え上がる松明の灯影に目と目を見合わせていた。

「なあに、一晩くらい、ここで野宿するのも一興であろうが……」

などと、うそぶいた者もあったが、この辺りは一面の草原と岩山で、木らしいものは一本もなく、この寒空に、夜露夜風をしのぐ木陰もなく、一筋のたき火さえ求められず、一夜を明かすことなど思いもよらなかった。

「おのれ、ど畜生めッ、見つけ次第、素っ首ねじ切ってくれるぞッ」

と、杉作をののしっている者もある。

「たかがこれだけの山だ。しゃにむに下れば、いずれ里へたどりつこう」

黒太夫は強気にいって、

「出発！」

と、荒々しく下知した。

一人一人が、手に手に松明をかざして一列に隊伍を組む。そのほとんど全員が、かきとった露頭の鉱石を、荷物に作ってぎっしりと背にしているのが、いかにも重たげであった。

「岩山を巡って二、三町行くと丸木橋のところへ出る。それを渡ってから左手の森を斜めに抜けるはずじゃ」

と、黒太夫は記憶をたどりながら、先頭を行く侍に下知をくだしている。

「丸木橋を見失うなよ。谷がそぎおとしたように険しい。足元に注意せいッ」

なぜだか分からないが、そう下知している黒太夫の声音も、次第に沈んでゆくようであった。なんということもなしに、不安な予感めいたものが刻々と濃くなってゆくのである。

谷の縁へ出た。

「丸木橋は見つかったか？」

「は、それが、どうも見つかりませんので……」

「うぬッ、あれほど申したのに、注意を怠ったな。二、三町のはずが、もう五町の余も歩いている。うかと見損じて通りすぎたのじゃ」

と、黒太夫はいらだちながら、今度は、われから先に立って引き返しはじめた。

「ふしぎだ。たしかに、この辺りと思ったのに、丸木橋はどこにも見えん」

黒太夫が立ちどまったのは、岩と岩とがつき出して、谷間をわずか四、五間の距離につめた狭い個所であった。

「丸木の橋をかけることのできる個所はここしかないはずだに……や！　松明をかざせッ。谷に橋が落ちているらしいぞッ」

叫んだ声につられて、一同がずらっと谷の縁へ立ち、谷底の方へ首をさしのべたその瞬間であった。

びゅん！

と、まず一声。

鋭い弓弦の音があたりの静けさを破ったと思うと、ほとんど同時に、

「うわッ！」

と、叫びながら、片手で虚空をかきむしり、片手で胸板を貫きとおした矢羽根の辺りをわし

づかみにした黒太夫の影が、一瞬松明の灯の中へ黒々とのけ反り、そのまま、谷底のやみへ吸いこまれるように消えさっていった。

が——それを、しかと見とどけているときもなかった。今の弦音が合図でもあったのか、間髪を入れず、けたたましい矢羽根のうなりが、つるべ撃ちに夜気をつんざいてわき起こった。

敵は、谷の向こう、わずかに数間の距離にいたらしい。

その人数もしかとは分からず、姿も見定めがたかったが、弦音の鋭さといい、矢羽根のうなりの速さが、その近さをしらせていた。

数間の距離から、ねらいにねらって射かけてきた矢であった。しかも、獲物になぞらえられた侍たちは、手に手に松明をかざして一列横隊に並び、われとわが所在をことさらに示しているに等しい。

「すわッ！」

「曲者ッ」

「伏せッ！」

などと、わめいた声も、ただあわてふためいてしどろもどろだった。

松明をすて、身を伏せようとするとっさの身ごなしも、背負った荷の重さが自由を奪っている。

一瞬が過ぎたとき、その大半は急所を射抜かれて倒れ、数瞬がすぎた後にはすでに立って動く影はなかった。

ただ、吹きすぎてゆく風が、その男たちの断末魔のうめき声を、生々しい血のにおいと一緒にかすかに運び来り、運び去ってゆくだけであった。

そして、やがては、地に谷に、おちたまま燃えていた松明も消え、そのうめき声さえも、ひっそりととだえてしまった。

月が雨ガ岳の向こうに昇りはじめた。その光が、谷の向こうに立っている一群の、真っ黒な

人影をおぼろに浮かび上がらせてきた。

その中央に、杉作らしい男の影も見えている。いや、それよりも、意外なのは、その杉作の前に凝然とたっている、片方の手首のない老人の影であった。

「黒太夫よ、長安よ、いや、およそ、この武田のかくし山をかすめとろうと忍びよってくる痴れ者どもよ、よく聞けッ」

と、その手首のない老人——鳥の目源三は、まるで巨岩を思わすような冷厳さでいった。

「この富里のかくし山は、武田信玄公のご直命によって、わしら山目付役の者、父子孫々うけついで守護し奉る。

武田家正統のおん血をつぎたもうお方さまが、直々この地におみえあそばし、直々わしらにご指令あるまでは、何者がこようとも……たとえ、徳川幕府の威光を真っ向にふりかざす者が大挙群れをなして来ようとも、断じてその秘密を守り通すのじゃ。

わしらの命あるかぎり、わしらの血統の絶えざるかぎり、みだりに何者の近寄ることも許さぬのじゃ。

見よ、痴れ者ども！

うぬらは、富里のことを知った。ここへきた。そして、かくし山の露頭を見、それを横領せんとした。生かしては帰さぬ。武田家の、昔からのおきてのとおり、わしら山目付は役目をもってうぬらを処断したのじゃ。死ねッ。残らず死ねッ」

源三は、おごそかにいいきると、そのままきびすをかえし、月明かりの中をすたすたと去っていった。そして、十数人に余る周囲の人影も、一つの重い役目をはたした人たちの、自信にみちみちた足取りで、声もなくひっそりと、どこともなく姿を消しさっていった。

山国の、秋から冬にかけての移り変わりは何かあわただしい。

この石堂峠から紅葉の色づきはじめる峰々をながめたのも、ついこの間だったと思ったのに、もうその峰々にはちらちら白いものさえかかっていた。

峠に近い森の陰に、この地で不慮の死をとげた三郎太の墓がたっている。墓といっても、わずかに土を盛ってその上に小さな自然石を墓標の代わりにおいただけのもの。

墓前にぬかずいている旅姿の男女は、進太郎に雪絵、そして、まだ襟元から包帯のはしが白白とのぞいているお梶であった。

鶏冠山で黒太夫の手の者に襲われ、のっぴきならない重囲におちたところを、忽然と出現した月姫さまに救い出されてから、進太郎と雪絵が走ったのは、塩山の村はずれにあるお静の叔母の家であった。

そこには、お静と藤兵衛にみとられて、傷ついたお梶がかくれているはずである。

藤兵衛は、すでに、甲府城内で起こった出来事の情報をことごとく握っていた。兵馬が処刑されたことも、長安が卒中に倒れたことも、そして、黒太夫のひきいる騎馬の一隊が、急遽南に向けて出発したことも、そして、それが、武田のかくし山に関係があるらしいということも。

事態の変化は、季節の移りかわりよりもまだ目まぐるしかった。

長安は一命はとりとめたが、病状は極めて悪い。この地では名医も求めかねるので、少しでも状態のよくなり次第、八王子に帰還されるであろうと、専らうわさされている。

それだから、もはや、雪絵やお梶の詮議どころではないらしく、一時、国境という国境へきびしく張りめぐらされた監視隊も急にとりやめになったというわさが伝わってきた。

それというのも、一つには、黒太夫の一行が、まるで大空高く消えさりでもしたように、姿を消しさったままようとして行方しれずになって

しまったことが、甲府城の狼狽を一層ひどいものにしたせいであろう。

「お梶どのに、兵馬のことを知らせてはなりませぬ」

と、雪絵は必死の祈りをこめる表情でいった。

「あのお方は、本当に心の清らかな、お優しい方なのでございます。もし、兵馬の本当の姿をしったら……きっと、お梶どのは絶望のため、死んでおしまいになりましょう」

「よくいってくださった。あなたのおっしゃるとおり、わしからも、それをお願いしたかったのです」

進太郎も、暗然としながらしみじみといった。

「信じていた兄のため、塵芥のように犠牲にされ、だまされ通したとしったら……そして、兵馬の恐るべき所業をしったら、おそらくお梶どのは生きていますまい。心にもない長安の前に、操をなげ出したそのことをはじめ、何もかも、兄のため、兄の必死の忠節をまっとうさせたいためばかりの、けなげな覚悟からだったのです。お梶どのは、兵馬がその節を持してついに死んだと思っています。その誇りだけは失わせたくありません。真相を知らせてはならないのです。それが、せめてもの思いやり、慈悲というものです」

進太郎と雪絵は、昼も夜も、お梶のそばにあって看護に専心した。

雪絵が、その優しい女心の故に、お梶の哀れさを思いやる親切もさることながら、妹のように思い、いつくしんできた進太郎が、せめてもの思いをこめて介抱する、その心の温かさがお梶の胸の底の底までしみわたらずにはいなかった。

「うれしゅうございます。もったいのうございます。わたくしのような者に、こんな静かな、幸せな日が……二度とめぐってこようなどとは、つゆ思っておりませんでしたものを……」

と、お梶はただ泣いた。

進太郎への思慕を、あきらめねばならぬと思いながらあきらめられない女心の哀れさを、はたして進太郎や雪絵は気づいていただろうか。

傷がおおかたいえて、起き出た日、

「わたくし、山へ入りとうございます。月姫さまのおもとへまいり、亡き兄に代わっておつかえ申しとうございます」

と、お梶は出しぬけにいい出した。

お梶にそう決意させたのは、半生の不運さや兄を失った悲しみと一緒に、思う人へのはげしい思慕を断ちきらねばならぬ苦しみのためだったかもしれない。

しかし、進太郎や雪絵は、別の理由から、それを強いてとめはしなかった。

——若い命を山にとじこめて老い朽ちさせる哀れさよりも、無理に浮き世へひきとめて、兵馬の死の真相を、いつかは知らせねばならぬむごたらしさの方が、はるかに堪えがたい。月姫さまのお慈悲にすがるのが、かえってお梶どのの幸せかもしれない……。

今日は、すべての人が甲州を去る日だった。進太郎、雪絵、お梶の三人は、その前に、そろって三郎太の墓参をしたいといい、お静と藤兵衛が、それぞれお梶、雪絵を馬にのせ、その先の峠の上までつれてきてくれた。

三人は墓前へぬかずいている。ぬかずく姿は同じでも、三人の思いは悲喜、吉凶おのおの別であったろう。

ささささ……

と、風が梢をわたる音がした。それが前ぶれであった。

森の奥の方から、さくさくさく……と草むらをふむ足音が近づいてきて、やがて、ぬかずく三人の間近に、ひたとせまった。

「雪絵……」

と、あの、すでに聞きおぼえのある朧たけた声が静かにいう。

目をあげると、あの夜鶏冠山で見た山駕籠が、屈強の男たちに守られてひっそりととまっていた。

「ああ、また会えましたねえ、雪絵。そして……そして、これがそなたに会う、最後となるのですね」

月姫がいった。

「そなた、どうしても、山へ帰るのはおいやかえの、武田の遺臣たちの切なる望みをかなえ、四郎勝頼公のおん孫として、はれてその人たちの首長となる決意はつかぬかえの、雪絵、もう一度聞かせておくれ。そなたは、どうしても水町家の娘として、名もない生涯を終わりたいのかえ?」

「は、はい。月姫さま、お、お許しくださいませ」

と、雪絵は切なげにいった。

「月姫さま、おそれながら、雪絵はただの女として生涯をすごしとうございます。ただ、母さまのこと、ご先祖さまのことを明らかに知りえました幸せだけを、そっと大切に胸に抱き、平凡なただの女として命をまっとうしとうございます。なにとぞ、このわがまま、お許しくださいますように……」

「それではそなた、勝頼公のご遺言をどうするのです? 武田のかくし山をなんとする気です?」

「何も望みとうございませぬ、雪絵のほしいものは、ただただ自由な命だけでございます。その、かくし山とやら、月姫さまの御意のままに……なにとぞなにとぞ」

「いたし方ありません。いいえ、わたしの未練というものでした。そなたの望むとおりになさい。それが、また、亡き母花姫の望みでもありました……」

そういった月姫の声は、さすがに語尾がかすれていた。

「も、もったいのうございます」
「では、行きます。雪絵、お別れです」
月姫の駕籠の垂れはついに開かなかった。
その隣にもう一つ山駕籠がおいてある。お梶は、進太郎の方へ目礼すると、逃げるようにそれへ身を入れた。
「ではごきげんよう」
「お元気で……」
いいかわす言葉はさりげなかったが、このときを最後として、おそらく生涯二度と巡りあうこともあるまい二組みの人たちであった。
二丁の山駕籠は森をくぐって去ってゆく。まるで遠い遠い昔から、そうあることが約束されていたかのような静かさで……。
いつか、進太郎と雪絵はよりそっていた。よりそいながら、雪絵は、声をたてずに泣いていた。悲しいのかうれしいのか、それさえ分からず、ただただとめどもなくあふれて流れるあつい涙であった。

「進太郎殿」
「は……」
「雪絵を頼みます。幼くして、生母養母二人をなくし、先ごろはまた父までなくした、身より少ない不運な子です。父に代わり、母に代わり、そして……わたしに代わって、その子をいつくしんでやってください。頼みます」
「はっ」
と、頭をさげたまま、のどがつまったように進太郎は無言だった。
「梶」
「は、はい」
「そなたは、わたしのもとへ来てくれるのですね？」
「お情けにすがりとうございます」
「山には山の楽しみ、幸せもあるものです。誠実だった兄の兵馬に代わって、これからはわたしの親身の相手になってもらいたい。仲よくしましょうね」

「進太郎さまア……雪絵さまア……」
と、待ちくたびれたらしいお静が、峠の方から呼んでいる。
しかし、それさえ耳にはいらぬか、進太郎も雪絵もよりそったままに、森のかなたへ消えさってゆく山駕籠の影を、ただじいっと見つめて立ちつくしていた。

長安は二度と回復せず、その翌年死んだ。死とともにさまざまの罪状が発覚し、一族一党残らず死を賜り、家も断絶したと伝えられている。
かくし山のことはつまびらかでない。しかし、今でも、その山は武田家の山目付の子孫によって厳然と守り通されていると信じている人もあるようだ。

0193-010226-3066

春陽文庫

月姫系図

昭和52年3月15日　第1刷発行
昭和52年7月15日　第4刷発行

著者　角田喜久雄
1977©

発行者　和田欣之介
印刷　城北印刷製本センター
発行所　株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三丁目四番一六号
電話（二七一）〇〇五一番
振替東京　一六一七番

乱丁、落丁のものは本社、またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

紅梅行燈 山手樹一郎 260
鳶のぼんくら松 山手樹一郎 200
桃太郎侍 山手樹一郎 440
朝焼け富士 山手樹一郎 460
夢介千両みやげ 山手樹一郎 480
又四郎行状記(上) 山手樹一郎 440
又四郎行状記(下) 山手樹一郎 400
恋風街道 山手樹一郎 480
二階堂万作 山手樹一郎 260
ぼんくら天狗 山手樹一郎 280
青空浪人 山手樹一郎 340
地獄ごよみ 山手樹一郎 280
素浪人日和 山手樹一郎 480
恋天狗 山手樹一郎 280
浪人横丁 山手樹一郎 320
青雲の鬼 山手樹一郎 320
鉄火奉行 山手樹一郎 320
江戸の朝風 山手樹一郎 480

ぼんくら与力 山手樹一郎 220
ぼんくら千両 山手樹一郎 280
花の青空 山手樹一郎 220
いろは剣法 山手樹一郎 200
青春道場 山手樹一郎 220
江戸の虹 山手樹一郎 460
青春の風 山手樹一郎 260
江戸の暴れん坊 山手樹一郎 340
青空剣法 山手樹一郎 480
はだか大名 山手樹一郎 480
野ざらし姫 山手樹一郎 320
浪人若殿 山手樹一郎 400
江戸花火 山手樹一郎 260
変化大名 山手樹一郎 480
天保紅小判 山手樹一郎 460
花のお江戸で 山手樹一郎 220
わんぱく公子 山手樹一郎 460

春秋あばれ獅子 山手樹一郎 280
若殿ばんざい 山手樹一郎 260
青春峠 山手樹一郎 220
和蘭囃子 山手樹一郎 280
のっそりと参上 山手樹一郎 220
恋染め笠 山手樹一郎 440
侍の灯 山手樹一郎 480
鶴姫やくざ帖 山手樹一郎 260
素浪人案内(上) 山手樹一郎 460
素浪人案内(下) 山手樹一郎 460
鍔鳴浪人 角田喜久雄 400
どくろ銭 角田喜久雄 440
風雲将棋谷 角田喜久雄 320
妖棋伝 角田喜久雄 400
将棋大名 角田喜久雄 440
恋慕奉行(上) 角田喜久雄 400
恋慕奉行(下) 角田喜久雄 340
半九郎闇日記(上) 角田喜久雄 340

浪人八景 山手樹一郎 480

半九郎闇日記(下) 角田喜久雄 320
寝みだれ夜叉(上) 角田喜久雄 340
寝みだれ夜叉(下) 角田喜久雄 340
盗っ人奉行(上) 角田喜久雄 340
盗っ人奉行(下) 角田喜久雄 340
花太郎呪文 角田喜久雄 480
折鶴七変化 角田喜久雄 340
闇太郎変化 角田喜久雄 280
妖異忠臣蔵 角田喜久雄 280
春風まぼろし谷(上) 角田喜久雄 340
春風まぼろし谷(下) 角田喜久雄 340
黒潮鬼 角田喜久雄 380
緋牡丹盗賊 角田喜久雄 400
月姫系図 角田喜久雄 440
まぼろし若衆 角田喜久雄 480
酔いどれ牡丹 角田喜久雄 480
姫夜叉行状記 角田喜久雄 320
元禄太平記 角田喜久雄 320

次郎長三国志 村上元三 480
上総風土記 村上元三 260
わんぱく大名 陣出達朗 260
わんぱく二度笠 陣出達朗 260
よさこい奉行 陣出達朗 280
まぼろし奉行 陣出達朗 320
すっとび奉行 陣出達朗 400
復讐の美女鬼 陣出達朗 280
孔雀駕籠 陣出達朗 480
隠密姫 陣出達朗 260
隠密将軍と嚊嚊大名 陣出達朗 400
らんまん剣士 陣出達朗 480
鬼姫悲願 陣出達朗 400
隠密奉行 陣出達朗 340
旗本退屈男 佐々木味津三 440
蛇姫様 川口松太郎 480
黄門廻国記 直木三十五 480
松平長七郎青春記 下村悦夫 220

清水の次郎長 村松梢風 440
水戸黄門 山岡荘八 380
花咲ける武士道 神坂次郎 260
上方武士道 司馬遼太郎 440
梟の城 司馬遼太郎 440
風神の門 司馬遼太郎 480
将棋大名 角田喜久雄 440
妖棋伝 角田喜久雄 400
風雲将棋谷 角田喜久雄 320
どくろ銭 角田喜久雄 440
鍔鳴浪人 角田喜久雄 400
素浪人案内(下) 山手樹一郎 460
素浪人案内(上) 山手樹一郎 460
鶴姫やくざ帖 山手樹一郎 260
侍の灯 山手樹一郎 480
恋染め笠 山手樹一郎 440
のっそりと参上 山手樹一郎 220
和蘭囃子 山手樹一郎 280
青春峠 山手樹一郎 220
若殿ばんざい 山手樹一郎 260
春秋あばれ獅子 山手樹一郎 280

清水の次郎長 村松梢風 440
水戸黄門 山岡荘八 380
花咲ける武士道 神坂次郎 260
上方武士道 司馬遼太郎 440
梟の城 司馬遼太郎 440
風神の門 司馬遼太郎 480
将棋大名 角田喜久雄 440
妖棋伝 角田喜久雄 400
風雲将棋谷 角田喜久雄 320
どくろ銭 角田喜久雄 440
鍔鳴浪人 角田喜久雄 400
素浪人案内(下) 山手樹一郎 460
素浪人案内(上) 山手樹一郎 460
鶴姫やくざ帖 山手樹一郎 260
侍の灯 山手樹一郎 480
恋染め笠 山手樹一郎 440
のっそりと参上 山手樹一郎 220
和蘭囃子 山手樹一郎 280
青春峠 山手樹一郎 220
若殿ばんざい 山手樹一郎 260
春秋あばれ獅子 山手樹一郎 280

江戸まだら蛇 早乙女貢 400
斬らずの若殿 早乙女貢 280
忍法女笛 早乙女貢 260
忍法関ガ原 早乙女貢 260
忍法雪月花 早乙女貢 260

伊賀忍法 早乙女貢 280
うつせみ忍法帳 早乙女貢 400
まぼろし若殿 早乙女貢 320
錯乱 池波正太郎 260
仇討ち物語 池波正太郎 220
阿波三国志 秋永芳郎 460
真田幸村 尾崎士郎 320

さむらい鴉 早乙女貢 220
きまぐれ剣士 早乙女貢 220
忍法紅絵図 早乙女貢 280
大江戸花暦 早乙女貢 260
青春の剣 早乙女貢 280
黒潮 姫早乙女貢 220
江戸浪人街 早乙女貢 320
忍法車一族 早乙女貢 260
剣鬼秘伝 早乙女貢 280
剣客往来 早乙女貢 280
江戸の小鼠 早乙女貢 280
戦国恋編笠 早乙女貢 280
慶長水滸伝 早乙女貢 260
花の無法剣 佐竹申伍 480
若殿まかり通る 佐竹申伍 460
変化若君 佐竹申伍 280
むらさき若殿 颯手達治 260
やまざる大名 颯手達治 260

ひょうたん侍 颯手達治 260
若さま隠密帳 颯手達治 280
若さま恋頭巾 颯手達治 280
若さま影法師 颯手達治 280
若さま風来坊 颯手達治 260
悪たれ若殿 颯手達治 320
若さま変化 颯手達治 340
若さま伝法 颯手達治 340
若さま小天狗 颯手達治 280
若さま旅日記 颯手達治 280
若さま青春記 颯手達治 280
若さま犯科帳 颯手達治 280
若さま居候 颯手達治 280
若さま鬼面帳 颯手達治 320
若さま刺客帳 颯手達治 480
若さま絵図帳 颯手達治 320
素浪人大名 江崎俊平 280
消えた若殿 江崎俊平 280

江戸っ子大名 江崎俊平 260
気まぐれ大名 江崎俊平 280
闇法師変化 江崎俊平 440
黒百合秘帖 江崎俊平 280
おもかげ大名 江崎俊平 280
夕雲峠 江崎俊平 400
朝姫夕姫 江崎俊平 260
江戸の野獣たち 江崎俊平 280
まぼろし絵図 江崎俊平 440
影法師推参 江崎俊平 320
江戸の風来坊 江崎俊平 280
白面剣士 江崎俊平 320
侍ニッポン 群司次郎正 260
鬼姫剣法 井口朝生 280
青雲乱雲 井口朝生 340
忍者は斬れ 木屋進 260
浪人恋変化 木屋進 220
おとぼけ侍 北園孝吉 280

めおと大名 風巻絃一 320
剣豪次男坊侍 風巻絃一 260
からくり殺法 風巻絃一 280
柳生十兵衛 大塚雅春 320
忍法五三ノ桐 戸部新十郎 280
血汐笛 柴田錬三郎 380
源氏九郎颯爽記 柴田錬三郎 480
主水血笑録 柴田錬三郎 260
遊太郎巷談 柴田錬三郎 480
おれは侍だ 柴田錬三郎 260
私説大岡政談 柴田錬三郎 200
南国群狼伝 柴田錬三郎 220
異常の門 柴田錬三郎 440
忍者からす 柴田錬三郎 280
度胸時代 柴田錬三郎 460
旗本伝法 土師清二 460
大久保彦左衛門 土師清二 480
無頼三十万石 土師清二 340

濡れ髪権八 土師清二 460
女犯地獄 野村敏雄 440
異聞忍者列伝 野村敏雄 260
反江戸獄門党 野村敏雄 460
寛永御前試合 順史 260
風流天狗剣 順史 280
恋ぶみ侍 順史 340
雪の謀将 永岡慶之助 280
情炎の美姫 真下五一 220
剣に賭ける 佐文字雄策 380
地獄草紙 名和弓雄 440
脱獄者 浅田晃彦 480
天国一刀流 多勢尚一郎 260
柳生無刀剣 松永義弘 340
隠密変化 小山龍太郎 380
双色渦巻城 昌幸 260
五月雨ごろし城 昌幸 220
人化け狸城 昌幸 220

幽霊駕籠城 昌幸 220
虚無僧変化城 昌幸 340
天を行く女城 昌幸 280
入形佐七捕物帳全集1 横溝正史 460
入形佐七捕物帳全集2 横溝正史 460
入形佐七捕物帳全集3 横溝正史 440
入形佐七捕物帳全集4 横溝正史 440
入形佐七捕物帳全集5 横溝正史 440
入形佐七捕物帳全集6 横溝正史 460
入形佐七捕物帳全集7 横溝正史 460
入形佐七捕物帳全集8 横溝正史 460
入形佐七捕物帳全集9 横溝正史 460
入形佐七捕物帳全集10 横溝正史 440
入形佐七捕物帳全集11 横溝正史 440
入形佐七捕物帳全集12 横溝正史 440
入形佐七捕物帳全集13 横溝正史 440
入形佐七捕物帳全集14 横溝正史 440
伝七捕物帳1 陣出達朗 320

伝七捕物帳 2 陣出達朗 320
伝七捕物帳 3 陣出達朗 320
右門捕物帖(1) 佐々木味津三 340
右門捕物帖(2) 佐々木味津三 340
右門捕物帖(3) 佐々木味津三 340
右門捕物帖(4) 佐々木味津三 320
江戸犯科絵図 和巻 耿介 380
江戸ねずみ犯科帳 和巻 耿介 280
ゆうり雨太郎捕物控 多岐川 恭 340
続ゆうり雨太郎捕物控 多岐川 恭 340
相良一平捕物帳 森 達二郎 400
続・相良一平捕物帳 森 達二郎 400
御朱印銀次捕物帳 島田一男 260
同心部屋御用帳1 島田一男 340
同心部屋御用帳2 島田一男 340
同心部屋御用帳3 島田一男 340
同心部屋御用帳4 島田一男 340
菊太郎事件控1 島田一男 340
菊太郎事件控2 島田一男 340
菊太郎事件控3 島田一男 340
菊太郎事件控4 島田一男 340
此村大吉無頼帖 早乙女 貢 280
三角館の恐怖 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集1 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集2 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集3 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集4 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集5 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集6 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集7 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集8 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩名作集9 江戸川乱歩 260
江戸川乱歩長編全集 全20巻
(1)孤島の鬼 江戸川乱歩 320
(2)蜘蛛男 江戸川乱歩 320
(3)魔術師 江戸川乱歩 280
(4)猟奇の果 江戸川乱歩 260
(5)黄金仮面 江戸川乱歩 280
(6)吸血鬼 江戸川乱歩 360
(7)白髪鬼 江戸川乱歩 260
(8)妖虫 江戸川乱歩 260
(9)人間豹 江戸川乱歩 280
(10)黒蜥蜴・湖畔亭事件 江戸川乱歩 320
(11)緑衣の鬼 江戸川乱歩 320
(12)大暗室 江戸川乱歩 340
(13)悪魔の紋章 江戸川乱歩 280
(14)幽霊塔 江戸川乱歩 340
(15)一寸法師・地獄の道化師 江戸川乱歩 320
(16)暗黒星・闇に蠢く 江戸川乱歩 340
(17)幽鬼の塔・恐怖王 江戸川乱歩 320
(18)化人幻戯 江戸川乱歩 260
(19)影男 江戸川乱歩 260
(20)十字路・盲獣 江戸川乱歩 340
奇蹟の扉 大下宇陀児 340

宙に浮く首 大下宇陀児 220
高木家の惨劇 角田喜久雄 220
虹男 角田喜久雄 380
霧に棲む鬼 角田喜久雄 280
奇跡のボレロ 角田喜久雄 280
黄昏の悪魔 角田喜久雄 280
横溝正史長編全集 全20巻
(1)本陣殺人事件 横溝正史 380
(2)蝶々殺人事件 横溝正史 380
(3)不死蝶 横溝正史 320
(4)吸血蛾 横溝正史 340
(5)スペードの女王 横溝正史 320
(6)扉の影の女 横溝正史 280
(7)夜の黒豹 横溝正史 400
(8)悪魔の百唇譜 横溝正史 340
(9)火の十字架 横溝正史 260
(10)魔女の暦 横溝正史 280
(11)支那扇の女 横溝正史 260
(12)壺中美人 横溝正史 280
(13)死神の矢 横溝正史 320
(14)毒の矢 横溝正史 340
(15)堕ちたる天女 横溝正史 260
(16)貸しボート十三号 横溝正史 340
(17)華やかな野獣 横溝正史 340
(18)蠟美人 横溝正史 380
(19)迷路の花嫁 横溝正史 400
(20)金田一耕助の冒険 横溝正史 460
金田一耕助の冒険 横溝正史 460
事件記者 島田一男 260
女事件記者 島田一男 260
特ダネはもらった 島田一男 280
錦絵殺人事件 島田一男 220
古墳殺人事件 島田一男 260
黒いカルテ 島田一男 260
黒い霧の東京 島田一男 280
事件弁護士 島田一男 280
黒い事件簿 島田一男 220
拳銃をみがく男 島田一男 320
殺人名簿 島田一男 260
上を見るな 島田一男 260
捜査一課 島田一男 340
最終都内版 島田一男 280
人喰いの夜 島田一男 280
犯罪乱流 島田一男 280
特ダネ記者 島田一男 220
銀座殺人事件 島田一男 220
赤い影の女 島田一男 260
座席番号13 島田一男 260
トップ屋事件簿 島田一男 220

死神の地図 島田一男 340
白と黒の谷間 島田一男 480
北向海流 島田一男 400
炎の地図 島田一男 440
素足の悪魔 島田一男 280
青い手の女 島田一男 280
その灯を消すな 島田一男 280
青衣の魔女 島田一男 220
鉄道公安官 島田一男 280
0番線 島田一男 260
待避線の狼 島田一男 340
灰色の終着駅 島田一男 280
幻の新幹線 島田一男 260
火の国特急 島田一男 280
海抜455 島田一男 260
能面殺人事件 高木彬光 260
姿なき怪盗 甲賀三郎 380
誰の屍体か 鮎川哲也 260

りら荘事件 鮎川哲也 340
鉄鎖殺人事件 浜尾四郎 340
殺人鬼 浜尾四郎 440
顔のない女 長谷川公之 220
魔の伝言板 長谷川公之 260
追跡七十二時間 長谷川公之 220
血液型の秘密 長谷川公之 220
深夜便一三〇列車 長谷川公之 220
七人の追跡者 長谷川公之 260
刑事の履歴書 樫原一郎 320
落ちる 多岐川恭 260
霧に溶ける 笹沢左保 280
死と挑戦 笹沢左保 260
恐怖の終局 笹沢左保 380
天の踊り 黒岩重吾 460
休日の断崖 黒岩重吾 280
賭博の街 黒岩重吾 340
腐った太陽 黒岩重吾 280

檻を出た野獣 黒岩重吾 320
生きた造花 黒岩重吾 340
朝を待つ女 黒岩重吾 380
幻の広告 黒岩重吾 340
夜の花が落ちた 黒岩重吾 340
青い枯葉 黒岩重吾 320
若狭湾の惨劇 水上勉 260
黒の構図 佐賀潜 280
黒の捜査 佐賀潜 280
謀略者 佐賀潜 280
華やかな死体 佐賀潜 280
二人が消えた夜 富島健夫 260
社外極秘 邦光史郎 340
巨人商社 邦光史郎 480
黒の連鎖反応 邦光史郎 340
泥の勲章 邦光史郎 400
悪の肖像 邦光史郎 320
夜の旅人 邦光史郎 320

夜の回路 邦光史郎 320
夜の壁画 邦光史郎 280
危険な時間 邦光史郎 260
色彩作戦 邦光史郎 340
天使の傷痕 西村京太郎 280
死を呼ぶクイズ 幾瀬勝彬 320
女子大生殺害事件 幾瀬勝彬 380
遠い殺意 幾瀬勝彬 280
幻の魚殺人事件 幾瀬勝彬 340
幽霊紳士 柴田錬三郎 280
瀬戸内海殺人事件 草野唯雄 260
抹殺の意志 草野唯雄 280
秘密パーティ 佐野洋 260
高すぎた代償 佐野洋 260
賭の季節 佐野洋 260
第一二計画 佐野洋 220
第4の関係 佐野洋 220
脳波の誘い 佐野洋 260

貞操試験 佐野洋 280
未完の遺書 佐野洋 200
ひとり芝居 佐野洋 260
銅婚式 佐野洋 260
未亡記事 佐野洋 260
第六実験室 佐野洋 260
重い札束 佐野洋 260
遠い声 佐野洋 260
再婚旅行 佐野洋 260
金色の喪章 佐野洋 260
光の肌 佐野洋 260
壁が囁く 佐野洋 280
旅をする影 佐野洋 280
勝海舟の殺人 斎藤栄 260
古都殺人事件 斎藤栄 260
殺人の棋譜 斎藤栄 260
爆破都市 斎藤栄 280
真夜中の意匠 斎藤栄 280

愛と血の港 斎藤栄 320
競走馬空輸殺人事件 新橋遊吉 280
消えた超人 高原弘吉 400
ふしぎなふしぎな物語1 三橋一夫 280
ふしぎなふしぎな物語2 三橋一夫 280
ふしぎなふしぎな物語3 三橋一夫 280
ふしぎなふしぎな物語4 三橋一夫 280
落日の墓標 山村正夫 340
無法松の一生 岩下俊作 200
この世の花 北条誠 340
続・この世の花 北条誠 340
わが恋やまず 北条誠 460
ここに青春 北条誠 260
君の名は(上) 菊田一夫 480
君の名は(下) 菊田一夫 480
ただ君ゆえに 大林清 280
しあわせはどこに 小糸のぶ 220
純愛の砂 小糸のぶ 260

美しい橋 早乙女勝元 220
プロペラ機着陸待て 城山三郎 280
泥だらけの純情 藤原審爾 280
誰よりも君を愛す 川内康範 320
恋しても愛さない 川内康範 320
恍惚 川内康範 480
新雪 藤沢桓夫 280
君は花の如く 藤沢桓夫 480
風来先生 白川渥 480
風来日記 白川渥 400
適齢期 白川渥 480
士と兵隊表と兵隊 火野葦平 260
花と兵隊 火野葦平 220
叛乱 立野信之 480
天皇の帽子 今日出海 320
すばらしき友人 中村八朗 260
三人姉妹 中村八朗 260
私の好きな人 中村八朗 260

二十四の瞳 壺井栄 220
感傷旅行 田辺聖子 220
七つの部屋 富島健夫 320
秘密ある季節 富島健夫 320
危険な年ごろ 富島健夫 320
ある愛の物語 富島健夫 260
初恋よさようなら 富島健夫 280
散歩する道 富島健夫 260
故郷の蝶 富島健夫 320
若葉の炎 富島健夫 260
早春の雪 富島健夫 280
星のない夜 富島健夫 280
夜明けの星 富島健夫 280
水色の夜 富島健夫 280
われらが城 富島健夫 280
風車の歌 富島健夫 280
海を見る日 富島健夫 260
鏡が夢をみてる 富島健夫 320

女ともだち 富島健夫 260
初雪 富島健夫 260
青春前夜 富島健夫 260
雪の記憶 富島健夫 260
ふたりの夜 富島健夫 280
恋愛百景 富島健夫 260
チャンスは二度ある 柴田錬三郎 480
わほわしの道を行く 柴田錬三郎 380
図々しい奴(上) 柴田錬三郎 380
図々しい奴(下) 柴田錬三郎 380
おれは大物 柴田錬三郎 480
生命ぎりぎり物語 柴田錬三郎 400
女の敵 柴田錬三郎 400
三人の女 柴田錬三郎 340
夢に罪あり 柴田錬三郎 380
欲望の媒体 邦光史郎 320
人間動物園 邦光史郎 220
背徳の階段 邦光史郎 380